# 最新碁戰評の評 續編上

特261
77

始

侍 261 77

# 最新碁戰評の評 續編上目次


第三十七局　九段本因坊秀哉講評　中押勝先　小岸壯二(四段)：一四六

第三十八局　方圓社長中川龜三郎講評　中理勝五先番　林德藏(三段)：一五〇　小野田千代太郎(三段)

第三十九局　九段本因坊秀哉講評　中押勝先番　喜多文子(四段)：一五四　先相先　小岸壯二(四段)

第四十局　六段廣瀨平治郎講評　九目勝先相先番　岩佐銈(六段)：一五八　先相先番　瀨越憲作(五段)

第四十一局　六段廣瀨平治郎講評　先番　長野敬次郎(五段)：一六二　五目勝先相先　加藤信(五段)

第四十二局　六段廣瀨平治郎講評　中押勝先　廣瀨平治郎(六段)：一六六　瀨越憲作(五段)

第四十三局　方圓社長中川龜三郎講評　中押勝　廣瀨平治郎(六段)：一七〇　先番　小岸壯二(四段)

第四十四局　九段本因坊秀哉講評　先々先先番四目勝　廣瀨平治郎(六段)　瀨越憲作(五段)：一七四

第四十五局　七段中川龜三郎講評　二目勝　瀨越憲作(五段)：一七八　相先先番　田坂信太郎(四段)

第四十六局　九段本因坊秀哉講評　中押勝先番　瀨越憲作(五段)：一八一　先々先　小岸壯二(四段)

第四十七局　九段本因坊秀哉講評　四目勝先　小野田千代太郎(四段)：一八六

第四十八局　方圓社長廣瀨平治郎講評
先番 長野敬次郎(五段)
中押勝先相先 小野田千代太郎(四段)　一九〇

第四十九局　九段本因坊秀哉講評
中押勝 岩佐銈(六段)
先々先先番 瀨越憲作(五段)　一九四

第五十局　方圓社長廣瀨平治郎講評
加藤信(五段)
帟先 小野田千代太郎(四段)　一九八

第五十一局　九段本因坊秀哉講評
雁金準一(六段)
二目勝先 岩佐銈(六段)　二〇二

第五十二局　方圓社長廣瀨平治郎講評
加藤信(五段)
三目勝先 小野田千代太郎(四段)　二〇六

第五十三局　九段本因坊秀哉講評
中押勝 高部道平(五段)
先二先番 福田正義(二段)　二一〇

第五十四局　方圓社長廣瀨平治郎講評
宮坂寀二(四段)
五目勝先々先番 小野田千代太郎(四段)　二一四

第五十五局　九段本因坊秀哉講評
中押勝 本因坊秀哉(九段)
先 雁金準一(六段)　二一八

第五十六局　方圓社長廣瀨平治郎講評
先番 加藤信(五段)
中押勝先相先 小野田千代太郎(四段)　二二

第五十七局　九段本因坊秀哉講評
雁金準一(六段)
四目勝先々先番 瀨越憲作(六段)　二二六

第五十八局　方圓社長七段廣瀨平治郎講評
五目勝 宮坂寀二(四段)
先 岩本薫(三段)　二三〇

第五十九局　九段本因坊秀哉講評
中押勝 瀨越憲作(六段)
先番先相先 小岸壯二(五段)　二三四





第六十局　方圓社長廣瀨平治郎講評
井上孝平(五段)
中押勝先々先番 小野田千代太郎(四段)　二三八

第六十一局　九段本因坊秀哉講評
小岸壯二(五段)
中押勝先 岩本薫(三段)　二四二

第六十二局　方圓社長廣瀨平治郎講評
六目勝先番 瀨越憲作(六段)
先相先 小岸壯二(五段)　二四六

第六十三局　九段本因坊秀哉講評
鈴木爲次郎(六段)
一目勝先 宮坂寀二(五段)　二五〇

第六十四局　方圓社長廣瀨平治郎講評
一目勝 宮坂寀二(五段)
先 岩本薫(三段)　二五四

第六十五局　九段本因坊秀哉講評
六目勝 井上孝平(五段)
先々先先番 宮坂寀二(五段)　二五八

第六十六局　方圓社長廣瀨平治郎講評
中押勝 鈴木爲次郎(六段)
先 宮坂寀二(五段)　二六二

第六十七局　方圓社長廣瀨平治郎講評
小野田千代太郎(四段)
五目勝先 小杉丁(二段)　二六六

第六十八局　九段本因坊秀哉講評
六目勝先番 雁金準一(六段)
先相先 瀨越憲作(六段)　二七〇

第六十九局　方圓社長廣瀨平治郎講評
中押勝先番 岩佐銈(六段)
先々先 高部道平(六段)　二七四

第七十局　九段本因坊秀哉講評
雁金準一(六段)
二目勝先 加藤信(五段)　二七八

第七十一局　九段本因坊秀哉講評
中押勝 鈴木爲次郎(六段)
先 加藤信(五段)　二八一

第七十二局　八段中川龜三郎講評
中押勝　小野田千代太郎（四段）
先　林　有太郎（三段）……二八六

方圓社長廣瀨平治郎講評
互先　鈴木爲次郎（六段）
中押勝先番　瀨越憲作（六段）……二九〇

第七十三局　八段中川龜三郎講評
六目勝　福田正義（三段）
互先先番　田岡秀子（二段）……二九四

第七十四局　九段本因坊秀哉講評
中押勝先番　林有太郎（三段）
先相先　福田正義（三段）……二九八

第七十五局　八段中川龜三郎講評
中押勝　小岸壯二（五段）
先　小野田千代太郎（四段）……三〇二

第七十六局






最新碁戰

# 評の評續編上

七段　野澤竹朝著

## はしがき

評の評といへば、大層ムヅカシイやうだけれども、要は自分の卑見を卒直に述ぶるまでのことにて、決して依りて以て、先輩と議論を戰はさんなどといふ意味にあらず。啻だ若し讀者諸彦に於て、斯く打つ手段もあらんかと、首肯せらるゝ點もあらば、自分の滿足するところである。

# ▲第三十七局

## 九段本因坊秀哉講評

大正九年三月中
大阪朝日新聞所載

中押詰先　小岸壯二（四段）
小野田千代太郎（三段）

▲黒十五如何、矢張りイの星下に拆くべし、圖の如く十五に拆くは明治の巨匠秀甫氏時代、盛んに用ひられし型なれど、一度先師秀榮之を不可とせしより矢張星下に拆くを良しとする事となれり。理由は圖の如く優先權を讓つて、狹く控へて構ふるも尙ほロに打ち込まるゝ手殘り居ると、白よりするハの詰め如何にも大所となればなり。

〔原評〕 白十六は目前に黒十七なる好着點を獲得せしむるもの、白として聊さか智なきに似たり。まづ實利を旨として、二に據るを此際要務たるものとなす。

▲白十六の意匠はまづ敵に實質を與ふものなれば如何なり、矢張り原評二に拆くを普通とす。

〔原評〕 黒二三は非なり、何とて單純いに押すの易道に據らざるものぞ、之が爲に白より下方部の低き位を利用して趣向を立てらるゝことは、黒として幾分煩らひの種たらずんばあらざるもの、其成積五二までの跡を通觀するに、現實の利は黒にあるが如くにして實は局面頓に廣莫たるを覺え來れるもの、寧ろ白として面白き局面を形作くれるものゝ如し。

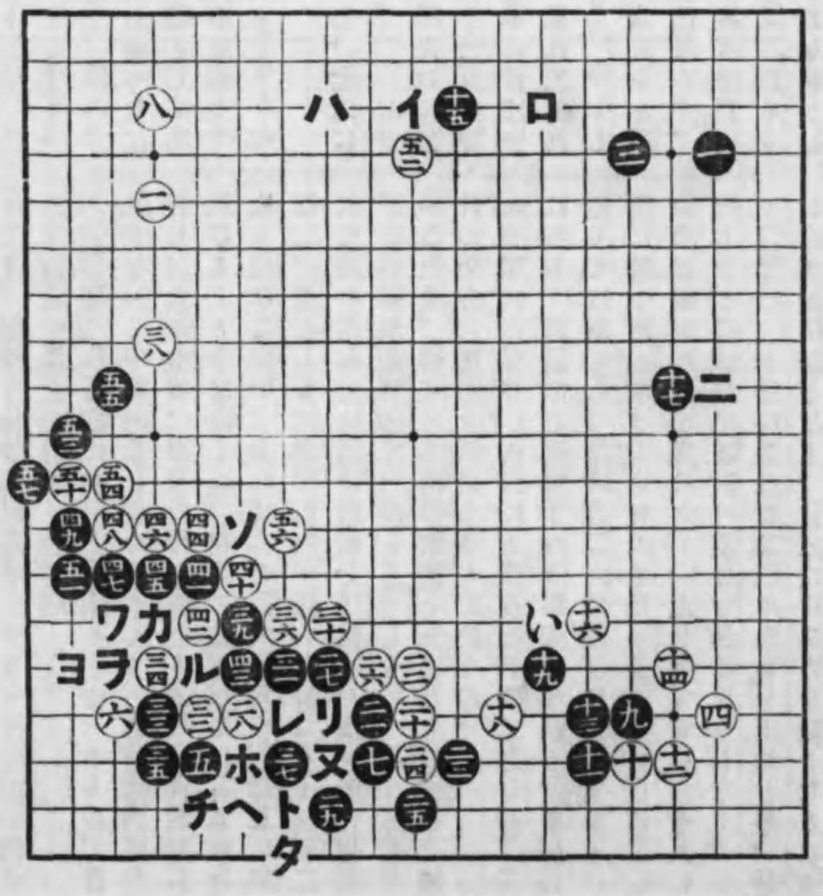
▲黒二三は如何にも味惡るの手なり、原評いに押すべき事議論なき處なり。

▲白三六、斯くても手割不可なけれど、譜の如く黒に三七と一著の下に形を整へしむるはいかにも物足らず、三六を以てホに曲げ黒へ白ト黒チ白リと打つべきなり。以下の變化として黒三六に曲らばヌに當てゝルに粘ぐべく、又黒ヲに截らばワに當て黒ルに截らばカに粘ぎ、下方五子を棄てゝ此處を封鎖する策戰に出づべく、又黒ルの截りをヨに伸びなばカに粘ぎ、黒三六なればヌに當てゝタに下るべく、又黒レならば三七に粘ぎ、黒ヌの時嚴しく三六に封鎖するか、或は緩く三九に掛けて爰黒の出路を阻止すべきなり。猶ほ黒初め白リと截りたる時、直にレに出なば三七に粘ぎ、黒ヌ白三六と打つてよく、或は之を三九に掛け黒ヲ白ワと打つ可きなり。

兎に角二八、三二の石を弄して飽迄爰を封鎖する意匠に出でむか、其孰れに歸着するも譜に比して優るものある而已ならず、一段の風致をも加ふべかりしに、白努力を是に致さず、平々三六に赶したるより、棋勢頓に索然たるを覺えたり。

〔原評〕 黒五三若しくば五五の時に於いて一先づソへ截りを加へ置くべきものなり、譜の如き白をして唯五六の一著をして此の缺陷を補充せしむることは大に黒に不利たるもの、隨つて此時に至り益局面の形勢廣きを加へたるさまなり。

▲然り。ソの截りは四七邊にて既に々々加へ置くべきにて、黒此大事を



怠り局勢茲に面白からざるを觀るに至れり。

〔原評〕 白六二は六九へ伸び立つを可となすもの又白七六の刎ねに於いても熟慮を缺けるの憾み多し、此刎ねに換ふるに轉じて上邊ろに刎ね抱へなば有利の結果を想ふものにして、以下の手順として黒百七白百八、黒は白百十となるべく、場面は却つて黒にあつて中腹の整頓に不便を覺ゆることとなるべし。

▲然り。白六二は六九に伸びるを正著とし、七六に至つては原評ろに抱へるを可とせしなり。

▲白七八と刎ね、黒に七九と泳がれたる事大いに惡しく、因りて局勢を挫折し了れり。是れを七九の押へに換へ、黒ろの時ツに頂けを試み、黒ネにせばナに刎ねる味を含みて始めて七八に刎ね、黒八三白八四と運べば未だ手段を施する餘地多きものありしに圖の如く黒に七九に泳がれ、八三に折曲らるゝ事となりては、啻に地域の損失を被りし而已ならず、黒の構へ堅固となりて、中央七五の黒の凌ぎを自由ならしむるに至り、白八八に非常手段を試みたるも既に及ばず、黒百五迄となりて大勢白を去る事となりたり。溯つて白ツの時黒ナにせば七八に綽ね黒八三、白百十二と打可なり。

〔原評〕 白百六は敗著と斷ずるを得べきもの、此粘ぎを以て中央の黒を攻め果さんずの計畫は到底遂行しがたきもの、而して譜に於ける黒の易々活路に就けることゝなりては、百六の粘ぎは半ば其意義を失ふ理ならずや、さればこの百六を以て百二三に斜行し、黒をして反對に百六へ提らしめたる上、百二六に詰め進みて地域の均衡を要旨とせば、未だ以て形勢の歸趨を判知すべからざりしもの、要するに局半の失着、相次いで白の敗趨を告げしもの、布石時代の努力に比して物足らざる感ありぬ。

▲白百六の粘ぎは如何にも手重なれば、之を百二三に打ち、黒百六と交換すべき事勿論なれど、事茲に至りては斯くして原評百二六に運びたりとするも、黒に百十四と頂けて中央の連絡を全ふされなば白の敗勢は免がれざる處にして、之を要するに白七八に失したる後は最早晩回の道なき局勢たりしなり。

〔總評〕 本局は黒最初二三の失著を出せし事、尠からざる煩ひとなり、白三六に努力を缺きたるに依





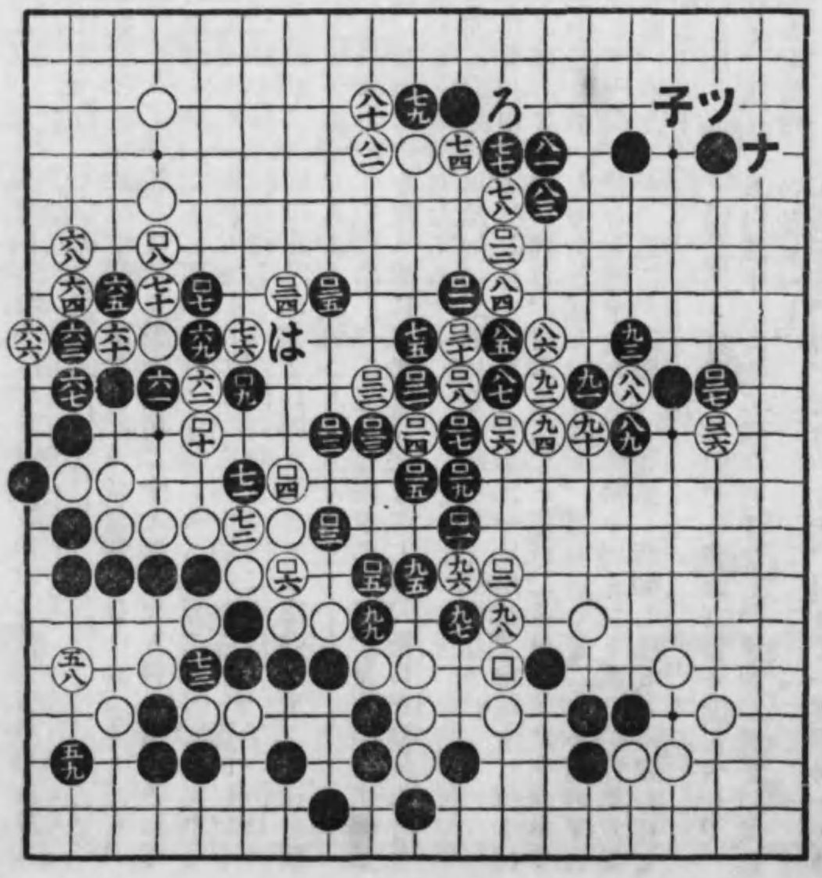
りて辛く形勢を保つを得たりしも、次で四七より五五迄の間に於いて七二に截りを入れ置く大事を怠り、反對にも白をして五六と一著の下に形容を完備せしめたるに及むで、全く大勢を失墜せしが、爰に於いて白六二に委を損じ、次で七六に緩著を下したるより、形勢漸く一變の趣きを呈し來りたるに當りて、白又復七八の失手を出せしより終に回復の餘地なきに至りしもの小岸四段平常の技倆として大いに物足らざる心地せられたり。

## ▲第三十八局

### 方圓社長 中川龜三郎講評

三月中大阪朝日新聞所載

互先 先番 中押勝 林 德藏(三段)
小野田千代太郎(三段)




百二十七手以下略

〔原評〕 白十二の如きは餘りに眞面目にして、機變を喚ぶの態度に缺けるもの、左方の黒低位に二拆しあれば進みていに頂け、黒ろ白は黒に白ほ黒へ白と黒ち白り黒ぬとなる時、十六に尖頂けて打つなど兎も角も一工夫あらまほし。

▲白十二に際しては之をりに打つも大家の棋譜に往々觀る所にして、其他樣々の意匠に依りたるもあれど、そは各人の取捨に任かすべきものにして評の限りにあらざるもの、而も譜に於ける白十二の如きは尤も穩健なる著手なりとす。されど此十二を以て原評いに頂くる手段も此際として面白からざるには あらず、去り乍ら斯くして黒ちとなりたる時、定型に依つてりに打ち、一轉して左上隅十六に頂けるとあるは最初いに頂けたる意匠の貫徹せざると共に索然たる趣きとなれば賞し難し。此場合に在てはりに換ふるに一歩を進めたる十七を以てし、黒イに應じなばロに押し、黒ハの時右上隅ニに迫り、黒十三白ホと運んで大なる働きたるべく、又黒イの手にて十四に薄まらばへに覗き、黒ト白チ黒リとなる時、右上隅十三に掛け、黒ヌ白ル黒ニと交換し、而して右下隅ヲに打つて捌けば風致ある局勢を得られしなり。

〔原評〕 白十六はるに拆くを普通とすれど、既に十六と打ちたる上は十八にて十九に綽捲くるを當然の勢ひとなすべし。

▲白十六は兎に角一旦るに打ち、黒リ白ワ黒チ白イ黒カと打せ、而してヨの頂けの狙ひを兼てタに備ふるなり、或は十六に頂ける等の意匠に出づべきなり。

▲白十八、同じくは一路右してレに構ふべきなり。然らば啻に黒十九白二十となりたる後の構へとして二五に打つの良形を得らるゝ而已ならず、レの拆き堅固なるに由つて、右側十四の味方をも遙かに之を援け得しなり。圖の如きは四二の飛び、リの掛け其他の意味を含まれ居る事とて十四の一著、運用を制せらるゝ事尠からざるなり。

〔原評〕 黒二五は打過ぎにして、左方の黒に煩累を加へ爲に棋勢を急促ならしむ、をに斜展するなど可ならん。

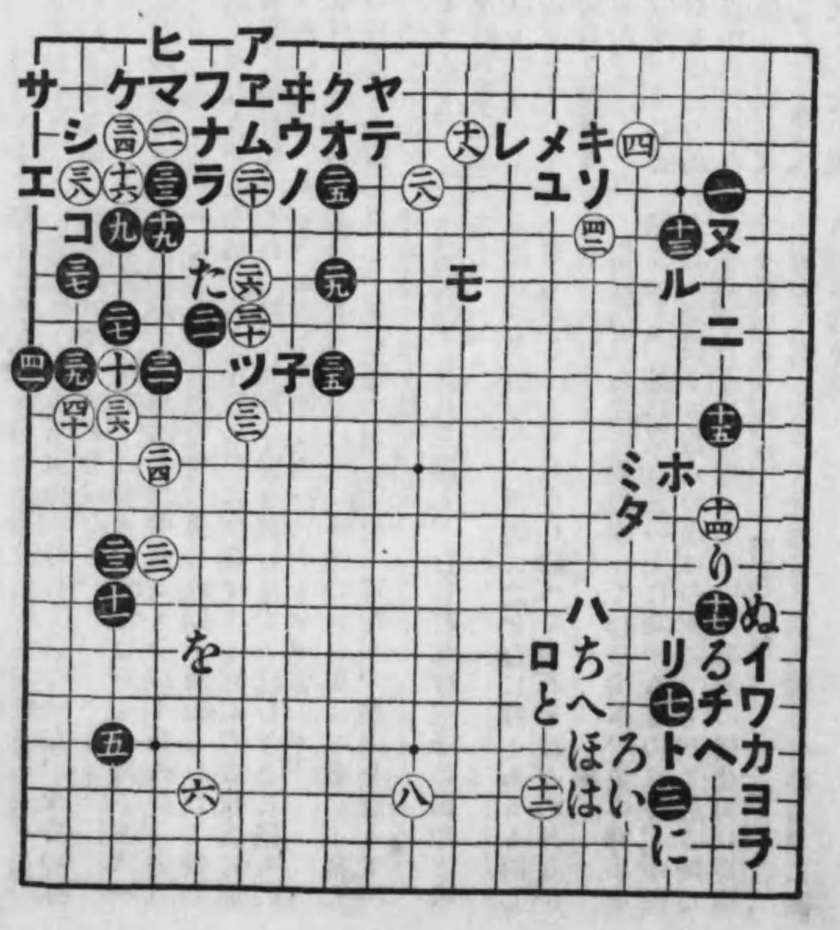
▲然り、二五はをに打つなど穩健なり。

▲黒二九、著想手重し三一に刎ね、白三十に押さばツに刎ね、白ネ黒三二と運び二五の點ぬ之を放棄する方針を採るべきなり。譜の如く三二と一著の下に爰を封鎖せしめて、形勢を與えたる事は、目前左側十、二二、二四の各著悉く活動し來るをも觀ればなり。

〔原評〕 白三十は四七に飛ぶ方幾分優るべし。

▲白三十にて他に飛び打手なし、原評は何かの間違ひなるべし。

▲黒三三、甚だ面白からず、因りて一度形勢を失ひたり。三三を以て何故にナに頂け出さゝりしにや。此頂出しを決行するに非ざれば二九の飛びは意義を爲さゝるに非ずや、而して黒ナに頂出さむか、白はラに打つの外なく、黒三三白三四黒ムと運び、爰にて白ウに せば井に刎ね、白ノ黒オ白ク黒ヤと振換て宜く、又白ウに打つ手をたにせばマに刎ね、以下白ケ黒フ白コ黒三七白エ黒三六白ウ黒井白オ黒ク白テ黒ア白サとなる時、右側リに掛け、白キにせばユに出で、メに受けさせて低位に就かしめ、一轉してミに十四の白を攻立る策戰に出て局勢惡しからざるなり、而も黒は尙ほ他に一策あり、夫はマに刎ねる手を三八に換へ白シ黒コ白フ黒ヱ白ヒ黒三六白ウとなる時、右側リに掛け白キの時、今度は一間に飛び、白レ黒モと運ぶも惡しからざる割合なり、兎に角三三に際しては二五、二九の石を捌く意匠に出ざる可らずして、圖の如きは徒らに足手纏ひを抱えたるもの、爰に成算立難き局勢は生じたるな



り。

▲黒四三は不急の所なり、四九に備ふるを是とす。

〔原評〕 白四四、四六如何、穩に六一に下りて徐に圖るべし。

▲四四、四六を六一に下るは穩かなれど此際手緩き嫌ひあれば、遽に贊し難し。

▲黒四七惡しく四九更に惡し俱にかに粘ぐ可なり。

▲白五十、五二は自家の勢圏より敵の勢圏に向けて競立つるものにて全然策戰を錯まれり、わに頂け、黒か白た黒れ白そ黒つ白ね黒な白ら黒セ白五五と此所を先手に縦斷し、而してスに赶さば一擧して全勝の形勢を占め得られしなり。

▲黒五三甚だ惡し、直に五七に飛ばざる可らず。

〔原評〕 白五四惡し、先づわに頂けを試み黒五五に尖まば白かに黒よと盤らせて五八に行びて打つべく譜に比して一着の美なり、黒若し五五に尖まずしてかに粘げば、白たに以下の符號順にて結局らと締付るを以て、其利勢黒の堪ゆる所にあらざらん。

▲白五四は惡し、原評わに頂けざる可らず。されど此時黒五五に尖まばかに截りて云々とあるは例の誤評にて、白かに截る手をよに押へなば黒か白た黒れ白そ黒つ白なと打つて、此黒の全部を屠ふり得れば黒卽坐に潰れるなり。但し黒かに粘ぐ手をたに伸び、而してラに打つて劫となす手あれど、元より大の無理手とて矢張り潰れとなるなり。

〔原評〕 黒五五はたに打つて活るべし、上方の味にも關せずや。▲贊成なり。

〔原評〕 白六十は普通の着想ながら、黒より六一に侵されては地境の均勢破るゝを以て此際是非共六一に下らざる可らず、黒に此點を綽ねられたる後の白は、極力中腹の黒に突擊せざる可らざる狀況に逼られ、勢ひ無理手段を强行するの已むなきに陷りたり。▲然り此際は六一に下るを至當とす。

▲黒六五、六七は敵に事端の材を與ふる者にて甚だ惡し、單に穩に六九に引く可なり、黒之を愆りて一度敗運に陷りたり。

〔原評〕 黒八三惡し、むに打たば三子の白殆ど味なし。

▲黒八三無理なり。原評に之をむに打とあるも同じく惡しかるべし所詮うに備へて大石を凌ぐの外なからむ。

〔原評〕白九六の手の邊にてむに尖み、黒の應手を問ふべし、是れ黒八三の失に乘ずるものにて、中腹大石の關係より百八の邊は白何にでも利き居る所なれば必ず右邊に波瀾を生ずく、形勢の變化尙ほ逆睹する能はざらん、黒より百九と截られたる後にては、上邊の白重くなりて此邊なく忽ち潰崩の外なきに至りたるなり。

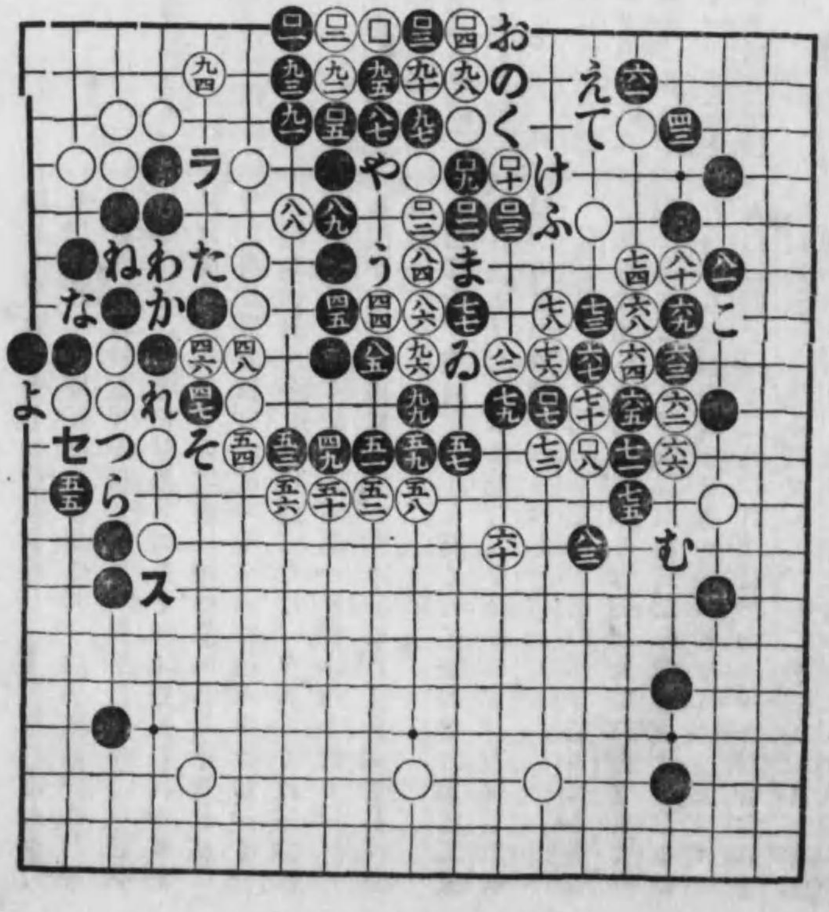




▲白九六は敗著なり、されど原評に之をむに尖む云々とあるも亦誤てり白九六を以てゐの出に換へ打ば、此大石如何に働くも結局の死を免かれずして、反對に白大勝となりしなり。

一例を擧れば黒は此時九八に頂るの外なく、白の黒百四白百黒九七白お黒百九白く黒百十二白百十一黒や白九六と粘ぎ打たむに、黒は百十三に當て白ま黒け白百十黒ふとなりて辛く劫とはなれど、黒は寄劫なる上に白には〇以下右側に無數の劫材ある而已ならず、え、てなどに打つ含みありて黒劫材を制せられ居れば、結局黒潰亂に終るの外なかりしなり。

去るにても一局裡に於いて二回迄死活の誤評を爲したる原評者の失態は斯界の爲めに深く之を遺憾とするものなり。




ツグ　百十三手終

# ▲第三十九局

四月中 萬朝報所載

先番中押勝 先相先

本因坊秀哉講評

喜多文子（四段）
小岸壯二（四段）

▲黒七、批評の限りにはあらざれど此布石にては之をイに據り、白ロなれば十五に三拆し白ハに締る時右下隅九に尖めば配置穩健なり但し此の尖みを以て上側ニの星下に據るもあれど、之は白にホと下側に先鞭されて幾分局面の廣濶を招く嫌ひあり。

▲黒十一の尖み、此場合にては如何、直に十三に懸り、白十四に挾まばヘに備へ、下側ト以下の打込みを含む事、白十の五間拆きに對して此側面に於いて黒の採るべき常型なりとす。圖の如く十一、十五と爰に二著を費す譯にては幾分歩趨に遲れを招く嫌ひなきにあらず。

▲白十六は元來手緩き手法なる而已ならず、此際眼に見えて黒に十七の好點を讓づるものなれば如何なり、十八に頂けてハに伸びさせ、此黒を重からしめて後十六に斜走する型を採り、黒チに構へなば三六に飛び、黒三七白リ黒ヌ白ルと運ぶ策戰に出づるか或は圖の十六をヲの尖みに換へ黒ニの星下なれば、ワに掛け黒カ白ヨと攻めてヘの打込みを含むべく、又黒ニに拆く手をワに應じなば、タ若しくば三六に飛ぶ意匠を採るか、二者其一を擇ぶべきなり。

▲黒十七、普通好まざる拆き方なれど此場合にては可なり。

▲白二十、趣向ならんも斯くして眼の當り黒に二三と打込ませたる事無理たるを免かれず。左側三六に飛びて黒の動靜を伺ふべし。

〔原評〕 白二四以下三一と黒の形を定めたる計らひ稍や餘韻に乏しき觀あるもの、此際二四を以て平凡に二八に尖み、黒二六白三二の飛び〳〵となるかた自から局面の廣きを認め得べきなり。

▲白二四を以て二八に打つは、あるべき筋合なれど此時黒三一と尖み打たんに、白二九ならばレに刻ね白ソの時ツに掛け塞ぎて白無理の姿たるを免がれず



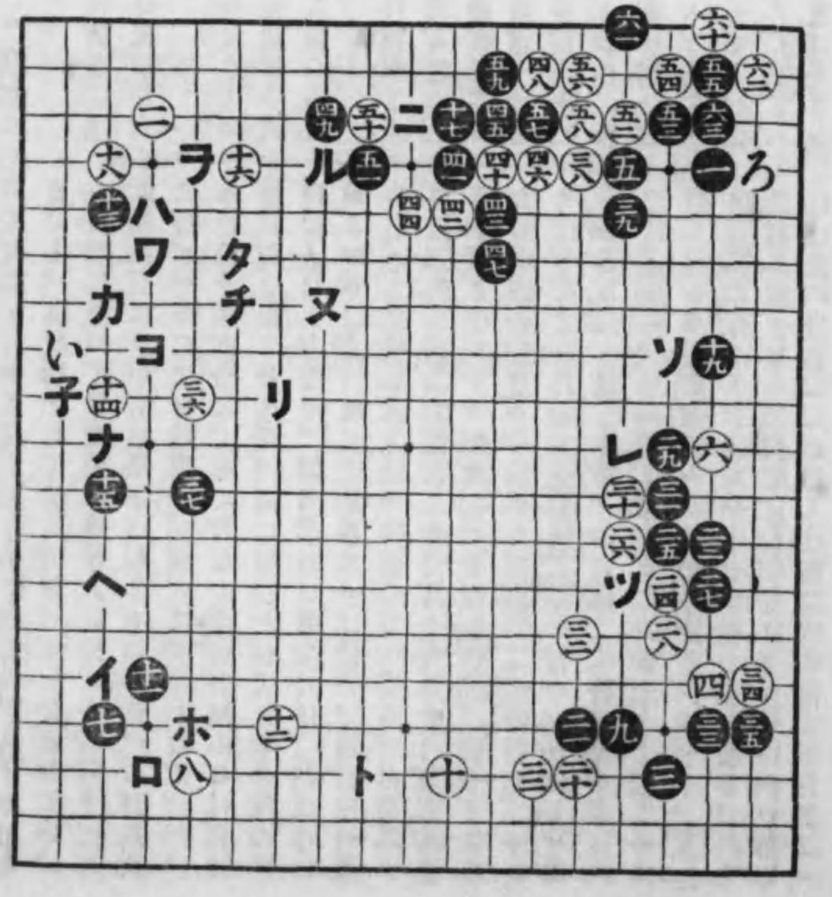


要するに白二十と詰めたるが無理なれば、黒に二三と打込まれたる結果黒三五迄の成行は至當と觀るの外なきなり。

〔原評〕 黒三七の飛びは上部面なる四二の飛びに換へたきものなり。假りに白にしてヘに侵入するあらば黒はネに附け越し、白い黒ナと運ぶの應接法あるもの敢へて憂へとするに足らず。

▲黒三七は部分的の場所なり、原評四二に大體の備へを完ふするに如かず。

〔原評〕 白四六と粘ざたる事は其儘にては如何にしても重き姿にて甚だ不同意なり。されば四六を以て先づ六三に頂けて黒の應答を待ちての計らひにありたきもの、黒にしてろに下がりなば其時譜に於ける四六の粘ぎを行ふべきもの、又黒にして五



三に應じなば最早上邊に望みなき場合とて、四七に綽捲くつて何等の惜しむべきあるを觀ず。

▲然り。黒には原評の外四七に伸びて隅の應答に換ふる嚴しき手段もあれど、白四六を以ては兎に角六三に頂けを試むべき機會なりし。

〔原評〕 白六四はいづれ放棄するより外なきものとせば其儘放任し置くべきものにして、目前黒の六五と交換するだけにても味を消滅せしむる慨らみなしとせず。

〔原評〕 黒八五を以ては八八の約さへに換へて上部分の大石を捕獲し果さば黒の勝算安全たるなり。此八五の多慾よりして再び混迷の局勢に變轉せしこと好局面として要なきわざ、若し夫れ白の百十四を以て百三四に引きなば其儘にしてこの攻合白勝利に歸すべきものにして、隨つて此時に於いては白の勝算に轉換すべかりしものを、白にして態ざと百十四に片寄りたること畢竟這般見損じによるべきものと觀察するの外無し、續いて白百十六に至つても、之をしてラに刎ねなば、尙ほ白の望みを繋ぐに足るべきものありしを、譜に觀る黒をして百二五に先手を以て打拔かしめては、たとへ中央の八、九子を護るまでも、其反響として全局の薄味を喚起せるもの、この時に至つては大勢の歸趨大かた定まりぬ。

▲黒八五は自から紛亂を求むるもの、當然原評八八に押ふべきにて勝敗亦此一著にて決せしなり。

▲白百十四は嚴しくして可なり。若し換ふるに原評百三四を以てせんか、ムに打拔かれて此攻合反つて白負となりしなり。即ち黒ムに打拔けば、白はウに飛ぶの外なく、依つて黒百六一に頂け、白百三一黒井白ノと交換したる後一轉百二二に尖み、白百二一黒百二四白百二六黒百二十白百十九黒オ白百六八黒百十四となりて。此攻合一手勝なれば、隨つて黒の大勝に歸せしなり。蠶つて黒百二二の時白百二十にせばラに尖み白百六七黒百二四と打つべきなり。尙最初黒ムに打拔きし時、白百四二に押へんか黒百六二に愚集み、クの出と百十九に突き出して百二一に截り絞る手との兩睨みに打つて勝敗決すべく、又白百四二に打つ手を百六一にせば百十五に出で、白ラ黒百二四となりて白防ぐに術なきなり。一例を擧ぐれば此時白百二二に截らば百二六に當て、白百二一





黒百十六白百六八、黒オ白百七三黒百十四白百六二黒百三三となりてよく又白百二二に截る手を百二一に並ばゞ百六八に當てゝ後、百二二に粘げば之亦白防ぐに術なきなり。されば白百十四は譜の如く打つの外無く之を百三四に打てば云々とあるは誤てり。

▲黒百十五如何、直に百十七に截るべきなり。

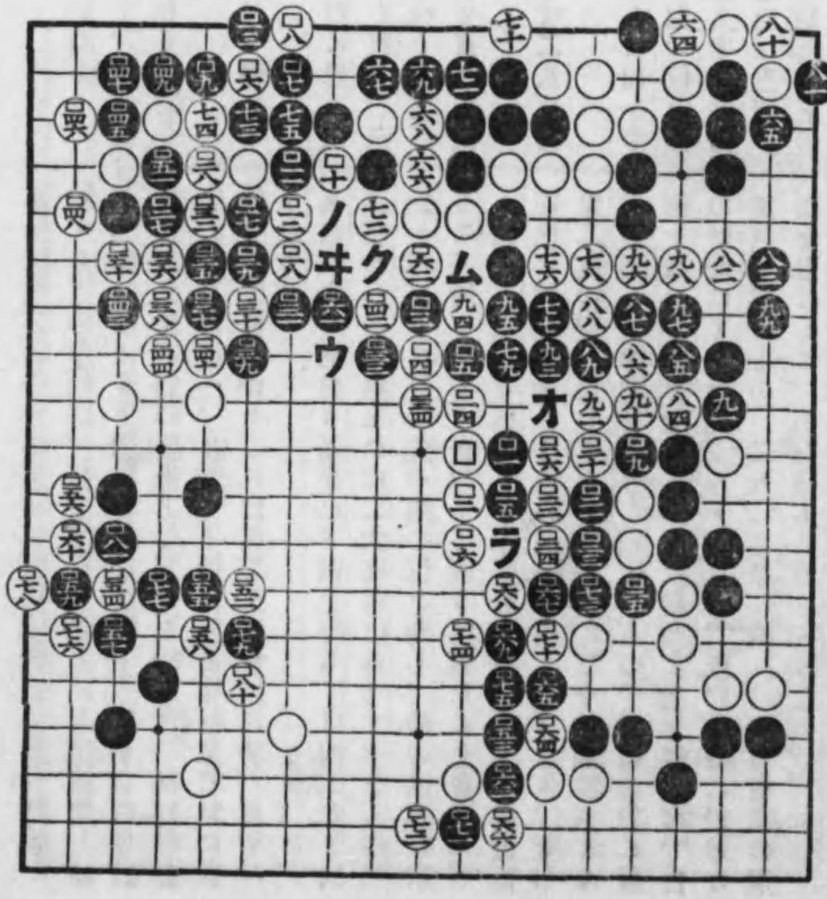
▲白百十六敗著なり。味は惡しけれど嚴しく原評ラに刎ねて凌ぐべきなり。白之を失し黒に百十九以下先手に二子を打拔かれて全く敗形を呈する事とはなりたり。

## ▲第四十局

### 六段 廣瀬平治郎講評

三月二十九日東京日々新聞所載

九目勝 岩佐銹(六段)
先相先先番 瀬越憲作(五段)



▲黒三はイに空隅を占むるを普通とす。

〔原評〕 本局黒聊か利を配佈に失せるの觀あり、爲に大なる戰鬪狀態を現出する事なくして、反て黒の敗に終れり、黒十一は二二の大場を占むるに若かず。

▲黒十一は當然二二に拆ぐべきものなるに、何によりて譜の如き變調に出しものにや。

▲黒十七は型に捉われたるもの、因りて白に思ふ儘に形勢を張らせたり。ロに頂け白ハ黒ニと打ち、白二九ならばホに曲げ、白ヘ黒二二と打つべく、又白二九の下りを三十の處に粘げば二八に拆ぎ打つて俱に圖に比べて黒働けるにあらずや。

但し黒ロに頂けたる時、白三十に引きなば二八に打ち、白ト黒四一と運んで捌く可きなり。

▲白二十は徒らに劫材を失ふもの打たざるに如かず

〔原評〕 黒二五にては一著ヘに打つて白の位を消すを可とせん、譜の如く遲れて二七に深入するの餘儀なきを觀て其利害を察すべし。されば白に三四、三六と煽られ出路に窮したるの姿あり、結局四五の痴形を見るに至つては耐へ難き心地するなり。

▲黒二五を以てヘにするは實際を棄てゝ先づ散地に馳するものなれば、有る型にてはあれど此際贊し難し、卽ち白にチと應戰されなば以下黒三十、白リ黒ロ白二九黒ヌ等の經過となりたる時、白に絕好の要所たる左側面へ、ル若しくば二五其他任意の點に先鞭されて面白からざれば黒二五は當然の著と爲すべきなり。

▲白二六、面白き著なれど白を持ちては圍ふなと云ふ諺さへある程なれば二六は尙ほ再考すべきもの、之を以てラに打ち先づ黒の位を消し、敵の應答に依りて手段を廻らすを以て手廣き策戰たるを覺ゆ。

▲黒二九は白を固めさせるものなれば惡し、此側面而已に就いて云へば直に三一に引くべきなり、蓋し黒二九の型に出し事は、此際白に三十と應答さるゝ妙著あるに想當せざりしに依るもの、爲に心算に齟齬を來せし跡を看るも、更に顧つて之を觀れば、白の勢圏にて業を施さんとする事、既に大體に於ける策戰を誤るもの、二九にてワに構へ、先づ自家の形勢を壯にして、事を後ちに計るべきなり。

〔原評〕 黒三七にて四十に曲り、

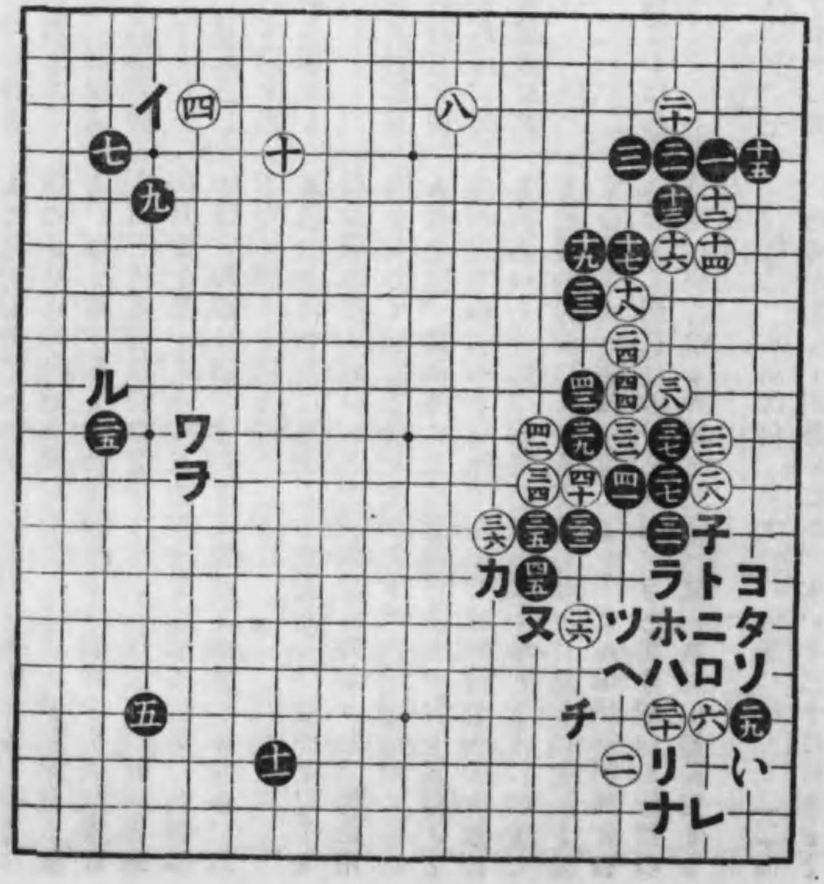




白四二の時、ニに打ちていの出と、ヌに頂ける二途を含めば、必ず小康を得べき形なりしなり。

▲黒三七、三九は手筋なり、之を原評の如く四十に曲り、白四二黒ニと打つは白にカと塞がれ、黒いの時ヨに斜走されんか、黒タなればトに出でホの刎ね押へと、レの飛びとの兩睨みに打れて黒惡しく、又タに押へる手をトにせんか、ソに刎ねられて防ぐに道なければ、黒は白ヨに對してロに突張るの外なく、此結果として、白タ黒ソ白ツ黒ト白ネ黒ナ白ラとなり、黒大持込みとて形勢甚だ面白からざるなり。

▲白四十如何四二に押すべし、「但し黒四三に出なば四十に截り、黒四四白四八黒百白四一と打つべきなり。」然るに黒四三甚だ其意を得ず、何故四四に打ち拔かざりしにや、然らば



白四三黑粘ぎ白四八となる時、ムに截つてウに伸び出す手を含みて四九に刎ね、白六五なれば百三六に伸び、白百三七黑百三三と伸び捌きてよく、又白六五に張る手を五一に伸びなば、ムに截つて六五に押さへ込み、而して井に掛け粘ぎ打てば可なりしなり

〔原評續き〕 然るに白四八謂はれなし、百三三に尖んで追擊せば黑の活路果して如何、遡りて之を思へば黑二九の頂けは時期尙早、爲めに自から累せる事少なからずといふべし。

▲白四八は黑重き姿となり居るなれば、原評百三三に尖むで嚴しく之を攻立つべきなり。假に黑之を凌ぎ得るとするも、多少の損害は免がれ得ざれば、同時に白形勢を收め得しならん。但し黑ムに截らば此時四八に突出すべきなり。

▲白五十面白し。

〔原評〕 黑五九位低し、六十に飛ぶか左なくばろに展開すべし。

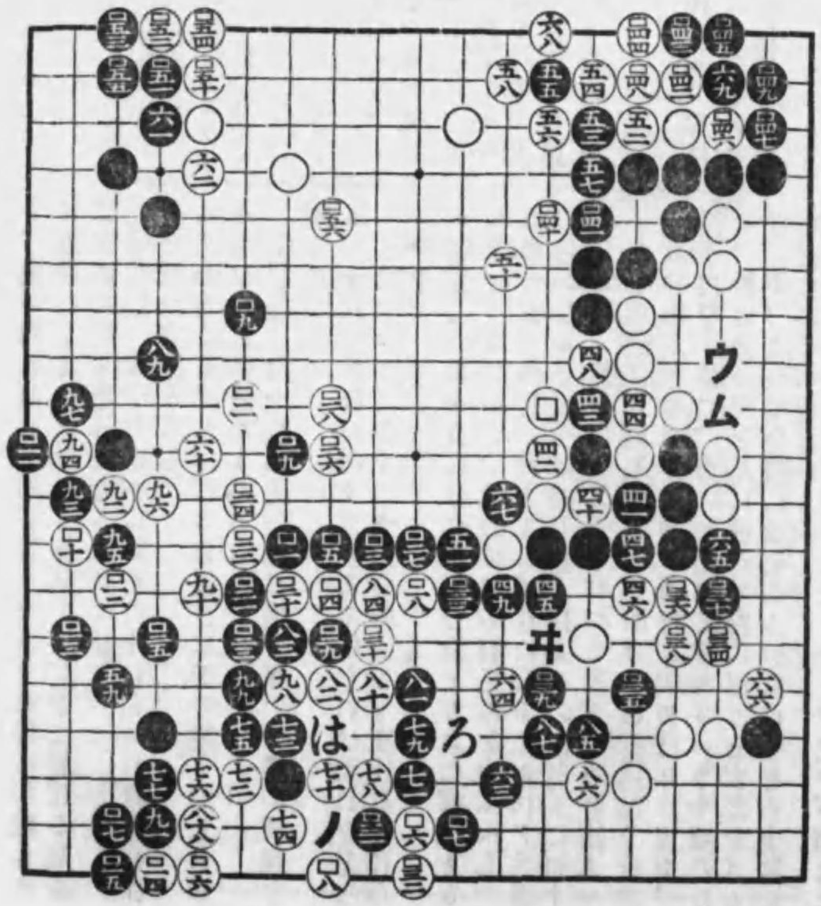
▲然り、黑五九は六十に備ふべきなり。

〔原評〕 黑六七不急の一著此に敗運に傾けり、七九に應ずべきや勿論なり、併しながら白の七十に對しては、假令六三の一子を委棄するまでも、はより綽ねざれば形を爲さず、後れて七二と挾みて自ら救ふが如きは、能く大局を制する所以にあらず、宜なり以往何等の波瀾を見ずして、白凌ぐと同時に地域の均分を失へるを、只黑百一を百五に打ち、白百二の時、百四に副ひ付ける方優らんかと思ふのみ、以下復た贅する所なし。

▲黑六七は七九に應ずるを當然とし、七一を以ても復た原評はに刎ぬべきや、論なき所なりし。黑此兩著を失して頓に形勢を失ひたり。

▲黑七三、此棋勢にては七四に下り、白七三黑ノと曲つけて戰ふべきなり。斯くせば前著七一の著意にも添ふべく。且つ戰場廣濶となる事とて未だ必ずしも絶望の局面にはあらざりしなり。然るに七三と通常の際用ふる手法に出しより、曾に地域の削減を被ふむりし而已ならず。攻者たりし黑の却つて防禦の位置に立ちたるの觀を呈し、爰に本局の形勢定まりしなり。

〔總評〕 本局は白、黑十一の緩著に乘じて二二迄に機先を制して形勢を收め。次いで三十に妙著を下して黑の策戰を挫き。四十、四八には失したるも五十に好著を下し。以下着々黑の失に乘じて利を占め、遂に大敵の黑番を九目の大差にて擊退したる事、岩佐六段近頃の手柄たりしと同時に、瀨越五段として稀に見る不出來の局面なりし。



## ▲第四十一局

### 六段　廣瀬平治郎講評

五月中　東京日々新聞所載　五目勝　先番　長野敬次郎（五段）　先相先　加藤　信（五段）

▲黒三は右下隅イに據るを普通にして正しとす。

〔原評〕　黒七はいに懸るべし、先づ七、九の頂け引きを打つて後にいに懸れば、白は十一に挾むの便を生ず、之に反しいの懸りを先きにして白若し十一に打てば、黒はロに斜走掛けの姿勢を取るべく、又白十六に挾めば其時黒は七に頂くるに好適なるを思ふべし、譜の如く十二、十四と兩隅に締りを容すは黒の爲に取らざる所なり。

▲黒七はいに懸るを普通とす。

▲黒十一、隅を措いて中側に就くは不利なり、尙ほいに懸らざる可らず、此時白原評十一に挾むもハに二折し、白十八黒ニと詰め居りて更に惡しき所あるを見す。

▲黒十三、面白からず、當然左上隅ホに懸るべきなり、由來敵に面已兩隅の締りを容すは俗に兩締られに勝碁なしとさえ云はるゝ位にて、譜に於ける配置は棋客の尤も厭ふ所なるにあらずや。

〔原評〕　黒十七はへに詰め白トに詰めればろに飛んで打つ方然るべし。

▲黒十七は原評へに打つ方現在にチの懸り嚴しきもの生づるだけ優るものあらん。

〔原評〕　白十八は先づはに肩を衝いて黒の模樣を削るに利あり。

▲白十八、此際は種々意匠ある所なれば孰れを是なりと斷ずべきに非ず、十八に備ふるも亦佳なるにあらずや。

〔原評〕　黒十九はリに飛んで白よりニに打込まるゝ筋を防ぎながら、兼ねてヌの打込みを窺ふべし。

▲黒十九、確實を旨とすればリに飛ぶにあれど兵機の速かなるを云へば圖の如く構ふるの面白きに如ず

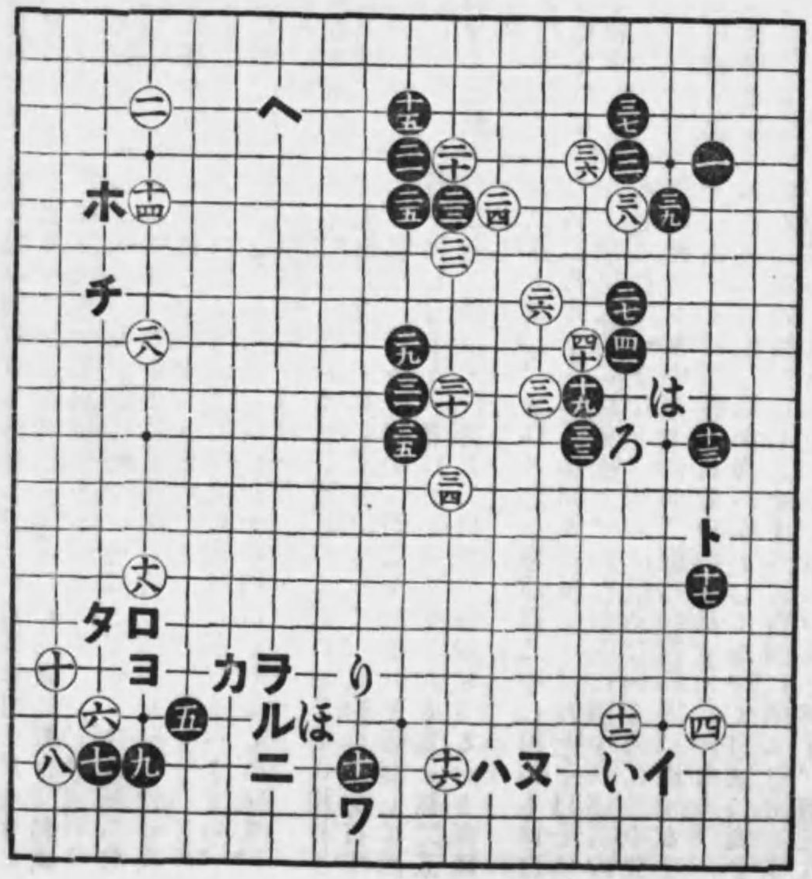
〔原評〕　然るに白二十と打つて蒼皇敵地を侵さんとするの俄に左祖し難し、何故にニに打込んで十六十八の趣意を貫かざるや、黒ほに尖めばルに出で、黒ヲ白ワと頂け、カの刎出にて成功すべきや疑ひなく、黒は勢ひほをルに換へて白の盤りを容認せざる可らず、隨つて全體に眼を失ふが故に手を右上隅の經營に移すの遑なかるべし。

▲白二十は當然の著と云ふべきなり、之を下側ニに打込まんか、原評の如く黒ルに頂けて白に盤りを與へくるれば十分なれど、此時黒は必ずヨに尖むでほの尖みと夕の尖み出しを睨み打んに、白は却つて此處の所置に惱まん。要するに黒ヨの尖みを含み居るうちは白漫りに此處へは打込めざるなり。

〔原評〕　黒二七緩し、チに懸るを以て絶好の大場となす、徒らに應答して形の輕き敵子に響かず、白に二八と守らしむる事、將來に於ける攻守の難易殆ど同日の談にあらざるなり。

▲黒二七は敵を攻むる當然の著なり若し之を原評チに懸らんか、白に換つて二七に打れんに、其手割を云へば始め黒十九をチに懸り、白二十以下二六迄となりたるに當りて漫然十九に下し、白に二七と飛び込ませし愚を演ずるものとなればなり。

〔原評〕　白三四と飛び以下三六より四十と一時を彌縫して、又へと他に轉ずる事輕しと謂はんよりも餘りに薄弱ならずや、三四にて五二に押



付くる事堅實にして亦形なりとす、此石弱ければ下邊ヌの一點自から黑の蹂躙に委するもの、僅々四二の二拆利害相償はざるや言ふ迄もなし。

▲白三六より四十迄俗手連發の姿にて爲に形勢を失墜せり、原評五二に押さざる可らず。

〔原評〕 白四四更に薄し、レに結いでソに打つの力を養ふべし。▲贊成なり。

〔原評〕 黑四七にて何故に四八に出ざりしぞ、此先手を了して四七と打てば、下邊ヌの打込みに對しても、白は只之を放任するの外なき狀況に在るもの大勢の歸結殆ど論ずるに足らず。

▲黑四七は無論四八に出づべかりし。

▲黑四九は五一を先きにすべし。

〔原評〕 白五十にて先づ五一に結げば幾分形を整ふべきか、黑五五、五七大いに惡し、尙ほヌに打込むべきや勿論なるに、黑頻りにダメの間を往來し、下隅に白地を與へ又中央の白を逸し、些の得る所なきもの、攻守斯くの如くんば配布の利害亦論ずるの要なからんとす。

▲黑五五、ヌに打込まざるべからず。

▲黑六五緩し、八二に打ち直接大石に迫るの傍ら爰を固め、而して百二九の打込みを狙ひなば大勢未だ充分なりしに、之を失して勝勢漸やく減退せんとす。

〔原評〕 黑六九、此に至つて尙ほ緩著を敢てす、ほに尖み頂けざるべからず、白八二に打てば七十に突當るべく、又白六九に綽ぬれば九九に截り、白九八黑ツ白百一黑百白ヘ黑ネ白ナ黑ラにて、白大石の活を失ふべし、白に七十、七二と打せて攻戰忽ち終熄したり。されど尙ほ細棋の情勢に在る事如何に黑の優越せしかを思ふのみ。

▲黑六九は緩かりし、兎に角ほに頂けるべきもの、黑之をしも誤り、白に八十に圍はしむるに至りて、黑白の勢威殆ど伯仲の姿となりたり。

〔原評〕 黑八七及び百三にて共に百二七に頂けて手段せば黑未だ敗に至らざるべく、又白九二を打ずして百四に尖めば自から百二七の頂けを防護して勝算を得しならん。黑に九三の手生じたる爲め百二五百二七の手段を呼應して白地の削減せらるべき間隙を殘したり。

▲黑八七緩し、されど之を原評百二七に頂けるは白に百二八に下られて事頗る面倒なり、八七を以ては左上隅百三九に肩を衝き、白百四五に應ずれば其時八七に打つべきなり、然らば微細ながら尙ほ黑の勝算的確なるものありたり。但し白百四五に應ずる手を、ムにせば百四八に置いて之は立所に手なり。

▲白九二は敵に疵を與へんとして却つて自家に疵を求めたるの嫌ひなしとせず單に百四に圍ふを可とす

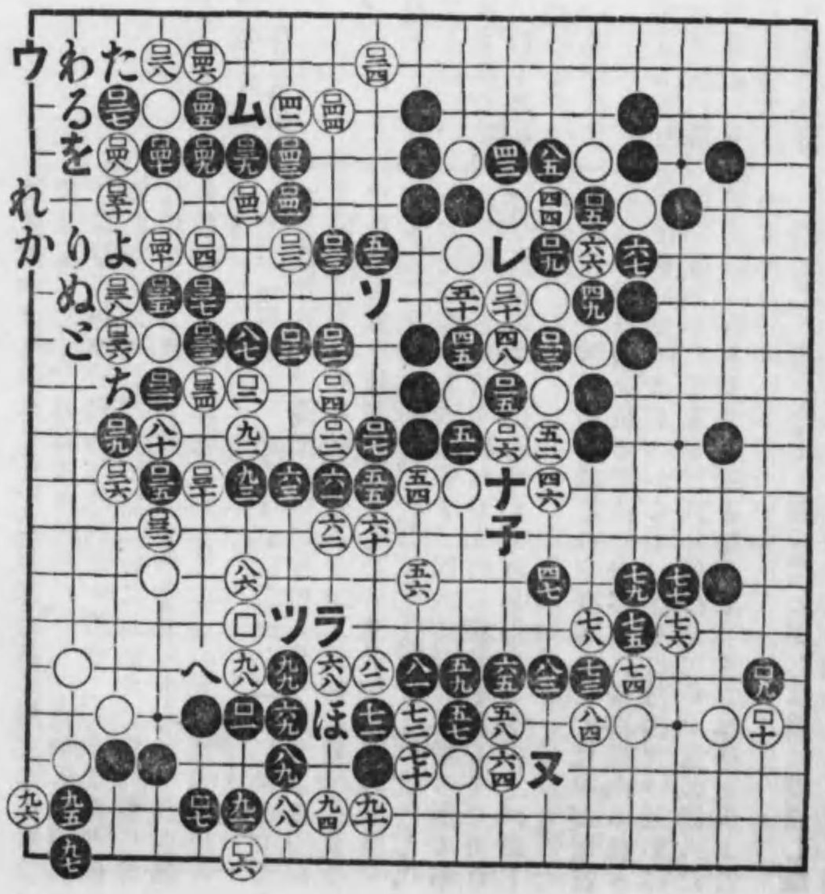
〔原評〕 黑百三七を以て最終の敗と爲す、百三八





に出で白百三七黑と白ち黑百五十と頂けて死形なし。其一例白り黑ぬ白る黑を白わ黑かにて劫となるべく、他例白よ黑り白百四十黑を白ぬ黑た白か黑れも亦劫なりしに之を失しては黑如何に努力するも僅少の免がれ難し。

▲然り黑百三七を百三八に出んか白は原評第一例の如く打つて大劫とする外無ければ、「原評に他例として白よ黑り白百四十黑を白ぬ黑た白か黑れも亦劫なりとあるは誤りにて、之は黑にれの手を以てウに打れなば、無條件の活なり。」黑大勝となるべかりしに、最後に至り之を失して敗となしたるは黑の爲に惜むべし。



## ▲第四十二局

### 六段　廣瀨平治郎講評

六月中　東京日々新聞所載　先中押勝　廣瀨平治郎（六段）　瀨越憲作（五段）

▲黒三は四若しくば**ろ**に締るを普通とす。

▲黒十三は棋聖知得の型を採つて五十に換へ、白**イ**に掛けなば**ロ**に張り、白**ハ**黒**ニ**白**ホ**黒十三と運び、自然に左側十二の白に迫り打つ意匠に依るも亦可なり、但し白**イ**の掛けを**ハ**にせば**へ**に頂け、白**ト**黒**イ**白**チ**黒**ロ**白**リ**となる時、**ヌ**に截つて振り換つて宜く或は白**ハ**の時**イ**に尖み附けて打つもあるべし。

▲白十六、此際面白き手段なりし。

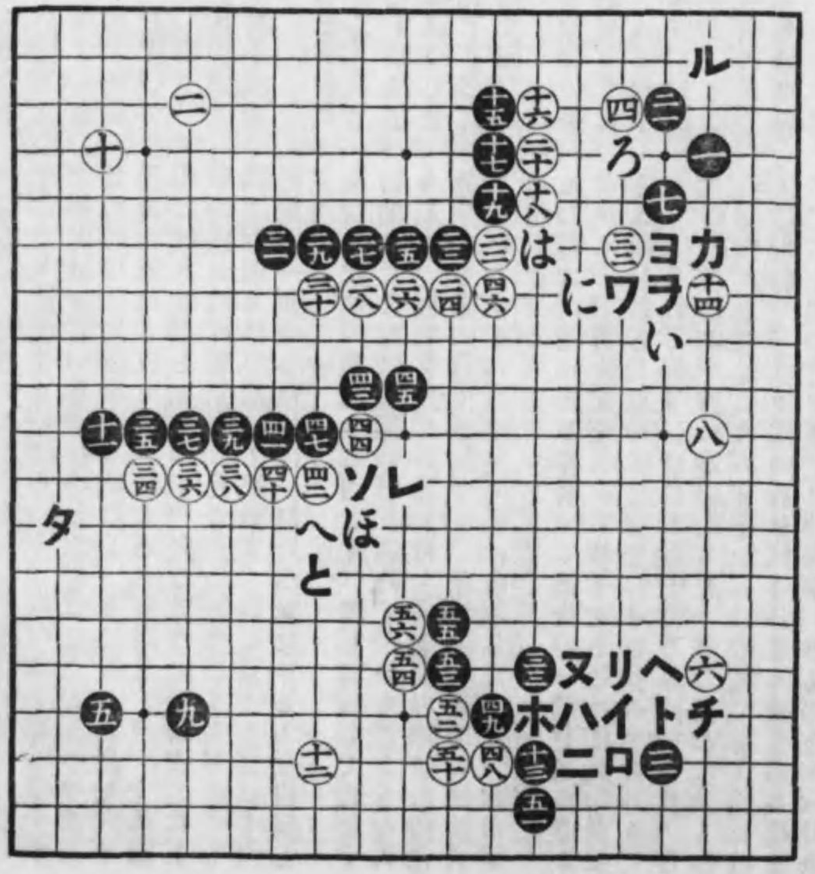
〔原評〕　本局の配布大なる得失なしとするも概ね尋常の手法に泥まず、七八着にして白稍や有望の域に達せるものにして、八六和戰の分岐に際會し意を決して戰に赴しも敢へて優勢を失はざりしに百六に至りては殆ど退嬰を極めたるもの、忙中の頓挫勝算既に白を去れるなり、さて劈頭の布陳黒二一は二二に伸ぶべきものにして、白は**ル**に走る趣意なること云ふ迄もなく、其時黒**ヲ**に頂くべし、白**い**に綽ぬれば黒**ワ**に伸び、白**カ**黒**ろ**白二一黒**は**となりて外勢黒甚だ厚かるべし。故に白は**い**に綽ねずして、單に**カ**に伸び黒**ヨ**白**に**と隔て行く棋勢とならんか、譜の如く白より二二に綽ねられし三二迄の結果は黒面白からず。

▲黒二一可なり、一見すれば二一を二二に伸び立ちたき姿なれど、斯くては原評白**ル**黒**ヲ**白**カ**黒**E**白**に**と隔てらるゝ結果は黒此石を凌ぐために散地に就きて白に勢威と實質を得せしむる意味生ずればなり。而も三二迄の成行、白大いに志を得たる如くなれど、七筋を連捺したる損害と、四六に截れ手殘り居る事は白中腹に勢威を得たるものと相殺し居るものあれば、此處の戰ひ白必ずしも利を得たるものとは斷じ難し。

▲白三六、尋常の手法なれど此場合にては甚だ面白からず、斯著を以て三八に飛び爰に遙に四六の截りの缺陷に備へさるべからず、然るに白四六の缺點に顧る處なく、手重く三六に伸びしため、遂に四六に補充の一著を要する事となりて、忽ち形勢を失ふに至りたり。

〔原評〕　黒三七より四一迄の押しは俄に贊成し難し、一方に白壁ありて元來狹隘の地點なるに爰に進出せんがために一面四二迄、白に新勢力を與ふるの不利あり。單に**タ**に走り置くべし。併しながら白四二に就いては更に工夫あり、此場合二路を進めて**レ**に打つを形と思量す、一見形薄きに似たれども一時黒より手を着くる筋なしとすれば、圖の如く黒に四三と打れて結局四六の補充を促され、四五、四七と中腹を消さるゝには優るべし。蓋し**レ**に對し黒四七に伸ふれば、**ほ**に尖むべく又黒四二白**へ**黒**ほ**と二段に綽ね出せば、**ソ**に截つて**と**に伸びる形なりとす。

▲黒三七以下宜く大勢を洞察するものと謂つべきなり。之を以て原評**タ**に應ずる如きは尋常の局面に於いて處する手法なり。而して本局大勢の依つて岐るゝ處は、繋つて四六の缺陷が無事に濟むか、濟まざるかに因つて決せらるゝ局勢にして、**タ**點の如きは更に大勢に影響を及ぼさゞる地點たるに非らずや。尙ほ白四二にて之を**レ**に飛ぶ事、面白きに似たれど、爰に至つて俄に四六の疵に備へ



んは機既に遅れたるものにして、此時黒、六四の手薄きに乘じて百四六に煽らんか、白は十二の一著と中央の連鎖點と、惹いて及ぼす四六の截り手との三方を凌がざるべからざるの窮地に陷るなれば、白四二の伸びは曩に三六に失せし祟りとして已むを得ざる所なり。

▲黒五七は好んで危ふきを求むるもの。五八に伸び白百四一、黒ちと運び居りて確實なる局勢たるにあらずや。

〔原評〕 黒六九は當局者亦其失策なりしを首肯せり。七十に綽込み白六九黒ツ白ネ黒七一と打つべし。白巾し手を拔かば百五十に打つて全部を殺す意味なれば白は勢ひ八十に補はざるべからず、黒依つて七四に押すべく、白は釣合上ナに走る棋勢とならんに、此一隅白の先手となりて七二と出られては黒面白からず。

▲黒六九は惡しかりし。七十に刻ね込むで原評の手順に依るべきなり、黒再び失して漸やく勝勢を失はんとす。

〔原評〕 黒八五はちに尖む方利ならざるや、白に百四と打たるゝも苦痛を感せざるに似たり。

▲黒八五は前者八三と打ちたる時の豫算の著にて、白に八四の一勢力加はりては、八五の處尤も緊要の打點なり。

〔原評〕 白八六にてナに打ち、地合の爭ひに於いて固より悲觀する所なけれど、譜の如き劫爭の一戰下隅を破ぶるの寧ろ捷徑なるを信じたるもの、若し百六に至りて遲疑する所なく、りに覗き黒百七白ラ黒ぬ白百八と打たば、黒大石未だ眼なく、必ず百四四に約ふる事となるべく、白ム黒ウ白百四三と收束戰に入る時は勝算白に在らんかを豫想するものにて固より作り棋の狀態と思量す。黒に百七と打れて大勢忽ち一變せる以往は、白に勝算なきことを自覺したり。

▲白八六の一著之を敗因とす。若し自重して之をナに馳せたらんには形勢未だ逆睹すべからざるものありしに、白功を急ぐの餘り後ち右上隅の形勢に變化を生ずる事の慮りを缺きて、劫爭の一擧將に佳境に入らむとするの碁勢を刹那に破壞したるは、白の爲に惜しむべき局面なりとす。

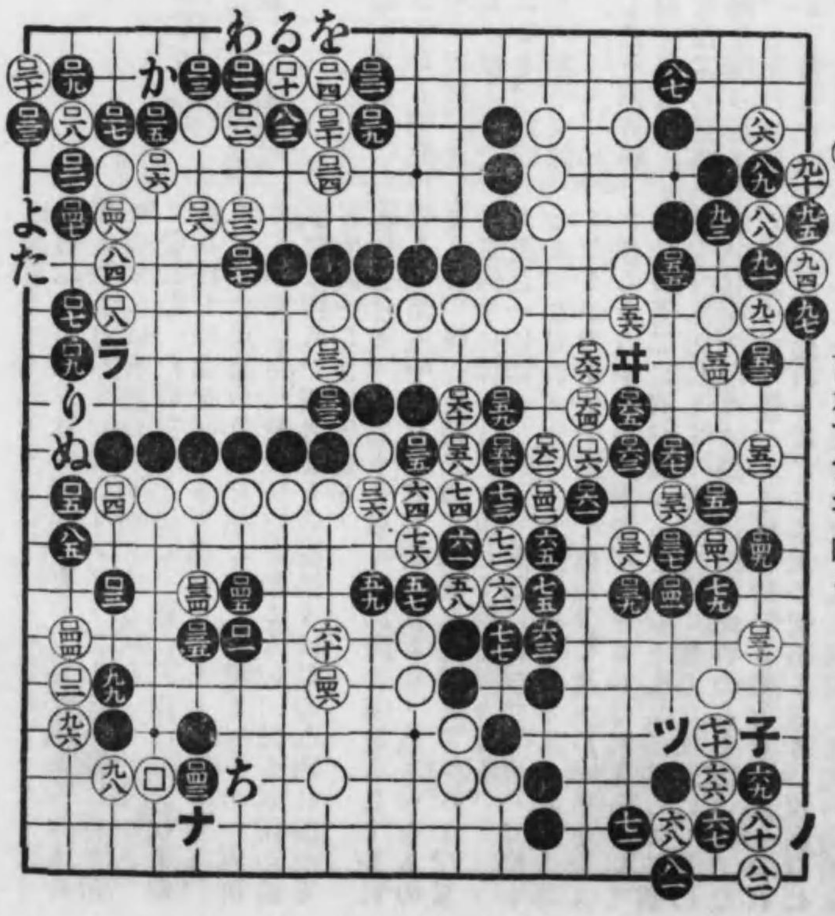
▲白百六は兎に角りに覗いて最後の一戰を試みざるべからず、百六は受手にてりは攻手なれば共に緊要なる所なれど、百六は之をりにせざるべからざりしなり。されど白りにせば黒百七白ラ黒ぬ白百八となる時、黒は必ず井に追擊して右上隅の大石に迫らんに、白は左側黒の大石を攻むるに暇無く其上白にはノに刻ねて、右下隅の石を狙らわるゝ疵もある事として、右上隅の白を凌ぐに損害夥しきもの生ずべけれ





ば、爰に至りては白の敗勢免がれざる所にして、之を要するに八六の一著にて全く白の敗勢と定まりたりしなり。依りて以下原評而已を掲げて批評を略す。

〔原評〕 白百十强行して却つて損を招きたれど、若し百十一に尖み、黒百十白るを黒をを白わ黒百三一となり、白手を他に轉ずれば黒は百二一に頂け、白百四七黒百十七白百十六黒百十九白か黒よ白た黒百二三と劫に受けられ、白如何ともすべからず。而も百二一に對し百十七に引くが如きは、到底忍び難きものに屬す。白百四二更に誤りを重ねたり。百五十に尖めば凡そ五六目の敗に結局すべけれど、五十步百步將に遺憾とする所なり。



## ▲第四十三局

### 方圓社長中川龜三郎講評

七月中中外商業新報所載

中押時先番　廣瀨平治郎（六段）　小岸壯二（四段）

▲黒五、普通にて素より批評の限りにあらざれど、此配置にてはイに斜走し、白ロ黒ハ白ニとなる型を採り、而して一轉左下隅十六に據り白十一の時、ホに拆き詰めする配置に出づるを働きある手法とす。

〔原評〕黒二五は場合を觀ての一趣向たるも、此際いに高がゝりする常套の措置に出づるも何等の支障あるなし。

▲黒二五は此場合當然の處置なり。若し之を原評いに懸らんか、白は必ずへに應じ黒二五白ト黒五二となる時チに詰拆かん、其時黒リに頂けなばヌに愚集み、黒ル白ヲと截らんに、左方白の堅陣を臨み居る事とて此戰ひ黒苦戰に陷るを免がれず、さりとてリの頂をワの斜走に換へんは不味に加ふるに實質を缺く著なれば、此配置として是亦黒の欲せざる所なればなり。

▲白二八の懸りはカ、ヨ、タの三點を撰ぶべきもの譜の如く打つて、黒にミス〳〵二九と三間に拆き詰めさるゝは普通白の不利とする所なり。

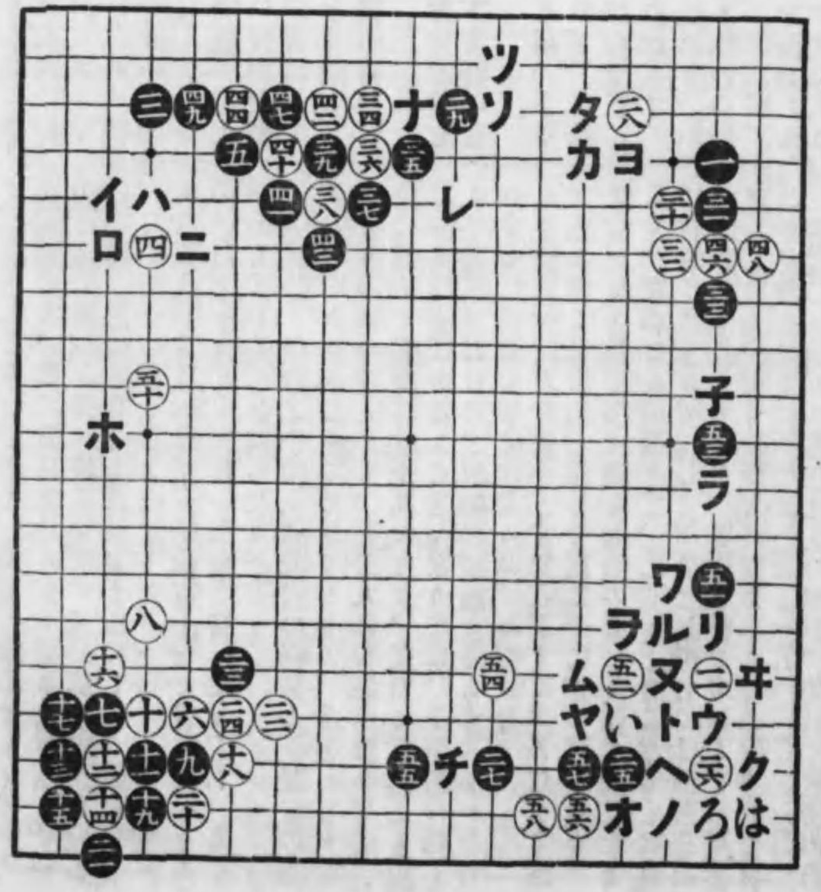
〔原評〕白の三十と掛け、更に三四の打込む手段往々にして之を試むる實例無きにしもあらざるも、其多くは局面の急迫を招く事、其振り換りの一方附くとの弊は白に於いて之を觀るもの、乃ち本譜の成績たる四八、四九までの振換りは黒の有利に歸せる事掩ふからざるを觀る。

▲賛成なり。白三十を以ては此際の所置としてレに冠し、黒三十白リに打つ型を採るなど然るべきものならん。但し此時黒カに掛けなばツに下るべく、又黒右側ネに拆かばナに頂けて捌くべきなり。

▲黒五一に詰め、次いで五三に拆きたるは一見働きなるが如けれど退いて大勢を通觀するに、本局の碁となるか否かは、繫つて白左側の構へがモノを云ふか然らざるかに由る局勢なり。されば黒五一を以ては先づ五二に飛び備ふるを斯局として堅實なる步調となすものにして、此時白ワに應じなば爰にてラに打込むべきなり。然らば黒は此石のみを凌げば可なるに加へて、遙かに上面に於ける勢力を利用し得れば、黒は此石を凌ぐに多大の便あるなり。又白ワに應ずる手をヲに頂けなば、ムに隱忍して先づ此黒を固め、白の打方に依りて徐に策を構ずべきなり。然るに黒、白の左側の形勢に顧みる所なく、手薄き五一、五三の手段に出たるより、白に五二、五四と冠せられ、左側の勢力を利用せしむる便宜を與へて茲に碁とならんとするの第一步を與へたり。

〔原評〕黒五五は先づろに頂け越し、白はへに白ウなる應酬を經たる後に行ひたきものにして、之一に下部の安定を期する所以にして、布石上黒の優勢たるや勿論たり。然るを黒にして之を懈りたるため、白より五六以下裾より眼形を掠め去らるゝこと黒の不利とする所にして、勢ひ其逃げゆく足跡、白の堅牢に接觸するもの、黒として其本意にあらざるべし。

▲黒五五は如何なり、先づへに突張り、白ろと交換して置き手を防ぐの傍ら、井の頂味を得置きて而して五五に飛ぶを確實とす、而も之を以てろに頂けるは原評の注文通りに參れば申分なけれど、斯くせば白は必ず



ノに刎ね出し、黒ヘ白オ黒ウ白クと運び來らんに黒はに押へんは五七に振換られて惡しければ五六に抑ふるの外なく、卽ち白はとなりて黒面白からざるなり。一例を擧げれば此時黒ヤに截りを防がんか、白リ黒ワ九二白五五と攻立てられて、黒は受身一方の姿となればなり。

▲黒五九は重くして惡しゝ、當然七七に突張つて七八に刎ねざるべからず、黒之を失して爰に敗因を招きたる當局者の不覺はさる事ながら、原評者にして事直ちに勝敗に關する這個の手段ある事を看過して一言の講評を加へざりしは甚だ等閑と謂つ可きなり。

〔原評〕 黒六一にあつてはまづ七三へ附け、白七四に受けたる時、更に七八へ頂けて早く下方面の治安を計るを急務となす。

▲贊成なり。七三と頂けて又七八と頂ける事、下手の兩頂けと稱して甚だ威服せざる手筋なれど、此際にあつては已むを得ざる措置にして、其時白七五に粘ざなば七七に突張つて早く活に就くを良計とす、黒再び之を誤まり、漸やく危殆の形勢に陷れり。

〔原評〕 黒六三の押しに至りては却つて煩ひの種無爲、九六に受くるを可とす。而して白より六四、六六と運びゆかれ、其六七と粘ぐの止むを得ざるもの一見して形の重きに堪へざるさま、此時代に入りては白として甚だ望み多き局面に推移せるを覺ゆ。

▲同感なり。黒六三は九六に應せざるべからず。一方下側に難關を控へ居る此際、又此處に煩ひを殘し打つ事、黒の不利なるは見易き所にして、爰に白有利なる局勢に移る事とはなりたり。

▲白百八、其意を得ず、無論百十七に當込むべきもの、白之を失してマに一眼形を與へたること、黒に尠からざる安心を與へたり。

〔原評〕 白百二十は上隅現實の利算より觀ての措置なるべきも畢竟小事に屬するもの、之をして大局上よりの場合ひとして、百三九の着迄に換へなば、白に於いて其優れるや萬々たり、反對にも黒より百二一の虛を衝かるゝことゝなりては、上面黒の飽くまで手厚きだけに、何物の歸趨を齎らすべきかを判知するに苦しむ事とはなりぬ。

▲贊成なり。

▲黒百二一、之を敗著とす爰に下すに先きだつて百六三の當てを領し、而して百二一に打つ可きなり。此當を打ち置く事は獨り大石の眼に關係するに止まらず、微細なる局面とて、之有ると有らざるとは直に勝敗に關する所にして。黒之を失しては後百三三の失なかりしとするも、黒勝を得る事恐らく不可能なりしなり、而も原評者が斯手あるに心附ずして再び評を脫したるは不注意と云ふべし。

〔原評〕 然るに黒百三三の輕卒、先以て敗着の第

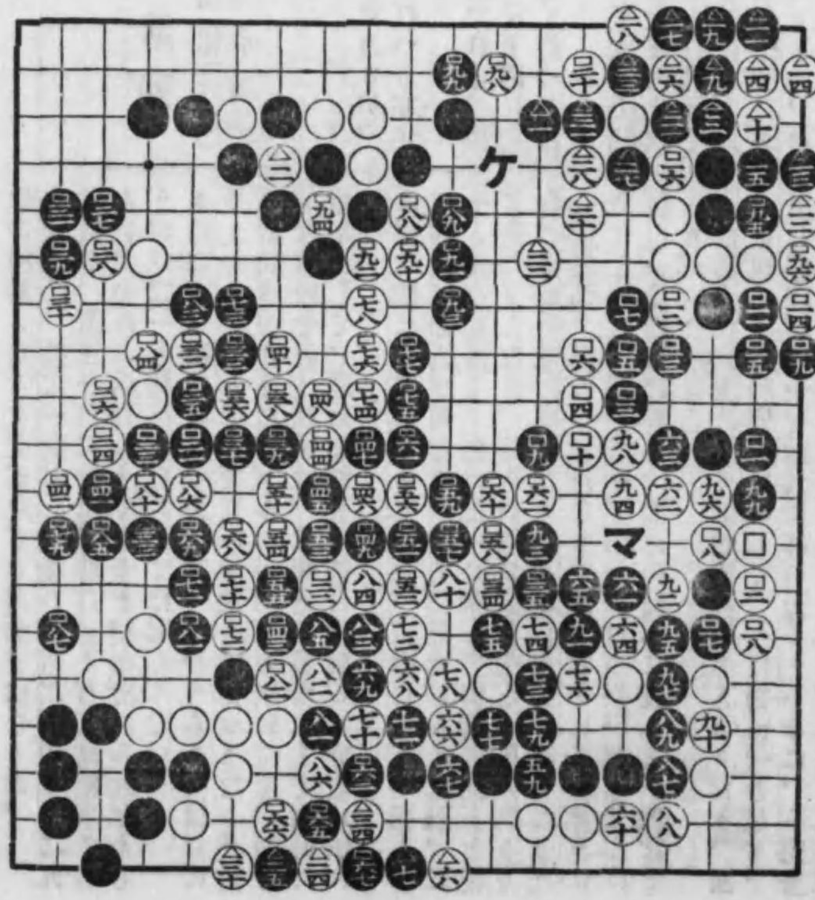




一歩を作せるもの、百三八へ一間飛ぶの至當なる勿論たり。續いて百四一の約さへは何必要ありての措置にや、無論百四七へ飛ぶの一途あるのみ、只觀る、白より百四四以下の壓迫を蒙りて、其百八七と低位を聯絡すること到底忍びがたきもの、其反響遂に百八八へまで波及することゝなりては亦救ふ所なきに終りぬ。

▲追評、黒百三三は兎に角原評百三八に飛び、白百三三黒百五四と運ぶべきなり。續いて白二百の劫提りはケに覗き置くを完全とす。黒二百十一以下は兎に角、左方三九の劫を爭ふべきなりし。

〔總評〕 本局は之を要するに最初黒五一に大體方針を誤り、次いで五九に大事を失せしより形勢を失ひ、最後に百二一に當て込みの手順を失して敗を取るに至りしなり。




黒百粘　白百提　黒百提　白百提　黒百提　白百提　黒百提　二百三十四手以下略ス

# ▲第四十四局

## 本因坊秀哉講評

八月中
中外商業新報所載

先々先
先番四目勝

廣瀬平治郎（六段）
瀬越憲作（五段）

〔原評〕 黒七、九と打つは普通の定石であるが、七の手で十に詰め、白イ黒ロ白ハ黒ニと打つも亦定用の布石である。

▲黒七を十に打つは手割として上乗の型なれど、黒として稍や働に過ぐる觀あると、敵手に左下隅に先鞭を讓るものあれば、黒としては圖の如く打つを穩當とせん。

▲白十四、十六の趣向面白からず、依りて大勢の第一歩を誤りぬ、之を手割より言はんに黒十五白十六の交換は互角とするも、此時に當り等しく打込むとすれば、二十にすべきを十四と黒の堅き部面に突入したる目前の不利を觀ればなり。されば白十四にあつては此場合二七若しくば十五を撰ぶべきもの、白之を誤りしため、片の附く棋となるに非らざれば急促の棋勢となるを免がれざる趨勢とはなりぬ。

〔原評〕 黒二一面白し、從つて白二十の手で二九に出で、黒三一白二十黒二四白いと打てば無事であるが、夫れは承知の上で二十と變化を試みたであらうが、二一と約へ付けられては馨しくない。

▲白二十、斯く打てば黒に二一と押へらるゝは目に見えたる所にして　要なき手法と云ふべきなり。由來當局者が普通に打ざるべからざる所にても、何をがな意匠を凝す棋風は、當局者の長所たると同時に短所にして、弱敵高都五段等に屢破るも亦之に依れり。

▲白二四は此際の策として先づ三四に截り、而して二四に刎ね出す可なり、然らば黒圖の如く二五、二七と運び來るも、白は三一に飛んで容易に此石を凌ぎ得たりしなり、而も白復た是を失し、黒の堅き方向に走路を取る事となりて、更に形勢を痛めたり。

〔原評〕 白四十無理なり、之が爲めに碁が非常に急になつた、四十の手で四九に打つか、然らずんば猶ほ一着四五に押し、黒ホの時へに備ふるが穩當である。

▲白四十は無理にして俄然潰れ形ちとなりたり、四十を以ては當然四五に赶して、へに備ぺべきなり。但し原評白四十を四九に打つ云々とあるは、不完全の著にして非なり。

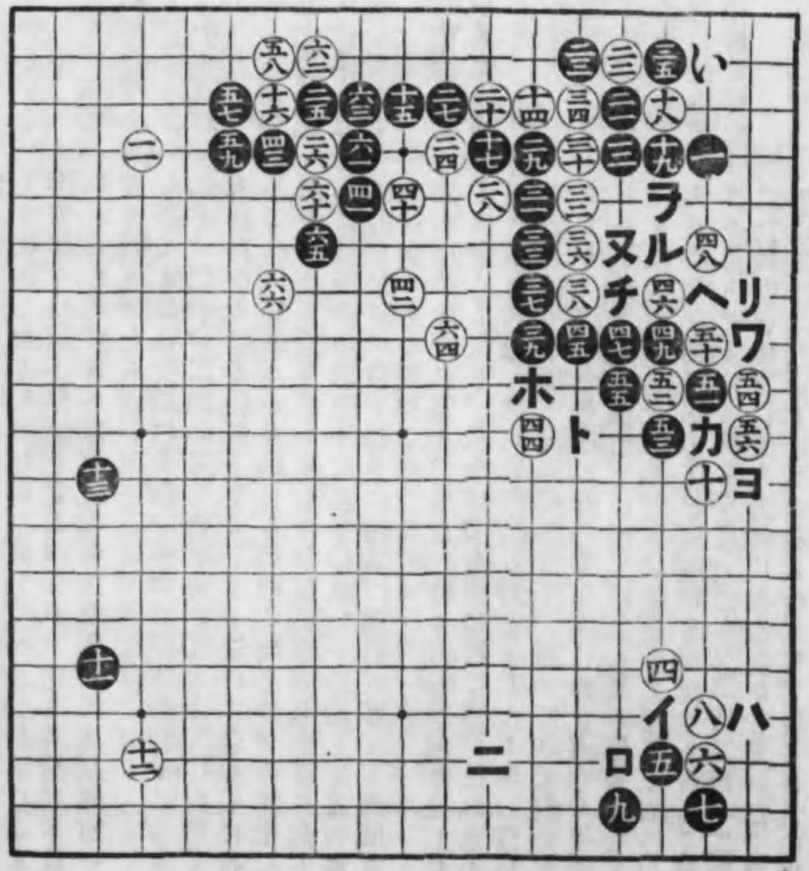




▲白四四は無謀の著なり、此際に當つては四九に攻守の一著を下す外なし、圖の如く黒に四五と折曲げられて次に四七と伸られ、ために四六、四八と黒の堅壁に向ひ連絡を取り行く事、姿より云ふも一見して白の無慘を語るものにして、斯くては黒に如何に打るゝとするも、白の敗は免かれざる棋勢たり。

▲黒五三、斯く打ちて白若し五五に伸びなば、トに頂けて逸出せんず氣構へは怯なり。其考案ならんには五三を以て寧ろ五四に下り切る可きなり、チに出でリに置く手を含みて、而も黒五三にては他に快著あり、卽ち斯著を以てチに突出し、白ヌの時ルに打込み、白にヲと取らせて手數を縮め置き而してワに刎ね、白へ黒カ白五三黒ヨと刎ね打んに白如何にするも大石に凌ぎなく、勝敗夙に決せしなり。

〔原評〕 黒六七にては七十に打つて二目を取切つて居る方が安全である。



▲然り、斯くせば白は此儘一局を放了するの外なかりしに黒再び勝機を逸して形勢に濁りを生せしめし事、怠りと云ふべきなり。

〔原評〕 白八二如何、敵を非常に窘める事が出來るならば兎も角も、此黒は容易に活があるから。タに飛んで居る方が働きである。▲賛成なり。

〔原評〕 黒百三、此場合に於いては百二十の所が無二の好點である。▲賛成なり。

〔原評〕 黒百七七如何、此手にてろに押して白の應手を聞へ、白若し百九六に出んか黒百九七白百九八黒は白にほと突切つて、三目を取つて仕舞へば劫を粘ぐ要もなし、又五以下の三目も復活して茲で忽ち勝敗が決して了ふのであつた。

▲然り、黒百七七は前著百七三の意を續いで、ろに押すべきである。其時白若し劫を提らばレ其他に劫立てせば卽坐に勝敗決せしなり。

▲黒二百五如何、リに刎ねて振換るを可とす。

〔原評〕 黒二百三一、一考を要す、二百三九の手で二百四十に打つて居れば劫である。然るに二百三一の手で九と打つて數子を棄てる位ならば、二百三一の手で二百三六に出で、白二百三五の時二百四七に押へて居る方が利益である。さすれば更に多くの勝を得たであらう。▲然り。

〔總評〕 本局は近年稀れに觀る不出來の碁にて、或人は初段畑、或は夫れ以下の局を當局者の打棋として掲載したるものならんかと言へど、眞逆にさる事實無きは疑ひを要せざるべきも、而も本局の手段其ものに就て言へば、或人の說に對して當局者は一言も無き所ならん。

さて本局は劈頭白十四、十六の意匠面白からざりしと、二十、二四の兩著要を得ざりしより、白早くも面白からざる局面となりしも、爰にて白四五に押してへに備ふるの泰然たる策戰に出なば、形勢未だ知る可らざるものありしに白茲に至りて形勢に焦りしにや四十の無理手に出で、次いで四四と無謀の擧に出しため、以下敵手に如何に應戰さるゝも到底立つべからざる局勢とはなりたり。

然るに黒此時に當り、五三に勝つべき機會を逸したるは暫らく置き、六七にて七十に打なば、夫れ迄の局なるを六七と戲れに似たる著を下したる事、當局者として不思議と云ふの外なく、斯くて中盤後に到りても、百七七をろに打つて卽坐に勝を占むる手段ある事は、前著百七三に出し時夙に黒の觀る所なるべきに、更に之を逸し、次いで百七九邊にて右方の大石の味を見て努力すれば、白を崩潰せしむる手段多々ありたるにも拘らず之を逸し又二百二四、二百二六に勝を確實にする方針に出づるかと見れば、最後に二百二九以下に巫山戲まわりて、自ら多大の損

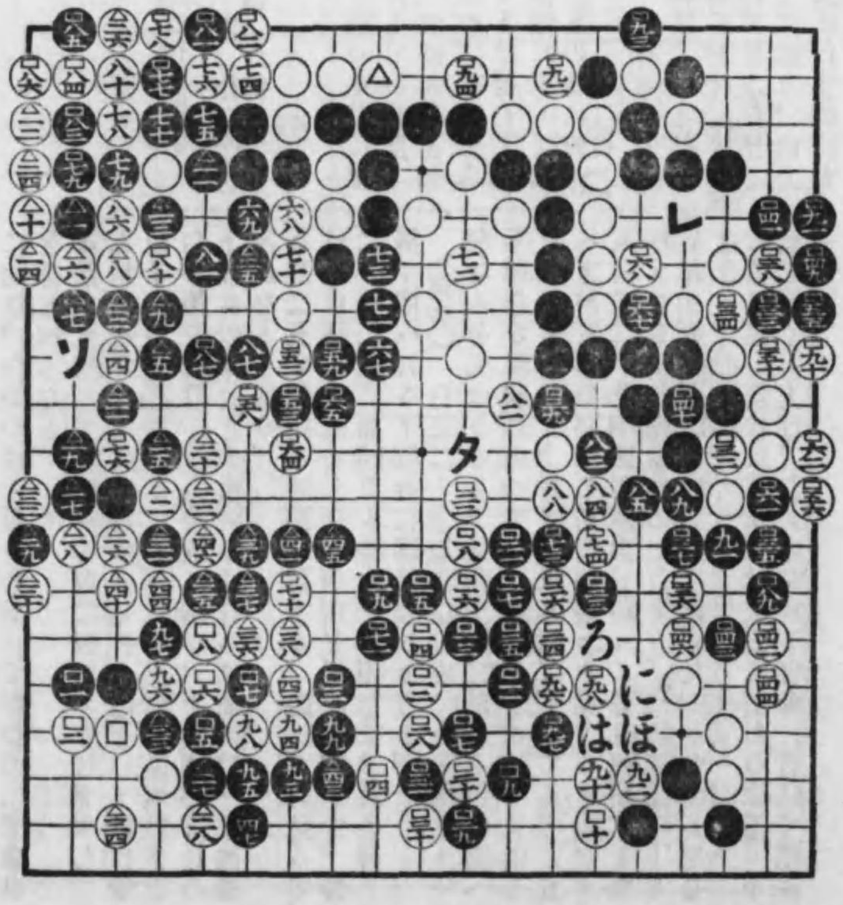




害を招き、右下隅の味に依りて、僅に四目の勝を收めて終局したるが如き、到底眞面目の局として受取れざる所にして評者は、當局者のため深く之を惜しむ。

(草)提 (草)提 (草)提 (草)提
(草)提 (草)提 (草)提 (草)提
(草)提 (草)提 (草)提 (草)粘
(草)白二の處粘

（本譜二百四十七手以下略）



## ▲第四十五局

九月中　東京朝日新聞所載

二目勝　瀬越憲作（五段）
相先　先番　田坂信太郎（四段）

### 七段　中川龜三郎講評

▲黒五と殊更に高く構へて、白に六と隅の正點に據らしめたる事もある型なれど、黒を持ちての態度としては緊張を缺くの謗りを免かれず、大體先著を布きたる局面の要は、敵の術數に乘せられざれば卽ち足るもの、黒より益も無き趣向立てするは勞して効なき業、況や技倆に格段の差違ある强敵に對しては特に根底ある配置を要するもの旁た黒五の著は矢張り九に據るの正陣を布くべきなり。

▲黒十七、機變に乏し、此形勢に在りてはイに尖み白十八にせばロに掛け、白ハ黒ニ白ホ黒二四と打つて中側に大模樣を張るべく、亦白十八にせずしてヘに頂け來たらばトに刎ね、白チ黒リ白ヌ黒ル白ヲとなる時、中央を主とする型を採つてワに截り、白カ黒ヨ白タ黒レと打つ型に出づるか、又は白ヲの時カに粘ぎ、白レの時左側ソに掛けて打つの二者孰れかを採るべきなり。

▲黒十九緩し、ツに尖み白二四黒ネと打つべし

▲黒二一、二三に非難は無けれど之を以てロに掛け白イに頂け出さばヨに伸び截ち、白ナ黒ヘ白チ黒ト白ラ黒リ白ワとなる時ムに飛び、下側ウの打込みと上側ニの掛けとの兩睨みに打づは如何、一層兵機の速かなるを覺ゆ。

▲黒二五の打込み地點を誤まる、總べて打込みの要は敵に痛みを感せしむる個所を擇ぶを利とす。卽ち二一、二三に加へたる勢力を利用して、白の薄く手廣く構へたる下側井に擊込むべきなり。

〔原評〕白三二と急遽浴びせゆくもの素より一趣向なるを失はざるも、兎角上隅に於ける白の備へも手薄なる現狀にあつては、思はしき成績も見出しがたきが常にして、評者は寧ろ三二を以て凡俗に五三へ下がる事の却つて局面の廣きを感ずるものなり。

▲白三二、此側面の勝形を籍つて黒を掩擊する型を採りたるは此際當然の措置とす。原評五三に下るは手廣き策戰にはあれど被攻擊者たるを甘ずる型なればなり。

▲黒三三の頂けは手重し、五三に刎ねの二五一子を棄て輕く引上げ、白ノの時尙下側井に打込て戰ふべきなり。



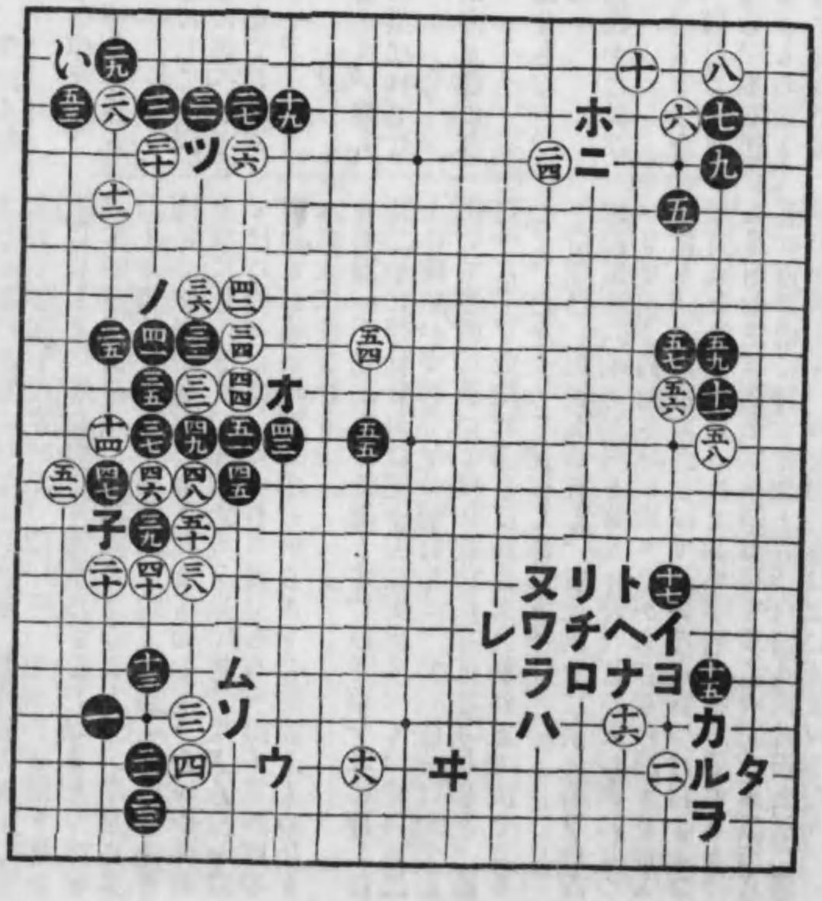


〔原評〕續いて白三六にあつては一應三七へ約さふるの外なきもの、上隅の事は其形の輕くなるに隨つて却ていに劫を迎ふるに便宜を覺ゆるものなり、反對にも黒より三七と突出さるゝもの、白とし目前委勢の毀損を憶ふもの多し。

▲然り白三六、三八は輕妙なる手段たるは之を觀るも、依りて黒を窮地より逸走せしめ、且つ自から黒の堅き方向に勢力を加へゆきたるの有樣白無理たるを免がれざる委なり。

▲黒四一斯く打つは只今黒三三に割込み、白三四黒四一と粘ぎたる道理となり愚集の委勢堪へがたし、四九に曲げて四一と提らせ、而してノに當てゝ打つべきなり。但し此の當を見合せ、四七に納まり居るもあるなり。

〔原評〕續き然るに黒四三の惡著求めて眼形を失ふの因、白の三六をして好著化せしめたる跡あるもの。何とて平凡に四三を以て四四へ截るの易道に據らざるにぞ。若し白にし



て四九へ伸びなば、四五へかけ絞ること、自から好形に就くべき所以ならずや。

▲黒四三は大失著なり。因りて忽ち敗形を作せり。原評四四に截り白五一にせば四九に提り。白オ黒五十と打つべきなり。

〔原評〕 白の六十粘ぎは何やら重き形にして登同の意を表しがたく、同じくはクの懸粘ぎに換へたきものにして、譜に觀る黒より六一と煽り立てらるゝ事は、局勢の急迫を招くの嫌ひなからずや。

▲白六十は原評を是とせん。

▲白六四の伸びは重し、七四に飛ぶを姿とす。然らば圖に觀る紛亂を釀さずして事は平易に運ばれしなり、白一度爰に勝機を緩む。

〔原評〕 黒七一の粘ぎは百七三に換ふ方上部に享くる便利多し。 ▲然り。

▲白八十甚だ緩し、八一に刻ねる可や論なきなり。白再び爰に失して形勢を危ふきに致したり。

▲黒八五は後にある原評の如く、一旦百四十に伸び置かざる可らず。

〔原評〕 白九二の時は甚だ着點に窮したるさまを見受くるものにして、九六を以て九七へ綽ねる事は叶はぬなど、白として苦しき立場たるもの、畢竟黒より六一と煽られたる反響と觀るの外なきものなりされば黒百一に於いて今一著百十二の押を先んじ置きなば甚だ歩調の可なるを覺ゆ、黒八五も拆くに先立ちて百四十に伸びて、白に隅を受けさせ置き度きものにして、將來白より百三八と頂け越さるゝ味を殘すこと、幾分頑ひの種たるものにして、現實に又白より百四十以下、百四六と迫まり寄られたるより極めて細微の局面に移りたるものなり。たゞ僅分の末期に近づきて、黒百六九を以てろ、又百八五を以てはに換へなば、いづれも幾分の有利隨て其勝敗の歸趨未だ遽かに判知すべからざりしを顧ふものなり

▲白九二佳著なり。

▲黒百一、百三之を敗著とす、原評百十二に押し白百二十に掛粘けがば百十三に突出すべく、亦白百二十に掛粘がずしてヤに刻ねなば。其時百一に突出し次いで百四に截つてマに截絞れば可なりしなり。黒百一にして此策に出なば勝敗未だ孰れとも決せざりしに、之を失して挫折し終れり。

〔追評〕 白百五四緩し、右上隅ケに刻ね黒フ白百六四黒百六七の交換を經たる後、百六一に刻ね打つべきなり。白此手順を誤り尠からざるの損害を被ふりたり。▲黒百六九を以て原評ろに打つは白よりコに突込む味を利用されて却て不利を招く恐れあり。▲黒百七三は百七六へ綽ね棄て置くべし。▲黒百八五は原評はに粘ぐを是とし。白百八六は百九三に懸粘ぐを利とす。▲黒百九三はエに下るべきなり。





〔總評〕 本局は黒の配置面白からざりしが、白三六に失ありしより一旦形勢を復せしが、黒四三に誤りて全く敗形に陷りたり。然るに以下黒よく奮戰して屢白を危地に陷しいれ斯局をして僅々二子の差に過ぎざらしめしもの、敗亦た遺憾とする所なからん。

## ▲第四十六局

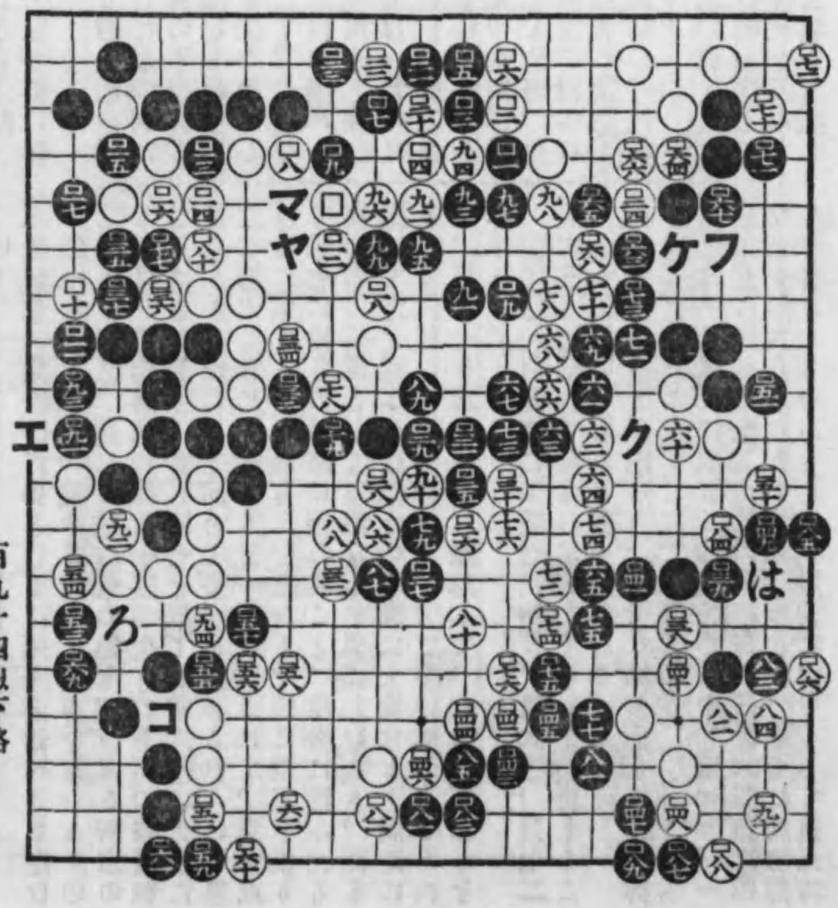
### 本因坊秀哉講評

先番中押勝　瀬越憲作（五段）
先々先　小岸壯二（四段）

九月中萬朝報所載

▲黒十五、要所には相違なきも明隅の大なるには及ぶべくもあらず斯著を以ては左上隅十六に懸るべきなり然るに之を怠りて白に十六と兩締りを得せしめたるは配置上面白からず

▲黒十七、此型を採りて白に迫らんとならば、十五の際に之を行ふべきもの、今にして斯の型に出づるは白




百九十四以下略

三十迄の結果、黒十五の一著幾分遊びとなるの觀を呈するにあらずや。爰に於いてか前著十五の更に面白からざるを憶ふ。

▲黒三五の頂は定型なれども、斯くして四三迄の戰蹟を顧みれば黒は白四の生命を半ば制したるの利は擧げ得たれど、下部に於いては殆ど一著の手損あるに加へて、曩の十五の一子白の堅きに臨むものとなり。一著として効力を一層減退する趣を生じ來りしなど、此振替りは決して黒を利するものにあらず。黒三五にては此際三八に押し、白イ黒七二白ロ黒ハと運び、此時白ニに懸粘かば黒三五白四一黒ホと伸びて宜く、又白ニに懸粘ぐ手を三六に截らば一旦ヘに截り、白六九と交換したる後四十に頂け、白四二黒トと打ち其時白ホに一子を抱へ提らばチに引くべきなり。果して斯くの如くなれば當に此處の手割に於いて優るものあるに止まらず、依然として先著の効力は之を保持し得たりしなり。然るに黒型に囚はれて三五の一著に出で、白に三六と機變の著に遭遇して不利を招き、廣濶なる局面を致すと同時に、既に碁となりたるの形勢を觀る事となりたり。

〔原評〕 白三六は四一に應じ、黒三六の引となるが普通であるが、さうすると三九の截れ味を生じて茲で白が打ちやうに困るから、三六と變化を試みたであらう。黒四七如何、此場合六十の大場を占領したい。

▲黒四七、此際の打場としては何人と云へども進むで四七に備へるか、退いて六十に地歩を占むるかの二途ある而已、而して黒四七の點を選びたる所以のものは、黒此時已に既著十五の失と右下隅の戰蹟利ならざるを覺り。若し四七を以て尋常六十の大場に據らんか、白にリと詰めて勢圏を阻められんに、黒之に應じてヌに冠せるも五一等に侵されて、形勢或は日に蹙まるものあらんを慮かり、特に羽翼を張りて四七に據るの戰略に出たること、棋勢に鑑みたる當局者の措置として當然なるを思はしむるも、而も退いて之を稽ふれば六十の地點は大場たると同時に兼ねて白四の活動を抑制する、二樣の働きあるあれば、黒四七を以ては更に隱忍して、六十に備ふるを本來とす。

〔原評〕 白五六にて五七に粘ぎ、黒六五、白七二黒六三と洒落れて活られは好しくないが、併しそこで七十に拆いて居るも亦一策である。

▲白五六は重き手段なり。五七に粘ぎ而してルに拆き、形勢を持して徐ろに敵に當るの策に出づ可なり。

▲黒六一は慮りに過ぎて却つて形勢を失墜せり、一旦六五に約へ白七二、黒六一、白六三黒六二白六四黒七十白六八黒六九と運ぶべきなり。然らば局勢黒に有利なるものありしに、黒爰に出でづして白五六



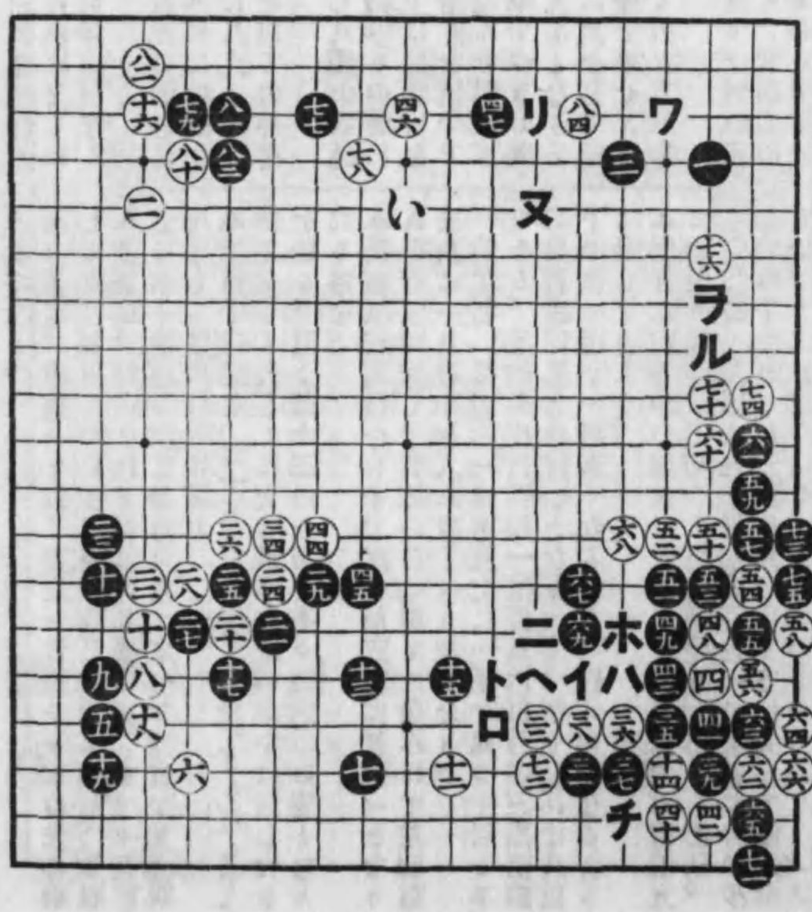


の目的を遂げしめ、七五迄の結果白をして多望の形勢を得せしめたり。

〔原評〕 白七六如何、黒に七七と打込んで來られるは分り切つて居るから先づイに飛ぶか普通である。ソコデ黒ラに詰めて來た處が、劫が殘つて居るからドウでも捌く事が出來る。

▲白七六は策を旨とするものにして原評イに打つは形勢を主とするものなり。されば策としてはイに飛ぶを上乘とする事、恐らく當局者の眼中に映じたる所ならん、されど斯くして黒にラと詰め迫まられんは、白として此處の劫爭手重きものとなり、隨つて戰場も狹隘を來たさん事を慮つて、先づ圖の如く七六に備へ、兼ねて八四、又はワの打込みを含み、而して黒七七と打込むを俟つて右邊の劫を利用し、紛亂裡に黒を惱ましんず策戰を採りたること、白七六は斯局にして當を得たる措置と斷ずべきなり。

〔原評〕 白八二は八三に抑へ付け




(三手)提 (三)同

る方が宜い、左すれば黒八二白ろ黒は白に黒ほ白へ黒百二十白九三黒百二四と、活て居なければならぬソコデ八四に打込んで行けば茲に劫材が澤山出來るから面白い碁になるであらう。

▲白八二は圖の如く應ずるの外なし。原評の如きは管に地域を失ふものたる而已ならず、外部に缺點を生ぜしむるもの、而も原評八四の時黒に八九と應せられんに、白所期の劫材をだに不充分を以ての外得られざるなり。

▲白八四、方針を二途にするもの、若し八四の打込みを目的とせば八二を以て原評八三に約へるの策に出づべきもの、一旦八二と下りたる以上は此趣旨を貫くべく百十二に押し、七八以下の各著意を繼いで此側面に全力を注ぎ以て右側の劫爭を睨んで戰はざるべからざるにあらずや、然るに白此乘ずべき好機を誤りて八四に打込みたる結果、黒九九迄となりて白は隅に於いてこそ志を得たれ、兩側は黒をして充分の姿たらしめ、依りて頓に形勢に一變を來せり。

〔原評〕 黒百一は百二に粘いで活きて居る方が味が宜い。

▲黒百一惡し、因りて復亦形勢を危ふせり。何故百三一に押すの當然の所置には出ざりしぞ、當局者の意を知るに苦しむと同時に原評者が斯著あるを措いて百二に粘ぐを佳なりと主張する所以を解するに惑ふものなり。

▲白百二、黒百一を以て百三一に押さゞるの失に乘して爰に突出したるは、著眼鋭しと云ふべし。敬服

▲黒百三、好處なれども未だ其機にあらず、一旦百五に劫を提つて白に劫材を費さすべき機會なり。斯局として實に勝敗に繫る。

▲黒百十三惡し、百十五に當込むで凌がざる可らず、黒之をしも失しては大勢最早白軍の掌中に歸したるを觀る。看よ百十三の一著が全々持込みの姿となりたる事を。

▲黒百三三面白からず、直に百三五に打つべきなり

▲白百三四緩し、右側の白は棄てる含みにて左側百三八に一旦截りを入れ置くべき機會なり。

〔原評〕 黒百四一は百五七に一子を取つて居る手である。其結果は白百四一黒百三六白百四三黒百四二白百四四黒との綽ねとなるべく、斯くなれば八以下の白一團が一層薄くなるから、圖の如くなるよりは優しであらう。

▲原評は何等かの間違ひならん。斯ては未だ百四九に劫殘り居れば、却つて黒中押の敗を招かん而已。

〔原評〕 黒百八九と押して百九一に尖むだのは少しく俗手であつた、百八九の手でちに尖んで居るが宜い、さすれば白はりに尖む位のものであらう。ソコデ黒百九一白百九二、黒百九三白百九四黒百九五





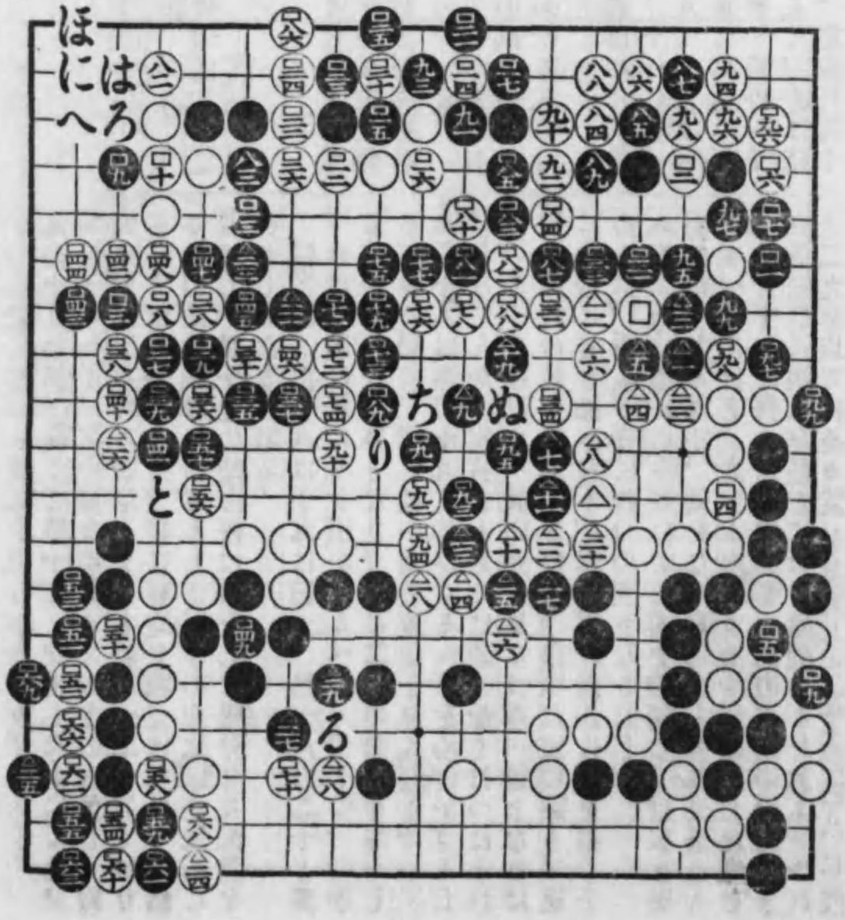
と打てば、白に眼形が無いだけ優つて居る。

▲然り。

〔原評〕 白二百十六は敗著である此手で二百十八に粘いで居れば攻合は無論白が宜い、故に黒は二百二十に截る外は無い、其時白ぬに活きて居れば宜い、然らば黒は二百十六に伸る位のものであらう。ソコデ白二百二六に押し、黒との時るに覗かば七の一子か、十七以下の五目を取り得て勝になるではないか、惜しい事をした。

▲然り、白此碁を取逃したのはヨク〳〵運の無かりし者と見ゆ。

㊀劫提、㊁同、㊂、百五四の處へ打込、㊃、百六十に提、㊄粘、



## ▲第四十七局

十月中
報知新聞所載

先　四目勝　小岸壯二（四段）
小野田千代太郎（四段）

### 本因坊秀哉講評

▲黒七は左上隅八に懸り、白若し下側イに挾まば黒亦上側ロに挾み打べく、又白イの挾みを以て右上側に拆きなば此時圖の如く七、或はイに拆き打も亦普通の配置なりとす。

▲黒九如何、二三に懸り勢圏を擴大して打つ意匠に出づるを普通とす、而も九を以て二三の處に迫り打事は直ちに七の前著を活動せしむる所以たるにあらずや。

▲白十如何、當面の敵子九に對抗して右側ハに斜走するを一般配置とす、此時黒尙圖の如く十一に備へなば直ちにニに打込み、九の黒を競り立てゝ自家を凌ぐ策戰に出づると同時に、一方上側ホの打込みを窺つて進行すべく、又黒十一に打つ手を一路控へてへに備へなば、此隅の事は姑く其儘にして、左下隅ト若しくば十二に構へてチに打込むか、左側に拆くかの二途に出づる策戰を採るべきなり。

▲白十二如何、斯くて黒十三と交換したるにては、前著十の一子が黒の堅きに詰めたるものと化し、同時に爰に詰めたる著意を失ふもの、十二を以てはリ若しくばヌ侵擊して、玆に戰端を開くべきなり。然るに白此策戰にも出ざりしより十の惡化は全配石に及ぼし、黒十七の時白既に敵をして充分なる配置を得せしめたるを觀る。

〔原評〕　白十八は十九に約へ、黒十八白二十と應ずれば、黒はルに手を引かざるべからずして、白卽ち三十に打行く事となり、黒に二九の飛びを加へしめざるを得て、譜とは一著の差違を見るなり。

▲白十八は黒に十九と伸びらるゝ手を心付かざりし誤りならんか、實質より見ては圖の如く打つにあれど、著手の運びに一著の差を見るは堪へ難きなれば爰は原評の如く運ぶべきなり。白復た爰に誤りて更に大勢に非を加へたり。但し原評黒ルに手を引くとあるは、恐らくヲに打つの誤りなるべし。

▲黒二九は遙かに左側白の勢圏を抑制して自家を堅固に構へたる著手、優勢なる斯局としては良著とも觀るべきなれど、之を本來より論ずれば若し此處を圍ふとすれば狹きに守備せず、敵の進擊の餘地多き右側三二に圍ふを是とすべき道理なるを思ふ。されど二九を以ては全々爰を放棄して左上隅四八に侵し、白四七に應じなばワに頂け、白カ黒ヨ白タ黒レと打つて外部に勢力を張るべく、亦白四七に應せずしてソに尖まば、ツに尖み付け、白い黒四一白四四となる時、ネに斜走して大規模の策戰に出づるは如何にや、大場の駈引に於いて、古今に冠たる元丈師は斯樣の形勢に於いて、常に此手法を採りたり。

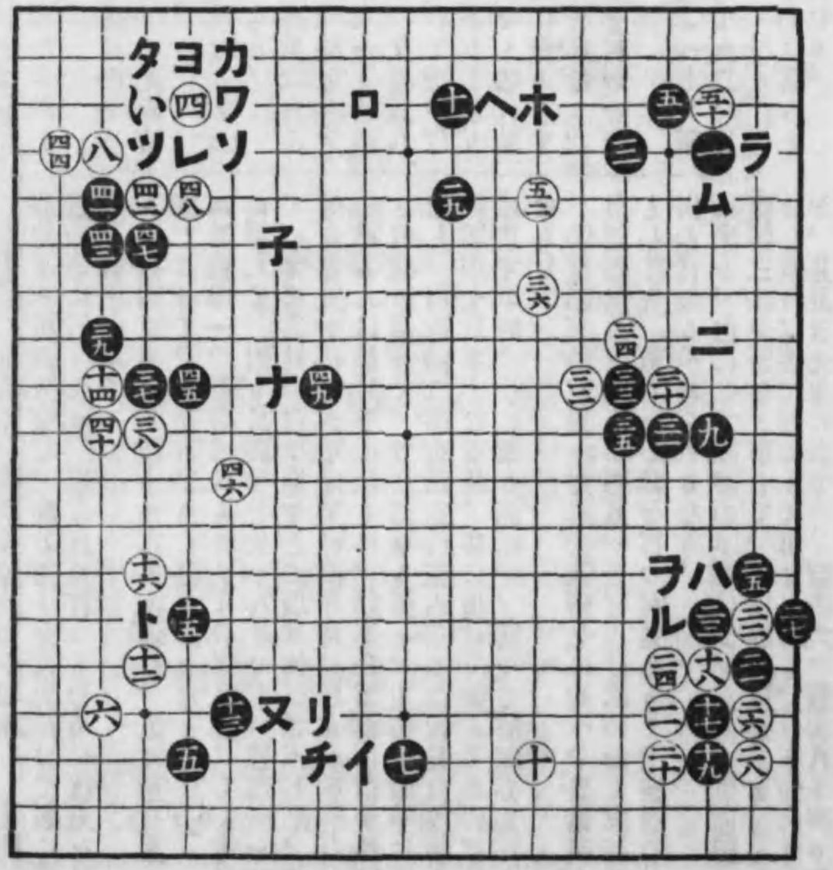
〔原評〕　黒三七、三九の趣向には賛意を表し難し、四八に打ち白四七なればワに頂けるべく、又白ソなれば黒ツ白い黒四一白四四の時、四五に冠すべし。

▲黒三七の策戰は、黒として穩かならず、原評に據るを妥當とせん。

〔原評〕　黒四七重くして惡し單にナに飛ぶべし、白を四八に行ばずは徒らに接攘を勢化たらしむるのみ。

▲然り。

〔原評〕　白五十と頂けて黒五一と交換しては、五二に進むも七十の飛込緊しからず、同じくは五十をラに頂け、黒五十に下らば其時五二に飛



びゆくべし、黒應せざらんか、七十の飛び込は甚だ打撃なるべく應せんか五十の下りは白に利かされし姿となる。

▲賛成なり。白五十を以てラに頂けなば黒は必ずや九七若しくばムに伸ぶべけれど、白としては此際兎に角ラに頂けの一著を試むべき機會なり。

▲黒五三は嚴しきは之を見るも、若し穩健なるを云へば六二に地歩を占めつゝ白を競るにあらん。

▲白五四、五六は手重き策戦にして其結果黒六九迄となりては本來より云へば最早望み無き局勢なり。五四を以てムに頂け、黒ラ白ウ黒五九白六一と運び其時黒五八に提らば井に綽ねて凌ぐべく、又黒五八に提る手を六十に粘がば、其時五四に頂けて凌がば斯局の形勢未だ遽に測るべからざるものありしなり

〔原評〕 黒七一働きに乏し、九二に出でゝろに粘がせ、七三に赶し居るべし、白其時七二に飛ぶとすれば七一はノに赶すべきにあらずや、▲賛成なり。

▲黒七三は此機會に於いて、九二に覗きを利かせ置かざるべからず。

〔原評〕 白七四不可、九二に約へて忍ぶべし、眼形に關係する要點なり。されば黒七五にて九二に出置くべく、八一にても尚然り。

▲然り。當局者双方此要著に心附かざりしは怠りと云ふべし、特に黒は爲に白に棋壽を與へたり。

〔原評〕 白百四、百六の趣向稍や無理にして結局利益せる所あるなし、寧ろ百十九に尖頂けて黒に百五の邊に備へさせ、百二八に打つて徐ろに收束を計るを可とせん。

▲白百四は兎に角百十九に尖み頂け、黒に百五五と應じさせて、上側百二八に打つべきなり。

▲黒百四一、百四三はミス〳〵の持込みにして大いに惡しく、因りて勝勢を失わんとせり。百四一を以てはオに頂け、白ク黒ヤとは頂け伸びざりしぞ、其時白百五十に約へなばマに曲げ付け居らんに、白ケに截らんは黒にフと截られ、以下白コ黒エ白テ黒アと打拔き居りて、サに活きる手と、上部百四一に突出し、白百四二黒百四三白百四四黒百四五白百四六黒百四七白キとなる時、ユに頂けて凌ぐ手あれば白は黒マの時、ケに截る能はず、隨つて勝敗亦爰に決せしなり。

〔原評〕 白百四六惡し、百四七に約へ、黒百四六白百四九黒百五九白百五一と打たば譜の如く成行くとしても、百六一の當を打つ利益ありて、勝敗の數尚未だ知るべからざるなり。

▲然り、白にして原評の手順に出でんか、黒百四一百四三は失著なる事として、或は勝敗に顛倒を見んとせし事は、甚だ危ふき次第なりしも、白亦如何せしか、見易き此擧に出でゝ、百四六、百四八と誤り運



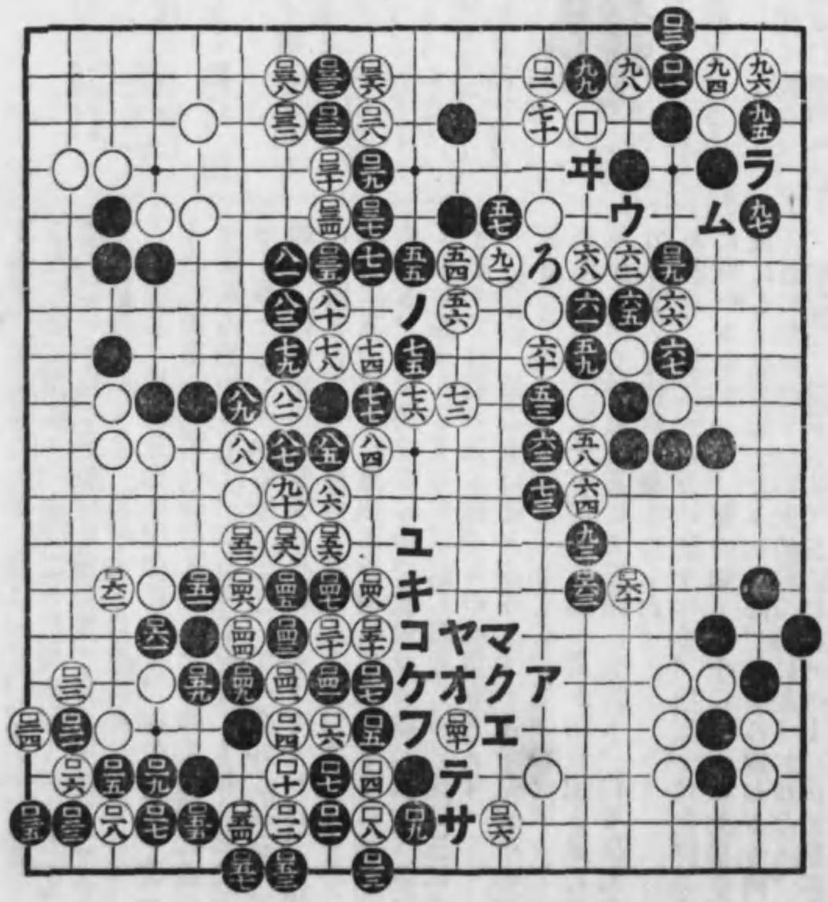


びしため、黒百五九迄となりて勝敗定まる事とはなりたり。

〔總評〕 本局は最初白十、十二の策戦面白からざるものありて、爲に十の一著惡化し、惹いて配石の利勢を失ひたる折から、更に十八に失して全く立遲れの局面となり、更に五四に事を誤りたる以往は、白回復に道なき局勢なりしが、黒亦數次勝機を逸して漸やく細碁の形勢となりしに當りて、黒更に百四一、百四三の失著を下し、或は勝敗の顛倒を見んとせしに、爰に於いて白亦百四六に失し、遂に四目の敗に終りしなり。

六六粘、九二粘。

百六十三手以下略



## ▲第四十八局

方圓社長　廣瀬平治郎講評

十月中　東京日々新聞所載　先相先　中押勝

先番　長野敬次郎（五段）　小野田千代太郎（四段）

▲黒三、白二と圖の如く左上隅に打ちたる際は、四又は十に締るを普通とす。

▲黒五は布陣忽々白の勢力範圍に於いて戰ひを挑むものにして穩かならず、左上隅十五に據るべし。

〔原評〕黒十一、是れ常法なれども六、八の距離廣き處に於いて十二と封ずるは白の欲する所なれば評者は之をイの尖みに代へんことを思ふものなり。

▲然り、此場合にてはイに尖む定型を採る方可なり。

〔原評〕黒二一の運用は大勢に至大の關係を有するもの、上隅既に十二と封鎖せられたるの局勢に於いて、新たに右邊に打込まんは黒の動作にあらず、從つて黒は下邊に蟠踞し、其の大を以て敵の模樣を壓するの釣合に行かざるべからず、先づいに掛け白ろに飛ぶ時はに打つを以て眼目と爲す。白ロに押せばにに飛び、白ほの時二一と治まつて然るべきものとす。

▲黒二一は此際穩かにはの要所に備へ居る處なり。白此時ハに斜走せばいに掛け、白ニ黒ロ白ホ黒へ白ト黒チ白リとなる時ヌに構ふべく、又白ハに斜走せずしてろに飛ばゝ、其時二一に尖み附くべきなり。蓋し二一を以て原評いに掛け棄て置く事は、黒として策を弄するもの、黒本來の態度に非らざるなり。

〔原評〕黒二三愈々保守に傾く、彼の十一、二一と共に局部の利潤に滿足すること、頓て戰局に後れを取るの始めにして、假令先着を布くも毎に機先を爭ふ事を忘るべからず、二三にて一着ルに試みては如何、白の應手がヲ又はへにあらずとすれば、如何に手段を弄するも黒の利勢たるを疑はず。

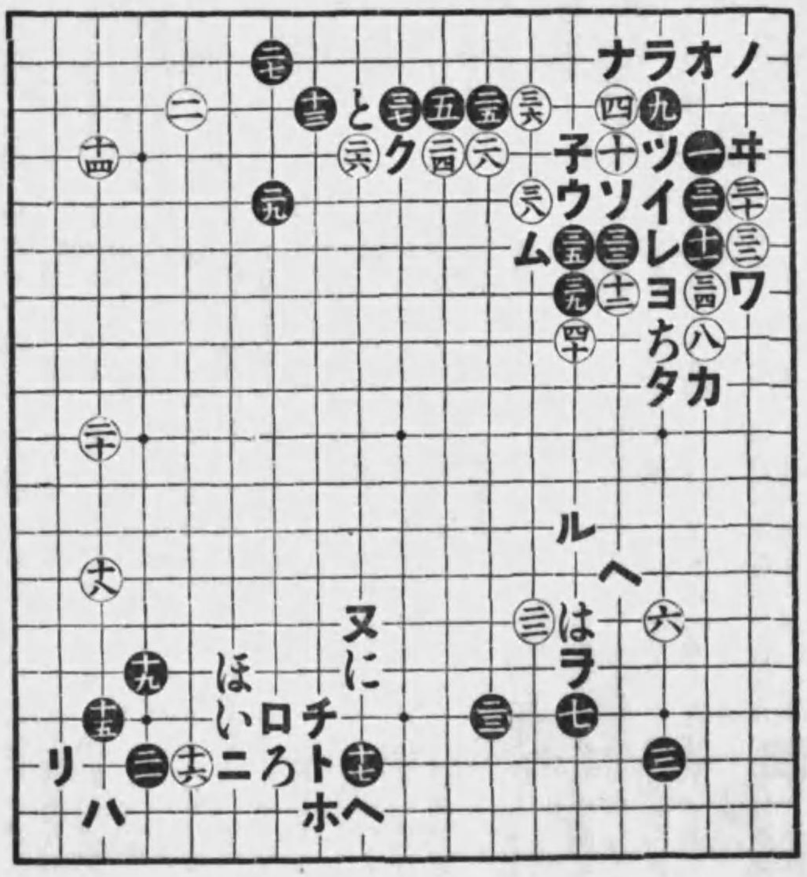
▲黒二三、原評は意味不分明にて批評するに由なけれども、之を要するに敵の先鞭せる處に向つて遲れて策を弄せんとするは事己に穩ならず。黒二三は今となりては圖の如く應ずるの態度を可とす。

〔原評〕黒二七はとを本手とすべく、白三十の輕擧却つて地盤を失はんとせしに、黒の乘せざりしは怪しむべし。三十を三六に約へ置かば右邊と共に形厚かるべく。黒三三にて三四に突當り、白ワ黒ちカ黒ヨと打ば白の禍とならん。

▲然り。黒二七はとに應ずべく、白三十は此際三六に約へるを是とす。圖の如く三十に打つは此場合無理にして黒ち迄となりたる時、白タに綽ねるも同じくヨに粘がれて白の大模樣消滅に歸すればなり。

〔原評〕黒三五にて三六に出づべし、此好點に先んずる者の優者なること、子を下して後に知らんは遲し、此に至つて白の答ふる所は只四、十の二子を棄つるに存せんのみ、聊か黒の爲めに氣勢を昂ぐるに庶幾からんものを、白に三六、三八の根據を與へし以往は黒頻りに散地を走り、白中腹の勢を縱まゝにす。

▲黒三五可なり。之を三六に伸びて白に三五の處を約へ込るゝは黒として堪へ難き姿にあらずや。即ち黒三五を以て原評三六に伸びんか、白にレと割込まれんに、黒イに當んはソに截つて三五に約へ込れて惡しければ、黒はソに突張るの外無く、以下白イ黒ツ白ヨ黒ネ白ナ黒ラ白ム黒ウ白井となる時、ノに應ぜんはオに割込れて劫となれば、黒は此時オに應ずるの苦痛を忍ばざる可らざるの有樣、斯くては之を姿より觀るも、黒に不利なるは歷々たる形勢に非らずや、況んや黒三五白三六の交換は、一見すれば白急所に先鞭したる如けれど、黒に三七と應ぜられて、クの



利手を失ふ不利あれば、三六はさしたる好點には非らざるに於てをや。

▲黒四一甚だ緩し。何とてヤには刎ねざりしぞ、白マに伸びれば四七に掩擊するの好形を得べく、又白マに伸びずして九六に割込み、黒九七白九八黒九九白五二と綽ねなば、マに截つて其時四一に懸粘がんに是亦佳形を得られしに非ずや。

▲續いて黒四三面白からず。尙ヤに綽ね白マなれば五二に押し、白ぬ黒五一と運び白るに伸ばゃ六三に押すべく、又白六三に刎ねなば五六に引き、るの截りと右下隅百五九に馳する手との兩睨みに出づれば尙ほ棋勢を保ち得たりしなり。

▲黒四五又復面白からず、直に四七に覗き白四六の時五六に伸び切り、白五一なればケに尖むで四九の塞ぎと五九の行切りを見て打つべし。要は速く大石の安定を得るにあるなり。四九にても尙五六に行切り、白五三に刎ね出ざばフに截つて決戰すべし。黒之をしも逸し白に五六と截らるゝに及んでは形勢最早黒に非なり。

〔原評〕 續き其五七に至り徐ろに形を按せば六一に曲り、白六三黒六十白五九の時りに掛けて兎も角も一段落を告ぐべかりしを、筋違に出でゝ白に五八と突破せらる。

▲黒五七は例の裂れ手なれば惡し、爰に至りては原評六一に忍ぶ位の外無からん。

〔原評〕 續き又六五の如き何故に一旦六七に綽ね白七十の後に打たざるや、爲めに後れて六八、六九の交換を甘受したる皆非なり。

▲黒六五は兎に角六七に綽ねるを手筋とす。

〔原評〕 白八十、順境に醉へり、八五に打つて無事の勝を收むべく、八六にて先づ九二の先手を打ち置かば八八の取切りに味を殘さず。九十に至りても此手順遲からざりしを悉く怠り、九二の時に至りては忽ち黒に九三と反擊せられて狼狽せり。九二にて九六に綽ね込み、先手に保護して九三に守るべし。

▲白八十は嚴しけれども斯局としては八五に伸び置くを危ふきに近づかざる著とす。白八八は此機會に於いて九二の粘ぎを利かせ打つを手順とす。

▲白九二は原評の如く打つべし、九二の粘はさして急ぎ打つの必要無きにあらずや。

〔原評〕 白百愈々危ふし、ぬに出で黒るの時百十五に頂け黒百四七白百二五に引いて治まるべし、百十七迄の大變化にて白九二が遊手となり。之に加へ右側に劫を殘すに至つては勝敗果して如何。

▲贊成なり。

〔原評〕 然るに黒百四七及び百四九の見込み惡しく、百四七のダメ詰りにて劫爭に一著の寄せを鈍らせ、殆ど其効を見ず怎で外側の白を征服し得べきぞ

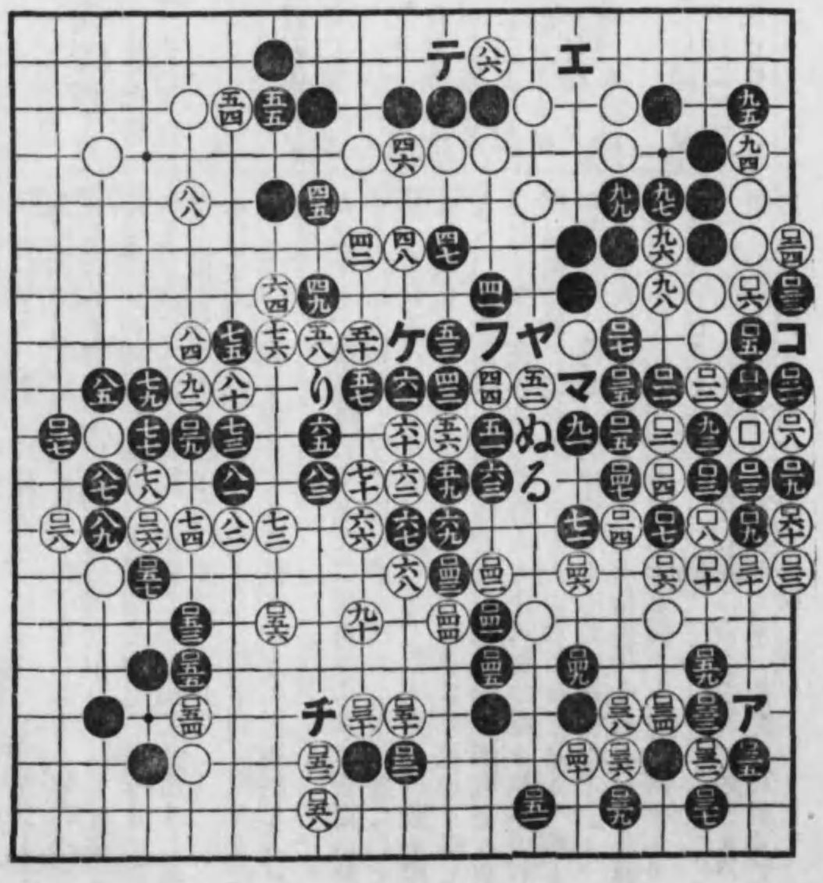




單にチに綽ね置かば此局尙ほ大に觀るべきものありしに。

▲白百二六より百三十迄如何、コに劫を提り一著毎に黒に劫材を費さすべき方針を採るを可とせん。

▲黒百三一之を敗著とす。此時に於いて局勢を通觀するに、斯局の勝敗は右側の劫爭と、右下隅に先鞭すると否とに依つて決せらるゝなれば、黒百三一にありては斷然右下隅百三三に迫り、上側エの利手の如き些々たる利は之を放拋して、テに約へ打つ無數の劫材を利用して飽迄右側の劫を爭ひ、而して白百四六に屈すれば其時百三一に引くべく、又白百三一等の擧に出づれば一旦百四六に伸びて眼を奪ひ、而して前述上側の劫材を利用して飽迄頑强に戰ふの方針に出んか、勝は却つて黒に歸したらんに黒此の無二の機を逸して、百三一に應じたる上は、白に百三四を以てアに刎ねた打るゝものとするも最早黒に望みなき碁なりしなり。




(黒)粘　百六十手以下略

# ▲第四十九局　本因坊秀哉講評

十一月中　報知新聞所載　先々先　先番　中押勝　岩佐銈（六段）　瀬越憲作（五段）

▲黒三と締る事素より不可なけれど、配石の偏重を避ける意味に於いて云ふ時は之を右下隅イに據るを普通とす。

▲黒五、之亦批評の限りに非らざれど、之を一路右してロに據り、白ハにせばニに三拆し、白左上隅十に締る時、ホ若しくば十二に懸り打つ運びに出づるを普通の配陣とす。但しニに三拆する著にて左上隅十に懸り、白ニに迫らばへに飛び、白三三となる時更に右下隅ホに懸り打つ意匠に出づるも亦可なり。

▲黒七は殊更に敵の勢圏裡に事を挑むもの、ホ或は十に懸るを普通とす。

▲白十、不急の締りにて面白からず、十二に締るを急務とす此時黒十に懸らばトに被せ、黒チ白二二黒リ白十八となりて隅に接仗を交へつゝ自然に黒七に迫るの好形を得ればなり。

▲黒十一、要所には相違なけれど此際斯著を右下隅十二に懸り、白いに詰なば一旦ヌに飛び右側より左側に及ぶ黒の勢圏裡に於いて、敵に相當る策に出でざる可らず、由來白に而已兩締りを與へたる配置にありて黒の勝利に歸したる局面少なし。而も黒之を失して白に十二と打せ、兩締りの好配置を得せしめたる事は本局黒敗因の第一歩たり。

▲白十六、普通なれども白として稍手緩き觀なきにあらず、一歩を進めてルに構へる方局面廣濶なるを覺ゆ。

▲黒十七、關係離れの著にて面白からず、當面の敵手十六に對抗してヲに備へざるべからず、黒にして此一著の備へあらんか、圖の如く白十八と戰鬪を開始し來るも、二七迄となりたる曉きワに連絡を保ちつゝ、右上隅面に大模樣を得る大勢上の便宜ある而已ならず、此一著の勢援ある上は圖の如き左側の戰鬪は黒に於て何等煩しきものあらざりしなり。然るに黒十七と戰線に無關係なる右側に馳せたるより、直に十八と其不備を衝かれ其結果、十七の一著は姑く游手と化して、黒更に形勢を失ふの端を爲せり。

▲白十八佳著なり。

〔原評〕黒十九の赶惡しきにあらざるが如きも、譜は紛殺の因となりて面白からず、此際カに斜走し白十九黒いと打つを穩健とすべし。

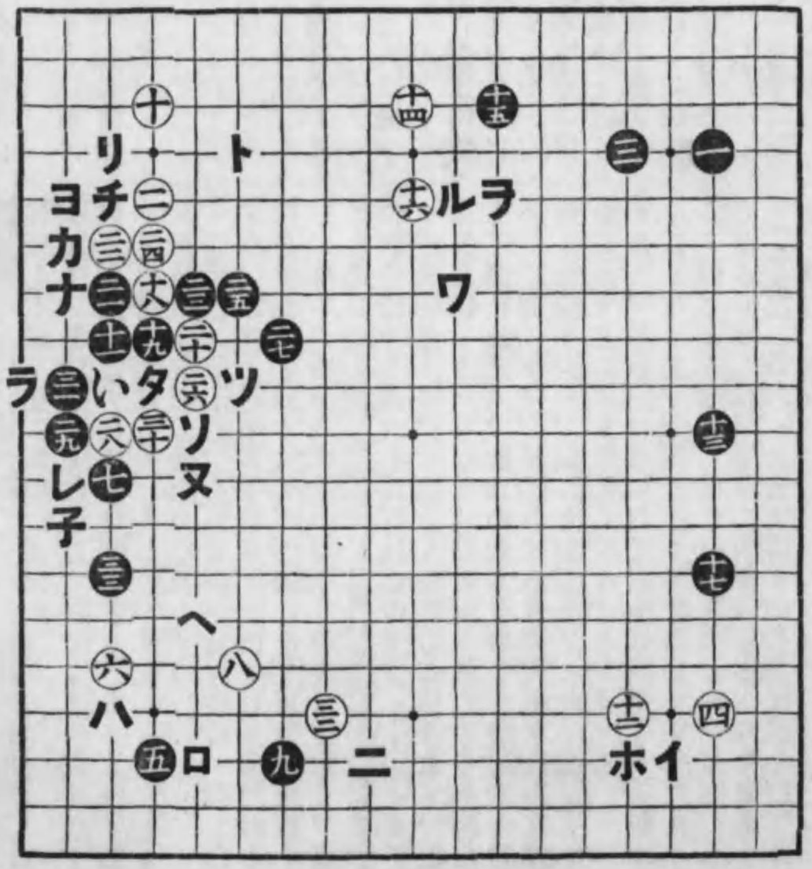




白に三二と掛けられるに及び、黒稍や混迷の局面となれるを見る。

▲黒十九は此際圖の如く赶の外無きを思ふ、カに走るが如きは原評白十九黒いとなる時、三十と覗き打れて黒の應手困難を覺ゆる而已ならず、十九と赶す手にて直に三十に打たるゝとするも、黒は之に對して三一と屈するの外無き有樣、斯くして白をヲの要點に就かしめて形勢を得せしむるに反し、自家は不利なる第二線に二著を馳せ居るが如き、委として之を云ふも、到底佳觀にあらざるに非ずや。

▲黒二七は一工夫を要す、之をカに綽ね白にヨと應じさせたる後に於て打べし、然らば白二八に頂け來るも三十に綽ね、白タ黒い白二九黒三一白レ黒ソ白ツとなる時、ネに押へて凌ぐを得たりしなり。「此攻合白後にナに截るもラに下り、死角卽ち這入れぬ手の關係にて、黒勝となればなり。」然るに黒カの綽ねの一著を怠りしより、白に二八の佳著を生せじめ



二九、三一と屈するの外なきに至りて、此處の戰ひ黑の形ち先づ崩れたり。

▲黑三三惡し、何とて一旦は三六に應せざりしぞ、此三六と約へ込まるゝ痛手を其儘にして、他に運動を開始するも効を奏する事不可能に非らずや。

▲白三四手筋なり。

▲黑三五、斯く應じて白三四の一著の利かされを甘受したる事、之を手割より云ふも果た又斯局の形勢より觀るも、黑として忍ぶ可らざる處三五を以ては斷然ムに突出し、白五三黑ウ白井黑ノと運びて白三四の一子を生擒して戰はざる可らず。

〔原評〕 黑三七の曲りは重き姿なり。三八に飛びて打べし。

▲然り、斯著は三八に飛ぶを可とす、假に白三四黑三五の著を除きて之を見れば、三七の不可なる事は手割上明らかなり。

▲黑三九は局部の著點なり。四十に運びて勢力の權衡を保つ可なり。黑更に之を誤り白より四十と煽らるゝに及んで、本局の形勢黑既に覺束なきを觀る然るに白四二は黑三九の歩趨に同ずるものにして戰機を誤まる。直に四六に備へて中央の黑に追擊を加ふ可なり。

〔原評〕 黑四七、四九綽粘ぎ不急にして大勢に後る。中央五十に綽捲くるべし、此は全局に響應する緊要處にして、現に白に五十と行びられて右方の模樣著しく薄くなりたるにあらずや。

▲然り、黑四七にて白四二、四四の虛を衝き五十の處に綽ねなば、白四十は全々著意を失ふもの、黑大いに形勢を挽回し得たりしに、反對にも白に五十と先鞭されて黑更に勢を失ひたり。

〔原評〕 黑五三、五五は規模甚だ少に、斯て白に五四、五六と一時に兩模樣を圍はせたる事、抑も黑傾覆の兆象と謂ふべし。此際に於て局面を通觀するに、唯一の爭點は六七の懸りに存するを以て、五三にてろに赶し、白百四四に行びれば尙百二四に赶し、白之に應ずる時六七に打込むの運びならざる可らず。又同じくははに出でゝ全部の鹵獲を求め、白の應答を聞くも一策なり。譜の如く僅に數子を獲たりとて爲に白三八、四六の如きを輕くし特に數子尙味あるに於てをや。果然白は八八の突込を含みて意の儘に外勢を堅め、遂に九四と先手に數子生還しては勝算全く定れるものならずんばあらず。

▲然り、黑五三はろに赶て六七に突擊する策戰に出でざる可らず、今日となりて挽回の策は唯だ此一途ある而已なりしに、黑之をしも失し白に五四、五六と據らしめては最早全く大勢の定まりたるを觀る。

〔原評〕 黑六一と白六二との交換は惡し打たざるを可とす。▲然り。



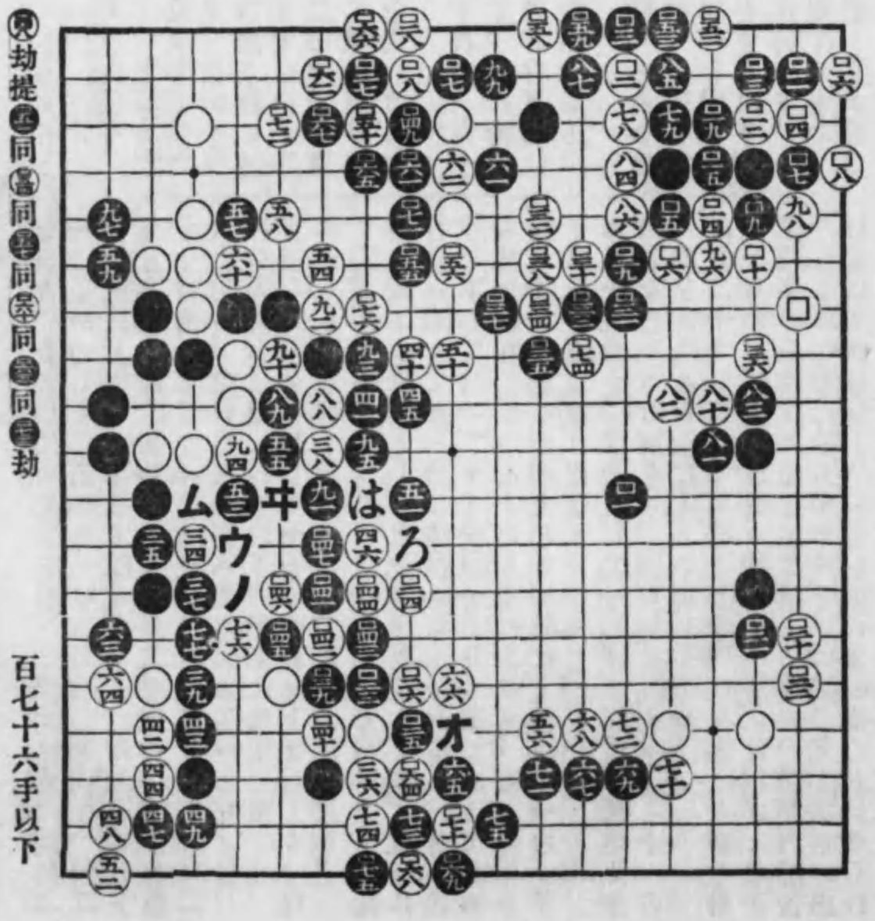


〔追評〕 ▲白六六、緩にして惡し嚴しくオに頂けて攻むべきや論なきなり。白之を失せしため黑七五迄に綽々たる活を與へたる而已ならず、白六六の連絡點手薄きもの生じ。現に後黑に百二三と打つ非常手段を與へたり。▲黑八五は兎も角も八六に綽ね打つべし、圖の如く八五と打ち次に八七と第二線に屈して渡りたる事、堪へ難き姿なり。

〔原評〕 黑百一は白に響かず、百二二に走るべし。▲然り。

〔原評〕 黑百二三以下奮鬪能く頽廢の挽回に努めたるも時既に遲く、勢日に蹙り、志更に達せざりしは是非なし。

▲總評 本局黑の敗因は全く布陣の不可なるに在り、配石の大切なる之に依るも知る可なり。




黑劫提白同黑同白同黑同白同黑同白劫

百七十六手以下

# 第五十局

方圓社長　廣瀬平治郎講評

十一月中兩氏三回目布棋也　東京日々新聞所載　先　加藤信（五段）　小野田千代太郎（四段）

〔原評〕黒十一はいに詰むるを可とす、白がイ又はろに打てば其時十一に拆くべく、又白左上隅に補はずしてはに拆けばにに懸るべし、要するに白十二に拆いて此に根據を得る事に依り、白二の隅子が單獨に働くの便を生ずるものなれば、次に黒に及び十三の何れより懸るも、さして白に響きを與へざるに至るべし。

▲黒十一、敢へて惡しと斷ずべきに非ざれど、白十は當面の數子なるが故に之に相當るべく、いに對抗すべきもの、之を措いて己に白の締り居る右下隅に就く事は、之を棋理より推すも變調の配置たるものと云はざるを得ず。

▲黒十五、批評の限りには非ざれど、斯くの如き自から分裂を求むるの著は、他日紛亂を招くの因を釀すもの、右下隅三三に飛び先づ自家の陣脚を固めて右側に形勢を張るの傍ら、將に成らんとする白下側の勢圏を抑制する策に出づるを穩當の配陣とす。

▲黒十七は下側全體の薄弱となるを坐視するもの、十七を以ては二九に衝き、白二七黒二四と運ぶ通型を採り、此時白二一ならば三三に飛ぶべく、又白二一に引かづして二三に約へなば二五に突張り、白二一黒三三と打ち、而して四九の尖みと他方二二に突出し、白二八黒三二と截り、白二六ならば三十に粘かば二六に約へ、白ロ黒三一白ハ黒ニ白ホ黒へと締め付け打つ両睨みに出づべきなり。然るに黒爰に出でづ、當面の問題を看却して十七の閑着を下せしより、白に十八と尖まれて攻守地を換ふる事となりたり。

〔原評〕黒十九は直に二一に着手し得れども、此隅に戰ふの餘波として白先手を得たるとき、五一に打込み來りて此一邊に事滋からんかを慮り、先づ此手を下して白の二十と交換せしむる事に依りて豫め其勢を緩和し置かんとの用意に出たり。蓋し白手を扳かばトに走るの利大なるが故に、白は十一の一子を取切る邊なければなり。

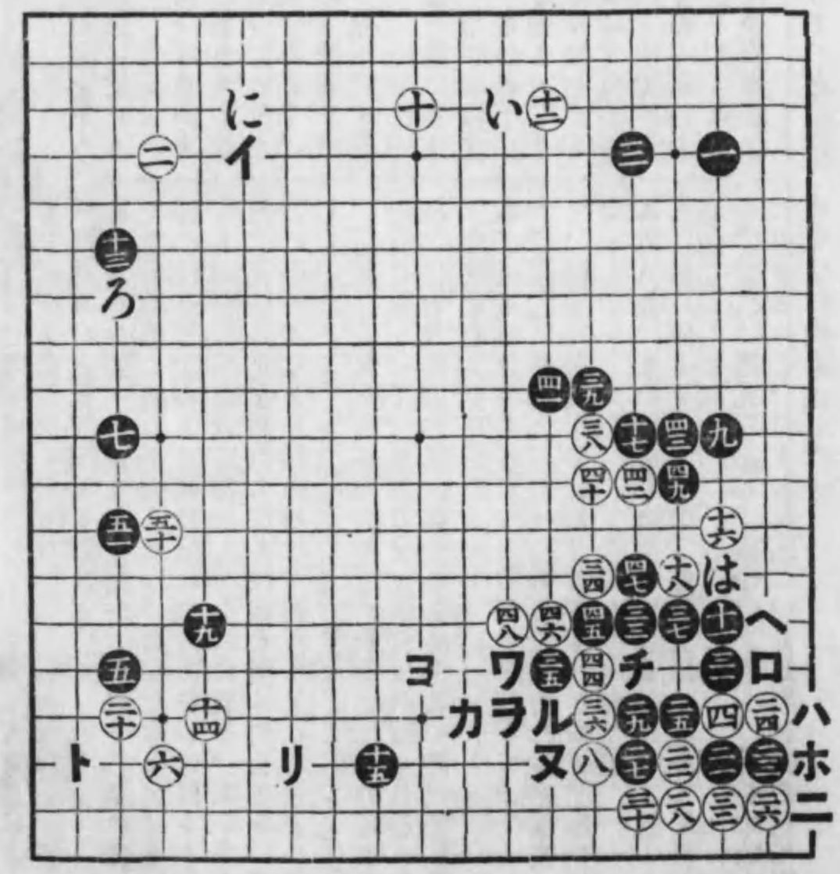
▲黒十九惡し、當然直に二一に頂けて先づ此處焦眉の急を凌がざる可らず、圖の如きはミス〳〵十一の一着を持込み石となすものにあらずや。

▲白二十大いに緩く本來より云へば敗著とも斷じ得べきもの、何故チに提り切りの一着には出ざりしか黒原評のトに走りなばリに構へ居りて、白些の痛苦とする所なきに非らずや凡そ碁に於て尤も棋家の忌む處は所謂持込と、一着を敵の意の儘に利かせられたるより切なるはなし、而も白は一方右隅に提切りの利を棄てゝ、他方左隅に黒十九の利かされを甘受して二十の受手に出たり。斯くの如くして白を持たる局面に、形勢を得ん事は、棋理として到底望む可らざる所果然黒に三一迄意の儘に振舞はれて先づ大勢を占められたり。

〔原評〕黒三三は三六に押し、白ヌ黒ル白ヲ黒ワ白カの時、四六に懸粘いで、右邊下邊の振替りを決行すべき場合なるに、形に泥み白に三四と打たせたる爲歩趨少しく鈍る。

▲賛成なり、黒此一擧に出なば當に右側に志を得る而已ならず、下側ヨに懸け塞ぐ嚴しき着も生ずる事とて黒充分の勝形となるべかりしに、黒此機を逸して、棋勢に澁滯を觀る事となりたり。

〔原評〕白三八と頂けしは手筋なり斯くて四四と出截つて四八の行びに其形を壯にし、續いて五十に敵を試む所、戰線愈々廣く誰か其歸着を豫想し得べき、斯くの如きもの白を



執りては先づ有望の局勢を打開し得たるものと謂ふべし。

▲白三八以下四二迄、先づ上面に莫大の損害を敢へてするものなれど、此際の措置としては譜に於ける決斷に出づるの外なからん。

〔原評〕 黒五一に際しては輕く勢を保つに若かず百四二に打ち、冥々の裡に左邊を援け白百九九に尖みもせば、又百九六に飛ぶなど機宜の計ひなるべし

▲賛成なり。黒五一は手重き手段にて面白からず、原評百四二に打ち居れば何分白は十九の大緩着を出し居る局面とて、黒尙充分の局勢なり、然るに黒再び誤りて棋勢を廣濶ならしめたり。

〔原評〕 黒六三、六五又左下隅五七迄と共に手法痕跡ありて高手の欲せざる所、此一隅一邊に着眼する者、ほに打ち白への時百六に飛ばゃ、敵の應手に由りて措置することの却つて自由なるを知るべし。

▲黒六三は利を射んとして却つて上側に形勢を成さしめたり。此際に當つて局勢を通觀するに、白の特む處は只下側の黒を攻むる事に依りて黒軍を凌がんとする一途ある而己、隨つて黒の勝利を得る所以も亦同じく下側を凌ぐにあり。されば六三を以ては直に六七に馳せて下側を援ふべし。然らば黒尙安泰なる局勢にあらずや。

〔原評〕 白六八、七十の趨向面白からず、とに打つて上下に黒の兩翼を咎むるの手筋あるを思はざりしか、一方黒九四に押せば白六八黒六九白七十黒七一白ろ及び九三と締める意なり。

▲白六八如何、右側七七に飛び、自家の勢圏を張つて黒の模樣に迫るを可とせん。斯手を以て原評とに打つは奇警なるも、其時黒に六八に粘がれ居るとしても、白は只九六に突出して九八に截り、次いで九五、九四に敵を壓迫したる快哉を叫ぶに止まり、實質に得る所なきを如何せん、況んや黒には白とに對して、九三に押し打つ手段も無に非ざるに於てをや。

〔原評〕 黒七五はちに打ち、白りと受ければ其時七五に頂くべく、又白りを夕に代ふればりに約へ込み、白七九黒百六五白百十九黒ぬ白るの時、をに曲る變化孰れも此場合にて好し。

▲黒七五は原評ちに打つを常用の手筋とす。

〔原評〕 黒八九、九一の兩着四一の行びと重複して、徒らに白九十の押しを甘受すべからず、るに粘ぐべし。

▲黒八九、大いに惡し當然るに粘ぐべきなり圖の如きは第一後手を引くもの。黒此失にて始めて局勢を微細ならしめたり。

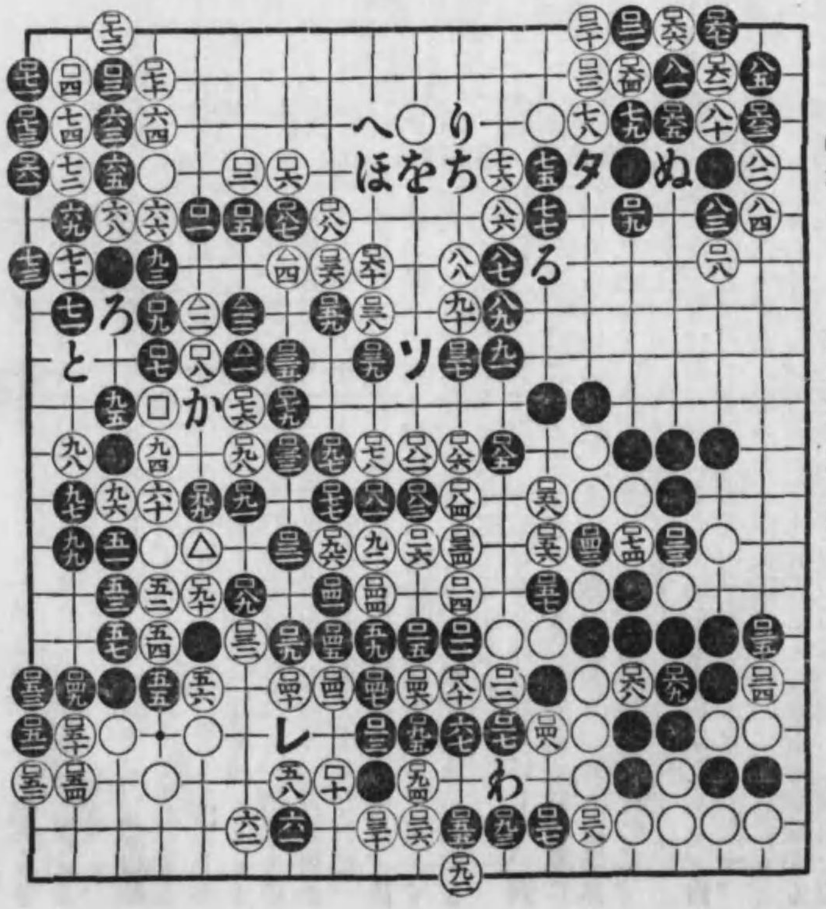
〔原評〕 黒九三惡し、百十に突當り、白レの時わに治まるべし、白より九三に押も此處を輕く見て應せずソに飛ぶべし。





▲賛成なり。原評の手段に出なば幾分の勝は尙確實に黒に有りしならんに、黒之をしも誤りて勝敗不明の局面に陷りたり、以下原評而己を掲げて評に換へん。

〔原評〕 白百二二と此機會に於て此手順を取る事意味頗る深し、從つて黒の應答に苦心せしが、百二三にて一旦百二四に約へる方、一目餘の利ありしならん。黒百二九の時は細棋の形勢に處して寧ろ英斷を稱揚せん、若し此手を百五五に頂け、白百三十の時百九四に活なば、白より百四二に覗かれて、其勝覺束なしと認めらるればなり。黒百三七を先づ百三八に打ち、白百六十の時に打てば大に優るべく、白百四二にて百五六に掛粘ぐの更に優れる、二者共に誤りたり。黒百八三は單に百八五に尖むべき理なるが、之を外にして白最終に、二百二を二百四に打ち、黒二百二白カと粘げば、白一目勝なりし事疑ふ所なかりし。



# ▲第五十一局

## 本因坊秀哉講評

十二月中報知新聞所載

先　二目勝　雁金準一（六段）　岩佐銹（六段）

〔原評〕　黒起手の劈頭に於て總懸りの布勢に出でたる事、普通には紛れを喚起する虞れより避忌するものに屬し、例へば七を以て四二に尖むなど常に能く見る所なり。當局者の敢試と言はゝ挿論すべきにあらねど、一應讀者の注意に資す。

▲由來總懸りの配置は、碁が難かしくなり、且つ微細なる勝敗に終り勝ちなれば、近世の棋家は之を忌む、黒七にては原評四二に尖むを穩かとす。秀策流の配置として一般に行はるゝ所なり。

▲黒九、批評の限りに非ざれど、擴がれる配陣を收束する意味に於て言ふ時は斯著を以て尙四二に尖み白イに拆かば更にロに尖み備ふる等の意匠に出づるを的確なる配置とせん。

〔原評〕　白十、十二如何、假に七の黒を十二に挾みたる時、黒十一に尖みしとすれば、十は均衡上寧ろハに在るを可とすべく、兎も角も尙推敲の要あるを思ふ。

▲賛成なり、圖の如くにては、白十の一著、黒の堅きに接し居る事とて、若しニの掛け等の一著利きもせば、直に十と十二との中間へ打込まるゝ缺點は眼に見えたる處、されば若し此側面へ手を附くるとすれば、單に十二に迫る等を普通とすれど、總懸りの一般棋法として、白は細碁たらしむべく、片の附かざるやう、チリ〳〵と進行するを利とするなれば、十を以ては黒九に應酬して、右上隅四十に飛び、黒ホの時へに拆き詰めする等の意匠に出づるを可とす然るに白爰に出でざりしより、折角總懸りの局勢をして狹隘ならしめたる觀あるを覺ふ。

〔原評〕　黒十三、十五は寧ろ白の態度にして、到底局面を廣ふする弊を免がれず、此際征の關係黒に可なるものあれば、十四に頂けて決りづけるの睹易きに如かず、卽ち白トの綽込を打つ能はざるに乘ずるなり。

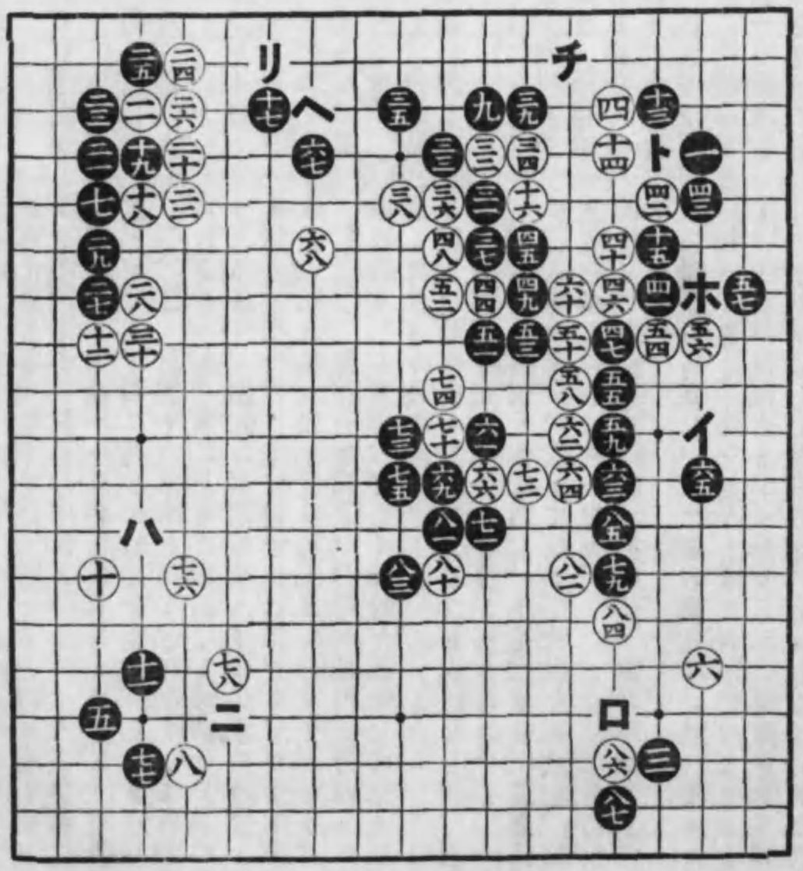
▲黒十三は例へ白にトの割込ありと假定するも、尙十四に頂けて全配置の整備を畫すべきなり。白十、十二と左側に馳せたる隙に乘じて。

▲白十六は定型なれども此際として手緩きを感ずるもの、何等かの工夫無かる可らず。例へば斯著を以て三四に肩を衝き、黒三二白三一黒三六白四八と二段刎ねし、黒三八に伸びなば三七に粘ぎ、右上隅四三の頂け出しと左上隅面に先鞭するとの兩睨みに出づる策戰を採るか、或は十六を一歩進めて三一に被せ、黒の應答を試みるなど、機宜の所置たるを思ふもの、圖の如く安んじて黒に十七に詰るを得せしめたるにては、白四六迄にて一見面白き局勢を打開し得たるが如くなれど、實は實質に失ふ所尠からざるものありて、既に棋勢の急促せるを觀る。

〔原評〕　白六六にて一著六七に打置く事は、局勢の消長に關するものあるを認む、黒此石を確保せんとすれば、チに尖みてリに下る位のもの黒に六七の尖を先手に打たれたるに比して其差實に幾干ぞ。

▲然り、白六六は六七に一撃を加へ置くべきもの、遲れて六八に應ずる次第となりては、本來より謂へば最早挽回に道なき局勢たり。

〔原評〕　黒七九は却りて白に調子



を與へ、徒らに右隅を薄からしめたり、單に八三に補ひ置くを上計とす。

▲黒七九を八三に備ふべきは見易き所たるに、之を失せしは如何にせしものぞ。

〔原評〕　白八八惡し、百九九に伸び、黒八九に赶ざばいに飛ぶべし、自ら中央の黒を蹙せん。黒に九一と双ばれて白拍子抜の姿たり。

△白八八、本局としては原評百九九に伸びるも亦一策ならん。

▲白九十、其意を得ず斯くして黒に九一と打たしめては八六、八八の趣意を失ふもの九十に至りては兎に角九一に頂けて、前著の意を徹せざる可らず。

〔原評〕　黒九五惡し、百六二に打つべし、白若し百に衝き來らば百六に飛ぶ形なるに、本譜に於ては黒の困戰なり。

▲然り、黒九五は百六二に打つを手筋とす。

▲黒百一以下百十一迄、策戰矛盾を極む、大體百一と頂けの手法は白百二の時直に百五に截り、白百六黒百八白二百二黒百七と打つて、成算ある場合にあらざれば用ひざるを普通とするものなれど、此際此手法を所謂裏に用ひたるものとすれば、百五の時百九に綽ね、白百十にせば强硬に百十九に二段刎ねすべきもの、而も爰に於て百五、百七と百一の著意を滅し去りたる後、百九に綽ねたる。又更に百十一に百九の著意を放棄したる等、當局者の意中を忖度するに苦しむもの、斯くて白に百十二と約へ込まる丶に至りて、漸やく細碁の棋勢とはなれり。

〔原評〕　黒百十一は如何にしても愚手なり、ろに懸粘がば必ず譜に優るの結果を得ん。▲然り。

〔原評〕　白百十六は味を喪す、打たずして百十八に行びるべし、百二三まで容易なる歸結を先手に與へたるより、黒玆に勝算に安んずるに至れり。

▲然り、百十六は單に百十八に出づるを可とす。

▲黒百四九は矢張り直に百五三に粘ぐを利とす。

〔原評〕　黒百五九以下、白の封域内に弄起して失敗に終りたる著手、空しく劫材を損せしに止まる、悉く打たざるに如かず。

▲然り、黒は獨り劫材を失ひたる而已ならず、百六三、百六四の交換に幾分の損を招きたり。

〔原評〕　黒百七九味惡し、小損は忍びて二百二五に遵守すべきを、貪りて反りて大損を招致し、爲に其勝を減じたるは笑止なり。

▲然り、黒百七九は甚だ惡しく、當に勝を危ふせんとす。

▲白二百四八惡し、之を又の當込みに換へてヨセなば如何、黒よし勝を得るとするも困難なるヨセを經て、勝數一目に止まるべかりしに、愼重を以て聞へたる當局者にして之を失し。易々たる二目勝を與へ

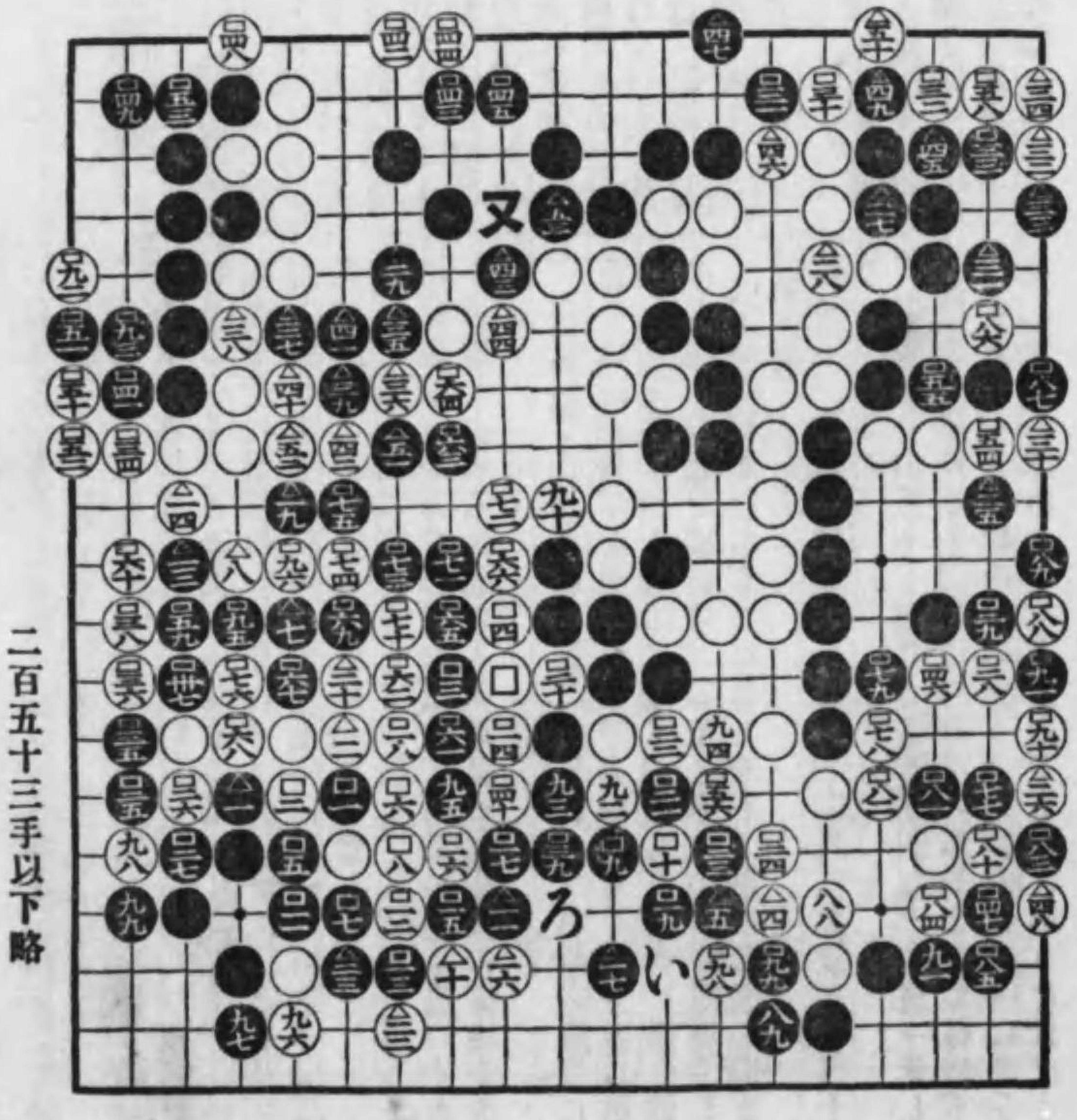




たるは惜しむべし。

〔總評〕　本局は黒殊更に不利なる總懸りの策戰に出でたれば、白として面白き局勢の展開を観るべかりしに、十、十二の趣向面白からざりしより、尋常の局勢に戻らんとせり、然るに黒亦十三に妥當を缺きたるため、又復面白き局面となるべかりしに、白十六の一著、定型に泥みて戰機を逸し、拱手して黒に十七の要點を讓りたる以降は、白只騷ぎを起したりと謂ふ而已にて、漸次に實質に損耗を招き、加ふるに六六の一著機を得ざるものありて、大勢已に爰に決し、以下頻々たる黒の失ありたるも、遂に敗を致したるもの、之を要するに、本局は白十、十二の策戰面白からざりしと、十六に工夫を缺きたる事、之を白の敗因となす。

●[illegible]粘、○[illegible]劫、●[illegible]劫、○△劫、●[illegible]劫、○[illegible]劫、●[illegible]劫、○[illegible]劫、●[illegible]劫、○[illegible]劫、●[illegible]劫、劫○[illegible]、



二百五十三手以下略

## ▲第五十二局

### 方圓社長　廣瀨平治郎講評

十一月中　三回持碁四回目の局なり
東京日々新聞所載　先　三目勝

加藤　信（五段）
小野田千代太郎（四段）

▲白四、打始めの著を批評するは極端に馳する嫌ひなきにあらざれど、斯著に就ては一言なかるべからず。白圖の配置に對し、四と高く懸るは、白二の著がイ若しくは、ロに在る際に用ふるを通法とするもの、然らば黑九迄となりたる時、圖の如く十に懸るも、或は十一に懸るも共に右下隅二との陣形、釣合を失はざればなり。されば此際四の一著は之を十六に懸り、黑七に締らばハに四拆し、此時黑尙九にせば圖の如く、十若しくは十一に懸りて打つべし。悠揚たる配置を得るに非らずや。然るに白、二の一著が圖の點にあるを思はずして、四と高懸りせしより黑に五以下九迄の策戰を採らるゝに及んで、白夙くも配置に於て困難を來たせり。

▲白十は之を十一に換ふる方、局勢手廣なるを覺ゆ卽ち此時黑二ならば十六に懸るべく、又黑一歩進めてホに四拆せば、ヘに打込んで直に戰鬪を開始するも可なるべく、或はトに斜走して徐ろに後圖を期すべきもの、圖の如き、右下隅との釣合に當を得ざるに當りて、兩隅に實質を失ひたる配置、白として極めて手狹き局勢となりたり。

〔原評〕　黑十七を二十に打つと孰れかは必ず考量に上るべき問題にして、其時白はチに據るべき棋勢と見るべく、可否固より論斷の限りにあらず。

▲黑十七は當然の一著なれど、次の十九は之をリに煽り打つも無きにあらず、此時白二一に斜走せば二四に迫り、白又黑ヘと運ばん意匠なり。

飜つて白十八は斯局として手緩し、敢然ルに迫りて爭はざるべからず、之を措いては譜に見る黑に十九と根據を占められ居るも尙ほ且つ白爭ふの餘地を失ひたり。

（原評續き）　されど黑二一に打つて打擊の態度に出しは時期尙早を免がれず、這は姑らく他方面に進捗を見て決すべきものに屬す、徒らに二八に敵を遂ひし迄の自己を顧れば、二七と十九との距離狹くして、戰の利を認めざるにあらずや、單に二九に尖まば可なり。

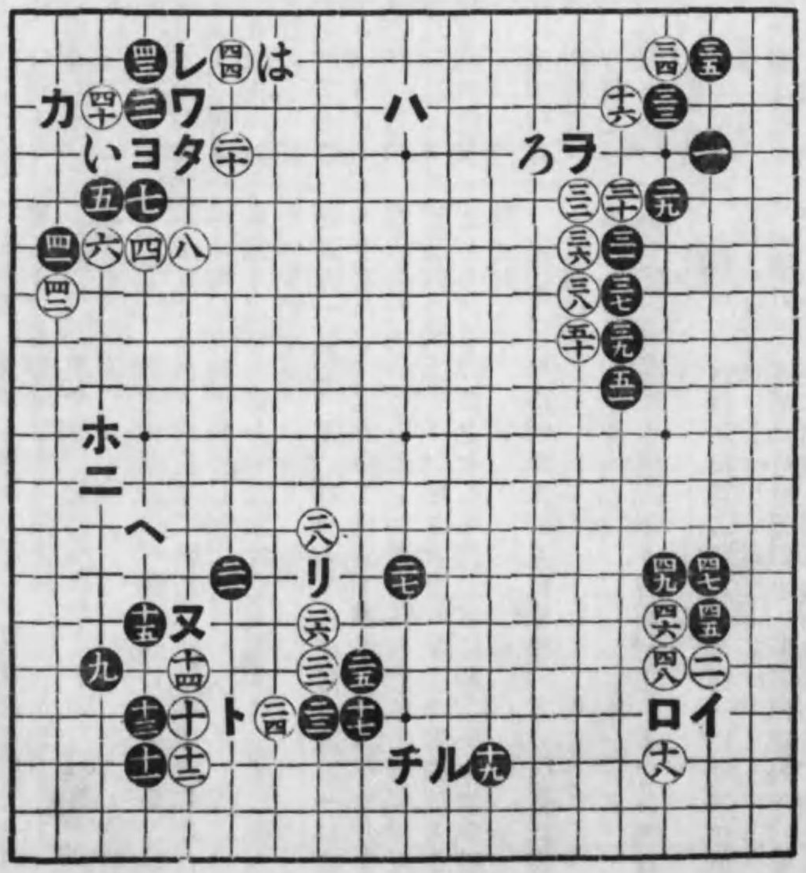
▲然り、黑二一は機にあらず、二九に尖むべき事十目の觀る處なり。

〔原評〕　白三十と頂けしより四四迄、企畫一見して雄大を覺ゆるも、實は一方棋の形勢として每時不安を感ずべき部類のものたり。只黑前述二一に時を失したるの罪ありて、多少白を有望に導きたればこそ、事或は成功せんかを思ふのみ、深く手順を味へば、三十を先づ四十に頂けて黑の應手を問ふに在るべし此時に於ては、黑未だ四一に姑息のハヲを打つに堪へざるべく、勢ひいに突當るものと假定せば、白轉じてヲ又はヌはろに擇んで、徐々に地歩を占むるに若かず、要は四十といの交換に依りて、黑より四四に走るの力を殺ぐの効あり、例へば黑四四白四三黑ワ白はにて之を遮蔽し得べしとせば、圖の如く、四四の後手を費さゝるの益あればなり。

▲贊成なり、白三十と頂けたる意匠は損を先きにするものにて、面白からざればなり。

▲黑四一の綽ね惡し、いに突當るかカに頂けるかの應酬に出づべきなり。

▲然るに白四二、絕好の機會を逸す黑四一の虛を衝いてヨに割込まば、黑は如何に之に應答するものぞ、黑若しタに當てなばワに截り、黑い白四三となりて黑窮すべく、又黑タに



せずしていに截りなば四三に綽ね、黒ワの時レに沿ひ打てば之亦黒所置に窮すべく、形勢爰に一變すべかりしに、白之を失して、黒四一の非を遂げしめ、四三に下るを得せしめて、四四と後手を引きたるに及んで、爰に全く大勢の決したるを觀る。

〔原評〕 白五二は實に一局大勢を定むべきの時にあり。敢て守らんとすること却つて敵に多くを與ふるの弊あり、是れ卽ち不安の伏する所、此際先づ六七に一擊し、黒リに應ずる時にに打つてほの下りを含まば、黒之に代へて百十八に飛ぶことを敢てせざるべく、遲々幾著決して大封域を消し了るべきにあらねば黒必ずほにせん、白依りて五三に打つべし、白五六と打ち黒に五七、五九と打たれて以降はヨセの巧拙に前途はあれども、大體に於て黒有利の地位に在りと斷ず。

▲白五二は六七に打つて五三に運ぶ原評に出づべし但し之に據るも、白は一方棋の事として而も縱橫にヨセ立てらるゝ局面なれば、假に此時黒に、ツ等より侵し進まるゝとするも、所詮白勝算を期し難きも、而も圖に於ける自ら五二と屈して、黒より五三以下五七迄に、攻めに兼ぬる侵略を甘受するに至りては最早全く絶望の局面なり。

（原評續き） 百五に伸びて敵を試むの餘裕は在りと見ゆるに、黒六五考量に過ぐ、七五に出で白七六の時七四に先手を打ち、而して百三九に打てば黒勝局なり。▲賛成なり、黒六五は緩かりし。

〔原評〕 黒七三、先づへに截りを加ふべし。

▲然り。

〔原評〕 黒七九亦緩手、百四一に尖むべきに漸次減退す。されど八三にては八六に粘げば確かなるに再び失して稍や危ふし。

▲然り、さりながら八六の截り取りは白夙に打ち置くべき者なり。

▲黒九一惡し、爰に打つとすれば當然百四一に尖むべきなれど、之を以ては右下隅ネに飛ぶを宜しとす曾に白九六の先手截りを凌ぎ得る而已ならず、次に百三四と抑ふる手、頗る大なるを生ずる關係もあればあり然るに黒之をして百三迄に黙なからざる損を弊けたり。

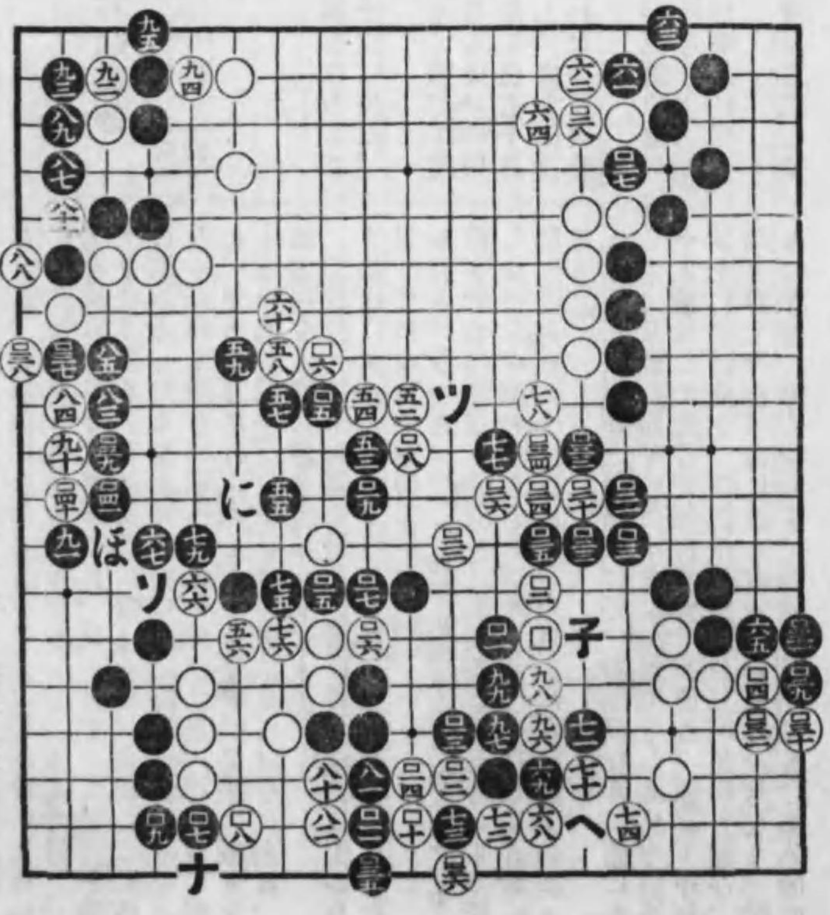
〔原評〕 白百四の先手五目を忍んで、百五に突當らば如何。

▲然か打つもあるべし。

▲黒百七は此際百九に下り白百七ならばナに刎ねて打つを利とす。

〔原評〕 尙最終白百二二にて百四一に覗げば黒勝とも至微至細なるべし。▲然らんか。

〔總評〕 本局は白勞頭四の一著策戰を誤り、次いで十の懸り更に考慮を要すべきものあり、而して十八に通常の局面に於ける手法に出しより黒に二一以下二七迄、面白からざるものありしも、而も二九に尖まるゝに及んで、極めて見易き局勢となり大體に於いて白既に非なるを覺へたり、されど黒四一の失に乘ずるを得しならば、主客地を異にするものありしに、白此無二の機會を逸し次いで五二に退嬰の一著を下しては最早大勢の定まれるもの、以下黒頻々たる失著を出せしも、白遂に及ばざりしは當然の結果と觀る可なり。




百四十一手以下略

# ▲第五十三局

## 本因坊秀哉講評

一月中　東京朝日新聞所載

中押勝　先二　先番　高部道平（五段）　福田正義（二段）

▲白十、此配置にて斯く打ちたる局面無きにあらざれど本來とせず。一應黑九に應酬して十三に尖み、黑三五と交換したる後に於てすべし。

▲然るに黑十一緩し、白下邊に備へざるに乘じて先づ十三に掛け、白十四黑十五白十六となる時、一轉して左下隅三四に掛け、白イ黑ロ白ハ黑ニ白五十黑五二と連捺して中側に大模樣を張るべし。之を兩掛けの配置と稱し、斯局面に於て黑の破れたる類例殆ど有る事なし。

〔原評〕白十二は蓋し趣向であらうが正著で無い此場合十三に尖むが本手である。▲賛成なり。

〔原評〕黑十三は二二に挾み返し、白十三に尖んだ時黑いに圍ふ方が宜い。

▲黑十三は普通なり。若し斯著を以て原評二二に挾み返さんか、白より注文外れに三一と肩を衝き來られんに、黑は如何に應答すべきぞ。假に此時黑尙いに圍へば、ホに提切られて惡しき事云ふ迄も無く、又黑にに頂けなばへに刎ね、黑ト白十三黑チ白十四黑リ白ヌ黑ルとなる時ヲに打込めば、最初二二の處に挾み返したる著惡化すれば、之亦黑面白からざるなり。「但し黑リの約へをヌの伸びに替へなばワに刎ね、黑カ白リ黑ヨ白ホと打つべく、又黑チの截りを上方十四に截り、白チ黑ヌと運び來らばワに刎ね、黑カ白タと隅に活を打つべきなり。」

〔原評〕黑十九稍や緩し、ろに押し白二二黑レ白ソ黑はに刎ね、ソコで白若しツに伸びたならばネに截つて白の應手を問ふが宜い。

▲然り、黑十九、二一の趣向甚だ手緩き而已ならず、前著十七の著意と矛盾す。當然ろに押し付ける手段に依つて中側の白に迫らざる可らず。「但し原評ネに截りとあるはナに突出し、白ヨの時ネに截るの誤りなり。」

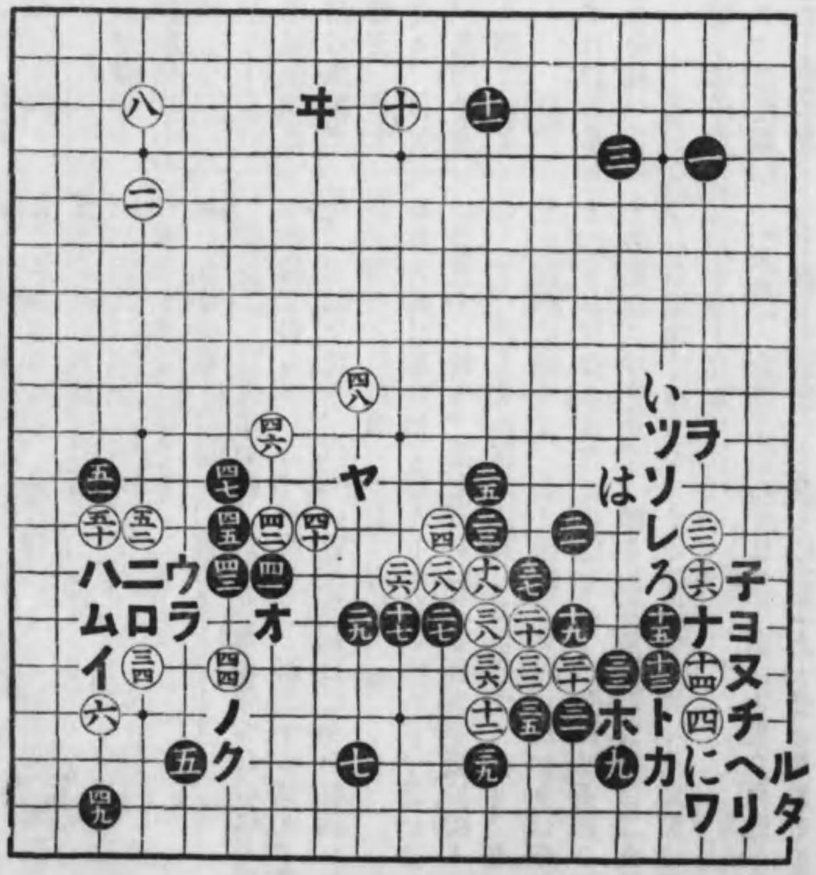
▲黑二三は部分上の攻擊にて、石を攻むるの道にあらず、三四に掛け、白イ黑ニ白ロ黑ラ白ム黑ウ白五十と接伏して先づ左側に勢力を扶植し、而して中側二七に竝び覗き、白三十黑三三白三一黑にと運び、漸を以て中側の白に迫るの策戰に出づべきなり。然るに黑爰に慮らずして、單純二三、二五に部分的の攻めに出たる結果、三三と後手を引き、反對に三四の要點に先鞭さるゝに及んで、先づ白に形勢を得せしめたり。

▲黑三七の當込は、左右ダメ詰りとなれば暫らく見合せ置くを是とす。

〔原評〕黑三九は味が惡い、此場合井に打込まなくてはいかぬ。

▲黑三九は手緩き上に味惡し、原評井に打込むの普通に出づるか、又は嚴しく迫りて、左下隅ラに肩を衝き、白ノにせばオに飛び、白クにするも四四に竝ぶもヤに掛けて戰ふべきなり。

▲白四四と飛びたる事、下側一體に味を含みての計らひと首肯さるれど而も斯著は盛中に入るの態あるもの、之を以ては五十に換ふるの大道に出づ可きなり、然らば白座して善局面を得べかりしに、圖の如く岐路



に走り、黒に四五、四七と運ばるゝに及んで、四四の一著は中ば効力を失ひ、俄然形勢一變の姿となりたり。

〔原評〕 黒四九は低い、五十に打つ方が急務である。其時白若しほに打込まば黒は夫れに應酬せずして、六九の大場を占領するに若くはない。

▲黒四九は、曩きに打たる白四四の交際をなすものにして而も著點之に劣るもの、四九を以ては無論五十に打ち、白ほにせば其時四九に走つて白の應答を試むべきなり、然るに黒此大事を錯まり四五、四七の趣意を徹せずして、方向違ひの下隅に走り、白をして五十の要點に就かしむるに至りては、黒の全石悉く離れ〳〵の姿を呈し、大勢の趨く處も略ぼ之を察するに難からざるの局勢となりたり。

〔原評〕 黒五三は惡い、五四と伸ばしては白の形を厚くするでは無いか、五一と頂けた意思を襲いて六五に約へて居るが宜い。

▲黒五三、五五ば又復四九の轍を踏んで著手の矛盾を行ふもの、何故六五には押へざりしにや、黒此肝要にして見易き著點を逸し、白をして五六と爰に先んせしむる事となりては、此末白に見損じあらざる限り勝算なきもの、之に依つて之を觀れば、黒五三五五の失は最後の敗著と云ふ可きなり。

▲黒五九は六十に頂けるを是とし。六一を以てはマに飛ぶを普通の姿とす。

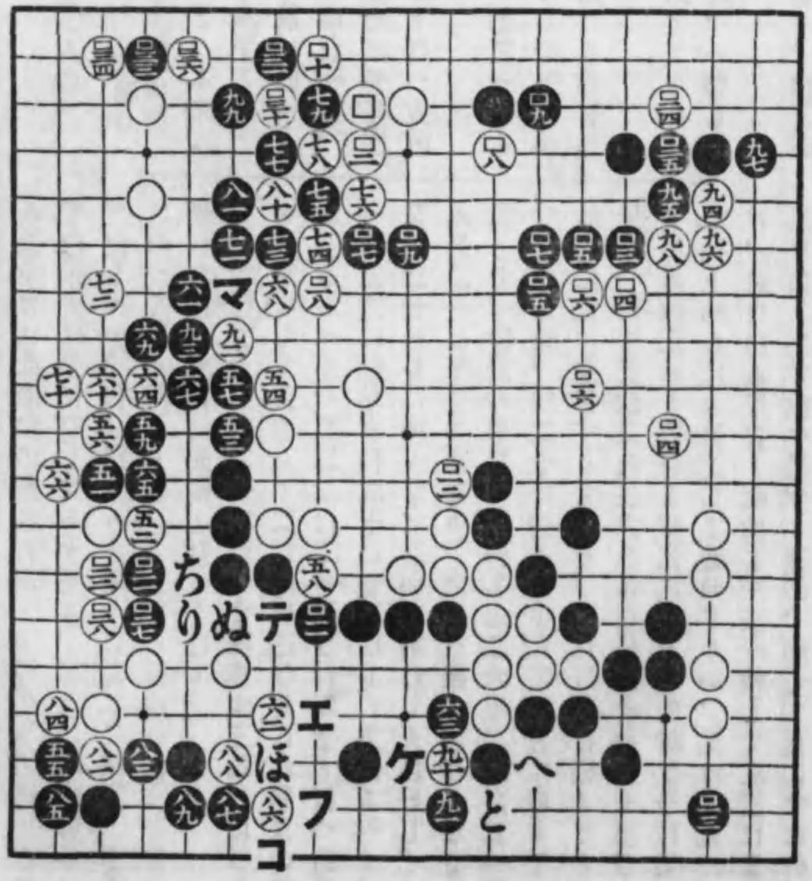
▲白九十の截りは惡し、打ざるを是とす。

〔原評〕 白九四如何、折角九十と截つたのは劫爭の準備であらうから、九四の手で百三十に截り、黒七五に劫を提り、白へに截り黒百二に劫を打抜いた時、白亦とに打抜いて惡くない。

▲白九四は圖の如く運んで十分とすれど、之を以ては百三十に截り、黒七五白百二と打つを更に優るものとす。若し夫れ原評に於ける百三十に截り、黒七五の時へに截つて、とと振替りを打つが如きは斯局としては要なき業たる而已ならず、却つて奇禍を招くの因たらずとせず、卽ち此時黒ケに當て白三九黒フ白コ黒エと打ちて、テの伸出しを睨めは此黒は更に劫爭ひとなるなればなり。

〔原評〕 白百二八にてはちに割込み黒り白ぬに截つて凌ぐ方が宜い、然るに百二八と受けた爲めに容易に眼形を生じたのは白の手落であつた併し黒の方に大分緩手が多かつた爲に、著々勢ひを制せられて遂に黒が中押敗に終つたのである。

〔總評〕 本局は黒十九、二一に戰機を緩ふし、次いで二三、二五に攻擊の策戰を誤り、白三四迄にて黒既に妙ならざる形勢となりたるに際して、三七の當込みは暫らく之を措くも、三九の失は累を全局に及ぼせるもの、因りて一旦黒形勢を失はんとせしが而も白四四の失に乘じて四九の一著を五十に打てば面白き局面となる可りしに、黒此大事を誤り、次いで五三、五五に失して敗を定めたるもの、之を要するに黒の敗因は夙に十九、二三になり、三九、四九に其敗を招きたるを觀る。




㊀劫同提㊁同㊂同㊃同㊄同㊅同㊆同㊇同㊈

百三十六手以下略

## ▲第五十四局

方圓社長　廣瀬平治郎講評（六段）

一月中　宮坂來二（四段）
中外商業新報所載　先々先　先番五目勝　小野田千代太郎（四段）

▲白十は趣向としては時に用ふる型なれど、本來は虚形に屬するもの、矢張りイに伸びるを本手とす。

▲黒十三、惡しきにはあらざれど白の下邊に備へざるを擊つてロに迫り、白ハならばニに飛び白十四、黒十五白ホ黒ヘと運び、此時白トに斜走せばチに應じ、此白を競り立てつゝ自然に白四に迫り打つ方針に出づるを手早き策戰とす。

▲白十六如何、リに斜走する型を採り、黒三一ならば二七に頂け、黒二六白二一黒三四となる時ヌに構へ、黒ルに拒ぐ時ヲに押し打つ陣形に出づる等普通ならん。

▲白十八は慮りを缺くもの、此場合にありてはルに引き、黒二九白ワ黒チ白カ黒ヨとなる時、一轉して下側タに備ふる配置に出づべきなり。

〔原評〕　黒十九は普通の如くレに突當り、白三四の時三一に斜走する事却つて場合を得たるものとす

▲黒十九は此際白の意表に出でゝ妙なり。此一著にて白殆ど著手に窮したるを見る、若し之を原評レに突當らんか、白は得たりと計りに二二に掛け、十九に截つて締め附ける味を含むで、此處に注文を附け來らんに、事甚だ面倒となりしなり。

〔原評續き〕　其二一に至つては無論三四に頂けるべき形にして白恐らく二六に綽込む外には解決の道あらざるべく、黒二二白二一黒ソ白二七と打つ時黒一且三六に懸粘ぎ白三七に當なばレに突當るべく、又白三七をレに換へなば黒いに刎ねて大に好し。

▲黒二一は至當の著なり。之を三四に頂けるなどは黒として餘計の事なり。即ち白二六黒二二白二一黒ソとなる時、白二七に約ふる手にて二三に截りなば如何に之に應答するものぞ、黒は二七に約ふるの外無く、白ツ黒四二白三六黒ネ白い黒ナ白三七黒ツ白レ黒ル白三一と振替る變化に出で、此時黒ラに尖まば右上隅ムに大斜走して趣向するか、又は二五に掛け、黒ウ白ム黒井と交換して後一轉して三三に當て黒リ白ノ黒オ白ク黒ヤと運び、而して更にマに押附



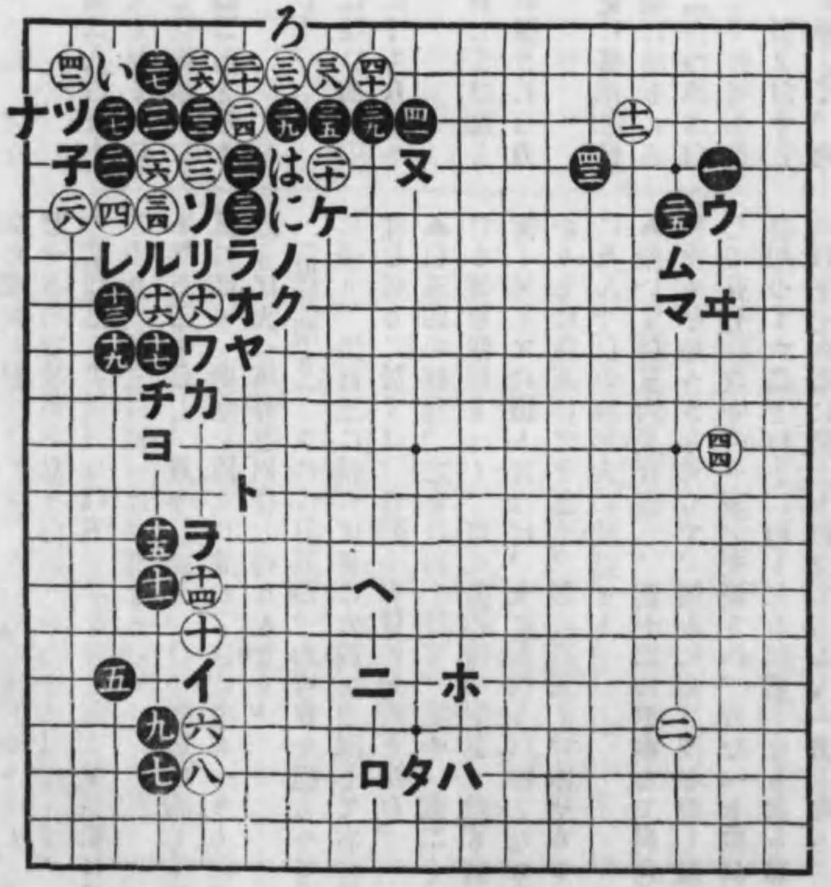


けて打つか、或は下側タに備へる等大規模の策戰に出でんか、廣漠たる局勢となる事とて黒として甚だイヤなるにあらずや。

〔原評〕　白二四は二六に當てるを手順とす、即ち黒二七白二四黒二九白三一黒三十白三二黒三八白三五黒ろ白四一となるの結果當然なるべし

▲白二四は當然の著なり。若し之を二六に當込まんか、命令通り二七に粘ぎくるれば宜けれど、反對に二四に伸びられなば如何、白爰に於て打つ手なきに非ずや。

〔原評續き〕　されば黒二五にて何故に二六へは打たざりしぞ、白若し三四に約ふれば三一に截り、白ソ黒二九白三十黒は白三五黒三二白三八の時にに曲るを肝要となす、白ろに盤ればケに曲りて、左右の白劇忙に陥るべし、四二迄の結果は黒惡し。



▲然り、黒二五は當然二六に膨れ打つべき處、之を失して稍や進運を沮めたり。

▲黒二七如何なり。ツに懸粘ぎ白三六黒二八白三七黒二七と忍ぶべし、一見大に利かされたる如くなれど、二九に頂ける手筋殘り居れば、さしたる事はなかりしなり。然るに二七と粘ぎ其結果四二迄となりて、黒面白からざる棋勢となりたり。

▲黒四五と打棄の著此形勢に於て面白し。

〔原評〕 白四六は一路七五迄進まずば後に四五の黒を攻むるの便宜惡し、此形黒は何時にても八二へ肩を衝くの好調を有すればなり。

▲白四六を七五に進む事は四五の黒に對しては嚴しけれど、フと三ノ三に打込まれたる際の拒ぎには力弱ければ一利一害なり。

▲白五十、五二甚だ而白からず、敵に更に痛痒を感せざる地點に子を馳せる事、圍碁の道理に無きにあらずや、之を以て百十三に迫り、黒八二白コ黒エ白六五黒百二となる時、右上隅井に詰めて、打可きなり然らば十二の一著には未だテに刻ね、黒了白サと粘ぎ、キに頂けて劫となる味も殘り居る事とて、地域の權衡に於ても白甚だ有望なるものありしに、攻むべき石の攻めを怠り白將に形勢を失はんとす。

〔原評〕 黒五三は四五の石を棄て置く事放膽に過ぎずや、百三に飛べば平穩なるに。

▲黒五三は惡し、貪りに過ぐ、白の閑著に乘じて五五に詰め、此處を防ぐに兼ねて白に迫るべきもの、然らば大に棋勢を回復し得たるなり。

〔原評續き〕 されば白五四、此機會を捉らへてエに煽り、黒百三に飛べば更に九四と追躡して右に模樣を張るに於ては、白頗る有望の局勢と認む。

▲白五四の緩漫、之を敗因となす。五十、五二と打たる著を活用すべく、將又黒の備へを怠りたる虚を衝く可くエに煽り打たば、大に面白き局勢となる可かりしに白更に之を怠り、黒に五五と守備せらるゝに及んで白の勝形大に減退せり。

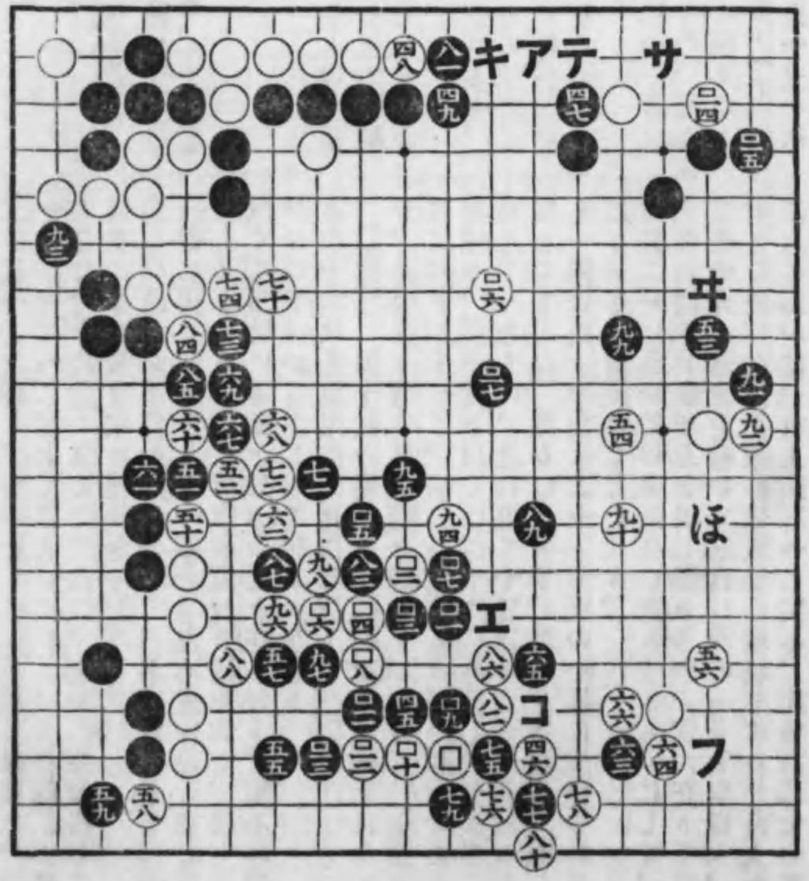
▲續いて白五六又復緩し、百十二に突擊して尙此黒に攻めを加へざる可らず、然るに此肝要を失し黒をして五七に攻守の一著を先鞭され、攻むべき位置の白却つて六二と防ぎに廻りたる狀態となりたる結果は以下七九迄に黒より打立てらるゝ一方となり、さしもの好局も爰に形勢の一變を來したり。





〔原評〕 白九十と受けしは蓋し敗運の定まりし刹那とや云ふべし。九九に曲れば尙手段に廣き意味あり、假に黒九十白ほとなるものと見做すも未だ九四に接續せざるが故に、黒に顧念ありて、白境は容易に減せず圖の如く黒に九一と尖まれ、又九九と飛ばるゝ順序となりては、其數に多少の增減ありとしても、黒の勝たるや明らかなりとす。

▲白九十は又復緩かりし、白を持ちて受立てする事は、勝の見据つきたる局面に於てすべきもの、今日に至りては棋勢を擴ぐ可く斷然原評九九に折曲つて奮戰すべきに、既に形勢一變して局面自家に非なる事に心附かず、迂濶にも九十と受げたる結果座して首を敵に授け畢んぬ。




百十七手以下略

# ▲第五十五局

## 本因坊秀哉講評

一月中　中押勝
東京時事新報所載　先

本因坊秀哉（九段）
雁金準一（六段）

▲本譜白十二迄の配置は屢ば見受くる處のもの、而して此配置に於ける打着は、將に戰鬪期に入る前驅を作すものにして、而も國是の大方針を定むるの肝要の一著とす

▲黑十三、斯く打つ事も無き型には非らざれども、之は布石匆々、第三位點たる中腹に據るもの、之に較ぶれば、斯著を以て右上隅三一の尖みに換へ、白右下隅に締るを待つて、二七に大場を占むるの尋常配置に出づるを可とす。

されど一隅定型として之を言へば、白十二の一著は黑十一の尖みに對應して、イに備ふべきもの、而も白は大體の配置上よりして、右上隅十二に懸りたるものなれば、黑としては必然に此不備を衝くべく、六以下十迄の三子を襲はざる可らず、卽ち黑十三を以てはロに迫り、白尙十四に締らばハに斜走し、白十三黑四十と追擊し、此時白ニに尖まばにホ覗き、白十八にせばへに應じて黑大いに好く、又白四二に應じなば、トに競り立て打たんに、之亦黑優勢にして確實なる配置を收め得べかりしなり。

然るに黑は此不備を衝かづして、不確實なる十三の一著に出で、白をして十四と、左右兼備の一著に出でしめしより、爰に前途廣漠たる因を爲し、併せて夙くも形勢に確實を失ふの端を作したり、配石の忽がせにすべからざる以て想ふべきなり

▲白十六は此際兎に角面白し。

〔原評〕　黑十九の尖み頂けは洵に好い處ではあるが、此場合左邊の黑模樣を擴大する一方に、上邊の白模樣を消すべく、チに斜走するも亦一趣向である

▲然り、黑十九を以ては白十六に對應して當然チに斜走すべきもの、之れ應て十三以下の著と共同の步調を爲すもの、然るに黑著手の脈絡を無視して單なる一隅に走り、白に二十と勢圈の中樞に先鞭されて更に形勢を廣漠たらしめたり。

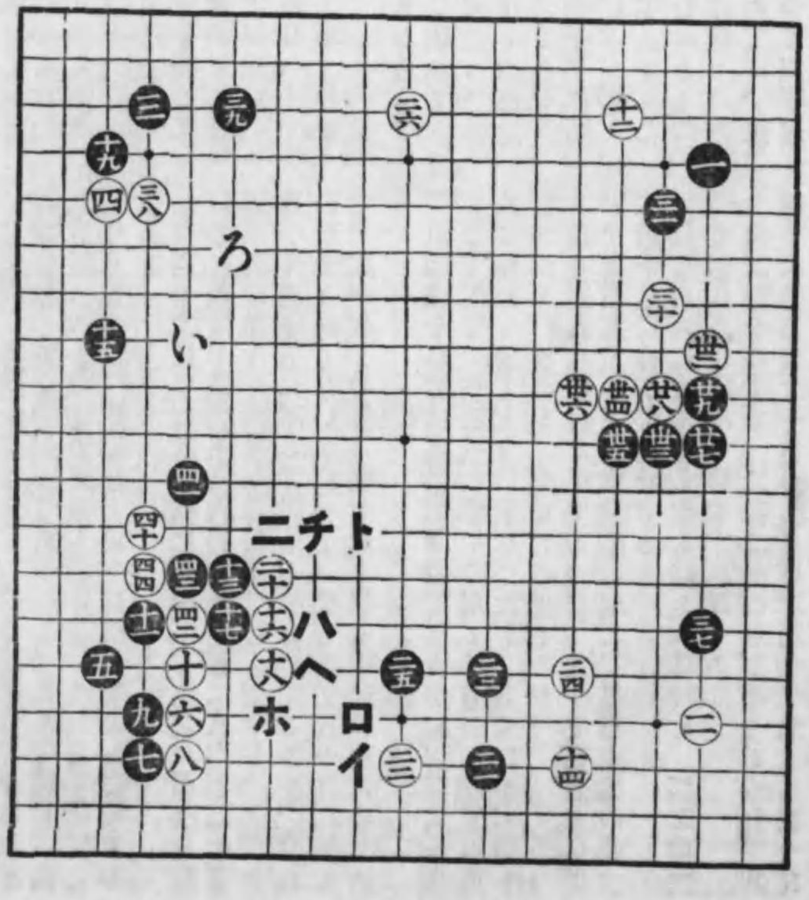
▲黑二一は孤軍敵の勢圈裡に突入するものにして、大體戰略上到底賛意を表し難きもの、爰に在りては前著十九の著意を繼いで三八に四の一子を取切り、依りて先づ左側全體に確實なる地域を收め、白上面二六に拆かば、右上隅三一に尖み、此時白二七の星下に據らば輕く二四に侵して、白の模樣を削る意匠に出づべきなり、圖の如きは徒らに弱石を生せしめて局勢の混亂を求むるものにあらずや。

▲黑二七は求めて自軍の分割を招くもの、斯くては八方手薄となりて敵に種々手段の餘地を與ふるなれば、斯手にても尙耐忍して三一に尖み、先づ自家の陣脚を堅め、而して徐ろに策を講ずべきなり。

〔原評〕　黑四一如何、此手にていに飛び、白四二に突出したる時黑ろに封鎖する方が確かである、若し然らば白は氣合が拔けて十三、十七の二目を取るも詰らないし、一寸打つ手に迷つたであらう。

▲然り、黑四一は無論いに飛ばざる可らざる所、然らば未だ前途豫測すべからざるものありしに、黑此見易き打著を失したるより大混亂を生じ惹いて局勢を危殆に陷らしむる次第とはなりたり。

〔原評〕　黑四五は此手で四六に約へて居れば無事である、併しさうす



ると白は六十に綽ねる、其時黒は六一に約ふる譯に行かぬ、何故かと云ふにはに截られて黒にならば白五八黒五九白六二黒七七白六三と絞られるからである、故に黒は白から六十に綽ねられたる以上、五八に愚集み、白は黒ほに取切りとなる位のものであるが、斯くては多少の損失は免がれぬ、夫れを嫌つて四五と綽ねた結果、愈々茲に激戰となつたのである

〔原評〕 黒五七惡し、只七四に伸びる方が宜い、ソコデ白百四に備へたらば、黒五八に愚集むべく、左すれば圖の如くなるよりは、遙に優れる事となるのである。

▲黒五七は白に六十と截つて凌ぐ手段あるを慮らずして下したるもの、而も此輕卒なる一著に依つて、殆ど致命傷を被りたる事、黒の遺憾想ふ可なり。

〔原評〕 黒六五如何、四一以下白を壓迫した趣意からしても、六五にて七十に尖む位のものであらう然るに事、茲に出でゝして却つて白から七十と包圍さるゝに至つては、黒の形勢が面白く無い。

▲黒六五、之を敗著とす、何故に七十に尖まざりしにや、黒にして爰に出なば、尙一脈の特むべきもの無きにあらざりしに、黒爰に至りて迷誤に陷り、白をして七十に易々肝要の七子を生擒せしめては、復た施すに道なく勝敗既に爰に決せり、依つて以下原評而已を掲げ、餘は總評に讓る。

〔原評〕 黒八一以下如何、白九六迄の結果は黒が甚だ面白く無い、依つて八一の手でに八七頂け、白八五黒八八と突當つて居る方が味が深からう。黒九五惡し、此場合ではへに飛んで居る位のものである。

白百十二にては百十三に突出し、黒とに截つた時白ちに曲り、黒百五三白百四七黒百二八白百二七黒百四九に截り、白り黒ぬ白る黒をと活かし、先手を取つて百十五に下る手段もあつたのであるが、孰れにしても惡くないと思つて、圖の如く百十二に飛んで、二一以下の黒一團を取り切る手段に出たのである。

白百三十にては茲は二段劫であるから、百二一に粘がずして、百四五に粘いで居る手もあり、又百五八に刎ねて居ても宜いと思つたが、其成行が判然しないから、圖の如く粘いだのであつた。

白百五八は餘計な手であつた、此手で百五九に頂け、黒百五八に下れば白わに刎ね、黒百七五の時、二百十三に伸びて充分である。

白百八六にては兎も角も百九六に押し、黒二百六の時百八八に尖んで居る方が得である。

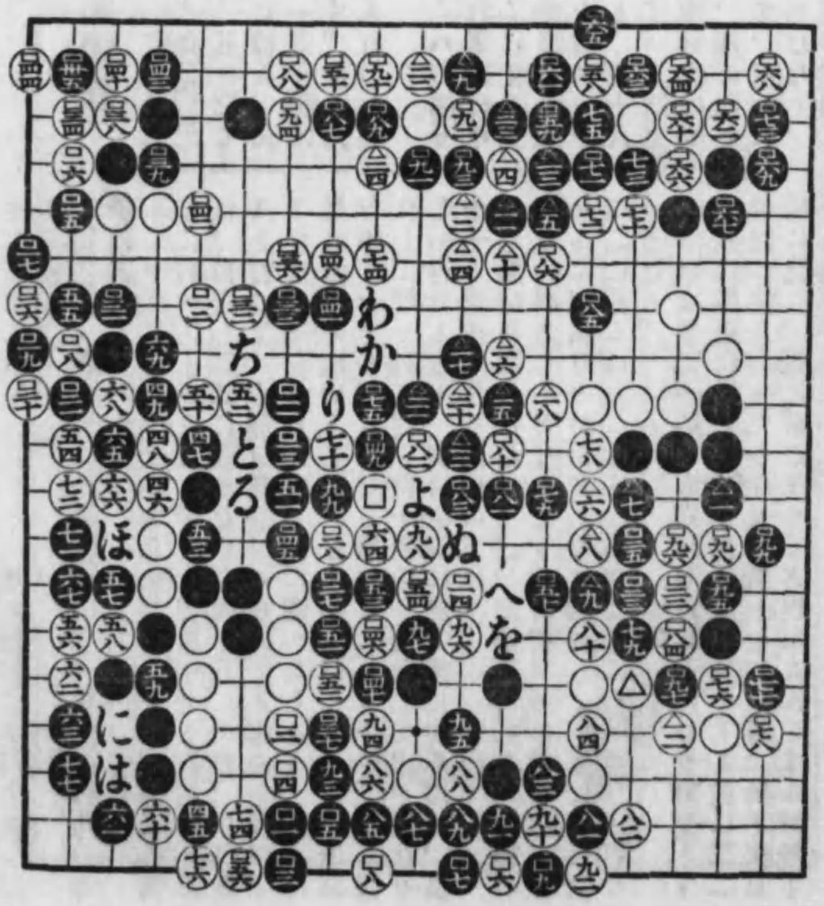
白二百十の手で、二百二一に出る手もあつた、其結果は黒二百二十白か黒り白二百十七黒よに截つた、白二百十一に約へて居る手もあつたのである。





けれども、さう打つと容易に極りが附きさうもないから、決定的に二百十と伸びたのであつた、是れで勝敗は確定したのである。

〔總評〕 本局は劈頭黒十三に大體策戰の一歩を躓き、次に十九に協調を缺き、白をして斯局の天王山たる二十の點に據らしめて、先づ大勢を白に得せしむ、而も此時に當りて黒二一の一著を三八に取り切つて除々に武歩を進むれば、黒の陣容未だ正しきを失はざりしに、黒形勢に苛ちて、孤軍二一に突入し、次いで三一に尖むべき、忍耐を缺きて自から分裂を求むる、二七の一著に出でたる結果、既に風雲穩かならざる局勢となりたり。然れども黒四一の一著にて之をいに換へなば、先著の効力偉大なる、黒未だ形勢を失はざるものありしに、急激四一の一著に出でゝ事端を釀し、次いで五七、六五に事を愆まりたる結果、白七十にて夙くも勝敗の決せしは、甚だ飽氣無き局面にてありたり。




㊐粘、㊐劫提㊐同㊐粘㊐粘　二百廿四手以下略

## ▲第五十六局

方圓社長　廣瀨平治郎講評

二月中　先番　加藤信（五段）
中外商業新報所載　先相先　中押勝　小野田千代太郎（四段）

▲黒五、七と打つに元より批難無けれど、五を以て左上隅八に懸り、白イに四拆せば其時五に據り、白六黒七と運びて全配置同委勢の下に三の一著を先んじたる配石を採るも亦打易き石立なりとす。但し此時白九に締らば、黒は此際左上隅ロに尖み打つを堅固なる配置とす。

▲黒十五如何なり、白ニの位置が若し高くハの締りにあらば其は論も無く上側に就くべく、打著點はイを撰ぶべきなるも、白ニの位置が圖の如くにては上側に拆くも、後の詰めの効力薄ければ、此場合十五を以ては右側ニに拆くを可とす、此時白上側ホ、十五の孰れかに拆き來らば、左下隅へに迫り、白十八黒十九と打つて、黒惡しからざる配置とす。又同じく上側に就くものとすれば、黒十五は棋聖知得の型を採り、一路控へてトに構ふるを是とす、圖の如きは、後三五に詰める間合惡しき而已ならず、何時にても、ホに打込んで活を得らるゝ缺陷あればなり、然るに黒之をして誤りも圖の如く十五と運び、白に十六と打たるゝに及んで、幾分配石に不利を招きたるを觀る。

〔原評〕　黒十九は此場合いの處へ擇び、白ろの時チに詰める方可なり。

▲黒十九は前著十七の著意を滅するもの、當然右側リに約へ込まざる可らず、大體黒十七と打ちたる意は、白若し二二に應じなば左側十八に掛け、白ヌ黒ルと打つて、中側を經營する意匠たる事論を俟たずさればこそ白十八と左下側に備へたるなり、然らば黒は當然の理由として、リに約へ込んで十七の著意を徹すべきや明らかなる所たるにあらずや。「而も黒にして斯く打てば、白十四の一著をして之を惡化せしめ得たるなり、高目定石に於て爰に尖み頂け、黒十七と交換したる道理の下に。」

但し此時白二八に詰めなば、左側ろに打ち、白いの時ヲに斜走して可なるなり。「尙初學者の爲めに一言せんに、黒リの時白若しワに刻ねなば、力に約へ白二二に截らばヨに當て、白タ黒三二白レ黒リと打つべきなり。」

▲されば黒二一にても尙ほリに約へ込むを肝要とす然るに黒更に爰に想ひを致さず、白をして遂に二二の點に據らしめたる結果、黒十七の一著、殆ど無意味に化し、爰に前途漸やく多難ならんとする形勢となりたり。





▲黒二三、堅固なれども運びに於て緩し、此形勢にあつては一路進んでヲに構ふべきなり。

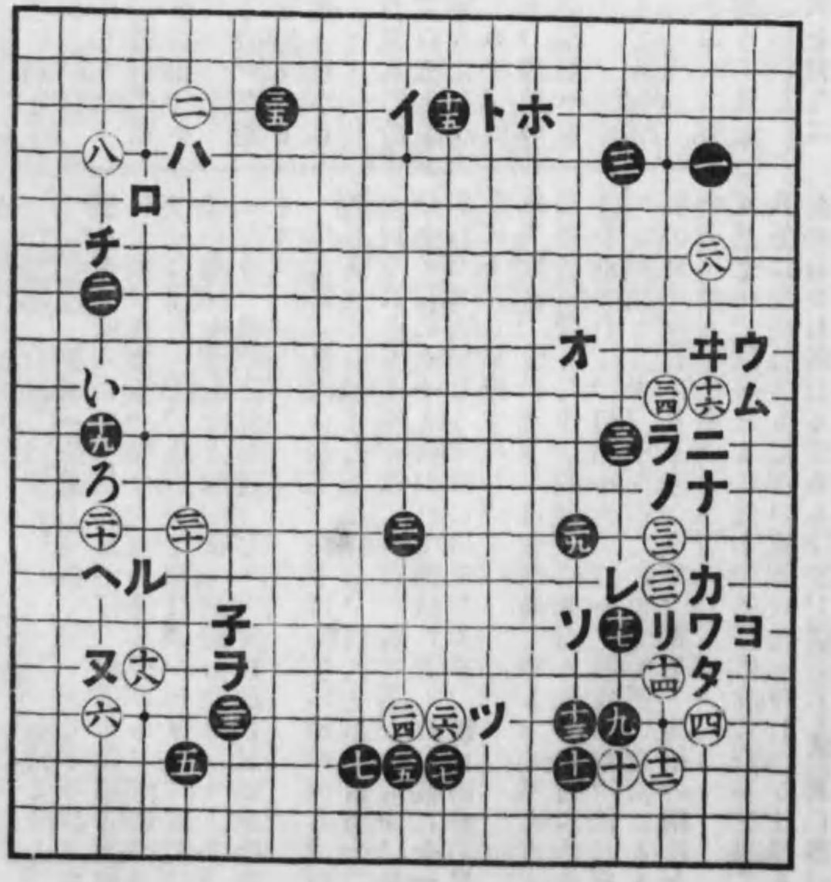
▲白二四、二六は敵を固むるものなれば如何なり、多少味惡しき節あれど、之を二九に構へ、而してツの打込みを狙ふなど面白からんか。

〔原評〕　白三十は同じく中腹に黒模樣を生せしめざるの意を含みたるものなれど、事實及ばざるを如何せん、三一に打つを正著とすべし。

▲白三十は方向違ひにして且つ緩漫を極む、三二に備へ黒尙三一にせば左側よりネと侵すべきなり。

▲黒三一緩し、二九の睨みを遂行してナに打込み、白若しラに尖まばムに頂け、白ウにするも、井に應ずるも、ノに押して打つべく、又白ノに頂けなばラに刻ね、中腹の模樣に順應して所理すべきもの、白に三二を打せて、備へを正さしめたり。

〔原評〕　黒三五は此棋勢オに斜走して中腹の勢ひを壯にすると同時に上側の防護を兼ぬるの趣意に行くべ



き處にして、白若しはに詰むれば五三に頂け、白百二四黒五七白イ黒三九となる事、却つて黒の利とする所なればなり。

▲黒三五は徒らに勢圏の擴張を計るものにして締りを缺く原評の如く打つもあらむかなれど、爰にては左中腹百二六に圍つて先づ封域を保つ方針に出づべきなり。

▲白三六は漠然據る處なくして事を起すもの、左側六二に打てば、普通なれど、若し爰に手を附くるものとすれば、斷然ホに打込み、黒三八に尖まばクに覗いて活を打つべきなり。

〔原評〕 黒三七は此場合四四に綽ね、白三八の時又四八に綽ね、白三九黒イ白百十三黒五三白五七黒百二四と打つべし、併しながら黒四九に至り之をクに換へなば、白をして五四の下りを利せしめず、何時にても三八の一子を獲べく、從つて四十、四二の白の活動を容るさゞるが故に、此處の變化黒敢へて惡しからず。

▲黒三七の應答は堅固なれど、四九に至りては當然クに打つべき所なりし。

〔原評〕 白五六にて尙一著五七に押しを加へて百二四に引かせ置かば可なりしを、黒より却つて五七と押されしは大打擊なりし。

▲贊成なり。若し五七に押すを忌まば五六を以てはヤに飛ぶべきものとす。

〔原評〕 白五八は五九に打つべし。▲然るべし。

〔原評〕 黒六一味惡し、百に粘ぐべし、されど六三に至り徐ろにマに刎ね置かば、附近の白頗る薄弱にして、白六五、又は六六の邊に補はゞ、直ににの缺陷に蔭むべく、黒優勢を失はざるべきに、爰に急促の著手を下したる事、抑も破綻の始めなりとす。

▲然り、黒六三は打過ぎなり。マに綽ね居るを堅實とす。

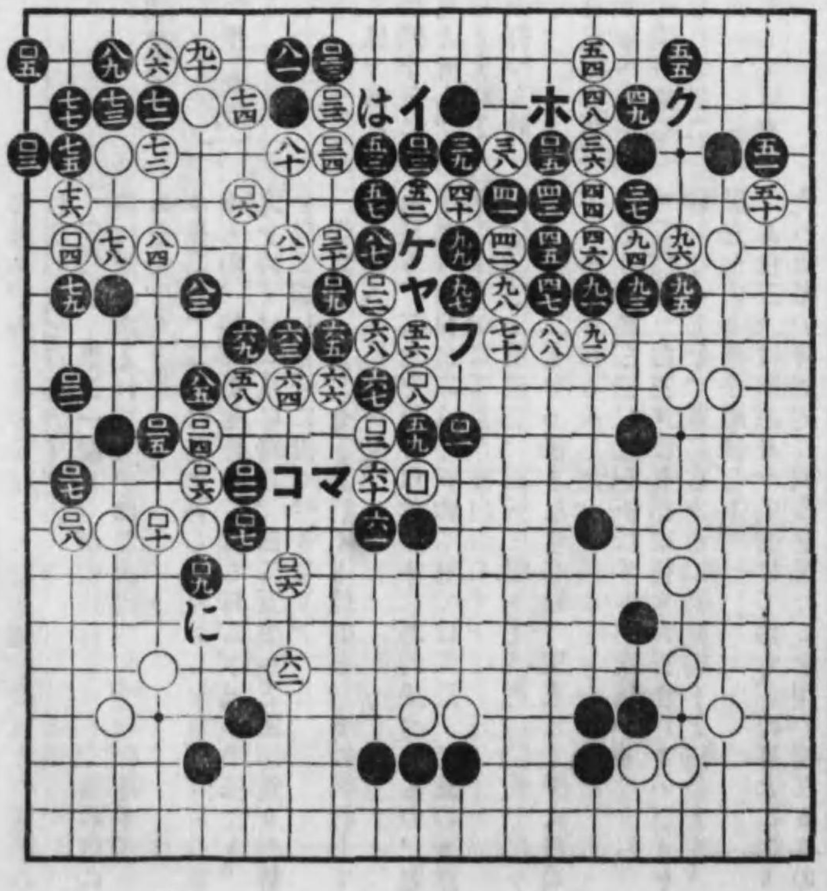
〔原評〕 黒六九惡し、此手にてケに綽ぬべし。白若し九九に粘げば九七に綽ね、白八七黒ヤ白百十二の時フに打つて極り附くれば、黒尙惡しからず、圖の如く白に七十と打たれて應接に苦しみ、俄に七一と打つて强拗なる手段に出でたる事、既に勝勢の黒を去りたるを證すべし。

▲黒六九、爰に至りては當然斯く押さゞる可らざる肝要の一著となす、原評ケに刎ねる如きは白に六九と折曲られて、目前十九、二一と此處との所置に窮する而已ならず、中央百二に當てゝ百に突出さるゝ疵の更に痛切なるを來たして、黒殆ど應接の術なき慘狀に陷りしなり。

▲黒七一、敗著たるに近し、黒は何故に斯手を以て八五には刎ねざりしぞ、前著六九と押したるは抑も此刎ねが目的たるにあらずや、黒にして此著に出づれば、七一の頂け手頗る痛切のものとなる而已ならず、白の百二に當てゝ百に突出す手をも凌ぎ居れば、斯くして中央と左上隅との兩睨みを得べく、黒未だ形勢を失はざりしに、黒此要著を失し、事を逸りて七一に頂けたる以往は最早、殆んど望み無からんとす。

〔原評〕 黒八七を以て最後の敗著となす。ケに刎ね白九九の時九二に尖まば白中央を活くるの結果、却つて細碁に變ずべき狀況にありしを、白に百、及び百二と打たるゝに及んで其敗は決したり。

▲黒八七、爰に伸びる意ならんには何故一旦九一には押し置かざりしぞ續いて九一惡し、爰に於ては先づ八九に約へて左上隅に活を打ち、而して左中腹コに打ちなば、下側白の連絡未だ全からざる事とて、黒猶ほ一縷の望み無しとせざりしに、黒之をしも失しては、最早回復の望み絶えたり。




百二十六手以下略

## ▲第五十七局

三月中報知新聞所載　四目時先々先番

雁金準一（六段）
瀬越憲作（六段）

### 本因坊秀哉講評

〔原評〕 黒十一は古風なり、氣分としては一路イに高く陣し、次に二七の詰を含みたきも此際十三に尖むか十五に挾むか、二途其一に就くを可とせん。

▲黒十一は「た若しくば十五に打つを通常とすれど圖の如く十一に、備ふるも將又十三に尖み打つも敢へて非なりとせず。

〔原評〕 黒十三は一考を要す、白の挾み三路の距離に在れば黒十九、白ロ黒いと打つかた然るべきか或は全然手を抜きて四九に拆き、白十三に掛け來らば、黒ろ白は黒い白に黒二一、白にをほなれば黒二一をへと應ずるも一策なるべし。

▲然り、黒十三は十九に尖み頂けるか、若しくば左下側四九に詰るを普通とす。

▲白十八は趣向に屬するものなれど、之を以てはハに備へ、而してニの走りと左上側の拆きとの兩睨みに出づるを正しとす。

〔原評〕 黒二一緩し、ホに詰めるべし、此隅白にニに飛び込まれても、にに飛出でゝ支障を見ず。

▲賛成なり。

▲黒二三、二五は策を弄して自からを薄弱ならしむるもの、特に黒を持して採る可らざるの手法たり。之を以ては二八に掛け、白二五黒へと運び堂々大勢を以て進む方針に出づべきなり。

〔原評〕 黒二七と詰行くも位低し、トに斜行して形を整へるに如かず。

▲然り、二七を以ては當然トに斜行すべきもの、之を怠り、白に二八と折曲らせては二三、二五の著意を失ふものにて甚だ面白からず。

〔原評〕 黒三三、三五と盤りては更に位低となりて、益々二七を不働きならしむ、三三にてチに斜飛する形式を採るべし。

▲然り、黒三三は之をチにする事當然の著なりし。

〔原評〕 白三六は其結果徒らに三十以下の三子を薄弱ならしむ、單に右方とに斜展するを釣合とす。黒三七の一著手順妙なり。

▲白三六は所謂身攻の著にて惡し、原評とに煽り先づ自家の勢圏裡に武歩を進むるを策の得たるものとす。蓋し白三六と頂けたる意は、斯くして隅を固めん所存なりしならんが、黒三七と頂けられて謀と挫折せり。

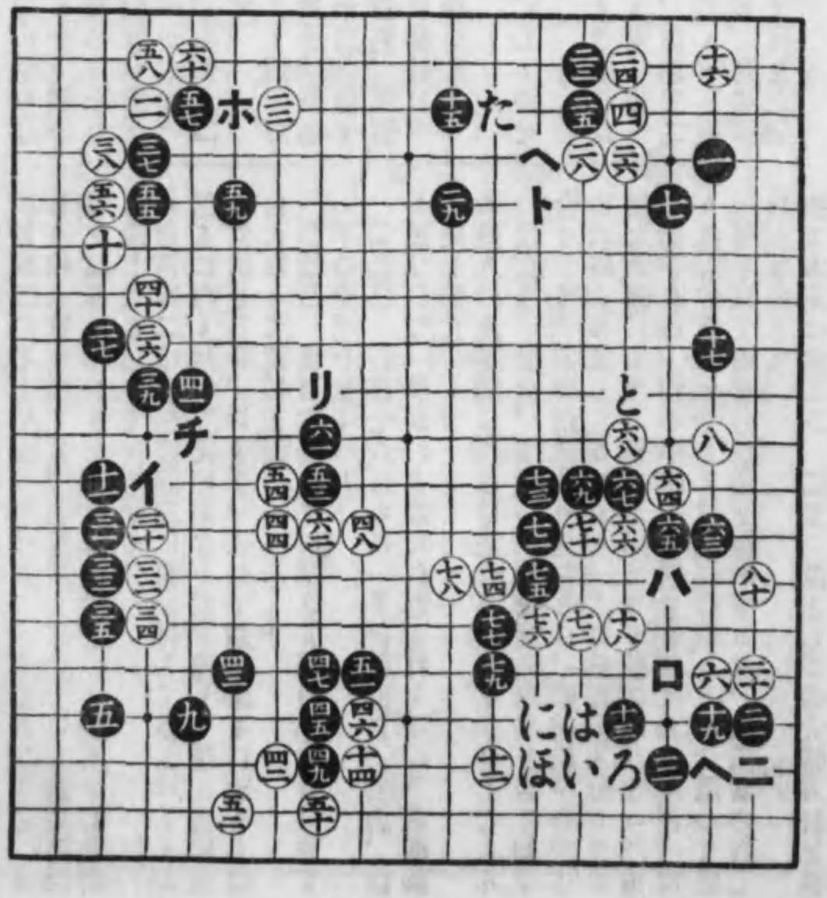
〔原評〕 白四四大に惡し、之を本局敗亡の遠因となす、放置してとに打つべし。後に黒四七となりし時に追想して、之を四四に擔出するの如何に重きかを悟るべし。

▲然り、白四四は爰に於ても尙事を自家の勢圏裡より運ぶべく、とに打つ場合なりとす。然るに白之を失して、圖の如く黒の勢圏裡に四四と手を附けたるより、以下着々攻撃を加へらるゝの已むなきに陷り、形勢既に白に危ふし。

▲黒五三は直に五五以下の手順に據るを可とす。

〔原評〕 白六十、此局勢に於ては甚だ緩怠なり、リに打ちて中腹の薄きに補ひ、依て均衡を保有せざるべからず。黒六一白六二となりては、黒の行動欲するが儘なり。

▲白六十は如何にも緩くして大勢爰に定りたるの觀あり。之を以ては六一、若しくばリに中腹を補ふべきや



論を俟たざる所たりし。

〔原評〕 黒八一、八三の趣向如何、九二に掛けなば天下一擧して定まらん。卽ち右方の締めや上隅の攻や、乃至中石に對する狙ひ等、一種々無數の含味あるを、白に八四と一歩を先んぜられ、不知々々紛殼の因を釀したるは、機に敏なる者と言ふべからず。

▲黒八一、八三は想を部分に馳するもの、右側九二に掛けるを、大勢に伴ふ健全なる著手とす。

〔原評〕 黒九九以下、劫の策戰機を誤りて道の好局昏迷に陷りしこそ是非なけれ。圍中の數子は全然放棄するの目的にて、黒百七白百八黒百十三白百十四黒百二一白百二二、黒ヌ白ル、黒ヲ、白百、黒百四七、白ち黒リ白百二黒ワ白百七と先手に締付け、轉じて力に詰めれば、勝確かにして數又少からず、是れ的算にして必勝の途なりしなり。

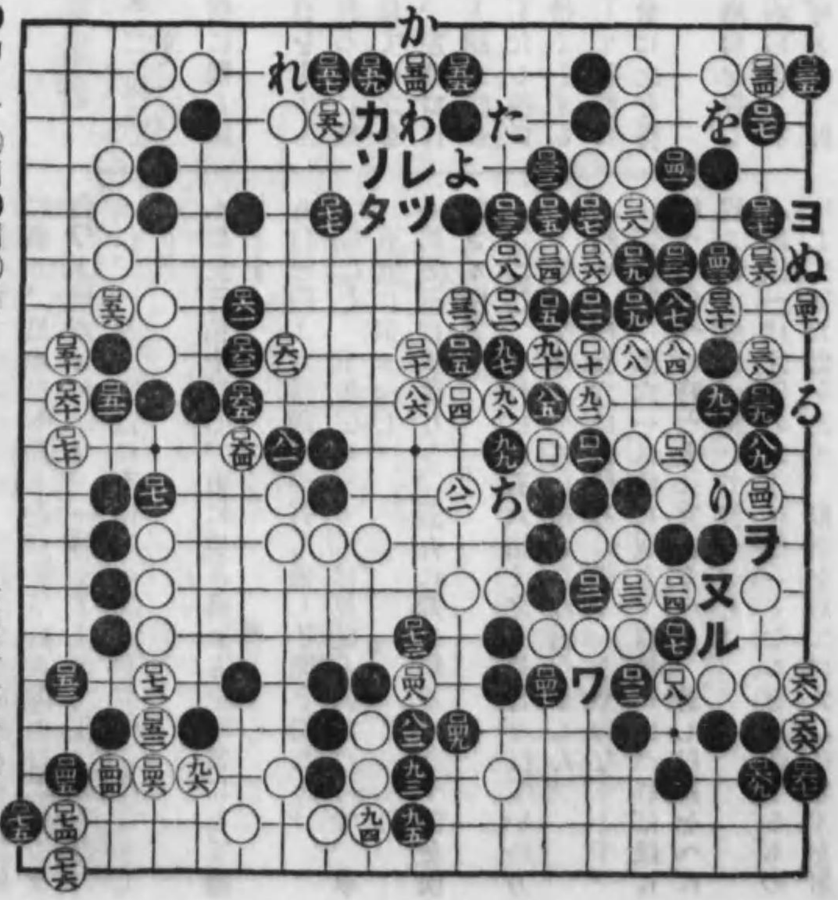
▲然り、黒にして爰に出でなば勝敗一擧にして決せしなり。

▲黒百十七以下の意匠、如何にも味惡しく危險言はん方無し、百十七を以ては百十八に當てゝ爰に備へ白百十七に隅を活きれば八五に劫を提り、白百三二黒百二十白劫提りとなる時、をに劫を立てゝ爭ふ手段に出れば、變化は樣々あれど結局白凌ぎに窮すべく、勝算も亦的確なるものありしに、黒又復た之を失して、將に勝を逸せんとす。





り、次いで二七に失し、白に二八と折曲られて、稍や形勢を損じたる折から、更に三三に緩著を下して夙くも微細の局勢となりしが、此時に當りて、白三六に失著を下し、續いて四四、六十に策戰を誤りたる以往は白に勝目なき局面となりしが、爰に於て黒八一、八三に方針を誤り、次に九九に勝を收むるの機を逸し、更に百十七に失して、さしもの局面も危險に瀕せしが、此秋に當りて白或は既に勝局なりと誤認せしにや、百四三に打つて決戰すべきを看過して敗に終りしもの、而も之を本來より論ずれば、本局白の敗因は三六、四四の兩著に爲り、六十の緩著に大勢決したるを觀る。




㊀劫トル ㊁同 ㊂同 ㊃同

百七十七手以下略



〔原評〕 白百四二にてに百四三愚集み、黒ヨ白ぬ黒百四二白ると刎ね、をに當てゝの劫となさば、其利害絶大緊切にして、敗局ならば之を以て最後の決戰を試みるべかりし。黒百四三と打つに至りて危機を脱したる思ひなからずや。

▲白百四二は當然百四三に眼を持ちて爭ふべきもの然るに白ミス〳〵此絶好なる機を逸し、黒に百四三と安堵せしめ、以下手を束ねて勝を讓るに至りしは白に取りて遺憾至極と云ふべし。

〔原評〕 黒百六一はタに飛びて連絡を求め、兼て一子の索引を制すべし。

〔原評〕 白百七六はわに一子を曳出し、黒力、白レ黒ソ白ツ、黒か白よ黒た白れと打ちなば、尙微細を期し得たらん乎。

▲然り白此手順に出なば更に其敗數を減せしならん

〔總評〕 雁金、瀨越の兩氏は實に斯局を以て初手合せとす。「其瀨越氏先々先たるは、瀨越氏手合半ばに六段に昇進したるに依る、之は新たに入社したる雁金六段に對する遠慮に出でたる社の計ひなり。」由來初手合は、相手の容子判明せざれば双方所謂、探り打ちの意味を生じて、互に打難きもの、隨つて此一局を以て兩者の技倆を揣摩するは、第三者の愼しむべき所とす。

扨て本局は黒二三、二五に黒としての大體方針を誤

## ▲第五十八局

方圓社長　七段　廣瀨平治郎講評

三月中萬朝報所載

五目勝　宮坂寀二（四段）
先　岩本薰（三段）

〔原評〕　本局の布勢、三二に至る迄、毎に觀る處にして黑惡しからず。

▲黑十三、徒らに定型を濫用して碁の糸口を失ふもの見よ其三十迄の意向通りとなりて、尙且つ既に細碁の局勢となりたるに非らずや。十三を以ては之を十六に替へ、白十八黑十三白イとなる時、左側ロに詰めて十二の白に迫り打つべし、但し之と同意味の下に、十三を以て二三に飛び白イと交換したる後ロに詰むるもあらん。其是非は姑らく之を措くとするも、兎に角此際當の敵子たる白十二に對して攻勢に出でざるべからず、然らば後の運びも順當に之を得られしなり。

▲白二四は定型を墨守するものにして、機會を捉らうるに暗し、此場合にては後に生ずる左右の征、我れに宜きを利用して之をハに押へ迄むを可とす。即ち黑イにせばニに刎ね、黑六六に二段刎ねせば二四に截り、黑ホ白ヘ黑ト白チ黑リ白ヌ黑ル白二五黑ヲ白ワと刎ねを利かせ、一轉して上側六五に押し打たんに、一擧して白に有望なる局面を打開し得たりしなり。

▲黑三三稍や緩し、カに尖み構ふるを尋常にして嚴しとす。

▲白三四より四四迄の打ち過し手順を得たり。

〔原評〕　其五三に至りては見込み確かならず、單に五九に飛ぶべし。

▲黑五三は失著なり、五九に飛び居るべきや論を俟たざる所とす。

〔原評〕　されば白五六姑く之を見合せ反ていの方より覗きを含みてろに掛けなば面白からん。

▲然り、白五六は當然ろに掛くべき筋合なりとす。

〔原評〕　黑六一ははに覗き、白ににに出づればほに約へ、白への時七七に突當るべく、若し白にをへに代ふれば黑ににに粘いで打つべし。

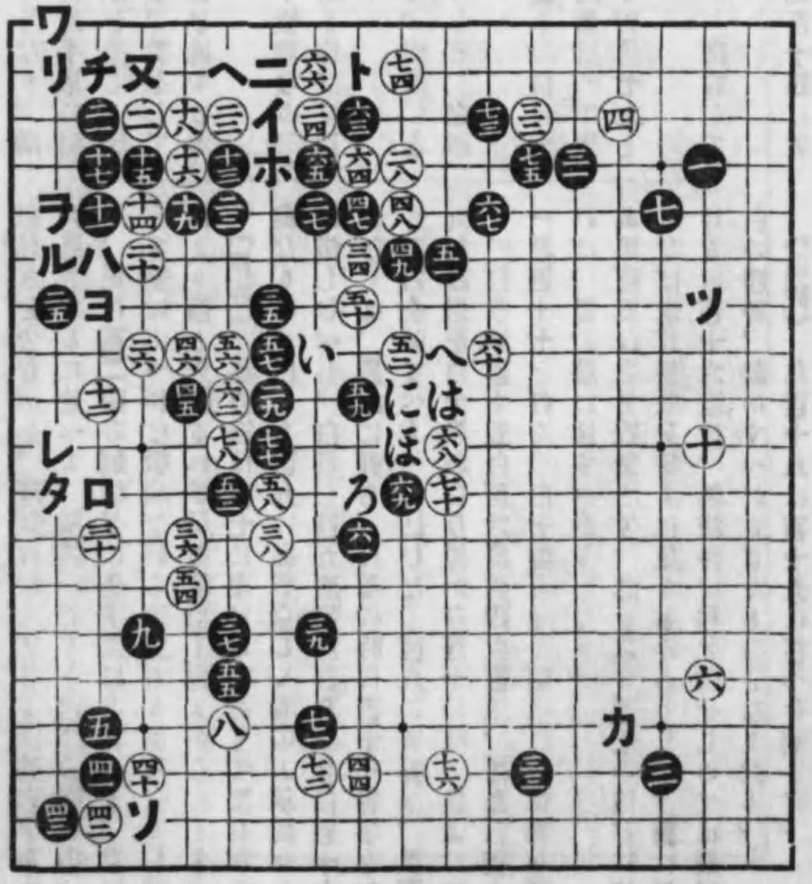
▲黑六一は左側の二子持込みとなるを座視するものにして甚だ當を得ず、斯著を以ては六二に粘ぐを肝要とす、黑爰に粘ぎ置く事は唯に白の眼形を奪ふに止まらず。左側ヨに覗き、白之を防がばロに頂け、白タならばレに刎返して上部六子を獲るか、又は先手に上方下方の連絡を取り得る手段生じ來ればなり、然るに黑此大事に慮る所なく、白に六二の急所を讓るに至りて、頓に恢復覺束無き局面とはなせり。

▲白六八、七十上側を放棄して爰に形勢を占めたるは果斷たるに近し。

〔原評〕　黑七一、打ざるを可とす

▲然り。

▲白七六、甚だ其意を得ず、爰は七六の飛びと、下側リの粘ぎとの見合の處なれば、些の打急ぐべき理由ある事なし、何故に之を右上側ツに詰拆いて此側面一體の形勢を占め、依りて六八七十の著意を繼がざりしぞ而も斯著は目下全局唯一の好點たる



而已ならず、此一著ある事は容易に此隅に手段を施し得る利便をも併せて之を收め得べかりしなり。「譜の如く百に下るとするも、百九に打つ常用手形に出づるとするも。」然るに白此肝要なる打點を逸し、反つて七九に先鞭せしめたるため形勢一變、黑をして頓に生色あらしめたるは、當さに敵に欺を通ずるものと謂つべきなり。

〔原評〕 白八十以下八四迄の越向稍や無理なり、此場合百三十に頂け、黑百三一白百三二と伸びて百四五の覗きを含むべし。▲賛成なり。

〔原評續き〕 然るに黑八七大に惡しゝ、何故にと之に曲りて大切なる八五の石を救はざりしぞ、之恐らくは大勢の岐るゝ所ならん。

▲然り、黑にして此手段を採らんか、曩きの白の七六の罪愈よ重きを加ふる事となりて、局勢反つて黑に有利なるものありしに、黑之を失して切角七九と詰たる効力の半ばを失ひたり。

▲黑九一は敵の地域外に逸れたるもの、一路右して禾に備へて白の封域を侵すべし。

▲黑九五緩くして且つ勝敗に關す。上側百十四に尖み頂け、隅の手段を防ぐと同時に左隅百二四の先手劔粘ぎを含むべし、斯著は譜に於ける白百以下百十六迄となるに比べて、斯隅に於て十六目の利を得べく、更に百二四の劔粘ぎに先手九目の利あり、黑にして爰に出づれば微細ながら勝算ある形勢なりしが白より百と先鞭されて局勢漸やく危ふからんとす。

〔原評〕 黑百三は百七に頂ける手ありて黑有利の處なるに、白より百九に振替らるゝものと承認せしは惜しむべし、白若し百九黑百八白ち黑り白百十七とならば、黑ぬに打ち、白るの時に百十一警手を加へて白全滅すべく、白已むなく百八に突當り、黑百九白ぬ黑を白ナ黑わ白り黑か白百十の時、黑よに出で、白ラ黑百十五白百六黑百四白百三、黑た白百十一黑百十七と打ち、白を盤らせて順次に代償物を獲れば、黑の勝に決すべかりしなり。

▲黑百三は之を敗著とす、之を以て百七の頂けに換へなば未だ勝敗を爭ふに足るものありしに、圖に於ける白百十六迄に、無條件に利を得せしめては最早白の勝勢、動かすべからざるものとなりたり。

〔追評〕 白百十八は百十九に打つを利とす。

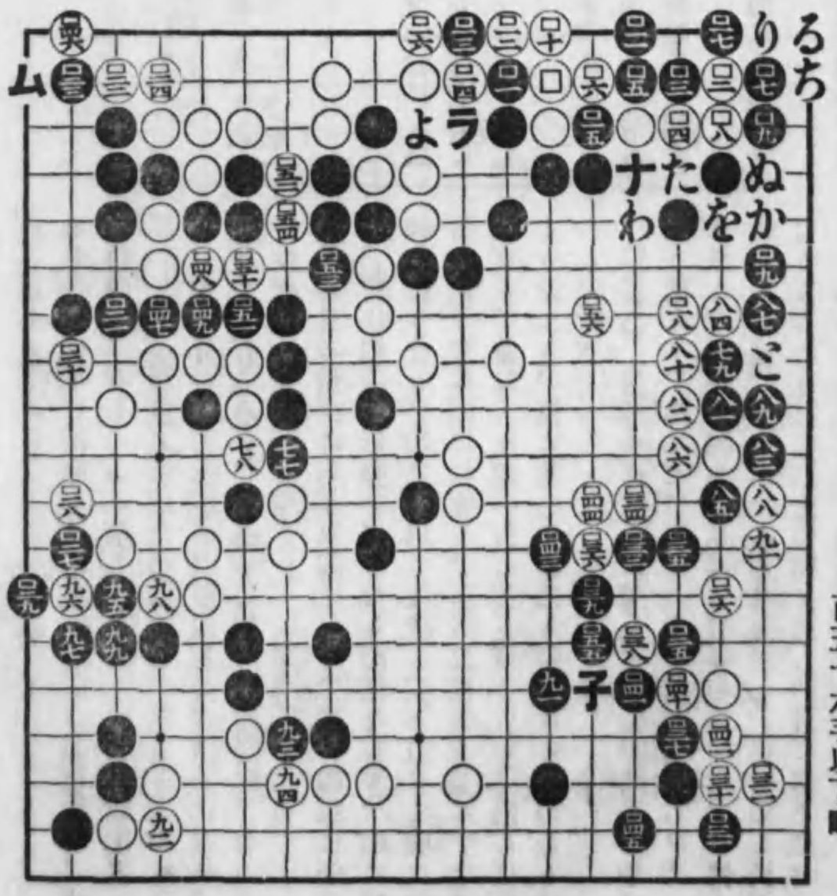




〔原評〕 白百二二は百三十に頂けるべし。

〔原評〕 黑百二七は小事なり、百三三に打つべし、黑百四七惡しくして愈よ敗に決せりムに受ければ尙細碁にてありし。

〔總評〕 本局は黑劈頭、十三に方針を誤りたるより、白二四の怠りはありしも、既に細碁の形勢となりたるに當りて、五三に失し、更に六一に大事を誤りて、黑一且敗勢に陷りしが、此秋に當りて白七六に肝要を失し、黑形勢を復せしが、以下黑八七、九五、百三に失して遂に敗に終りしものなるが、更に其遠因とする所を云へば劈頭十三の一著に在るを想ふものとす。




百五十六手以下略

## ▲第五十九局

四月中報知新聞所載

本因坊秀哉講評

先々先　中押勝　瀬越憲作（六段）
先番　小岸壯二（五段）

〔原評〕 白二四にて四六に懸り、左邊に於ける黒の拆きを牽制して、黒二四に入るに對し、百十二に頂けて打つも一案なり。

▲然か打つもあるべし。

▲黒二七、此際歩調緩に失する嫌ひ無きに非らず。一路迫つてイに挾む型を採り、白三一黒三十と構へ而して二九の拆きと、四八の詰拆きと兩睨みの配置に出づるを確實にして嚴しとす。

〔原評〕 黒三九はロに突出すべし、同じく定法なから場合に可なり。

▲然り、斯くて爰を固め置く事は、轉て左邊ハの打込み嚴しきもの生ずるなり。

▲黒四一は單に侵略を試みたりと云ふ而已にて、他に目的とするものある無く、加ふるに全體の配置と調和を置く嫌ひあれば左袒し難し、斯著を以てはニに肩側を衝き、白ホ黒へ白百六ならば六一に飛び、上邊ハの打込みと、下邊トに固める手とを、含みて打つべきなり。

▲黒四三の飛びは此遲逼緩にして、爲に四四に侵され、管に細碁の形勢を招きたる而已ならず、頓に戰機を緩うせり。四三を以てはは に尖み頂けて直に當面の敵子たる四二に當り、白五二黒チと飛んで之を攻立て、兼ねて左側の白に迫る可きもの、然らば委より云ふも、圖に比して黒頗る優越なるものあるにあらずや。

〔原評〕 白五十は五一に綽ねるべし、然らばリの截り緊しく、夫れだけ左邊の三子を緩ふせしむ。

▲然り、五一の綽ねは見易き肝要の著、白之に據りたらんには、黒白伯仲の形勢を示し、棋勢頗る廣濶なるものありしに白此要點を逸し、爲に以下黒七一迄に形勢を與へたり。





〔原評〕 黒七三非なり、單に九一に應じ、白八九ならば七八に阻むべし、（或は七五に尖みて七三に粘がせ七八に双びても惡かるまじ）白より七六、七八と乘じられて其地域の瘠せたるを見よ。

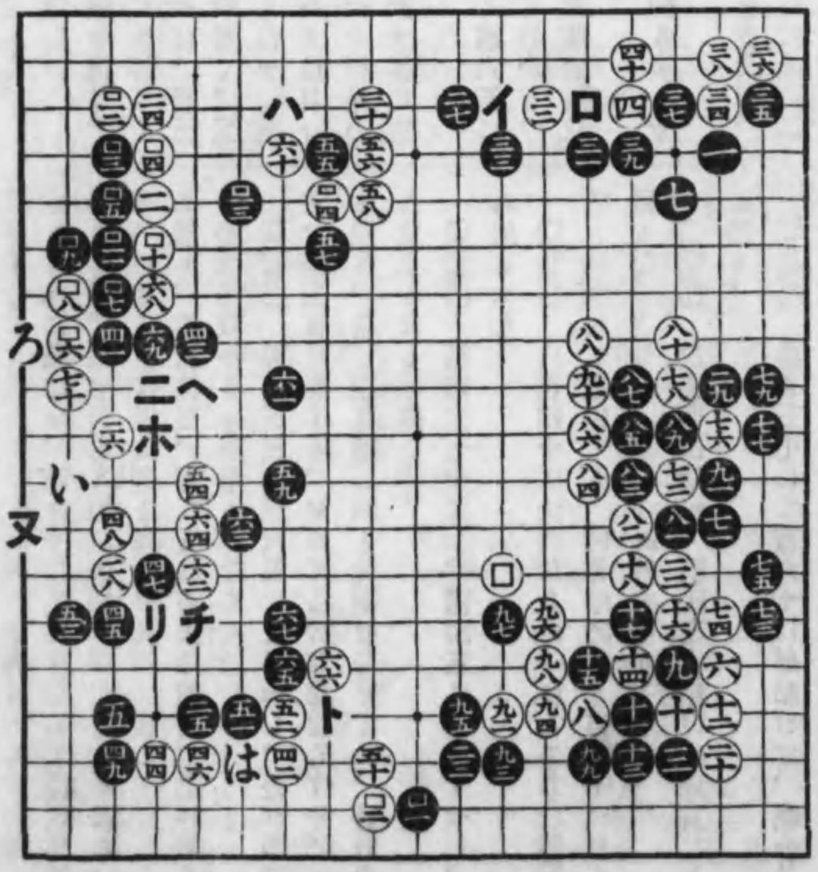
▲然り。

〔原評〕 黒八一、八三は時機早くして白に九十と締付けられては面白からず、左上隅百三に覗き、白百四の時百六に約へ、白ゐ黒又と走り、次にろの下りを利かせて百十二に約込むべし。黒百五にても百六に約へて然る後、百五に引くを利益とす。

▲然り、黒百六の約へは急所なるに黒少しも之を利用なさんとせざりしは如何せしにや、或は白に百六と泳がるゝに慮からざりしものか。

〔原評〕 黒百九に至りては百十に綽込むべし。

▲然り、黒百九は當然百十に綽込む



べきもの、之をしも失しては、局勢既に危ふし。

▲黒百十五無理なり、百十七に引くの外無し。

▲然るに白百十六、保つを先きにして戰機を逸す、若し之をルに頂けて迫らば黒は如何に之に應答するものぞ。一例を擧ぐれば此時黒百十七にせば、百五七に伸び、黒百十六白ちとなりて黒に手段無く、又黒ホに打てば、百五七に備へ黒いに點くも白ヲに應じ居りて、ワの覗き其他の味にて此白を凌ぐは易々たるものあれば、黒百十三、百十五、は全々持込みとなりて、勝敗爰に決せしなるを、双方此大事に想ひ到らざりしは不覺なりと謂つべし。

〔原評〕 白百二二緩し、姿勢より云ふも百六五に二段綽ねすべく、此處白一帶に强厚なるものから、黒に妙手段あるべしとは覺えず。此邊所謂勝負所なれば、特に奮力すべき機會なり。

▲然り、白百二二は緩かりし、百六五に綽るべきや勿論なり。

〔原評〕 黒百二三、百二五惡しく、白を百二四、百二六と打たしめたるは大損なり。黒は白に黒百二四と下り居らば、左邊の白の關係上百六三の粘ぎ、先手利きにて此に二子の截取りを殘すべく、白ほに當てゝへに飛ばゞ、百六十に綽粘を打ちて優に贏算あるもの、之を失して頓に微細の局たらしめたるは寧ろ敗者と評するも誣る所なけん。

▲然り、黒百二三、百二五は多大の損著、之れ恐らく勝敗の岐かるゝ所なりしならん。

〔原評〕 黒百三三は百六五に赶すべし、是れ百二三、百二五に對する、せめてもの責務ならずや。

▲然り、白に中央百三四と先鞭せしめては、勝敗愈よ定まりたるを觀る。

〔原評〕 黒百三七少なり、百四五に突出すべし、

▲然るべし。

〔原評〕 白百四十は怯れたるか、白と黒ち白百四三と粘ぎたる後にても、何等障碍なく百四十に打ち得るなり。

▲贊成なり。

〔原評〕 白百四四怠慢、百四五に粘げば確實なり

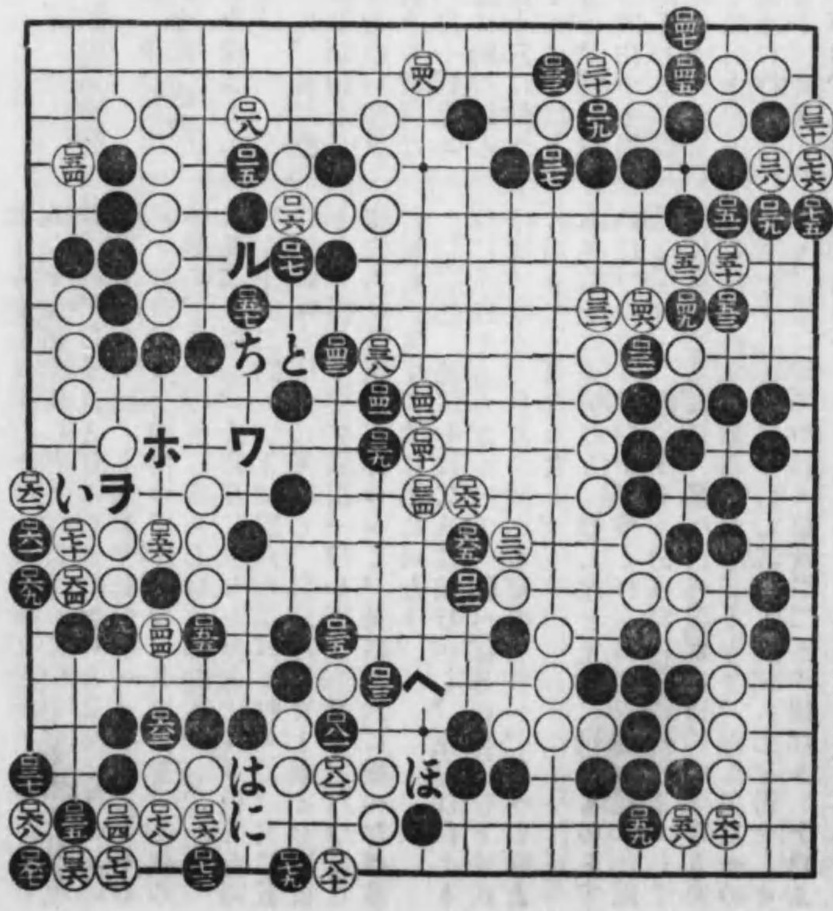
▲然り。

〔原評〕 黒百五七にて百六十に綽粘げば、縱令及ばずとするも極微の差なり。白之を綽粘ぐに至りて其勝を定め、黒之を知りて中途に投了したるも、終局すれば大凡四五目の敗なるが如し。

▲黒百五七は勝敗は兎も角、百六十に綽粘ぎを試みるべき所なり。

〔總評〕 本局は黒二七、四一の兩著稍々當を得ざるものありしに次いで、四三に機を失したるより。白に四四と乘ぜられ、黒漸やく先著の効力を減却せしが、爰に於て白五十に誤りて頓に形勢を失ひしも、黒七三以降百九迄、着々事を誤り、白百十六の失に一度危機を免かれたるも、百二三、百二五に大事を誤り、次いで百三三に肝要を失して、爰に勝敗決せしもの、之を要するに本局黒の敗因は、後半の努力足らざりしに依る。

因に本局日時は、對局日數五日時間五十時間半。




百八十二手以下略

# ▲第六十局

方圓社長　七段　廣瀬平治郎講評

四月中　中外商業新報所載
先々先　先番　中押勝　井上孝平（五段）　小野田千代太郎（四段）

〔原評〕　黒七は配石上却つて白に手段を與ふるの嫌ひあり。いに三拆するを普通とすべし。

▲黒七、今し接伏中なる左側を其儘にして、爰に懸るは穏かならず、左側面一著の優越なるを利用して嚴しくイに迫る型を採るべきなり、尚ほ七の一著をいに拆くは、自家の優勢なる場面を無視せる緩著なれば、白は此隙に乘じてロに打ち、黒ハ白十四黒ニとなる時、十に截る定型に出づして十五に約へ込み黒十二ならば一著十に截り、黒ホならば十三に約へ込み、黒へ白十八と打つべく、又黒ホをへにせばトに約へ、黒ホ白チ黒リ白十八と打ち來らん、尚又白十五の時黒十に粘がば十八に飛び、黒十六白十七黒ト白ヌと打つて、此側面黒を低位に就かしむる手段あり。而も假に黒ニの時白十五の約込みを十に截るの定型に換へ、黒へ白ホ黒ル白十五黒十二白ト黒リ白チ黒ヲ白十八となるものとするも、曩きに打ちたるいの一著は、白の堅きに向つて拆きたる、失著と化すれば、此形勢に於て黒七をいにする事は、其孰れより見るも面白からざるなり。

▲白十如何、爰に在りては却つて之を、十七に綽ね、黒十一、白十八となる普通に出づるを可とす。譜の如く應答しては、右側黒十九の約へ込み如何にも好處となり、兩々相待つて厚壯なる大地形を、好個の恰好の下に、中側に占めしむればなり。

▲黒二五緩し、此際ワに挾むを嚴しとす。但し此時白左上側二六に尖まば三八に頂けて打べく、又二五に掛け來らばカに突出し、白三八黒ヨと截るを肝要とす、而して白タ黒四一白レ黒ソと應じ、白ツならば二六に掛倒して打つべく、又白二六に備へなばネに綽ね打ちて、共に黒に可なり。

〔原評〕　黒二七は二八に挾むべし、左邊は白より別に手段もあらざるべく、例へばろに打込むとすればはに頂け、白にに綽込めばほに約へ、白への時とに引きて不可なるなし。

▲黒二七は妥當なり、若し之を上側に就くものとすればツに迫り、白ナ黒ラと打ちムの小鬢を狙ふを嚴しとすれど、斯くするも白は原評ろに打込まずしてにに頂け來らんに、黒へ白ろ黒はは白ほ黒ウとなる時いに截られて、黒面白からざるなり、而も黒二七の良著を下して尚且つ白に二八と上側に志を得せしめたり、爰に於てか益々前著黒二五の緩なりしを想ふものなり。





〔原評〕　黒二九緩し、ちに頂け白井に桂馬する時ノに引き、白にりに下らせてぬに飛ぶべし。

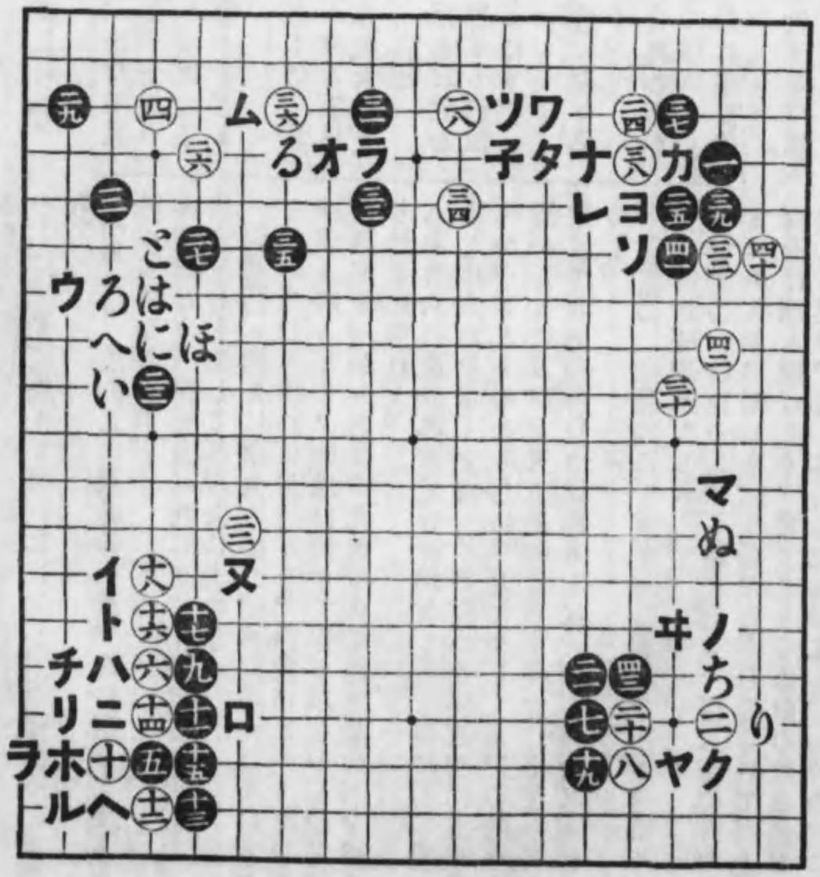
▲黒二九如何、假に目的の如く白オの圍ひと交換するも、尚黒に利ある無し、斯著を以ては尋常右下隅井に打つ型に出で　右側に形勢を張るべし、但し斯著に依つての此隅の含みは機を見てクに項け、白ヤならばりに綽ね隅に活を得るにあらざれば、ちの一勢力を先手に收めて、爰白の出路を封鎖するにあるなり。

〔原評〕　黒三五緩しるに迫るべし

▲然り、黒三五は當然るに打つて此白を痛め付けざる可からざる所なるに黒の此を逸したるは怪しむべし。

〔原評〕　黒三七、三九面白からずレに飛び白タに受ける時マに打込むべし。

▲賛成なり、圖の如く應ずるは當に割喫ひたる而已ならず、攻を執り得る處を防ぎに廻るものなれば、黒に不利たるや申迄も無く、果然白四二迄となりて黒形勢を損じたり。



〔原評〕 白四四惡し、輕く四六に打つべし。

▲賛成なり、此失に依つて黑頓に形勢を復したるを觀る。

▲白五十如何、五五に壓迫するを可とす、此時黑五十に綽ね、白ケ黑五一に應じたりとするも、上邊の出路塞がれば此隅フと走り、黑コに應ずるもエに頂けて手となる所なれば、五十の下りは急務とせざるなり。

▲從つて、黑五一亦之を五五に進展すべきもの、爰に先鞭するは、曾にぬの約へ嚴しきを加へ來る而已ならず、中央全體彼我の消長に關するもの多大なるにあらずや。

▲白五二は愈々五五に打つを急務とす、然るに之を失して黑に五五と據らしめ左上隅五六に應するに及んでは全體の形勢白甚だ手薄きものとなりたり。

〔原評〕 黑五七はぬに曲り込むべし。

▲黑五七は形容に止まりて敵に響をず、ぬに曲り込んで白を競り立つ可や、明らかなる所とす。

〔原評〕 黑五九重し、九九に尖み、白を黑わ白かし黑七二、白百に活る時、よに打ち地合にて爭ふべし

▲然り、黑五九の下りは甚だ重く依りて白に縱横の機を與へたり。

〔原評〕 黑七三は七四に備へて無事に復するの外なし。

▲然り、黑にして爰に耐忍せば未だ餘裕ある局勢なりしに、事に焦りて再び之に失し、形勢漸やく混頓たらんとす。

〔原評〕 黑九五は最終の一戰、たに頂けて上下を隔つる外なきものとす。

▲賛成なり。黑九五はたに頂けて戰はざる可らず、黑之をしも失しては事既に大事なり。

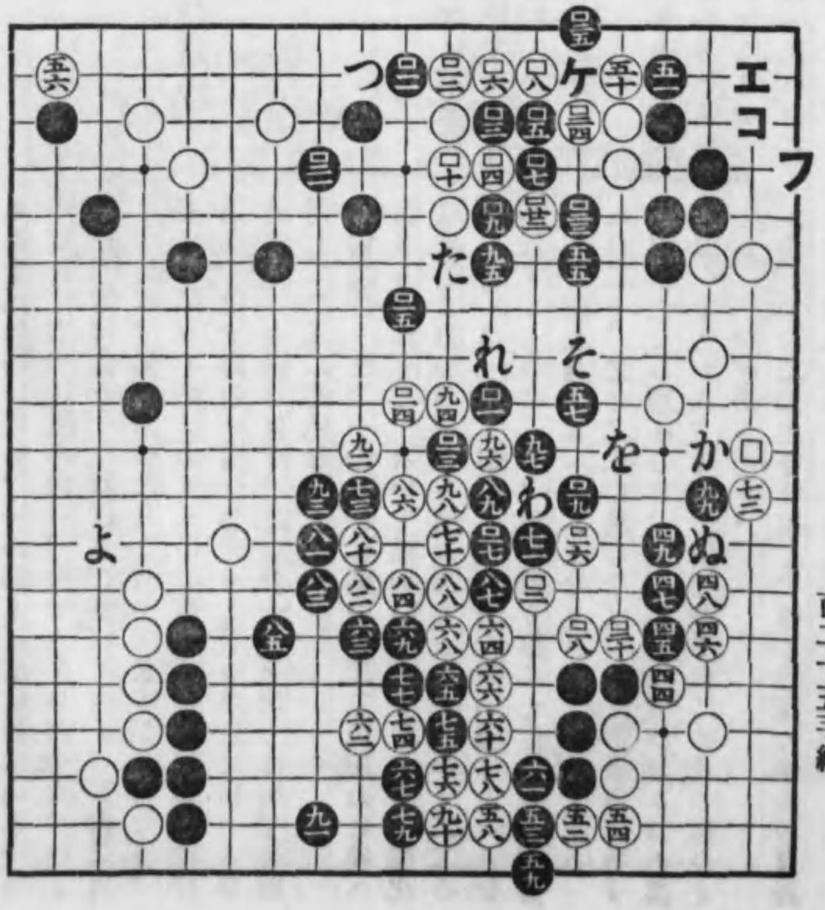
〔原評〕 然るに白九六惡し、れに尖めばその頂けとたの押しと就れに出づるも、白爰に治まりで黑再び爭ふ所もなく、地域白優りて作り棋ながら、其勝は確定すべかりしに、此失策にて偶々黑の名を成さしむるに至れり。

▲白九六は原評れに尖むを佳著とす。白にして爰に出なば大石を凌ぐを得べく、從つて勝敗俄に逆睹すべからざるものありしに、之を失して百三の痛手を衝かるゝに及び、又恢復の道無く半途にして一局を放了するの是非なきに終りしは、白に取りて遺憾なりし。

〔原評〕 白百六にて百十一に尖み、三子を棄てゝつに渡れば細碁なるべし。

〔原評〕 白百十二は手順として、百二四に打たざるべからず、而しながら黑に百十三提られて、上下兩全は頗る疑はしく、爰に至りては白の敗は免がれ難しと認む、蓋し本局黑配佈に失し、一時敗勢に陷りしを、百六の一失に白其勝を失ひたるは深く惜むべしと爲す。

〔總評〕 本局は黑劈頭七に要も無き趣向立てせしより、配置荒びんとせしが、白十に意匠を誤り、二三迄に黑却つて形勢を得たる配陣となりしが、爰に於て黑二五に緩手を下し次いで二九、三五、三七に武歩を錯りて形勢を損せしも、白四四に依つて棋勢を復し、更に五五の要點に先鞭する事となりて、一層棋勢を確實ならしめしに、以下五七、五九、七三、九五に失して局勢將に危ふからんとせしが、此秋に當りて白九六に大事を誤り、依りて勝敗決せしもの白に取りて惜むべき局面なりし。




百二十五手終

# ▲第六十一局

五月中
萬朝報所載

先　小岸壯二（五段）
中押勝　岩本薫（三段）

## 本因坊秀哉講評

▲白十、十二の掛伸びは趣向ならんも、之は第三位點の中腹と第一位點の隅側とに著手を交換するものなれば、啻に實質上に於て不利なる而已ならず、手段の餘地を失ふものなれば賛し難し。斯著を以ては十五に締るを尋常とす。

▲白十四、爰に於ても尚ほ十五に締るを通法とすれど若し右上側に志すものとすれば、更に武歩を進めて三二と一抔に詰め、黒尚十五ならば十六に迫るべく又黒高くイに懸らば、白十五黒ロ白二一黒ハ白ニ黒ホ白十九黒二二白二五と打つて戰ふべきなり。

▲黒十五機略に乏し、一路深く二三に打ち込み、白イなれば二一に尖み頂け、白十九黒ロ白十六黒ヘと運び、其時白十七なればトに伸びて宜く、又白二九にすれば、黒ト白チ黒リと打つて之亦黒に可なり。要は白二をイ點にあるものと假定すれば、二三に打込み、白十四の一著を愚化せしむる手段に出づる事通法とする處なれば、此場合十五を以ては斯型を應用して二三に打込むべきなり。

〔原評〕　白二十の伸びは此場合二二の綽ねに換へたきものにして、次いで黒い白二一となりゆく變化は概して白の有利たる傾向ありとす。然かも二二の時に於ては、輕く二四へ飛び去る事の優さるべきを唱道するものにして、譜に觀る黒二七迄の運用姿勢として施し易かるべきさまなり。

▲白二十、之を二二に綽ねなば、黒一勢子白二勢子の戰ひとなる所なるに、之を二十に伸びたるため黒に二一と粘がれ、却つて黒三勢子白二勢子の戰ひとなるの不利を招きたり。

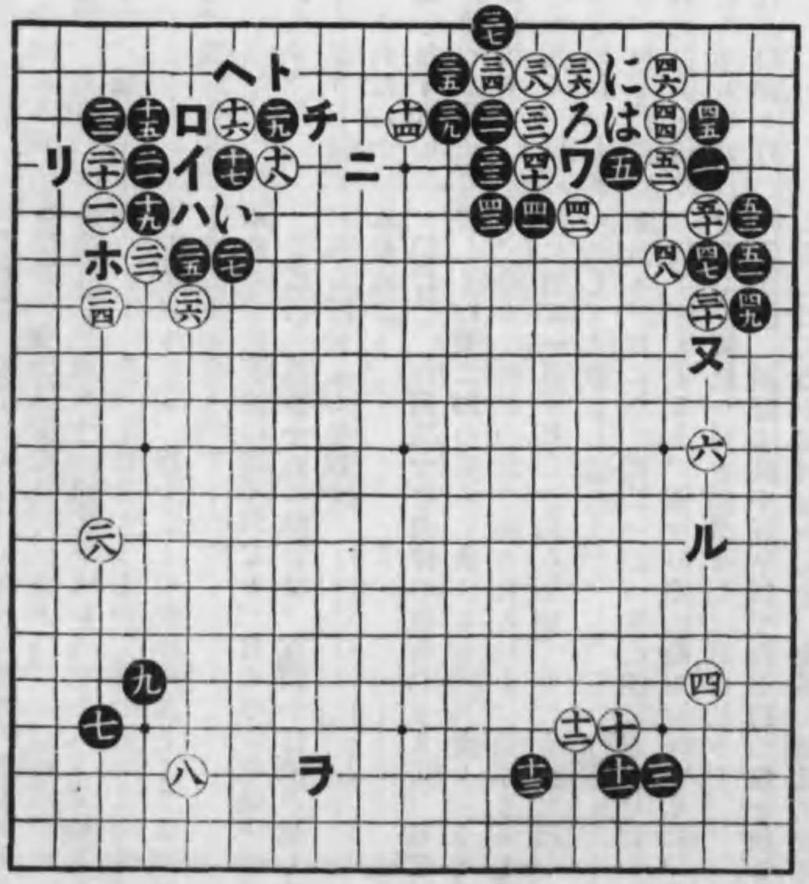
▲續いて白二二之亦手重し、輕く二四に飛ぶの原評に據るべきなり。





▲黒二九は疵殘りの截り手なれば重くして惡し、之を以ては三一に詰め居るを普通とす。但し斯著を以て又の詰に換へ、白三二の時ほに押してルの打込みとヲの詰を窺ふも亦一策なりとす。

〔原評〕　白三十も詰めるに先立ちて先づろ迄歩を進めて黒の應答ぶりを試みたきものなり。黒にしてワに押さば三二に引き應ずべきは勿論のこと黒にしてはに押へ受けなば、其儘にして三十へ詰め寄ること幾分の働きあるものなり。其時に當つて黒三一に打込みなば、白ワ黒四二白に黒四六白三六となるべき順序を追ふものにして、白としては如何やうにも捌き得らるべき輕き形にあるものとす。譜に現はれたる三四以下四十と押し出づる事は、外廓の手薄さを招くは自然の反影にして、其五三ま



での成積、黒の有利たるを觀る。

▲然り、白三十は此場合一著ろに輕騎を馳せたる後三十に拆くべきもの、「ろに打棄ての一著は、往年竹朝の案出せし手なり、」黒に三一と構へさせ、後れて事を仕掛けたるは、策戰無理なり。

〔原評〕 黒七一の粘ぎは重くして不可、ほに押すの常套に則るべきものなり。

▲然り、黒七一は當然ほに押さゞるべからず。

〔原評〕 但し白七八の趣向、肯綮に中らざりしため、黒七一をして良著化たらしめたり。されば白七八に於ては、九十の頂けに換ふるを良案となすものにして、黒にして七八へ立たばへに伸び出づる事、左右の均合上甚だ要を得たる計らひたるを信ず。

▲白七八惡し、此處黒に勢力を加へしむる無く、單純へに伸びてカの打込みと、ヨの截り手を睨むべし卽ち黒タに備へなばヨに截つて打つなり、但し此時黒レに當て來たらば、白リ黒ツ白ネ黒八九白ナと運び、爰にして黒ラに當て白ム黒八二と打ち來らば八七に出で、黒八六白八八黒八四白ウ黒八三白井と打つ變化に出でゝ之は白大いに可なり。

〔原評〕 白百六の粘ぎは百九に押へて活路を保全するの外無きものなり。 ▲然り。

〔原評〕 黒百十一は他日とに迄進み入る意味ある場合とて一先づ見合せたきもの、勝つたるこそ幸。若し負けもせば、百十二との交換は黒として罪淺からざるものなり。

▲然り、此交接は黒不利なり、打たざるを是とす。

〔原評〕 黒百十九の粘ぎは、百四十に飛び越して何等の障碍あるを觀ず。

▲賛成なり。

〔原評〕 白百二十は最終の敗著たるもの、百二一若しくば百二四の尖みに換ふるも、其優るべきや萬々、恐らく何かの思ひ誤りたるべく、此事よりして黒に百二一以下烈しき搦みを受くるに至つては、いかにしても救ふに途なし。

▲然り、白にして百二一の一著に誤らざりせば、よし敗くるとするも、僅少の差に終るべかりしに、之を失して俄然一局を崩潰せしは殘念なりし。

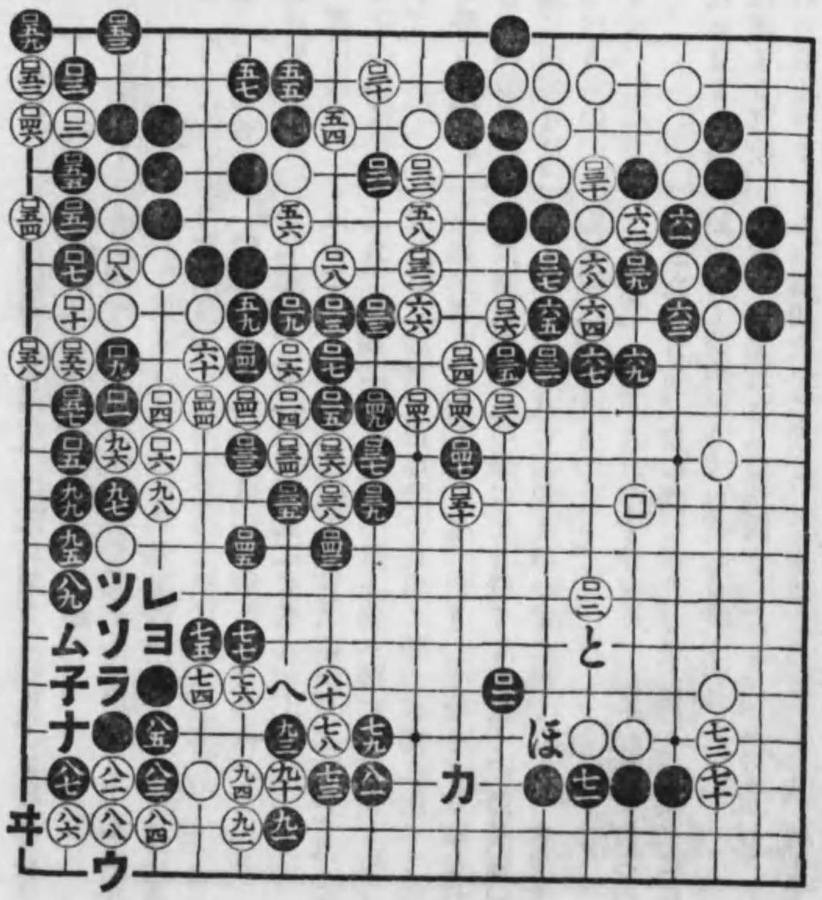
〔總評〕 本局は黒十五を以て白十四の虛を衝き、二三に打ち込めば可なりしを、十五の尋常に出でゝ





幾分白の注文を行きたる趣きなりしが、白亦二十、二二の策戰當を得ず黒をして安然の配置を得せしめたり然るに黒二九と截りたる事惡しく、白之に乘じ、いの當て其他、此處に於ける味を含みて、一著ろに打棄て而して三十に拆く措置に出づれば、面白き局面となるべかりしに白之を失し、後れて三二に事を起すに至りては、白の無理たるは免がれ難く、其五三迄の成積となりたる以往は、大體に於て黒常に優勢を保ち、遂に白百二十の失にて勝敗決したるものなるが、斯局は之を大局上より觀て白一人角力を取りて敗ぶれたるの感あるを觀る。

本局は小岸五段四勝、五回目の局なりしを、岩本三段の之を喰ひ止めたるは多とすべく、小岸五段の之に敗ぶれたるは、遺憾なりし。




百五十九手終

# ▲第六十二局

方圓社長　七段　廣瀨平治郎講評

五月中　中外商業新報

先番　六目勝　瀨越憲作（六段）
先々先　小岸壯二（五段）

▲黒九、斯く頂けるもある型なれど、之は元來場合定石とて、白に十と綽ねられ、黒九の一著は白八、十の二著と爭ふ不利を來たせば、此處に在つては矢張り十一に尖む通型に出づるを穩かとす。

▲白十四は此場合手緩きが上に、自家の勢力範圍を縮少するものなれば面白からず、イと打つ相尖みの型を採り、黒尙十五以下十九までの手順に出でなばロに掛けて上側を厚壯にする意匠に出づべきもの、白之を失して上側面に手掛りを失ひたるは、配石上其罪輕からざるを觀る。

▲白二十如何、此場合に在つては黒を攻め立てる順備としても將又た上側の地域を間接に保護する意味に於ても、二十の拆きは一路緊縮してハに備ふべきもの圖の如くにては隅の黒に響かざるを如何せん。

〔原評〕　黒二一、二三如何あるべき、ニの處に詰めるなど、先づ普通の着眼點なりとす。

▲黒二一、二三は斯くして隅を治め、依りて他日ホに肩を衝いて上側白の地域を侵さんとするの意に出でたるもの、又不可なりとせず。

〔原評〕　白二六二八の出截りは多少無理ならん、いに這ひ、黒二九の時四二に拆くべし。

▲白二六にて二八に張る意匠は穩かにはあれど、黒二九、白四二となる時、黒上側へ等に大模樣を張り來たれば如何、白は勢ひ此黒の勢力範圍に向つて兵を馳せざるべからざる事、白として欲せざる處なれば評者は黒二五の掛けを甘受するる無く、斷然圖の如く二六、二八に出截りの一擧に出でたる、當局者の措置を贊するものなり。

〔原評〕　黒三九は不十分なり、四十に置き白ろの時三九に打ち、白にはに打たせ置くべし、後ににに綽ね行く餘利を存すればなり。

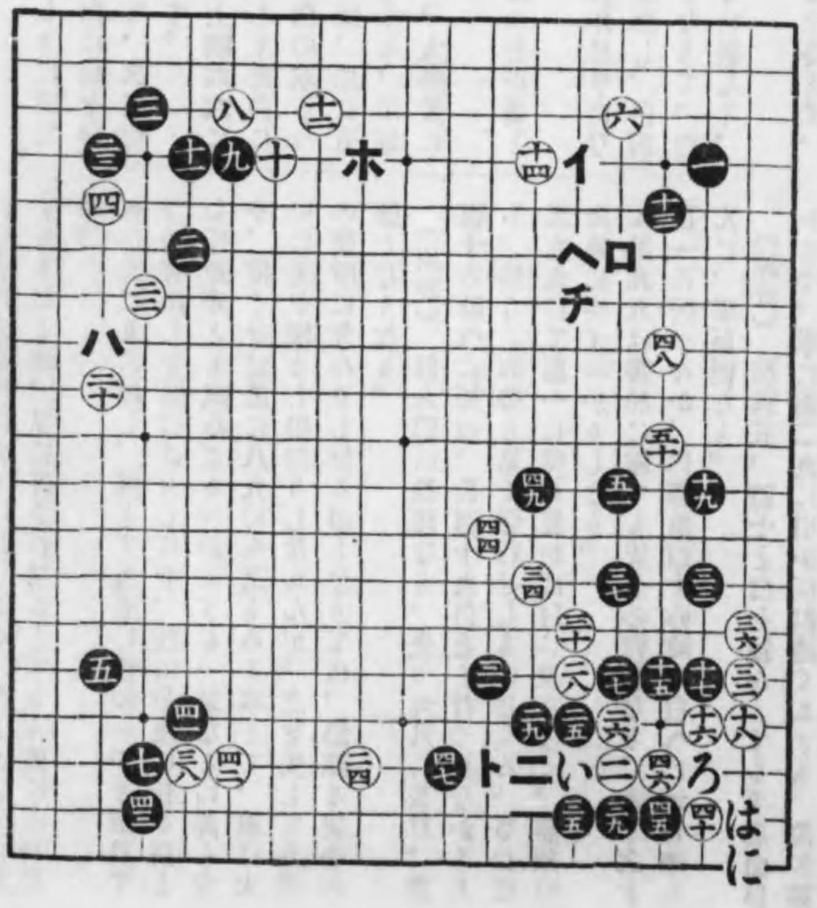
▲然り、黒三九は當然四十に置くべき處なりし。

▲白四四大いに緩く、之を本局の敗因とす、何とてトに打つて迫らざりしにや、反對にも黒に四七と此肝要に先鞭され、此石に安瞑を得せしめては、最初二六、二八に出截りたる行動、全く無意味となりたるにあらずや、思ふに白四四は斯くして黒四七の時、四八に打ち込んで爭はん意匠たりしならんが、斯は之れ大體策戰上の岐路に着眼するものにして、高段者の採らざるところ、觀よ黒に四七と打たれたる時、又爭ふに餘地なき局勢となり居る事を。

〔原評〕　白四八は二八、三十以下の四子に累を及ぼすの嫌ひあり。チに打つを妥當とすべし。

▲白四八は四四の著意を繼ぎたる當然の一著にして、之をトに打つが如きは、假に黒に四八と應せられ居るものとするも、拱手して勝を黒に授くるに止まる形勢たるにあらずや。

〔原評〕　黒五一、五三就れにても手强く五四に押して打たば、黒の形



勢一層佳良なるべし。

▲黒五一を以て五四に押す事は、一見嚴しきに似たれど、白にリに飛び應せられて、下側の白に援を與ふる氣味となれば、圖の如く五一に應じて、ヌ其他此白を攻擊する手段を保留し置くを可とす。

▲白五二は徒らに空地に馳するもの、右上隅六六に迫り黒を攻むるに兼ねて自家を凌ぎ、而して此白に根據を占むる方針に出づべきもの、之れ白の取るべき最後の一策なりしに、之をしも失しては、黒に五三と圖の如く隅を治まり打たれたりとしても、地域に勢力に白遙かに黒に及ばざるものあり、大勢爰に定まりたるを觀る。

▲黒五三、爰に於ては原評五四に押し打つを正著とす。

〔原評〕 黒八九は一旦九十に出で、白ル黒ヲ白ワの時八九に曲り、白ほに伸びればカに突出し、白百二二黒九二と截りて戰へば、白ヨ黒タとなりて、白左りを凌ぐがために、中腹の地境を拓くに暇なく、黒の捌き方、滑らかなるべし。

▲黒八九重くして如何なり、レに頂けるを妥とす、若しそれ之を原評九十に出づるは、黒八九迄の手順となりたる時、ソに押され居るとするも黒に不利なり。

▲白九二甚だ緩し、何とて九五に四の一子を援けてツの突出しを窺はざりしにや、既に非運に在る白として是非とも試みざるべからざる一著なるに非らずや、斯くせば黒に八九の失著もある事とて、或は大いに黒を惱まし得たりしならんが、之を失して九三の要所に先んせしむる事となりては、黒頗る安全の勝となりたり。

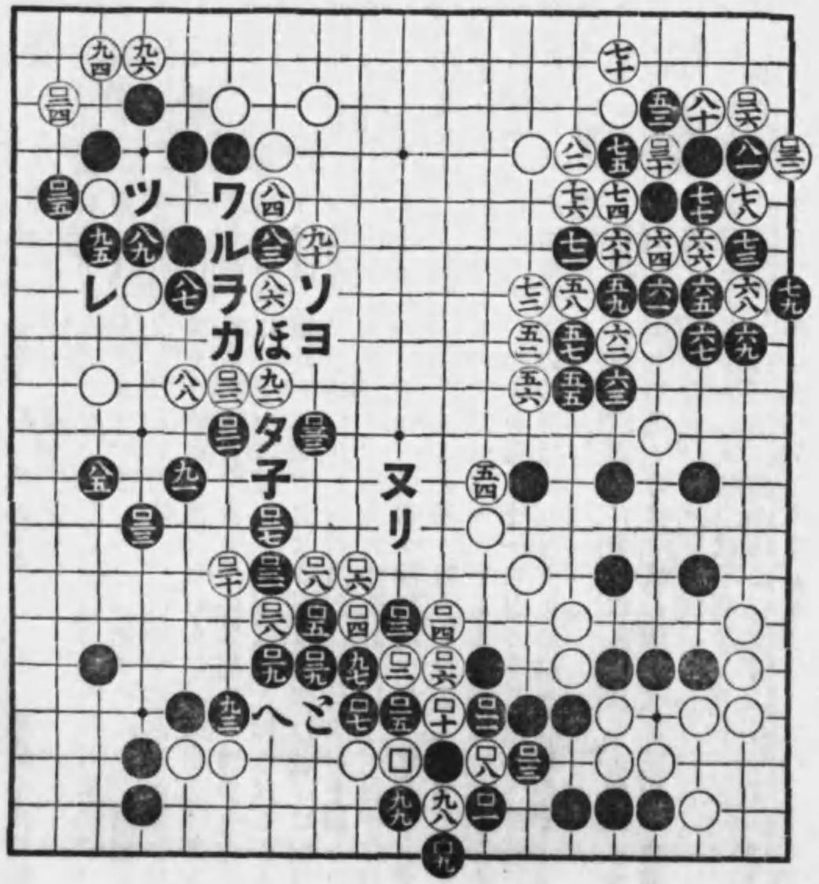
〔原評〕 白九四は無理なり、先づ九八に頂け、黒百十の時へに綽ね、黒百十九白とと打つ外なからんも、恐らく敗勢と見て强行せしものならん。されば黒九九にて百一に受け置かば白に凌ぎなく、勝敗は此時に決すべかりしなり。

▲黒九九は勝局に處する安全の打著なり、若し之を百一に押へんか、白百黒百十の時、白へに刻ね來らんに、事面倒なり。

〔原評〕 黒百五、百七と白を獲んとする手筋面白からず、單に百二九に引かば白逃ぐるとも、黒の勝は鮮少ならざりしに、之が爲め細碁には變じたれども、依然黒の勝たるは、疑ふ所無く、只白百二六にてネに打てば、三四子の敗に止まるべかりしのみ。

▲黒百五、百七は惡し、これは原評百二九に引くを可とし白百二六の一著も亦原評ネに打つを優れりとす。

〔總評〕 本局は白劈頭十四、二十の二著之を配石上より云へば、當を得ざりしも、而も四四の一著にてトに打つて攻勢を採るの擧に出でなば局勢の展開見る可ものありしに、黒に此要點を先鞭せしめて大勢を失ひ次いで五二に方針を誤りたる以往は大體に於て黒の勝勢動かすべからざるものとなりたり。只黒八九の失に乘じ、九二を以て九五に引いて最後の一戰を試みざりしを白の爲めに憾む而已。




㊤㊥の處提㊤二目提　百三十三手以下略

## ▲第六十三局

本因坊秀哉講評

六月中萬朝新聞所載　先一目勝　鈴木爲次郎（六段）　宮坂家二（五段）

〔原評〕 黒九はイに懸れば十一に挾まれるのを忌みたる趣向ながら、十、又はロに高懸りすれば障碍ある事なし。

▲黒九、有る型にはあれど、斯手は元來第二位點たる中側に就くものなれば、等しく此側面に打著するものとすれば、第一位點たる隅側に就くべく此際十と高懸りに出づるを本來とす。されど此配置に在つては、黒九を以て右側十二に拆く手法に出で、白尙ほ十に締らばハに詰め拆きて如何、之を手割上より云ふも、白八を以て十に締り、黒十二と拆く通型となりし時、白はニに詰拆く要著に出でずして、左下隅八に構へ、黒は此際に乘じてハに要點を占めたると同じ結果を收め得れば、少くとも黒幾分を働きたるは疑ふ所なきなり。

〔原評〕 白十を締り、次に十一を狙ふよりは、直に十一に進みて黒の拆點を奪ふべく、黒若しホに飛べば、其時十に所斯を遂ぐべし。

▲白十は正著なり。若し之を原評十一に詰めんに、黒ホ白十となる時、黒にへと封鎖されんか、黒安定を得る配置となると同時に、棋勢狹隘となる傾きを觀るに非ずや。尙は一例を擧げんに、秀甫先生著方圓新報、秀策秀甫（先）両先生の對局に、秀策先生は黒九の手にて十一に打ち、白ト黒九と拆きたる碁あり、「但し斯局と本譜の異なる所は、黒白並びに配置の相違と、手順に於て本譜黒九は斯局の白十四となり居るとの差あり、」秀甫先生講評に曰く、白十二の手は「本譜黒十一」通常十四の處へ打つを善しとす「本譜黒九の處」然るを斯く打ちしは蓋し工夫ありて變化せしものと見へたり、とある、然るに本譜黒九に對して、白十を以て十一に打つを可なりとすれば右秀甫先生の講評は誤りなりとの結論に到着するを奈何。

〔原評〕 白十六は黒に十七に入られて面白からず二二に飛ぶを普通となす、或は四十又は三四の方面に着くも不可なし。

▲然り、白十六の大斜走は不利なり。

〔原評〕 白三二は黒の急に赴す所にあらざれば、暫らく見合せ置くかた含みあり。





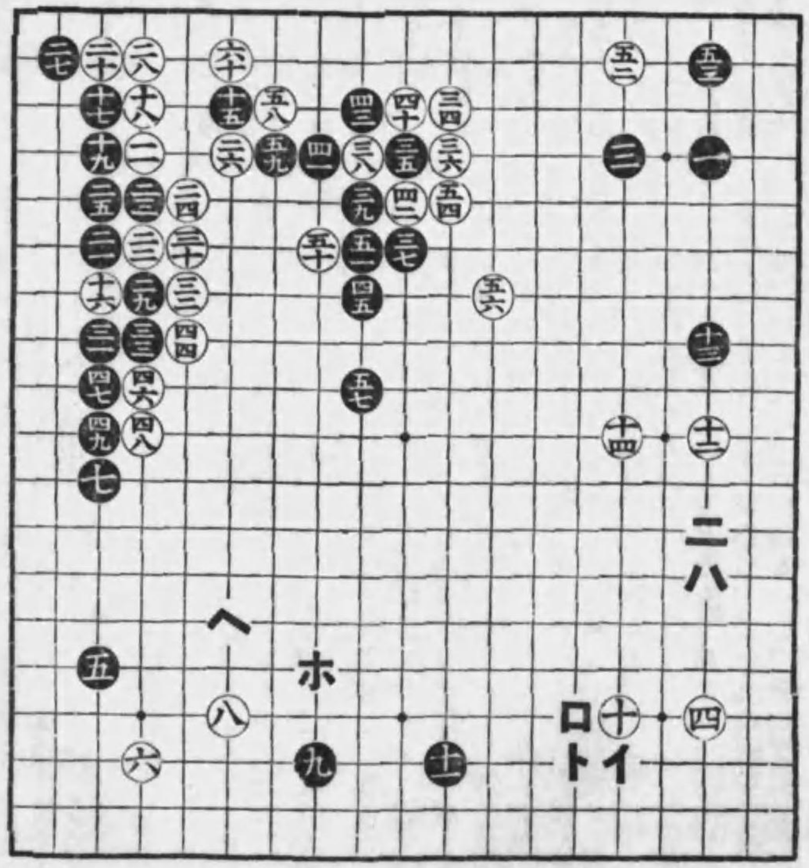
▲白三二の當ては之を打つも不可なく、打たざるも亦可なり。

〔原評〕 黒三七は此場合四二に伸びるべし、十五の一子と種々の交渉を生せん。

▲賛成なり。黒三七は無論四二に伸びざる可からざるもの、其三五の著に於てすら、五九に綽ねて十五の一子を活用したき心地の所なれば、爰に在ては猶更十五の一子とと脈絡を通ずべく、四二の所に伸ぶべきや明らかなる所なり。

〔原評〕 白四十は此の場合四三に下りて黒の一子を封鎖すべし。

▲白四十は常用の手法なれど、此處に於ける爭ひは、一ッに繋つて十五の一子利用せしむるか、然らざるかにあれば、四十を以ては此際四三に下り、十五の一子を圍殺すべきもの然るに白爰に出でずして、尋常四十に應じたるため、黒三七の失著を餘程に良化せしめたること、局勢に及ぼす影響、蓋し尠からざるものありたり。



〔原評〕 黒四五た味惡し、堅く五一に粘ぐるに如かず、

▲然り。

〔原評〕 白四六、四八は劫め含みならんも徒らに黒を固むる俗手なり、打たざるを可とす。

▲賛成なり。

▲黒六一は漫然たる著にて甚だ其意を得ず、之を以ては右上隅七二に尖み込み、白チ黒リ白ヌと交換して、白を攻むるの傍ら、此處八十の打込みを防ぎ、而して中央百八一に我に備ふるに兼ねて、上側の白に攻を含むべきなり。然らば黒の陣容頓に引締るを見ん。

〔原評〕 黒六三は味を伏する好手順なり。

〔原評〕 白六六は散漫とや言はん。同じくはいに尖む方優れり。

▲白六六は勝負所に於ける緩著、蓋し本局の敗因たらん。斯著を以ては右上隅八十に突入し、黒八三に尖まば八四に伸び、黒八五白八八黒八九白九十黒九四となる時、ルに截り、黒百六二白ヲと運ぶべし。此時黒九六ならば九二に當て、黒ワ白カとなりて宜く、又黒九六に押さすしてワにせば、白換つて九六に曲り、九二の割込みと、九一の押へ込みとの兩睨みに出んか、黒立ち所に窮せん、されば黒は白八十の打込みに對して、他に何等かの工夫に出づるの餘儀なきなれば、隨つて局面の展開計り難く、白として頗る面白きものありしに、白方針を錯まりて六六六八に下したる以往は、勝を得ること至難なる局勢たるを覺ゆ。

〔原評〕 黒六九はろに控へるを堅實とす。

▲賛成なり。

〔原評〕 黒七三は百六二に飛び居るを本手とせん

▲然り、黒七三は稍や貪りの感あるもの、百六二に備へ居りて形勢確實なるを、此打過ぎよりして局勢將に混沌たらんとせり。

▲白八二、斯く甘んじて黒八一の突出しに應じたること、平素の當局者として甚だ怠りと云ふべし、何とて此際八五に飛んで隅に迫らざりしにや、斯くせば黒はヨに頂けて凌ぐ位ひの者なるべく、即ち此時八二に渡り、黒タに備へなば、白又右下隅にに備へ居りて未だ大に爭ふに足るものありしに、白再び此好機を逸し、結局して黒に右下隅九七に先鞭せしむることとなりては、最早施すに道なし。

▲白百十六の攻め面白し。

▲黒百十九、百二三の凌ぎ此際手筋なり。

〔原評〕 黒百三五手順惡し、百七九に綽ねてはに引かせ、而して百三五に曲るべし、然らば百三七に頂けて、白の一子を擒にするを得。

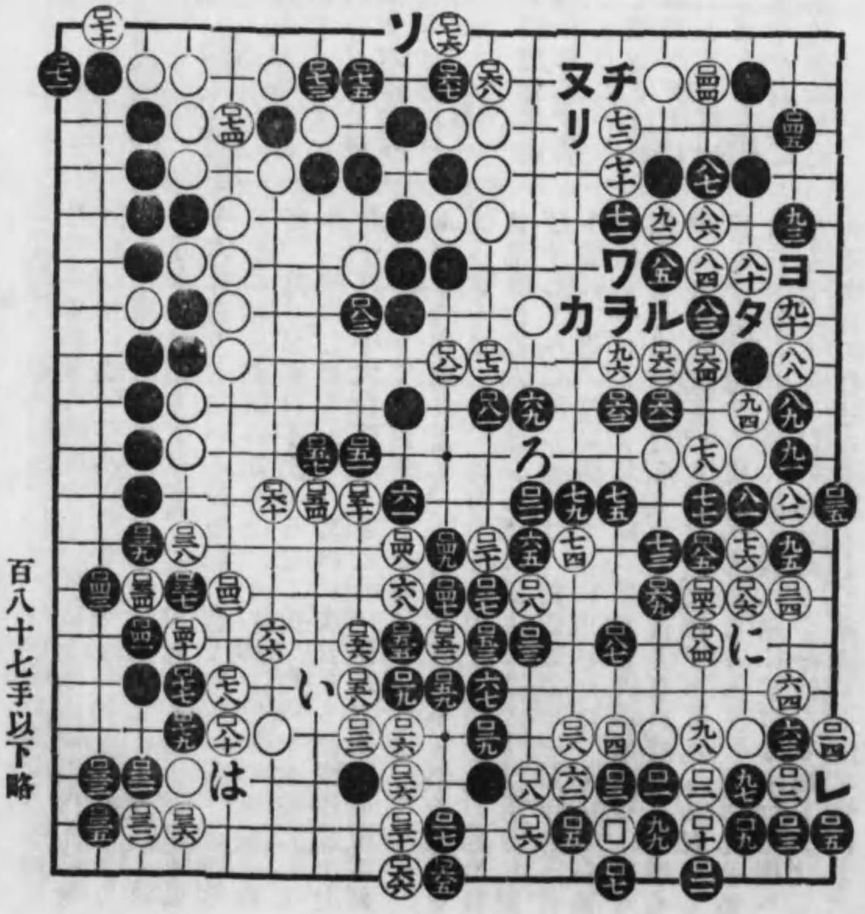




〔原評〕 黒百八一甚だ少なり、レに刺込むか、にに覗くか、兎も角も此白を窘しむるの利を擧ぐべく、又は之を材料としてリに劫爭するも一手段なり、本局の微細に終れるは爰を白に百八四と讓れるに由るなり。

▲然り黒百八一の侵せは甚だ少なりし、或は何等かの思ひ違ひに由るか。

〔總評〕本局は黒三七白四十に互に肝要を失して奇妙なる局勢となりしが、而も黒六一にて七二に尖み込んでリに伸び、而して中央百八一に備へなば堅固なる棋勢なりしに、黒之を誤りで將に碁にならんとせしに、此時に當り白亦六六、六八に方針を誤り黒七三の失に一時勢ひを復せんとせしも、爰に於て八五に攻を打つべきを、八二の受手に出でたために右下隅九七に先鞭せしむるに至りて大勢定りたるを觀る。




百八十七手以下略

# ▲第六十四局

方圓社長　七段　廣瀨平治郎講評

六月中　東京日々新聞所載

一目勝　宮坂家二(五段)
先　岩本薫(三段)

〔原評〕白八をいに締れば、黒直に八の大場を占むること、毎に見る所の布石法なるを以て、故らに變化に出づ、されば黒九は通體と云ふのみ、別に趣向してイに懸らは如何、白ロに受くれば十六に挾み返し、白ハ黒五四と打つ場合至つて佳なるを思ふ。

▲白八、同じく變化に出づるものとすれば、斷然一歩を進めて、之をニに拆きたき心地す。

▲黒九の懸りは普通なり、之をイに懸るは白九黒ホ白いに黒へとなる時、白に左下側十六と拆かれて、黒得る所なし。

▲黒十一は三十、若しくば二六に懸るを普通とすれど、圖の如く隅に備へんとならば、一路控へてトに大桂馬する、知得先生の型を採るを正しとす。圖の如く十一に拆くは、未だチの打込み殘り居る事として氣味面白からず、先師名人秀榮曰く、黒十一白十二の交換は、普通黒面白からずと、蓋し前述チの打込み殘り居るを嫌みたる言なり。

〔原評〕黒十五は右側リの打込みの手段意の如くならざるが故に其効なし、其場合ろに挾み白イに掛ければはに應じ白ハに尖む時十五に押して打つべし

▲黒十五は右側又、又は三四の肩を狙ふものにて不可なるにはあらざれど、若し嚴しきを云へば左下側十六に迫り、白ハの時五四に拆くを唱へん。原評ろに打つは一路緩み居ると、七の拆き三間の狹隘なれば、此時原評白イ黒ハとなる時、白隅を其儘にしてルに桂馬し來らんに、黒ハに掛けるも白四四黒十七白十八黒十六白四一と運ばれ、黒八方手薄の所謂剩り形となりて面白からざるなり。

▲白十六機略に乏し、一著ヲに打込みて黒の應答を試みざる可らず、此時黒ワに飛ばゞ白十七、黒カ白ヨ黒タ白四六と運び右隅に迫りて宜く、又黒ワに飛ばずしてハに掛け來らば、白四四黒十七白十六と打ち爰にて黒、型に依りてレに頂けなば、此手割白圖の如く十六と拆きたる時、黒ハ白四四黒十七と爰を後手にて掛伸びたるものと同樣となれば、こは明らかに白有利なり。されば黒は白ヲの打込みに對して忍んでレに應ずる位ゐのものなるべく、而も此交換は白有利なれば爰に於て假に譜に於ける十六に備へ居るとしても、白の働きたるや分明なる處とす。

▲黒十九の打込み手段として非議する所なけれど、

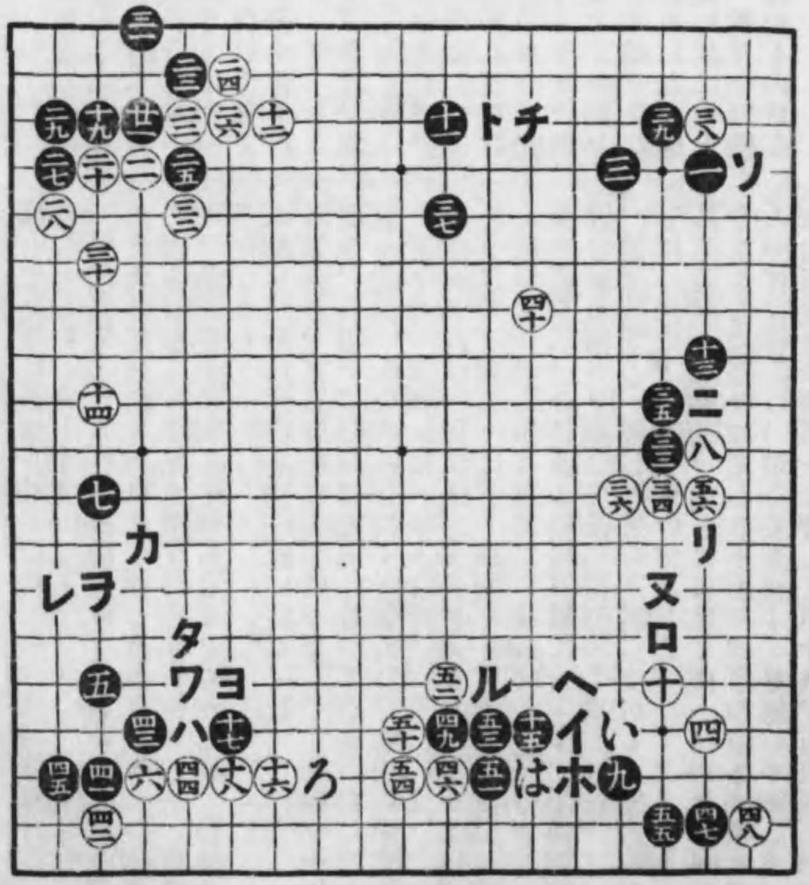




此種秀策式を曲解せる利を射るに至なる手法は、之を部分に於て得る所之を大勢に於て失ふものとなれば、或る機會を除くの外、此策戰に出でざるを可とするもの、その雁金、加藤両氏と藝風を同ふする棋家の、這般作戰に出でゝ失敗に終りたる局面指を樓ふるに暇あらざるを以てしても之を察すべしされば黒十九に打込む意匠は暫らく之を見合せ、前者十七を以て之を五四に備へ、先づ陣脚を固めて、而して徐ろに敵に當る意匠に出づるを尤も穩健なる態度とす

▲白三六の伸びは、雷に損なるのみならず爰に截り殘りては上隅に手段を施す能はざれば、斯著を以ては五六に粘ぐべきもの、後に至りて更に此粘ぎに一著を費したるを思へ。

〔原評〕黒四一より四五迄、時期早し、五六に一子を截り取る事、此場合に於ける肝要の著たり、然る時は白三八の頂けは、ソに綽ねる餘韻を存せす、從つて中央四十の白は無



援孤立の地に立つことゝなるべく、上側の黒境意外に其大を成す所以を思ふべし。

▲黒四一を以て五六に截る事、要點には相違なけれど、斯くては配置一方にのみ偏重するものとなればこの之は矢張り譜に見る、四一以下四五迄の計ひにて、此側面に備ふるを、黒として穩かなる計ひとなす。

〔原評〕 黒五七にて八五に守るか、左なくば六一に至りて六二に引いて無事を計るべし、白に六四と頂けられて以下措置に苦しみ、八六まで全く償ふ所なくして、白を利せしめたり。

▲然り、黒五七を以て八五に守るにあらざれば、六一にありては六二に引き居るを可とす。

▲白七四の截りは、劫爭を輕くする含みはあれど、此際手緩し、上部八五に截り次に七六に劫立して爭ふべし、此時黒九四に劫を打抜んか、白亦八三に打抜きて微細なる局面となるべく、又七六の劫立に應ずるとすれば、黒は劫材に苦しむ事となるなり。「但し白八五に截る時、黒ツならばネに截ること勿論なり。」然るに圖の如く七四と截つて、手輕の劫爭とせしより、劫に於ては、勝を得たれ、ために左上隅の劫立に於て、三目の損失をなし、外部に於ても七九の一著を利かれたる等の損失ありて、折角の劫勝も白にさしたる利益なく終りたる事、聊かもの足らざる感ありたり。

▲黒九三は實利の一著にはあれど、之を以てはナに構へて此處に地域を收め、傍ら白の模樣を消す意匠に出づるを本來とす。

〔原評續き〕 されど棋勢は未だ先著の効を減せず黒九九にて何故に百に先手粘ぎを爲さゞりしか、白に百と打たるゝは殆ど先手の意味あり、百一の突當り、及び百七の尖みを餘儀なくせられしは、幾分の損失なりし。

▲然り、黒九九は是非に百に粘ぐべし。

▲黒百三、百五俗調にして且つ重し、一著百十一に覗き、白百十二の時二百五に打つて中側の白に攻を見せ爰白中腹の模樣を消すと同時に、百七の補充の一著を省く策戰に出づべきなり。

▲白百十八は、只氣味よき手と云ふのみにて緩し、之を以てば百二一に下り居るを肝要とす。

▲續いて白百二四は百三二に桂馬するを可とす。

▲白百三二、今に及んでは其機に當らず、上側百四四の綽ね粘ぎを打つて後、百三四に備ふべし。

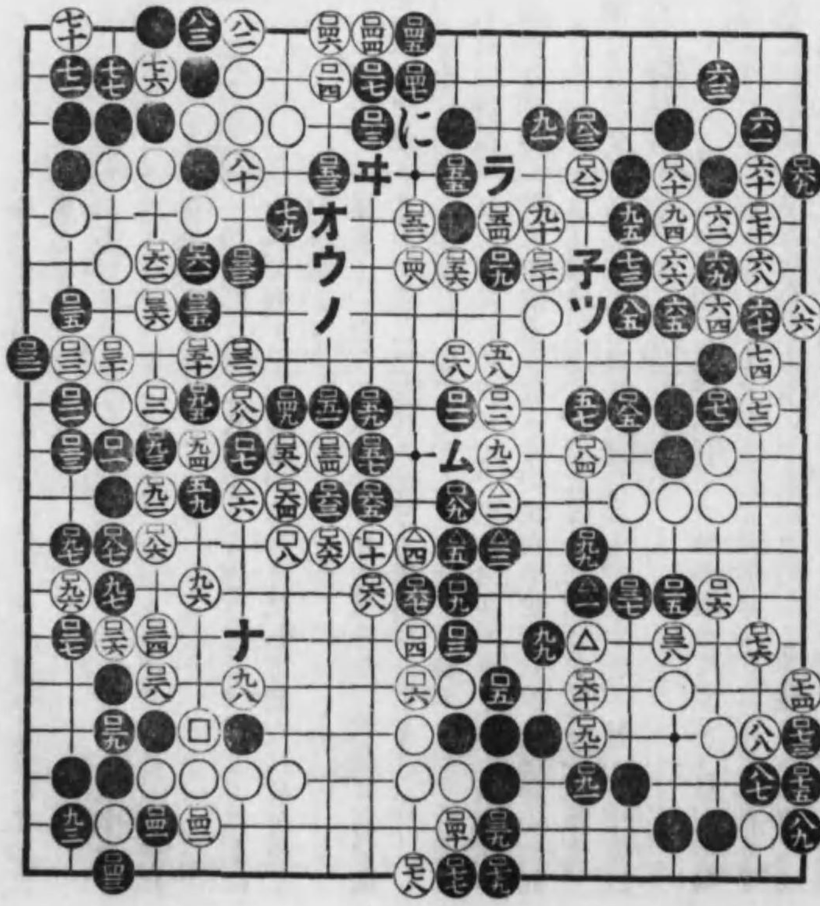
〔原評續き〕 但し收束の末段に及びて、黒百四七をにに打てば現在一目の差あり。

▲黒百四七可なり、之をにに粘ぐは一見利なるが如くなるも、何分味惡しき手とて、ラの覗きの味を睨みて打たれんに、恐らく黒利する處無かるべし。

▲白百五十は百五一に押して百十八、百三四の趣旨を繼ぐを本來とせん。

〔原評續き〕 又百七七に至りてムに打たば百八八の截りを豫防し得て結局黒二目程の勝に結ぶべかりしものを、恐らく白より百九二と劫に提らるゝを思はず單に百九四より打たるゝものと速斷せしにやあるべし

▲黒百七七は、白に百八八と截らるゝも、黒百九四に粘いで中央の黒は上下の孰れにも、連絡あるものと誤認したる失著に依るもの、白に百八八と截らるゝに及んで、始めて上側の連絡は、ウに打つも、井に尖み頂け、次にノに頂け、オに劫を以て連絡を斷たるゝ手段あるを發見し、已む無く百八九に應じたるもの、黒にして此失を無くんば、恐らく負けは無かりしならんに、終局間際に至つて、之に蹉跌して敗れたるは、黒の遺憾察すべきも、而も之を本來より云へば、黒九九に失し次いで百三以下百七迄に策戰を誤りたる以往は白甚だ優勢にして、其勝を危ふしたるは、職として百十八を以て百二一に下らざりしに依る。




百提 百大同 百八同 百四同 百六粘 百九提

二百六手以下略

## ▲第六十五局

七月中
報知新聞所載

六目勝　井上孝平（五段）
先々先　先番　宮坂家二（五段）

本因坊秀哉講評

▲黒九はイに押し、白ロ黒十七となる型に依るを運びに於て利とす譜に於ける型は黒五、七、十七。白六、八の姿勢となりし時黒イに押し、白にロと伸ばしめて先手を得べきに、之を八と下つて後手を引きたる手割となればなり。

〔原評〕 黒十五は十六に懸れば白の好調ならんを慮りたるものか、進莫ハ又はニ、ホの三點を擇びて先づ隅に懸るを布法とはするなり。

▲黒十五如何、之を以てはハに懸るを普通とすれど若し斯隅に懸らざる意匠を採るものとすれば、斯著を以て直に十九に薄り、白十六其他孰れに締るも、十七に尖み、此時白尙十八に拆かばヘに掩擊するを嚴しとす。

△續いて黒十七は運び前後せり、矢張り尋常十九を先きにすべきもの、圖に於ける十七、十八の交換は白に安堵を與ふ。

〔原評〕 白二八と下るも響き乏し、同じくはトに行びて利かすべきも、寧ろ手拔して三十に肩を衝くべき機とす。

▲然り、白二八は些か手緩き感あり、三十に肩を衝くか、或は之を含みて三六に擲べきなり。

〔原評〕 黒二九緩し、上邊チに襲ふべし、白若しリに頂けるとすれば、黒ヌ白ル黒ヲと壓して中腹に强旺の廣勢を得べく、又白の應對に依り兩斷して戰ふも望ましきに、白に三十と打たれては還元せり。

▲黒二九は普通の著なるも、之をチに打つは面白し。

▲白三四、目下は實に大勢の依つて別るゝ肝要の場合とす、然るに白三四の策戰は局部に偏重したる手重き策戰たるもの、此處は姑らく其儘にしてワに煽り、（トの伸びを含みて）依つて中原を經營する大規模の意匠に出づべきなり。

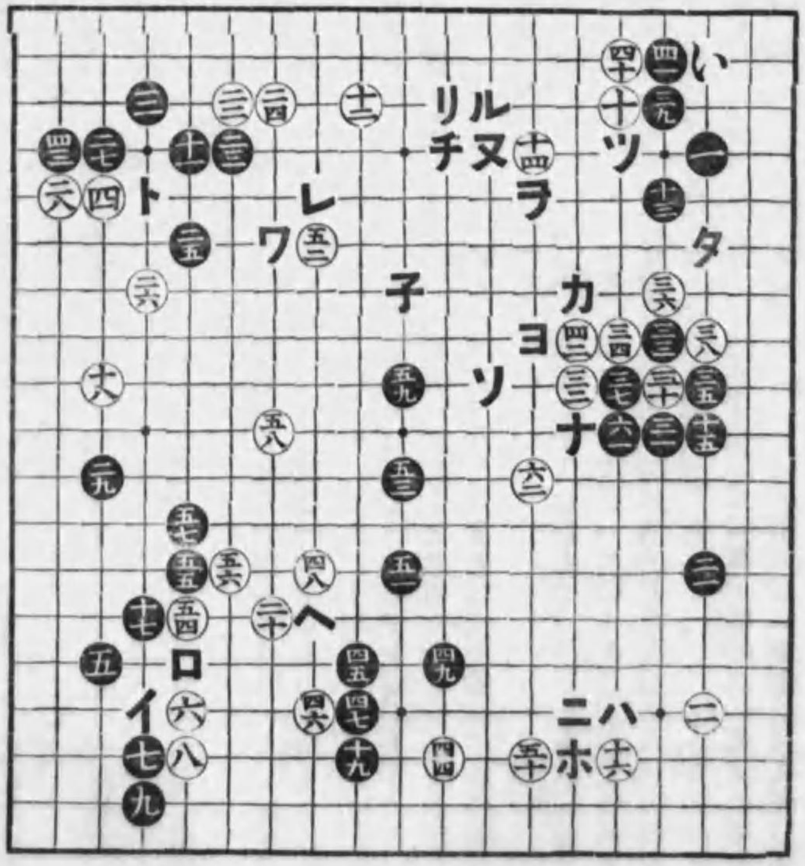
〔原評〕 黒四一亦甚だ緩し、四二に截りて、白劫提、黒六一と粘ぎ、白若しカに綽ねなばヨに伸び、赶すに從ひて飽迄行びるべし。隅は白いに飛込むも、タに尖みて死形なし。

▲然り、黒四一は四二に截るべきもの黒此機を怠りて白三四を善化せしめ、且つ外部の形勢を壯重ならしめたり。

〔原評〕 黒四三少處なり、レに斜飛して白の模樣を消すかた遙に優れり。 ▲賛成なり。

〔原評〕 白六二は反りて黒にソに覗くなどの調子を與ふ。此處殆どダメに近くして、目今强て侵蝕に値せず、ツに行びて、黒にタを讓り、而して未に圍ふなど然るべき策ならん

▲白六二は虛形に近きもの敵に響かず、ナに押して黒の動勢を窺ふべし



〔原評〕 黒六三と退嬰しては白六二に脅威されたるさまなり、百二二に飛出さば白の諸處却つて海し白五二に對する釣合よりするも、百二二に飛行くは至當ならずや。

▲黒六三は中央百二二に飛ぶを普通とす。

〔原評〕 黒七三何事ぞ、爲に白に七四、七六と利せられたり。百四七に尖むべにや論なし。

▲黒七三甚だ惡しく、此失よりして局勢微細の爭ひに移れり。

〔原評〕 黒八三にて一著百十九に截りを入れ置くを手順とす。黒八五も百十九に截れを入れ、百六二に打ちて凌ぐかた可ならん。

▲然り、百十九の截りは之を打ち置くを手順とす。

〔原評〕 黒八七は何等の誤算、之を本局の敗著となす百十九に截らば白に好手段とてなきものを、即ち白八八に刺込むも、黒百三五白八九黒粘ぎとなりて白如何に捌くべきや、兎にも角にも百十九の截りなしに、白に打扳かせしは甚だ惡しく、其結果白九四の頂越を招き、忽ち中石に破綻を生じて、中途覆沒の非境に陷れり。

▲然り、黒八七は敗著なり、さるにても當局者は何を慮りて、百十九の截りを打たざりしにや。

〔原評〕 白九八は貪りたり、百六に尖むを確實となす。

▲然り、九八を以て百六に尖めば、白確かなる中押勝なり。

〔原評〕 白百三八は所謂勝局の怯臆にて、反りて爲に厭味を生せり。百四一に粘ぐかた危悞なきに庶幾し。

▲然り、白百三八は百四一に粘ぐを堅固とす。

▲白百六六の尖みは惡し之は百六七に行び黒ラならば其時百六六にすべく又黒百六六に尖めばムに刎ねて可なり。

〔原評〕 白百七十大に惡しく、是にて作棋に變じたり、百の處に三子を提れば最も安全、或は百八八に二子を貪りても、劫は勝となるを以て中押の棋なりしなり。 ▲然り。

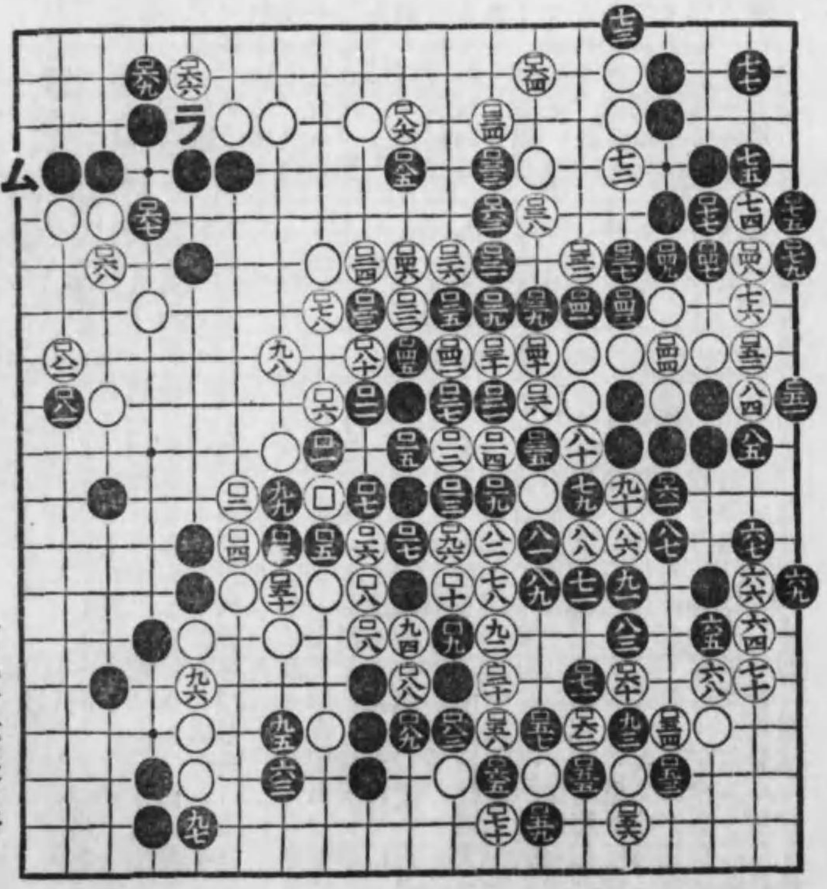
〔總評〕 本局黒三三迄の配置は尋常の布陣たるは之を失はざるも、而も全躰に於て緩漫に亘る嫌ひありたれば、白三四の時に當つて之をワに打ち、中原





を經營する策戰に出なば、白として手廣きものありしに、白之を誤りて形勢を失はんとせしが、黒四一の緩著につぐに四三の失ありて、白の形容大に復せり、されど曩に三四に大躰策戰を誤りたる創憂は容易に療えず、五九迄の形勢黒依然先著の効力を保ち居たり、然るに黒六三に至り俄に臆して損を招き次で七三に失して大に形勢を損じ、局勢既に微細の爭ひとなりたるに當りて八七に肝要百十九の截りを失して勝敗定りたるもの、之を要するに本局黒の敗因は當局者の棋風兎角退嬰に傾くに累せられたるを觀る。

(三六)提(三五)粘(三七)同(三六)三目提(三六)粘(三七)三目提(三六)劫提(三五)同(三七)同、(三二)、(九六)の所へ打込(三五)、(三三)の所(三五)劫提(三六)、(三七)の所(三六)粘



百九十六以下略

# ▲第六十六局

方圓社長　七段　廣瀬平治郎講評

七月中日々新聞所載

中押勝　先　鈴木爲次郎（六段）　宮坂案二（五段）

▲黒五如何、一路右してろに據るべし、獨り白四の星打ちに對しての定手たる而已ならず、斯くせば白いの時黒イ若しくばロと拆き場合、白はいの低き關係上、左上隅の懸りに不便を生ずべく、又白いに懸らずして高く六に懸らば黒い白七黒九白ハ黒ニと實利を占めて、堅固なる配置を得るなれば、黒五は其孰れの點より見るも、ろに據るを優れりとす。

〔原評〕白八と引く事近時の對局に數々行はれ、之が應答は隣隅の情勢と關聯して好個の研究資料たるものなり。若し黒九の手をいに引くとすれば白は暫く十の押へを見合せる便利あり、又九を十ばに突當り、黒いの白ろと打つべく、其時黒穩かにホに伸び切らば、白は九に伸びて突當り、黒いの白は其儘手を拔く場合と、本局の如きは白ハに刎ね黒はの時ニに懸粘ぐ手とあり、び直にへに必ず後者に從ふを以て、場合を得たるものとすべし、若し夫れ黒ホに伸びずして以下種々の變化に刎ねるべき趣きあり。早くも布石を離れて戰爭の狀態に入る。故に本譜黒九と突當り、十一と下りしこと、可否は姑く置き又無事の應答として用ひらるべきものに屬す。

▲黒九緩し、十に押し出し。（二六四頁）參考圖甲の意匠に出づるか或は乙圖に據るべきなり。抑も白の八と引きたる姿は、竹朝が往年岩佐氏と對局の際創めて試みし手段にして、但し岩佐氏の局面左側の形勢は、黒七白六と懸り、黒十五白三黒五とある時、白高く八と押したる碁なりしと記憶す。」以來斯型の流行を見る事となりたるも、未だ本型の利害に就て、確實なる說あらざるを憾みとするも今此機會に於て些か本型の利害を參考圖に據つて述べん。

〔原評〕續き斯くて白は十の曲りにて先手となり上隅十二と工夫の一著を下して、飽迄配布の變化を企てたり。黒十三の尖みも亦黒として滋援を避くるの意に出でたるもの、若し之を十九に桂馬せば、白は十四に頂け、黒二一の時又ほに頂けるの變化に出でんこと、疑ふべからず。黒へ白とと截る。

▲黒十三緩し、十五に頂けるか、十九に桂馬すべし。前者なれば、白十六黒十四白チ黒定型に出つべし。前者なれば、白は一路低き地リ白十七黒二二と運ぶべし。斯なれば、此際白そ十三黒に點に於て、高目定石を行ふも、黒十九白ヌ黒ほ白ル黒二四白ヲぐらひになるも、黒更に憂ふ突出して來るもの、黒十六白十三黒ヌ白カ黒リ白ヨ黒ラとなり居なが押れる所、無き姿なり。又十三を以て之を見るも、後者十九の桂馬に依ふへて宜く、四黒二一白ほを以てなれば、黒十五白チ黒へと白十七と換へなば、黒十五白十七と惡しからざるなり之を要するに一著優勢にして居る事は白に易々十四に飛ばしむる事は





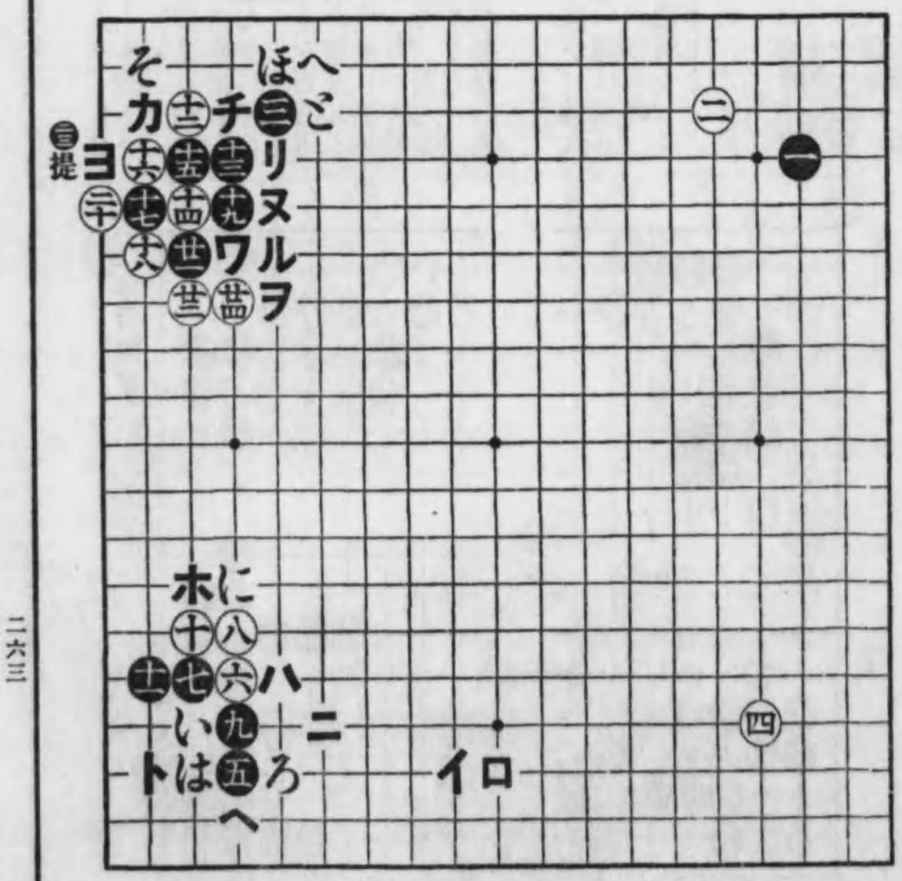
評者の欲せざる所なり。

〔原評續き〕然るに黒十七と截りしは打過ぎにて爲に二四迄黒の方面白からざる形なり。單に十九に押し、白二一黒二九白二四の時三一に綽ね、白ちに伸びれば引續き三二に押す事寧ろ黒の欲する所なれば、白卽ちを三二の綽ねに代へなれば一著りに截り白十七に粘ぐ時三四に伸び、白にちに粘がせて百三三に挾まば可なり。

▲黒十七の截りは姿なるが如くにして此際非なり、之に比しては十九に押す原評に據るを可とすれども白二一黒二九の時白は今一著二二に行び黒二四に赶す時ちと四筋に擡頭し來れば之亦黒面白からざるなり去れば黒十七を以ては之を二九に掛け、白二一なれば黒二四白二二黒ち白タ黒レと運び、爰の押込みと百三二の詰との兩睨みに出ず可きなり。

〔原評〕黒二五、惡しく目下不急の著といふべしぬに尖みて百三三の挾みとるの懸りとを含まば要領を得るに庶幾からん、尙講究を要す。

▲黒二五、斯くして白に二六と拆かせては甚だ面白からず、百三二に挾む百を以て百



三三若しくは**リ**と烈しく挾み打つもあらんが、要は爰に先鞭するを目下の急務とす。黒之をしも錯まりて大いに棋勢を損せり。

〔原評續き〕次に黒三九の押しは本局破綻の始めなり、此手にて單に劫を提るべし。次に白**を**黒**わ**と白劫を提るも、黒は靜かに百五三などに頂けて差支なき處ならずや。されど黒一旦四一と刎ねて以上は、如何に成行くとも、四三の劫提りを百五五に掛け、白**か**黒**よ**白**た**黒四六白四四黒**れ**白百五三と打たざるべからず、斯くて黒劫を提り、白**そ**に懸結がば四五に截り、又**つ**に截り、白**ち**黒**ね**となつて結局隅は劫の攻合となり、尙ほ外側**な**に出で、白**ら**黒**む**と打つ筋ありて、黒必ずしも不利ならざりし。譜の如く四六と二子を征に取られては、棋勢既に黒を去れるに似たり。

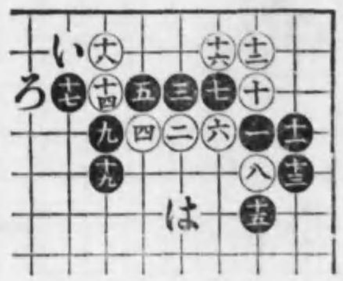
▲賛成なり。

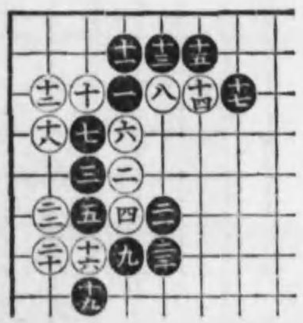
〔原評續き〕其の六九に至りては**う**に飛び、白八五黒**ゐ**白九十の時、**の**に打つて下邊の黒に補はざるべからざるに、又復白より七十に先鞭を着けられ、此黒兩眼に活くるの結果、上側百三一と強行したるも、時既に勝負の爭ひに至るべくもあらざりき。

▲然り、黒六九は中側の黒を補ふべきもの、之を失しては勝敗決せり。

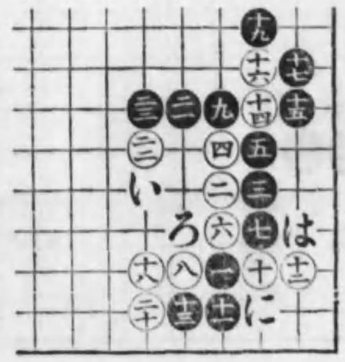
參考圖甲　本隅黒十九迄の變化、黒三子は之を失ひたれ、外側の極り如何にも好ければ斯くてもなられず、但し黒十五を以て十八に綽ね、白十七黒**い**乙圖に依るも不可ならず共に場合に依る。

乙圖　黒十五以下二一迄強硬なる手段にして斯く振



丙




乙

丁

參考圖甲

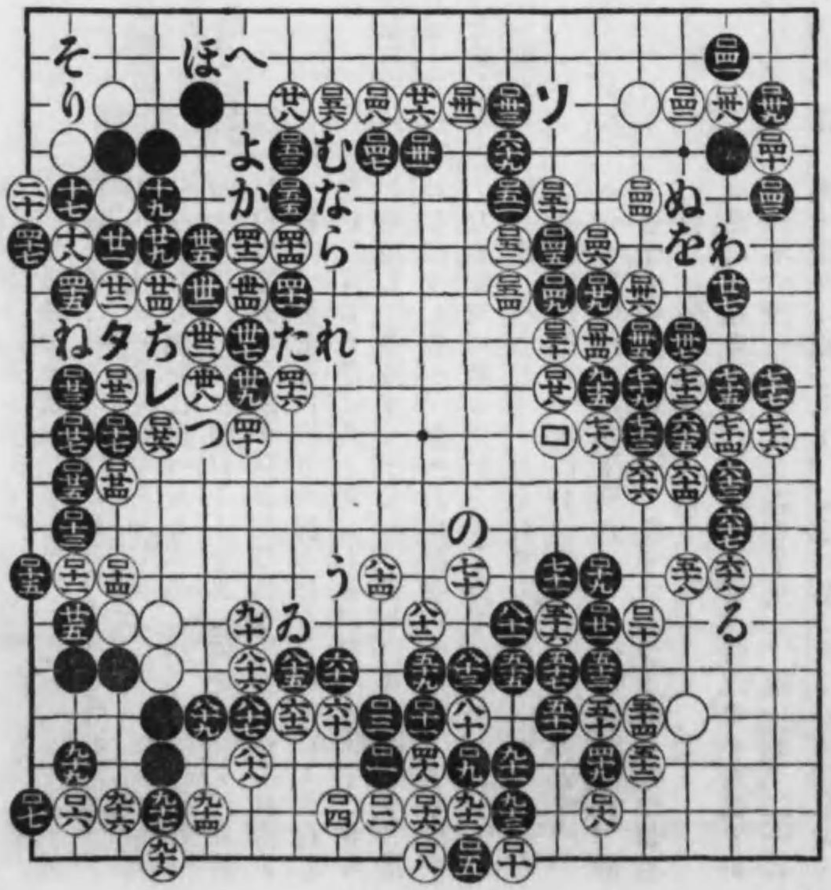




替り打つも亦惡しからず、尙白二四を手拔すれば、**い**に頂け白**ろ**黒**は**白**に**と利かせて他に轉ずべし。

丙圖　本型は鈴木小岸兩氏の打棋に出たる姿にして第十九局に本型は伏魔殿あり、他日秘密の鍵を示すべし、黒二三迄斯くと掲げたるものなり、黒惡しかるべからざる姿なれど、只之を甲圖に比べて外側の締め、幾分緩みとす。

丁圖　黒十五、十九は所謂秘密の鍵なり、斯くなりては白**い**に打てば黒**ろ**に打つて白に手段なく、又白**い**を黒**は**にするも同じく**ろ**に頂け、白**に**黒**ほ**白**へ**黒**い**白**と**黒**ち**白十九黒**り**となりて、之は白潰れとなるなり、之を要するに本圖は白十四と伸びたるに白は、黒に十五、十九の鬼手ありて白施すに策なし。




三提㊀提㊁同㊄同㊅同

## ▲第六十七局

方圓社長　廣瀬平治郎講評

八月中　萬朝報所載　　先五目勝　小野田千代太郎（四段）　小杉丁（二段）

〔原評〕　黑五及び七の三拆を用ひるには左右方向を變じてイに打ち、白三二黑ロと打つを普通とすべし、是れ此勢に於ては八に入る位置の低きを忌むが爲なり。但し別案として、ハに打ち白三二の時直に八に入るも面白からん。

▲贊成なり黑五はイに據り、而してロに拆くを普通とす但しロの拆きを以て右下隅八に入るも亦可なり

〔原評續き〕　されば白八は寧ろ十二の方に締るべき理ならずや。

▲然り白八は之を十二に締るべし。黑は八に入るの外無く、白は爰に三樣の策あり、卽ちニに頂け、黑ホ白ヘ黑ト白チ黑リ白ヌ黑ル白ヲ黑二三白チと打つて、黑の全形を低位に就かしむる意匠に出づるか又は始めチに截る手をワに截り、黑カ白チ黑ヨ白ヲと打ち黑七の一著を白の堅きに向つて拆きたるものと化せしむる趣向に出づるも亦惡しからず尙ほ他の一策として、白ニに頂ける手をヌに斜走し黑タ白レ黑ソ白ツ黑カ白ネ黑ナ白ニ黑ワ白ラ黑ム白ウ黑井白ノと打ち、黑七を裾空きの拆きならしめて打も面白し孰れにするも黑に八と懸らしめ、黑七の低きに在るを利用して手段すべきなり、但し白ヌの時黑トに頂けなばヲに押へ、黑ヘ白オ黑ク白ヤ黑二三白リ黑チとなる時マに曲り、此三子を棄てゝ外勢を占むる策戰に出づべきなり、但し白マの時黑若しケに伸びなば隅側ツに頂け、次にレに當て込むを肝要とす。

▲白十二の頂けは左下隅六の一子位置低ければ、此場合十七の並びに換へ、黑十六白フと飛び打つ舊型に據るを是とす。

▲黑二一は普通コに飛ぶべきを、白六の一著低きが故にエの押へ緊切ならざるを見て、圖の如く二一に曲り爰を手拔きして、二三に拆きたるは着眼佳なり

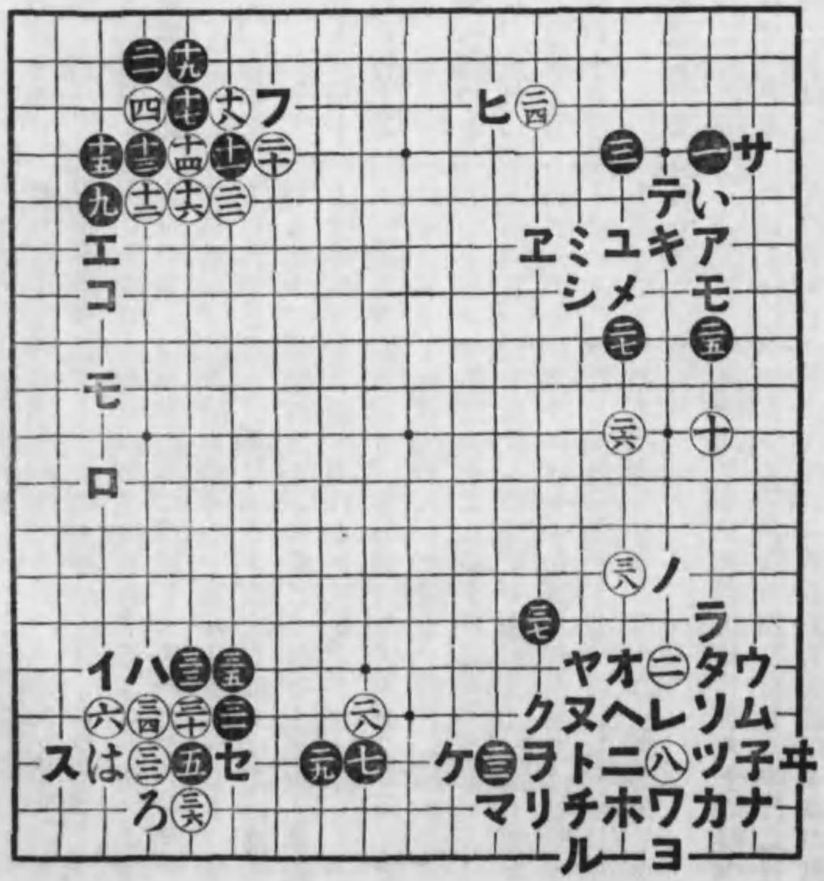




〔原評〕　白二四緩し、此場合いに頂け、黑テ白ア黑サ白キと曲り、黑ユ白メ黑ミの時シと押し、黑エの伸びを餘儀なくせしめ、而してヒに打つを働きとすべし。

▲白二四、斯くして黑二五の詰拆きと交換するは白裾明きにてもあり旁た面白からず、反對にモに詰拆き此時黑ヒに據らば左下隅ハに尖み黑コ白モと拆き詰めて徐ろに爭ふべし、原評いと頂ける型は一見働ける手段の如くなれど形を極り附けるものとて、多くの場合有利ならざるなり。

〔原評〕　白二八、三十の趣向面白からず、二八にて三十に頂け黑三一の時セに截るべし、黑はろに尖むの外好形はあらざるべく、白依りて三二に當て、黑三六の時三三に伸び、黑はに當つればスに刎ね、黑三四白ハに打ちて結局エに約へる意味に行



くべし。

▲白二八、三十の趣向如何、前著二六の趣旨を承けて百二三に頂け、黒八三に伸びなばイに飛び構へて陣形を張るべし。二八を以て三十に頂けるは原評の如くなるものとするも、左側の構へ餘りに廣きに過ぐれば、恐らく白の期待に反かん。

〔原評〕 黒三九緩し、六十に桂馬すべし、白ニに打たばホに打込むべし。 ▲賛成なり。

〔原評〕 白四十より四六迄大勢に遲れたり、四十にて八二に飛び、黒同じく四一に打てばニに打ち置くべし。

▲白四十着眼少なり、之を以ては六四に約へ打つを緊要とす、但し此時黒左下隅四五に打てば、夫れに付け入つて四九に迫り、黒の模様を消して自家の形容を張る意匠に出づべきなり、若し夫れ白四十を以て八二に飛ぶが如きは黒に響かず。

▲白四二、四四は却つて前著四十の著意を滅す、元來四十の著は黒の地域を侵略するものと謂はんより寧ろ黒よりの打込みを凌ぐ意を重しとすれば、此處は既に四十の一著にて事足れり、されば四二を以ては當然左下隅ニに打ち、而して黒の大模様を未前に消磨する策戰に出づべし、白更に之を失して黒に四五の好點に據らしめては大勢漸く白に非なり。

▲白四六は好點には相違なけれど要するに部分の著なり、兎に角左中腹口に進展し、黒の大模様を消すと同時に、上側自家の形容を盛んにすべきなり、然るに白之を怠り、黒に四七と據らしめては黒の模様益々擴大重厚を加ふると同時に、白の上側漸く手薄く大勢益々非を加へ來れるを觀る。

▲白四八著眼を誤る、前著四六を活用せしむべく爰の疵を狙つて一著先づ八一に侵し、黒若しハに受け應じをば、次で左側五二に侵す可なり。

▲黒六五、六七は徒らに味を失ふもの之を以てはニに尖み白ホに應ずれば七十に圍ひ打つ意匠に出づべく或は全然中腹を放棄して右上隅ヘに尖み頂け、白ト黒百二と綽ねて手廣く形勢を占め打つも亦惡しからず。

〔原評〕 白九十損なり、九二に約へ黒九十の時ヘに粘ぐべし、然る時は黒と白百四黒百七の時白は百九の下りと、及び八九の一子を先手に截取するの利

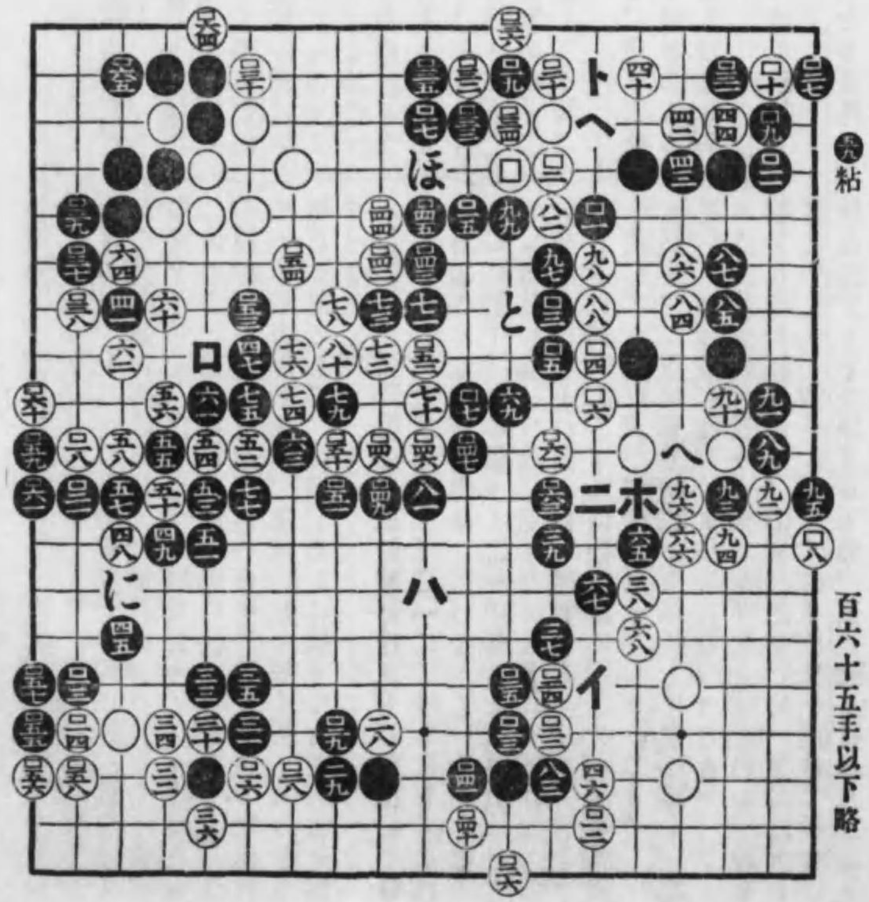




得ありて、細碁に終るべかりしが、此以外に於ては双方收束に過誤あるを認めず。結局五子の差は黒手堅き勝算なりしなり。

▲白九十は當に來らんとする中腹の爭ひを氣構へたる著なりしが、而も圖の如く百七迄の成行となりて白の謀と挫折し終れり。

〔總評〕 本局は大體に於て白策戰を誤り、其黒四七と打つに及んで、既に大勢定まりたるの觀あり、然るに爰に於て白更に四八に方針の面白からざるものあり、黒全勝に歸すべかりしに、六五、六七、六九の三著退嬰に傾き、爲に却つて深く七十に侵され、次で八二の要點に據られ、以下の接仗黒將に危からんとせしが爰に於て奮鬪宜く凌ぎ、遂に五子の勝を收めしは、宜く終りを完ふせしものと云ふべきなり。



# ▲第六十八局

入月中
報知新聞所載

先番　六目勝　雁金準一（六段）
先相先　瀬越憲作（六段）

## 本因坊秀哉講評

▲白十二と正著に出でたるは、低く構へて備へを固め徐々に進んで碁を細かに打ち、而して敵の隙に乘ぜんとする所謂剰して打つ策戰に出でたるもの元より評すべきに限りにあらざれど、普通は之を以て一路高くイに發展して構へ打つを白としての態度とす

〔原評〕黒十三は堅きに過ぎるの嫌ひあり放任していに懸り打つも此處白格別の趣向ありとも覺えず十四の締りを與へるは廣局の誘因なるを思ふべし。

▲黒十三はいに懸るを普通とす、されど圖の如く打つて、右側全體を厚壯ならしむるも亦決して不可なるにあらず。

▲黒十五、由來此三間挾みの型は緩めり、然るに此際之を採りたるは要なきに趣向を弄する傾きあるもの卒直ロに二間挾みを以て迫り、白ハならばとに拆くを通體とす。

〔原評〕黒二一は甚だ長縮の觀あり、ニに三拆するに何等顧慮あるべからず。

▲黒二一、特に進展を控へて堅固に構へたるは此際佳著なり、之をニに拆くは一見働きの如けれど、斯くてはとの打込みを始めとして、爰に種々の缺點を存すれば、白は直に此虚を衝いてロに押へ込み來らんに此處甚だ不味となり、畢竟更に一著を爰に費す事態を生ぜん、之を要するに黒二一と控へ拆きたるに依つて、白はロの要點を黒に讓りたるなり、『二五の原評參照』尚ほ此上側の形勢に就て明治の棋聖村瀬秀甫著方圓新報に、黒圖の如く狹く拆きたるを意味ある著として、推稱しあるに依りても其利害を察すべきなり。

〔原評〕黒二五は十三の轍を趁ふもの手拔してロに曲るべし、元來此曲りは二一にて打ちたき所なれど其場合にては白必然ホに頂けるべく、黒ろ白はとなるに於て、への截りと二一の拆きとを兩睨みせらるゝが故に忍びて茲に至りたるものにて既に二一の拆著生じたる上は白は他に應對を求めざるべからず若しトに約へるとすれば後にはの覗きを利かず利便を伏して三一に飛び打ちて惡しからざるなり。

▲然り、二五は部分に就くものにして且つ緩し、之を以ては原評に據りて大勢を占むべきなり。

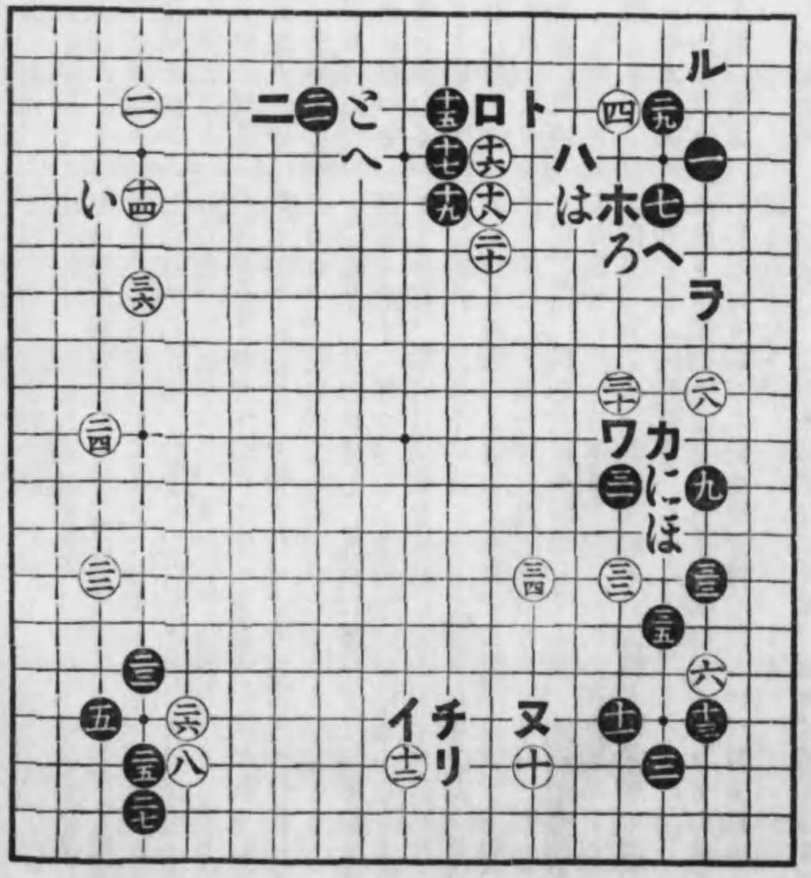
▲黒二九如何、三一に飛ぶを手順とす、白の手段を制する利あればなり、而も白三十の時、黒は二九を打たずして下側チに衝き、白リ黒ヌを頂けて形容に壯んにするを主張するもの、圖の如きは黒三三迄となるものとするも、黒三三、三五と屈して白に三二、三四の二勢力を中原に加へしめたる委た、棋勢を廣漠ならしむるの趣きを呈すればなり。

『ほの覗き其他此處に味殘りあり旁た』若し夫れ右上隅の事は、白ルに走り來るもヲに應じ居りて、些の憂うる處無きなり。

〔原評〕白三十は尙深く推敲を要す、ワに斜逼しては如何黒若し三一に頂けれはにに綿込み黒ほ白カとなりて白頗る振はん、二九と尖み頂けて三一と飛ぶ姿勢はさらでだに黒の期望する所なるに無爲三十と飛びては特に之を誘成したるさまなり。

▲白三十は黒前著二九にて三一に飛ぶ手順を怠りたるに乘じ、何等か手段を施すべきもの、原評ワに桂馬するなど面白からん。

〔原評〕白三六の秋は當に趣向を案ずべき機會にして、凡想凡着を以てしては遂に機先を制する能はず、評者を以て之に臨ましむれば、輕騎をへに馳せて應答を挑み、黒となれ



ばちに曲り黒り白三七黒黒五七白五九黒五四白五六と掛けて打つべく、又黒六一なれば、五二に綽ね、黒五三白四七と綽ねて打つべく、要は三六と一著を費すことなしに、權奇に依りて同じ効果を獲んとするに在り、何れにしても殊策なかるべからざるなり

▲白三六は劈頭十二以來の方針に依り飽迄碁を細かに爭はん意匠に出でたるもの亦良策たるを失はざるも、而も此際部分を主とする著に出ては大勢に遲るゝの憾みなしとせず、斯著を以ては三七に煽りて中央全體に勢威を加へて且つ左側に備へ、一方右側の事はぬに頂けて封鎖する機會を窺ひ打つ意匠に出づるを手廣しとせん尙ほ原評白三六を以てへに打つとあるは黒にとに應ぜられ、此交換徒らに黒を固むるの失著となれば此時白ちに曲るも黒に六八と顧みて他を云はれんに白五四邊に虛勢を張るもヨに肩を衝かれて地域を保つべくもあらず、結局剩り形となりて收拾に苦しむに至らん、要するに白へ黒とと交換するが如きは棋家の所謂損より先きにするもの作り手なるものにて多く失敗に終るの策戰とす。

〔原評〕 白四四は少所に似たり、中原を爭ふの意味に於て五九に打ち『五九は五五、又は五四の誤りならん』、黒かに飛び出さば六一に逆行して黒の薄味を狙ふに如かず。

▲白四四は雷に好所なるのみならず、黒の薄味を狙ふものにて可なり。強いて左側に地域を求めんとするは、自から右側全體に累を及ぼせばなり。

▲黒四五、四七は用心に過ぎて却つて疵を求め依りて一時形勢を損せり、『敵に勢力を加へしむるが故に』上側の事は姑らく之を放任して左中腹四八に綽ねの攻勢に出で、白タに二段綽ねせば九八若しくばレに截つて打つべく、又白レに伸びなばイに頂け、白チ黒リと打つて白に迫るべきなり、次で四七は味惡しくして非なり、爰を打つとすれば五四に備へるにあれど、爰に於ても尙四八に綽ねるを是とす。

〔原評〕 白四八惡し、九六に懸粘ぎて黒を盤らせ而して五十に打つべし、此處遂に譜の如くなるものとすれば、四八は同効を異點に求め得るを以てなり

▲白四八、黒四七の虛に乘じて原評の手段出でなば形勢頗る有望なる者ありしに、白斯の見易き著點に出でずして一度大事を逸したり。

〔原評〕 黒四九は少所にして不急、此際緊要の爭點は五十に在りて存す、見よ白に之を先據せられたる結果、五二以下の先手締めに遭ひて、甚だ中腹を旺勢ならしめたるを。

▲然り、黒四九は當然五十に飛び備ふべきもの直ちに勝敗にも關する此要點を逸したるは、双方怠りと云ふべきなり。

〔原評〕 白六十は要なき蛇足、反りて打たざるに





味あり。

▲賛成なり

〔原評〕 白六二にて策戰を誤り之より敗運を惹けるぞ是非なき、ぬに頂けて上下の連繫を固め、黒かに飛び出さば八二に突當るべく、然らば黒中々に樂觀を許さゝるなり。

▲然り、白六二は自家の薄味に顧みずして黒の勢圏裡に馳せたるもの若し之を原評ぬの頂けに換へなば前途甚だ多望なるものありしに、此一著を失しに敗勢に傾きたるは遺憾なり

〔原評〕 白六八より七四迄惡し、單に七六に應ずべし、同じく八三迄の結果に成るにしても、眼形の脅威に危惧あるを奈何。

▲賛成なり

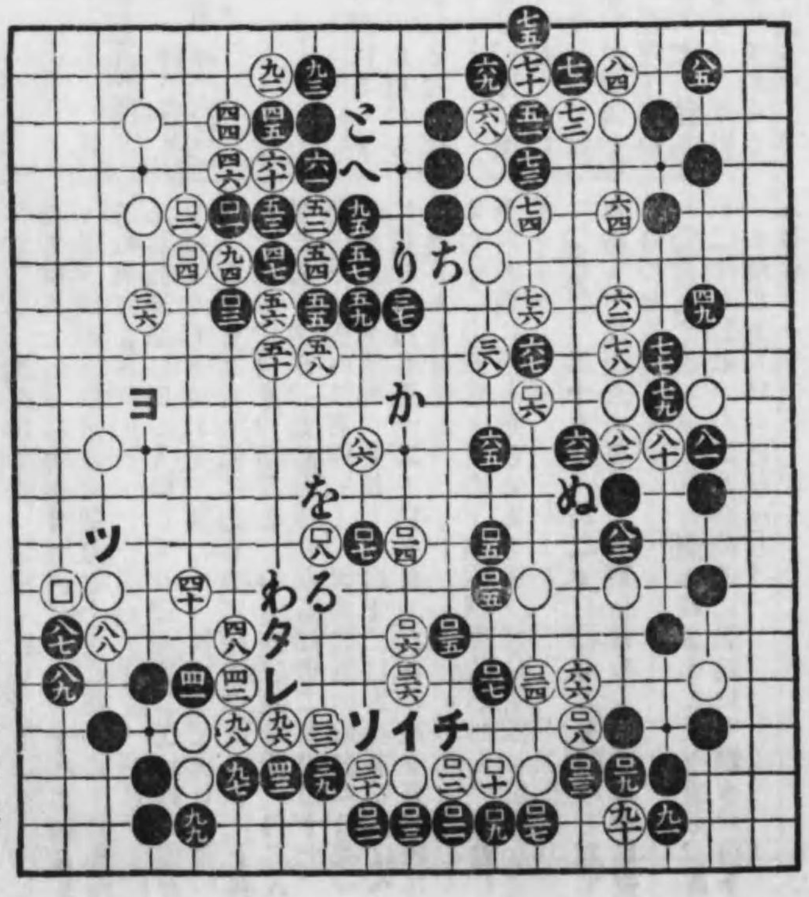
▲黒九三は左側百に出で、白九三ならばツに綽ねて振替るべし。

〔原評〕 白百六に至りては敢然上石を放棄して、百十四に圍ふにあらざれば細微を期し難し、黒上石を屠らんとするは容易の業にあらず。

▲然り、白百六は兎に角百十四に圍つて爭はざる可らず。

〔原評〕 百九はるに綽ね白をに引けば百二五に斜侵すべく、次にわに伸び出せば白境頗る退縮して勝形更に加はることゝならん。

▲然り。




百二十七手以下略

## ▲第六十九局

方圓社長　廣瀨平治郎講評

九月中　東京日々新聞所載

中押勝　先番　岩佐銈（六段）　先々先　高部道平（六段）

〔原評〕　黑五と打ち置いて七に入るの理はあらず單に七に入りて可ならずや、其時假に白いに頂けるとせば、左下隅の着點は却つて六の處適當となればなり。

▲黑五、次に七に入らんとする意匠ならば、イに據り、白に十六に懸らせ、爰を低からしめて後、七に入るを通躰とし、既に五と據りたる以上七を以ては右下隅三一に懸り、白七黑八となるを通常の配置とす、但し白七と締らずして八に挾まば、黑左上隅いに打込むを法とす、若し夫れ五を以て原評七に懸るは、白いに頂けくるればイに據る事尤も宜く、又は之を五に打ちて可なれど、白は黑七に對して恐らくいの頂けに出で、ずして左下隅ロの星に據るべく、然る時は廣濶なる局勢を齎らさん。

〔原評〕　黑九にて先づ二三に打ち、白二九に應じたる時九と打つに若かず、白に十六、十八と煽らるゝ事、白の三間挾みの効力を十全に發揮せしむる所以なればなり。

▲黑九斯型に出るものとすれば一著二三に打つ原評に據るを可とすれど。斯くても尙ほ型に泥む守勢の趣きを脫せざるものゝ此形勢に在りては之を左下隅ハに掛け、白イ、黑二七、白十八、黑二三、白二八黑二五と運び、此時白十六ならば黑二九、白十七、黑三一と懸りて打つべく、又黑二五の時白ニに飛べば敢然左上隅ホに突擊し、白十三に尖み應ずればへに頂け、白り黑十二と粘ぎ打つ攻勢に出る方潑溂たる趣きあるを想ふ。

▲白十二の懸粘ぎば左下隅戰鬪經過として、目前に形容重復に陷る憂ひあるもの、單に十四に粘ぐを當然とす。

〔原評〕　黑十九は一路二十に控ゆるを無事と爲す

▲然り、黑十九は要なきに事を挑むもの、二十に控へ打つを正しとす。

〔原評續き〕　其二五の捌きに至りては形重し、直に二七に綽ね、白二八の時ろに懸粘いで働き、白トの時二九に約へ込むべし。

▲贊成なり。





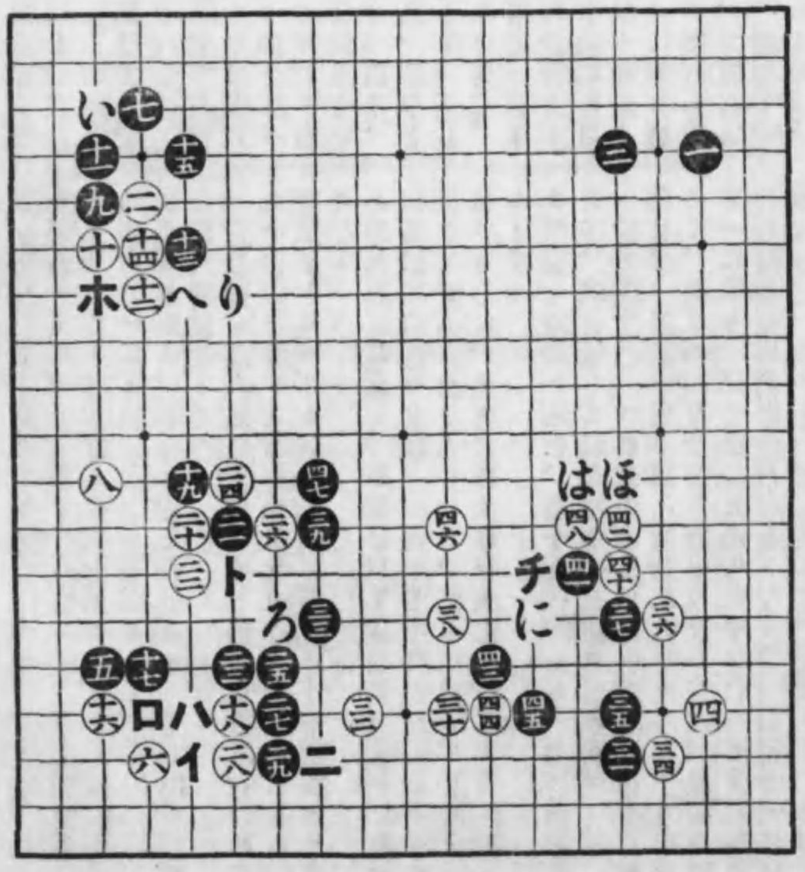
〔原評〕　黑三一の懸りは高く三五に代ふるを場合に於て安全の位置とせん。

▲黑三一の懸りは手重し、高く三五に懸らば輕くして捌きに便なり。

〔原評〕　黑四三、四五以下此狹區に活を求めしは退嬰に過ぎたり。尙ほ一著四八に押すの要あり。假に白四六黑四七と交換するとして、白はに綽ねし時、にに懸粘ぐ方白にほの疵を殘すの働きあり、況や白四六に飛びし時、黑必ずしも四七に應ざるの意味さへ存するものを、圖の如く白に四八と曲られし事、大勢に關する事甚だ大にして、本局の布置概して白の方有望の趣きあり。

▲黑四三は四八に押すを當然とすれど、斯著に出づる事も亦別樣の趣き存せり。

▲黑四五惡し、之を以て何故にの懸粘ぎに代へざりしにや。然らば四三の覗き爰に働きて、黑攻勢となるを得べかりしに、輕々四五に應せしため、爰に前著意を減して、兩著倶に



惡化し、惹いて大に形勢を損したり。

▲白四六大に緩く、爲に戰機を逸す、此際嚴しく四八に曲付け、黑チなれば其時四六に飛ぶべし、然らば黑左右の所置に惱まん。

▲白五六の覗きは筋違ひなり、反對に內部リより覗き、黑五七に粘ぐ時右中腹八二に約へ打つべし。

▲黑五七の粘ぎ手順前後せり、之を百三に當て白百二と交換したる後爰に粘ぐべし、斯くても白は五八に打つの外無く、依つて黑百十二に綽の一擊を加へて白に又と引せ、而して後右側五九に拆く可し。圖に比べて遙かに働らけるにあらずや。尙ほ黑五七を百三に綽ねし時白五七に截らば百一に提り、白リ、黑ロ、白ル、黑六四、白ヲ、黑イ、白九九、黑ワと締附けて後、百三三に飛び凌ぐを尤も可とす。但し黑其他の手段に出づるも、カの利き手もあり旁た、此黑絕えて死形ある事なし初學者の爲に婆心一言す

▲白六十、由來此種割打棄ての手法は他に急務ある際應急策として採るべきもの、然るに次著六二に目下攻めの利かざる大石に向つて、空矢を放つ外無き現狀として、六十の一著に出たるは明らかに割打棄ての用法を誤るもの、六十にありてはヨに割打ちの手法に出で、黑タなれば八六に拆くべく、又黑右方レに詰めなば白は左方百十四に據るべく、而して中央大石の事は、自然攻擊的の策戰に出づべきなり。

然るに白之を誤り、黑に六一、六三に地歩を占めらるゝに及れで、俄然形勢を失墜せり。

▲黑八一大に惡し、斯くては當に前二著意味を爲さゞる而已ならず、徒らに白を固めて累を右方に招くもの、八一にては之をソに當付るべし、白は八二に防ぐの外無く、依りて百三四に截つて活に就けば黑の勝勢歴然たり。

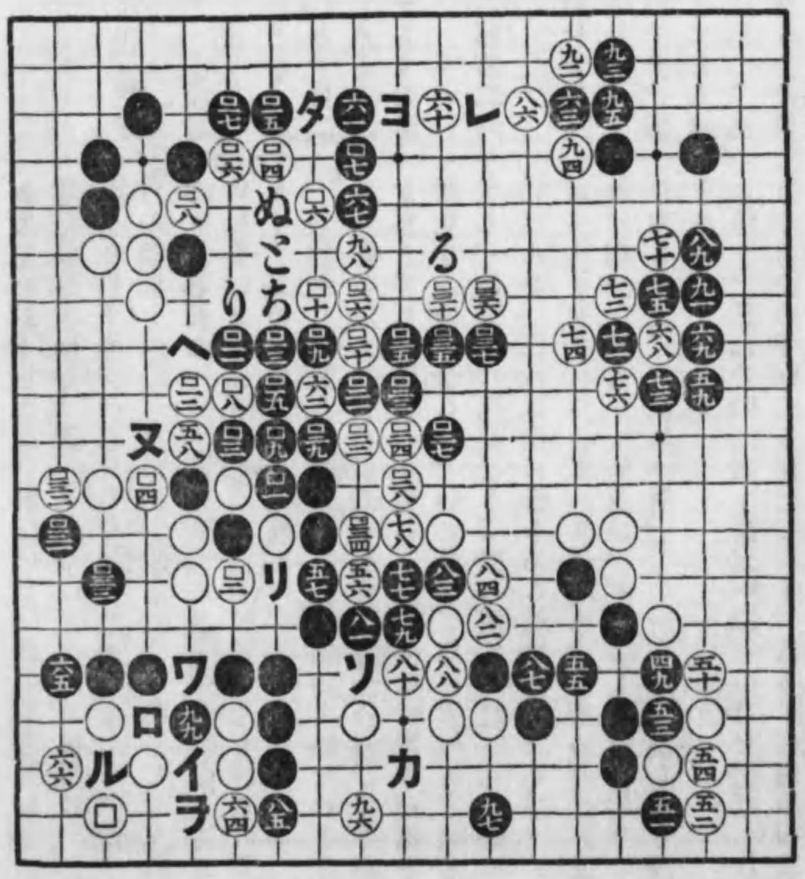
〔原評〕 黑八五は輕忽なり、白に九六と打たれて九七の活を要する事を豫量せば、大石危地に在るの時眼形を具へざるの地點に冗著を下すの理無きや萬々なり。

▲黑八五甚だ惡し、斯著を以ては左側百三一に馳せ白百三二に押へなば、一轉して中央百三四に一子を拔きて大石の活を保つべし、然らば黑未だ勝勢を失はざりしに、黑更に此大事を失して頓に形勢一變せんとす。

▲黑百七緩著を極む、百十九に綽ねるべきや言を待たず、之を失しては最早本來黑勝算無けん。

〔原評續き〕 されば白百八に至りて單に百十に懸粘げば、黑百十三と出し時百二九に先手を下す事を得て、次にへに打つて大石を攻むる時は、黑勢ひ百二一に截り、以下百二五迄の先手を打ちて爰に黑と白ち黑リ白ぬ黑百十八白るとなりて、黑百十一に接續すれば、百十五に破らるべく、此他何れの手段に據るも、大石何等の犧牲を拂はずしては活に就くこと能はず、當然黑の敗局なりしものを、最終白一著の誤りにて大魚を逸したるは、寧ろ餘りに呆氣なかりし。

▲然り、白百八は輕卒、一著にして大事を逸せり若し之を單に原評百十に懸粘ぎ備へなば、例へ黑に好妙なる凌ぎ發見さるゝとするも、黑勝を得る事恐らく難かりしならんに白最終にして之を失し、努力を水泡に歸せしめたるは遺憾なり。




百三十七手終

## ▲第七十局

本因坊秀哉講評

九月中
報知新聞所載

先　二目勝　雁金準一（六段）
加藤信（五段）

〔原評〕 黒二三は新意なるやを知らざれども、到底賛し難き鈍着なり。兎に角イに綽ね行き、白二四に飛べば二六に行びて打つべし。白に二八と尖み頂けの手順を與へては、劈頭先づ勢を損せるもの鮮からず。

▲然り、黒二三は不可なり、イに綽ね白二四黒二六の正手に據るべし。

▲黒二五惡し、之を以ては二一の著意を繼いで二九に伸びるを肝要とす。然らば白はロに並ぶの外無く黒由りてハに煽り塞いで、形容可なるに非ずや、而も此時假に圖に於ける二五の著に出づるとするも、黒二九白ロの交換は是非に必要とする處なるに、黒此要著を失し、白に二六に刎ねしむるに及んで、黒頓に氣勢を失ひたるを覺ゆ。

▲黒三一以下三七迄、愚集の姿を敢へてしたるもの着眼拙俗を極む。三一を以ては左上隅ニに掛け、白ホ黒ヘ白ト黒チ白三八黒リ白ヌ黒ルと運んで、先づ白の模樣を消し、此時白三四ならば一轉して右上隅ヲに挾み迫るべきもの、然らば先著の効力偉大なる尙ほ勢ひを失はざりしに、黒更に此大事を誤るに至りて、大勢既に非なるを觀る。

〔原評〕 白三八と綽ねる事は快は卽ち快なれども此形勢に於ては尙ほ推敲を要す、三九に伸びて中腹を厚うするは評者の主張にして、依つて黒の進出を封塞するのみならず。いに覗きてワに出づる意味も生じ、此際甚だ緊要なる爭點に屬す。白にして之に從はんか、三八は他に働きある着點を見出し得べく延て天下を制するも敢へて難からじ、然るを黒に三九、四一と打たるゝに及び、其勢著しく還元緩和されたるを見て、更に一着適否の得喪絶大なる感を深うせり。

▲然り、三九の點は獨り黒三一以下の志を遂げしむるや否やの爭點たる而已ならず、依りて右側黒四三の進出を制する意味に於て、爰に一著の差あるを思



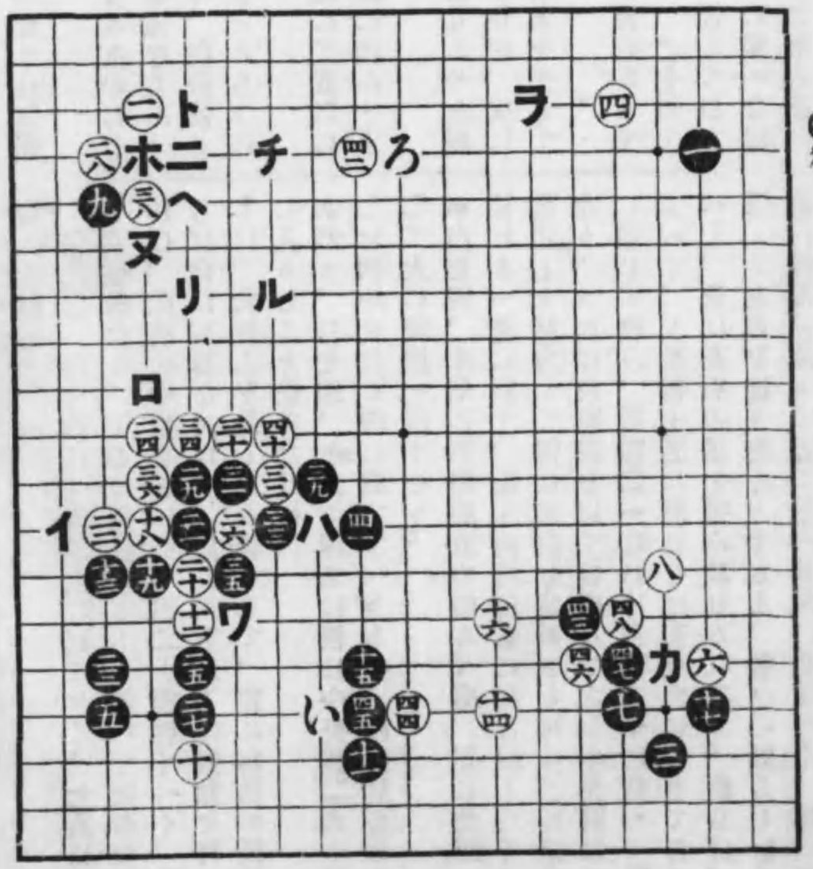


ふと同時に三九の伸びに依つて全く中央の勢ひを制し得る事に想到せば斯著は實に本局に於ける天王山にして、黒之に據るを得て、大に形勢を復せり。

〔原評〕 白四二、同じくはろに抱擁を廣くすべき所なれども、畢竟緩急を誤れりと謂ふべく、カに伸びて十四、十六の二子を整ふるの急務なるは、當然黒三九、四一の影響ならずんばあらず。黒に四三と襲撃せられて、此二子の危殆を惹きし事、又形勢の消長に關せり。

▲然り、同じく上面を經營するとなれば、白四二は原評ろに據る事見易き地點とすれど、而も下邊を放任し置くは到底無理たるを免がれざるもの、白之を誤り黒をして更に勢ひを加へしめたり。

〔原評〕 白四四、四六の手段急に



して非なり。單に六十に飛ぶを輕しとなす、百四四に頂けるなどの味ある所なれば、四四の如きは留保せざるべからず。

▲白四四、四六の手段は損より先きにするものにして且つ無理なり、六十に飛び打つなど普通ならん。實は六十に飛ぶ事も所謂氣のなき著とて、白の欲せざる所ろ勿論なれど、さりとて他に良著もあらざれば姑らく之に就くの外なからん。

〔原評〕 黑四九、五一俗筋なり、四九にて五二に伸び、白五七の時はに打つべし、白中腹に出んとすれば、自ら絡みの形を誘はん。

▲黑四九、五一大に惡しく何等かの誤算なるやを疑はしむるもの、斯著を以ては當然五二に伸び、次にはに迫るべきなり。然るに黑易々たる斯著を失して形勢更に一變せり。

▲黑七三は所謂空を衝くものにして甚だ面白からず中側面の攻は姑らく來るべき機會に讓り、之を以て右上隅八六に備へて先づ自からを持し、而して白左中腹を圍へば上側に突擊すべく、白上側に備へなば左中腹を侵し、兼ねて中側の弱石を狙ふ策戰に出づ可し、今日黑の頽勢を支ふるは、只此策戰を採る一途ある而已。

〔原評〕 白七四にて百二六に赶すべく、七八にても其機會たり。下石は手拔するとも絕へて死形なければ、此間に中腹を壯にして四二と對應すべく、然らば尙ほ勝算を失はず。黑に八五以下の侵蝕を與へしは、此押しを逸したる罪にして、玆に細棋の狀態に入りしこそ是非なけれ。

▲然り、白七四、七八の兩者は俱に中央百二六の押しを利かせたる後に於てすべきもの、白此肝要を失して大に戰機を緩うせり。

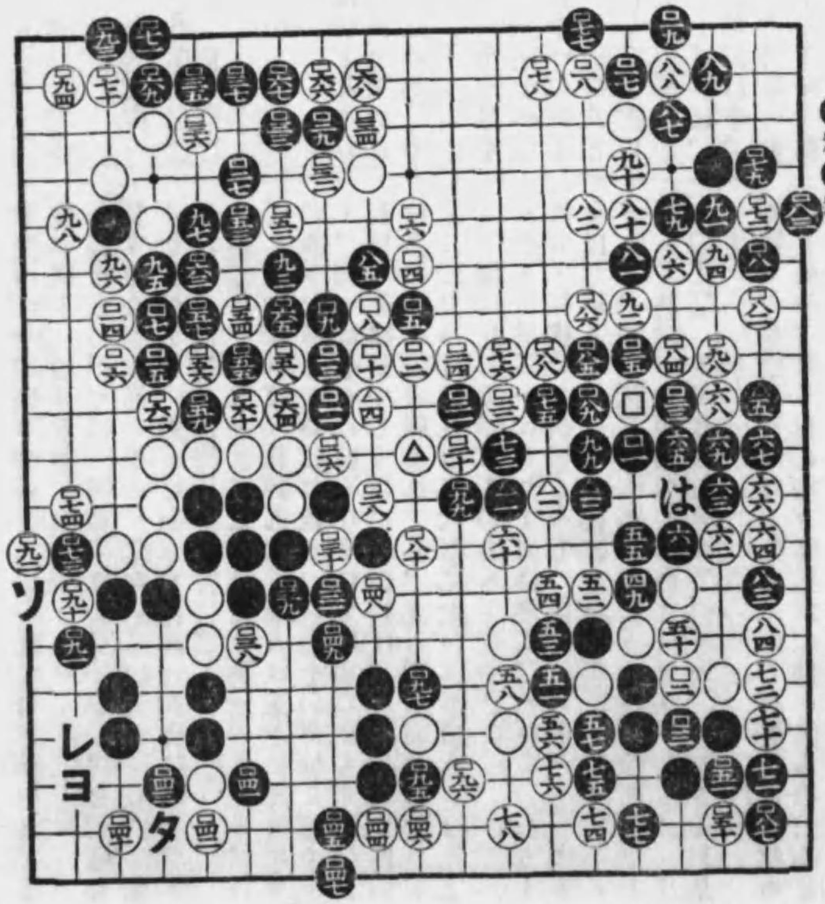
▲白百四、本局の形勢勝敗の岐るゝ處、正に此際に於ける一著に存す、而も尙ほ勝形に在る白としては是非とも努力して爰に其勝を定めざる可らざる機會なり。されば白百四を以ては進んで之を中央百二二に頂けて挑み、黑百二一なれば白百二十に截つて戰ふべく、又黑百七五に綽ねなば百七六に引きて打つべし、要は左右の黑を搦み攻むるに在り。然らば、黑よく左右を凌ぎ得るとするも、勢ひの然らしむる處、外境は依りて悉く白の地域に化すべく、勝敗亦





此一擧に決す可かりしに、白却つて退嬰百四、百六の著に出でしため、黑に百七、百十七等隨處に要點に先んぜられ、而も之に比例して白地域を加ふるもの無きに反し、黑は百十七の打拔きに依りて、右中側の黑を安堵せしめたる勢ひ爰に至りて微細ながら、白勝を得ること至難なる局面たるを觀る。但し古上隅百七二の綽ねは慮りを缺くもの、之を左下隅百七三に下らば、此隅ヨに尖み黑タ白レとなりて活あれば、黑は百九十に應ずるの外無く、白依りてソの綽ね粘ぎを了して、始めて百七二に綽ね打てば、爰に二目の差あり、恐らく勝敗不明ならん。

〔原評〕 白百二六はチに圍ふ手段もありて幾分優る處あるやを思はしむる如けれど、其結果又甚だ錯雜にして俄に斷ず可らず。 ▲然り、




五六粘 ⊗粘

二百五手以下略

# ▲第七十一局

十月中 報知新聞所載

中押勝 先 鈴木爲次郎（六段） 加藤信（五段）

## 本因坊秀哉講評

▲黒十一、白十と引く竹朝式は近來の流行となり毎局此型を見ざる無きの樣、蓋し未だ其利害を審かにせざるに因るならん、而して白十に對し圖の如く十一に押す事普通とする處なれど、此場合に在りては穩當とせず、之を以ては十二に突張り、白十一黒イに應酬し、此時白下側五三等に拆かば左上隅七一に懸り打つ配置に依るべし、而して此際黒十一の押すの穩當ならざる所以は、左下隅黒五の一子は白八との交換に位置低きに在るは第一の不利にして、次に右上隅黒七白四と交換し居る事は、爰接仗の結果として、黒七の一著重復の形容に陷るにあとざれば、白四の著に一ッ利かされたる姿となるを免がれず、之れ第二の不利とする處にして、前後の形勢斯の如きに當つて、本隅に戰ふは黒到底利勢無きもの、而も黒爰に顧みず强硬に十一の伸を敢へてしたるため果然白に十二以下十八迄の型に出られ、黒頓みに手段の廣きに窮せるやを觀る。

▲黒十九の頂けは一種の手段として觀る可も、而も贊す可らざる筋のもの、之を以ては矢張り五六に曲るを當然とす、然らば黒未だ此處の所置に窮せざりしなり。「以下の變化は別圖に掲ぐ」

〔原評〕 黒二一は二二に綽ねる手段もありて、白若し五六なれば「原評五六とあるは五七に突き出すの誤りならん」ロに打拔き、白五七の時他に轉ずべく、例へば七一に懸るなどにて黒惡しからず、白又振替りを欲せずしてロに行びれば、黒二一白二四の時黒に種々の策戰あれども、尤も判じ易きに從ひて黒二三白ハ黒二五白二六黒二七白ニ黒二九となりても、圖に比して優るものあるを覺ゆ。

▲然り、黒二一にあつては斷然二二に當て、白五七黒ロと打拔いて振替るべし、斯くても黒三子の犧牲を出し居る事、一子の打拔きを以て償ふべきにあらざれど、圖に比しては確に優れり、然るに黒復之を失して前途の歩趨漸やく難色を呈せり。

〔厚評〕 黒三三は蛇足にて損なり、打たざるを是とす。

▲然り、黒之を押したるため、ホと小鬢に迫る攻め手を失ひ、惹て白に右下隅五六に押へ込みの安心を與へたり。





〔原評〕 黒四一は四六に打込むの間隙を存す。四八に飛ぶに如かず。

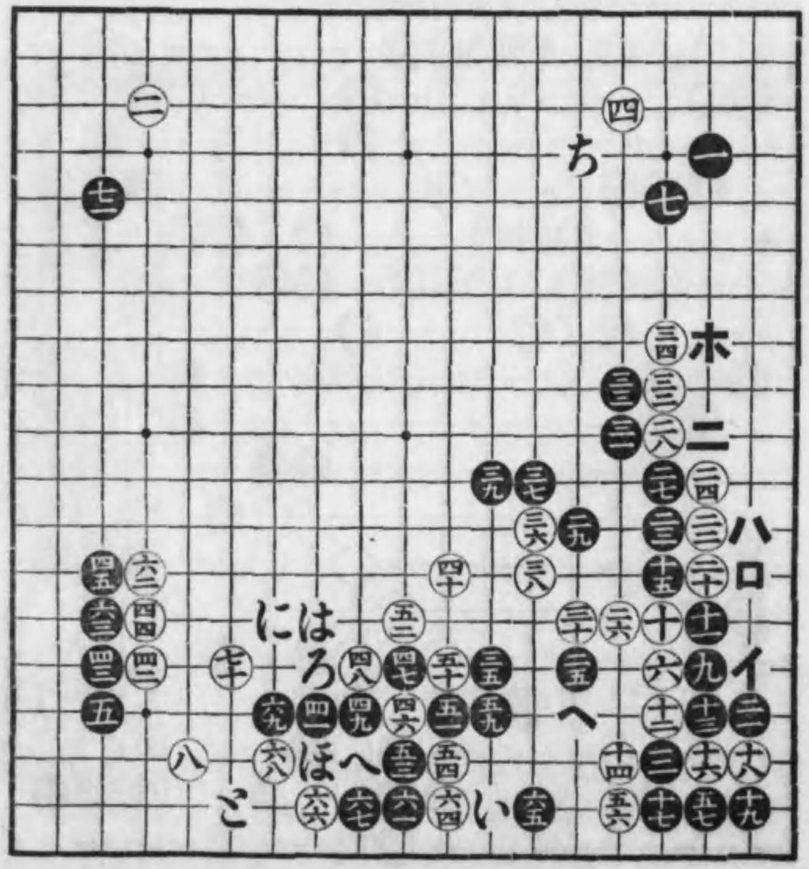
▲賛成なり。

▲白六四は考慮の一著ならんも、而も現在に手損なり、姑く之を保留して單に六六に走り黒ほなれば六八に刎ね、此時黒ろに押すも强くはに刎押へんか、黒殆ど應手に窮せしなり。

〔原評〕 黒六五大に惡し、無論いに頂けざる可らず、然らば白六六に襲來するも、黒六七白六八黒ろ白は黒にと綽ね行くを得べきに、六五の弛みより、白に七十と完全に封塞せられ、中石遽に大脅威を受けて、茲に傾覆の端を開けり、但し右手順中白六八を若しほに換へれば、黒へ白に黒六九白と黒へと活きて、中腹間隙の餘味多し。

▲然り、黒六五は無論いに頂けべきもの、然るに圖の如く應じたるため白六四の一著を餘程に良化せしめ、再び形勢頓挫せり。

〔原評〕 黒七一は此際ちに掛けて中石の連衡を保つを要す、白の中腹




五五トル 五八同 六七ツグ

甚だ厚壯を致したればなり。

▲然り、黒七一は右上隅ちに掛けざる可らず、黒目下の急務たる之を措いて左上隅七一に馳せ、白に七四と先鞭せらるゝに及んで、黒の形勢殆ど塞迫せるを覺ゆ。

▲黒七七、大に手緩るく敗著たるに近し、兎に角七八に伸びて爭はざるべからず。

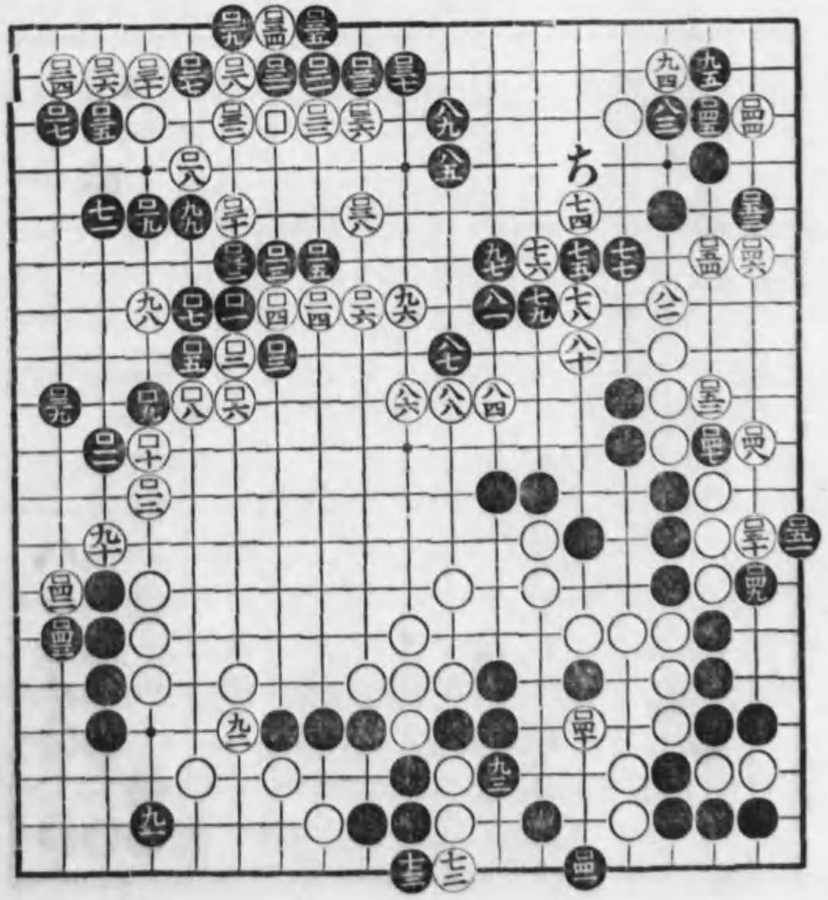
▲白七八辛辣の一著、正しく黒の意外とする處にして、依りて全く大勢を制したるを觀る。

〔原評〕 黒八三と尖み頂けて白に八四と截遮され、中石を悉棄するに至りては敗勢定まるもの、兎も角も八四に打ちて之を救ふにあらざれば到底前途を語るべくもあらず、而も隅は絶て死形なきにあらずや。

▲賛成なり。

〔原評〕 最後に白百二十は百三六に飛ぶを安全となす。されど此石のイヂめられ位にては、勝敗に關せざるを奈何せん。▲然り。

〔總評〕 本局黒の敗因は之を要す



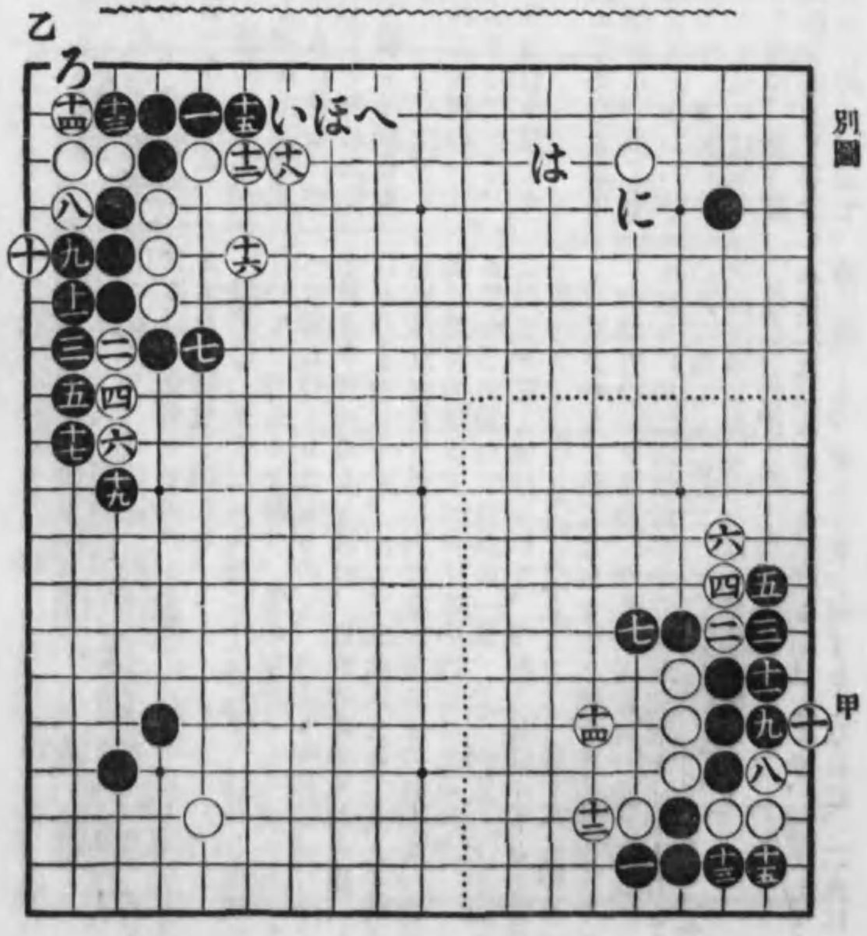





るに、劈頭黒十一の一著に次で、十九、二一の兩著共に當を得ざるに在り遂に敗局に終りたるは是非なし。

別圖甲　黒一と曲れば白恐らく二と截るべく、依つて三、五と運び七と伸びるを要著とす、而して白十二の時一著十三に攻る事肝要なり。圖の十五迄となりて、黒不利とせず。

乙圖　又黒十三の時白十四に押へれば十九迄の手順に出で、此時白いならばろに打つべく、又白いにせずろに下らば黒種々手段あれど、見易きに從つてはに挾み、白い黒にと打つて之亦黒惡しからざりしなり。但し黒はの時白若しいの押へを怠れば黒直ちにいに出で、白ほ黒へと打てば白窮す。



## ▲第七十二局

### 八段中川龜三郎講評

十月中　大阪朝日新聞所載

中押勝　先　小野田千代太郎（四段）　林　有太郎（三段）

▲黒七如何、元來此側面黒三、五と構へたる事は、黒白同姿勢の下に三と一著先鞭するの優勢を占め、依りて白左下隅の孰れに懸るも、之を挾撃せん趣意たるもの、されば黒七を以ては此際十八に薄るの型に出づるを當然とすべく、圖の如く七と守勢に出でるにては、三、五と攻勢に構へたる策戰と矛盾せるを觀る。

〔原評〕　白八と引く事は近時行はれる新例の一にして猶ほ研究の餘地多かるべきを思ふものながら、黒の受け手としては、九を以て十に突き當り置くも手割上不可なきものゝ如し。

▲白八は竹朝、岩佐氏との對局に始めて此型を案出したるものゝ、其際に於ける中川氏の講評に、斯くして黒に九と押されては、白到底無理たるを免がれずとありしが、近來に至り黒之に對して十に突張るの穩當なるを屢ば說明せらる、之に依つて見れば同氏も竹朝の創案を是認せられたるものと見ゆ。而も飜つて白八の引きは、此際要なきに趣向を弄して場合を測らざるもの、爰に在つては尋常九に押へ、黒十一白八黒イとなる時、ロに三間挾みする通型に出でゝ、黒七の矛盾せる意匠を咎むきなり。

▲黒九、白八の引きに對して原評十に突張る守勢に出づるなく、圖の如く强硬に九と押すの攻勢に出でたるは、前著七の誤れる策戰を是正したる點より見るも此際機宜を得たり。

〔原評〕　黒十三は凡俗に十五に下り應ずるも黒に在つて不利あるを觀ず、碁の氣分としては一旦十三へは綽ね捲くりたるものゝ、白より十四並びに十八と截りを加へらるゝ事は、目前趣向の餘地を提供したるさまあるもの、而して其結果たる二九迄の低き姿勢は如何にも黒に利なきを憶ふものにして、之が爲に局勢の廣きを形作くるの因たらしめぬ。

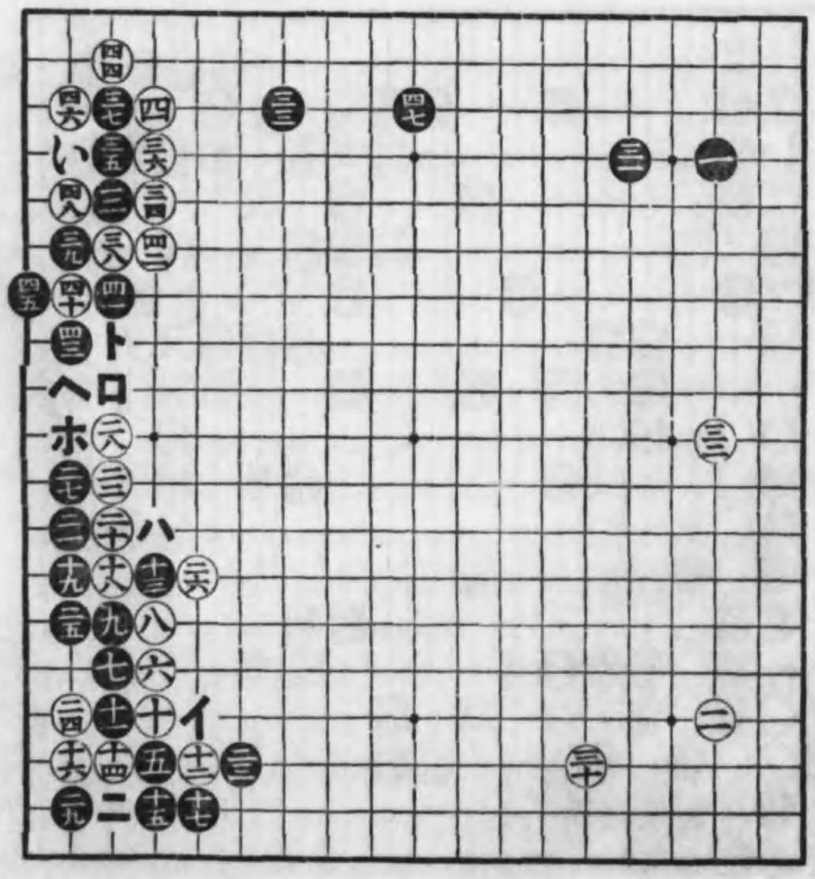
▲黒十三の綽ねは當然の一著、之を十五に下る如きは白に十三と伸びられて、手割上黒に不利なる事言を俟たず。「但し此時黒十七ならば白十八に抑ふべく、又黒十八に張らば白十四と截る手筋を含んでハに伸び打つべきもの、初學者の爲に一言を添ふ。」

▲然るに黒二三は肝要十三の著著意を忘却したるもの甚だ惡しゝ、何故に二六に伸びて戰はざりしにや、黒此大事を失して頓みに形勢を損じたり。

「此說明別圖に掲ぐ」

▲黒二九は味惡しき手たる而已ならず、緩くして大勢に遲くる。爰に一著を補するとなれば、二九は二に攻むるを優れりとすれど、之を以ては更にホに張り、白ロに伸びるも尙ほヘに張り、白トなれば一轉して右上隅三一に締り、而して三の一著は之を委棄して進行する策戰に出づべきもの、然らば黒尙ほ勢ひを失はざるものありしに、黒更に之を誤りて大勢漸く黒に非ならんとす。

〔原評〕　黒三五甚だ惡し、兎も角も四二に綽ね應ずるの一途あるのみにして、此場合としてさしたる支障を認めざるにあらずや。譜に現れたる四四までの成積に於ては、折角の三三の挾みを無意味に孤立せしむるものにして、窮餘の急四八の截り提られを座視して、四七と拆き補ふの止むを得ざりしもの、又以て三五以下の非なるを語るものにして、評者は此場合にあつても猶ほ四七を以ていに救ひ置くの優れるあるを唱道するものにして、無殘々々三子を抱へ去らるゝことは、萬籟の風味を沒却し去れる觀あるものにして、此時に於て大勢黒に難色ある事、掩ふべか



らざるものあり。

▲黒三五は、白一子黒二子となる處なれば、當然原評四二に綽ねざる可らざるもの、而も黒一度之を失す、而して黒四七に至りては無論之を原評いに三子を救ふべきもの、然るに黒再び此大事を失するに及んでは、大勢殆ど定まりたる如し。

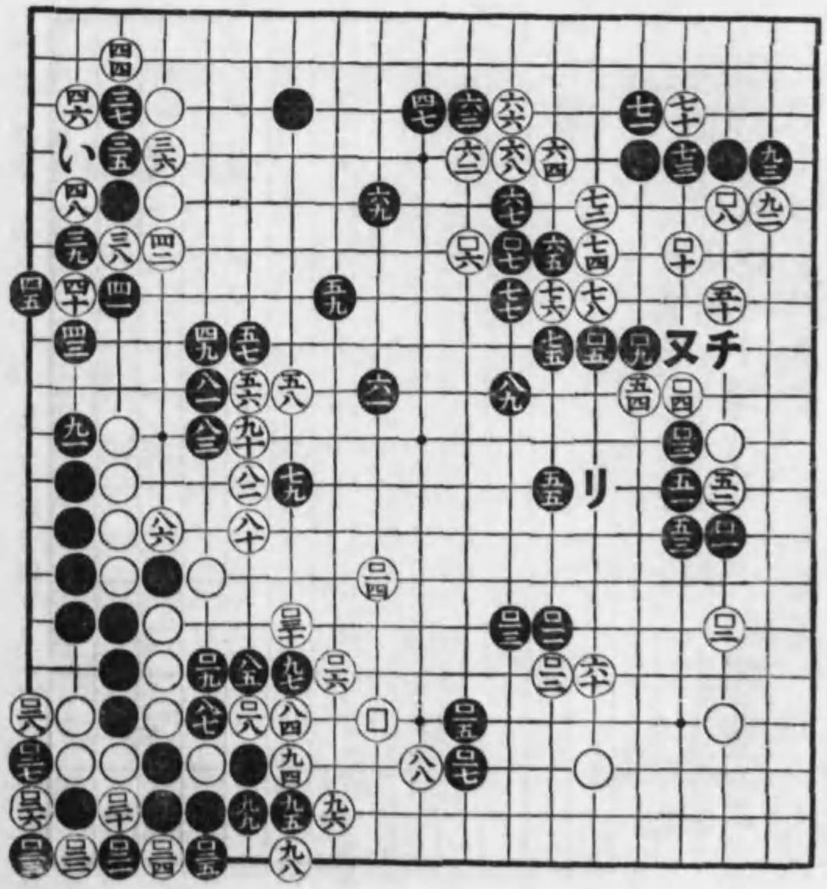
▲黒四九は歩調に遲る、之を以てはチに詰拆きて地歩を占むべし。白に五十と拆かれては黒の勢ひ蹙まれり。

〔原評〕 黒五五は常套を換へて六十に行きたる氣分なり。

▲贊成なり、但し五五と飛ぶ意ならば、一路堅くリに飛んで又の衝きを狙ふべし、五五にては白に響かず。

〔原評〕 黒六一は六四に圍ひて地域の拘分を保持するを要旨とすべきもの、白より六二と踏み込まれては大躰に白の手厚き局面とて、相當の蹂躙を蒙るべきは覺悟せざる可らず。

▲黒六一可なり、原評六四に圍ふは




第三、百二十四の處結

百三十手以下略





正著なれど、斯局として間に合はざるを憾む。

▲黒六五は急に失す、左中腹七九に一著を試みて遙かに上部を脅威すべし、然らば乾坤一擲未だ爭ふの餘地なしとせざりしに、直接六五に迫り、斯くして七八までに、白を易々逸走せしめては最早救濟の道なし。

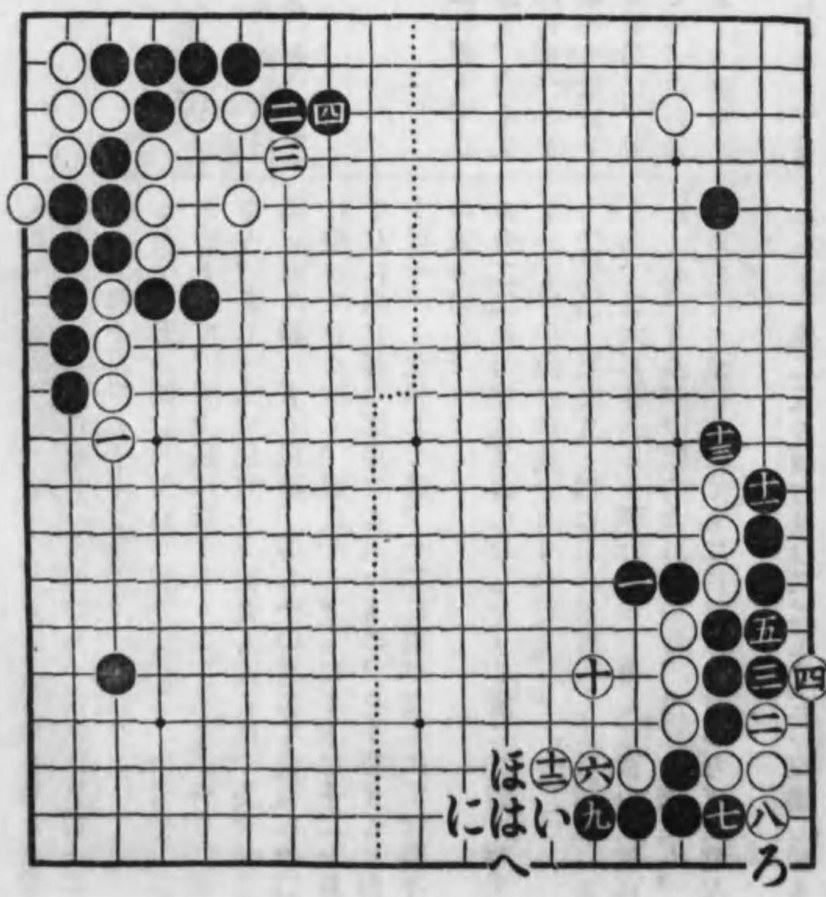
〔原評〕 黒八五は形の如くにして實は八七に拔き提るかた、後の運びに便なり、結局白に八八と位置を占められては、大勢茲に定まれるを通觀す。

＊　＊　＊　＊　＊

別圖甲　黒一と伸びたる以後の變化は、圖に於ける十三迄の運びに出で此時白いなればろにすべく、又白いをろの下りに換へなば黒代つていに出で、白は黒に白ほ黒へと打たば可なり。

乙隅　又白一に出づれば二、四に劍ね伸して可なり。

乙




甲

## ▲第七十三局

方圓社長　廣瀬平治郎講評

十一月中
中央新聞所載

先番中押勝　互先　鈴木爲次郎（六段）
瀬越憲作（六段）

▲黒三は右下隅七に據るを通常とし、五に至りては之を六に換へ、白五なれば右下隅イに懸り、白七黒ロ白ハとなる時、左側ニに挾み拆く意匠に出づるを通躰とす。但し爰に云ふ處のものは、敢へて批評を試みるものには非ず、只だ黒を持ちたる當局は、要なき自からの趣向立ては總べて之を止どめ、白の策戰に對應して行動するを黒として尤も正しき態度と爲すを云ふなり。

繇つて白四の目外しは、當局者の趣向を別として見れば、普通ホの下目に據るを有利とす。

▲黒九、惡しきにはあらざるも、若し分り易き石立を擇ばんには之を高く二三に懸り、白九なればへに押へ、白ト黒チと運ぶを是とす。

▲白十と五の黒に攻を加へ置きながら、次著十二に卒然として、右上隅に馳せ去りたるは心得難き策戰なり、若し十二に頂ける意匠たらんには、黒十一と隅を固め備へざる以前、卽ち十の著にて直ちに十二に頂けて打つべく、既に十と下したる上は十二を以てリに頂け打つ順序たるべきもの、之を要するに白十黒十一と交換して後、十二に頂けたるにては斯手の威力薄し。

▲白二二如何爰は其儘になしをきて單に二四に押すを是とす手段に餘地を存すればなり。

〔原評〕　黒二五と刎ねしは過激にして其態度にあらじ、二六に伸びるを穩健とす。然らば白いに圍はんは必定なれば、黒二六白ろの時、黒はと挾返し、白ヌにても或はリにてもにに挾みて打つなど妥當ならん。

▲然り、黒二五の綽ねは白二二黒二三の交換し居るを盾に、手强く圖の著に出でゝ戰端を開きたるもの



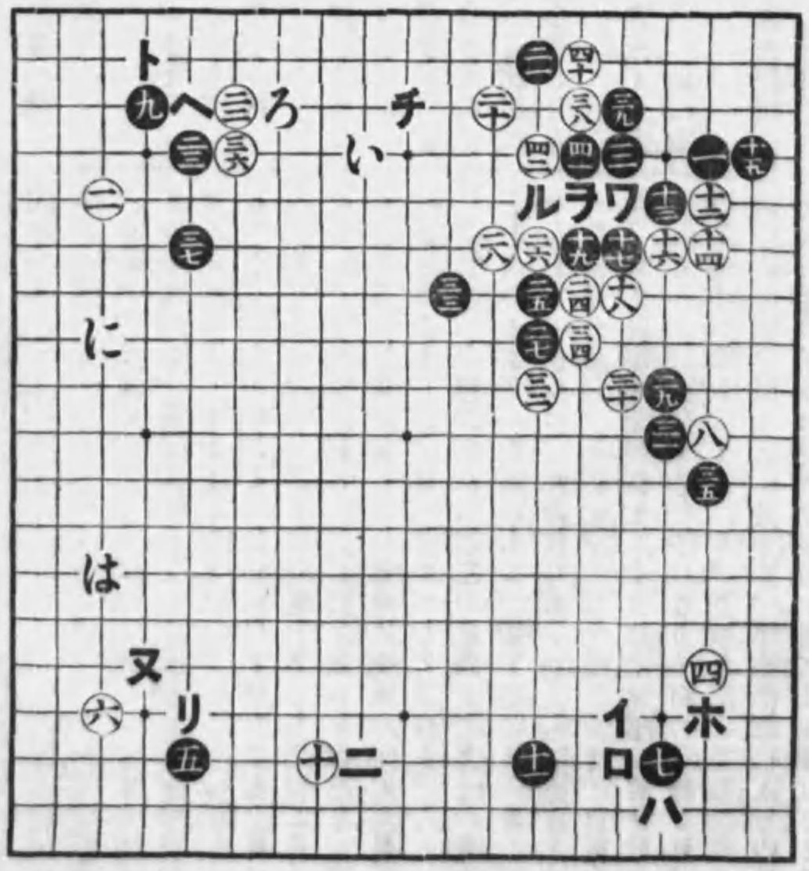


其意氣は之を觀るべきも、而も二六に伸び居りて何等支障無きに慮みれば、二五の一著は黒として打過ぎに非らざるなきやを想ふ。

〔原評〕　白二八は弛緩なり形よりするも直ちに四一に頂けざる可らず之に依て黒に二九の緊點を衝かれ三五迄の不利を被る事となりたり。

▲白二八可なり、委としては四一に頂けたき處なるも、斯くせば黒ルに白二八黒ヲと粘がれたる際、白に好手段なきを奈何せん。

▲白三八、之亦委としては三九に頂けたき處なれど、之は黒三八白四一黒ワと粘がれて、以下の變化は多樣なるも、結局白に利あらず、爰に於て曾つて先師秀榮が、碁は委ばかりにてもゆかぬものと云ひたる言を想起すると同時に、當局者が皮相の手筋に逐はされざる力量、轉た推服の



外無し。

〔原評〕 黒四三重し、四八に膨らみ、白ほに飛ばゆへに頂けてモタレ行き、自ら三子と連繋せんとする策を可とす。

▲然り、黒四三は當然左上隅四八に綽ぬべきもの、當局者亦之を逸したるを、深く自ら憾みとせり。

▲白五十、五二は大局の經營を定むる大切なる秋なり、而して白五十と押し、五二と隔て行きたる事、深慮に出でたるならんも、而も白五十の押しは黒に五三と圖の如く、二の一子を完全に圍殺され手段の餘地を失ふ事勢からざるを想ふ時は、白五十にて百三四に斜走して直ちに黒を隔て打つを手廣き策戰と爲すを主張するもの、而も白之に據らざりし結果は所謂一方攻の碁となり、局勢頓みに狹隘を告げたるを覺ゆ。

〔原評〕 白五四の秋は定計甚だ至難、五五よりする意味も、亦九七よりする意味もありて、容易に論斷を下し難し。 ▲然り。

〔原評〕 白七八惡し、黒に絞られたる形迹癡觀にして、九二の截りも黒に活あるを奈何せん。去りとて八六より綽ねて、キマリづけるも惜しければ、尙推敲を要すべし。

▲白七八、面白き策戰なるも、而も無理筋たるは之を免がれざるもの、さりとて他に適當の良策あらざるを觀る時は、愈よ曩の白五十の大躰策戰、當を得ざるの感を深うするものなり。

▲白百二二大事を誤る、此粘は目下要なき處、直に百二四に衝くべし、然るに斯著を下して黒百二三と交換したる結果、曾に實質に失ふ處ある而已ならず右側の黒に安堵を與へたる以降は交戰の跡頗る見るべきものありしが、遂に及ばずして終れり。

〔原評〕 白百二四は二百三の截斷と百五七の奪眼とを含める必死の勁著にして、依て勝敗を一擧に決せんとする態度は、此際機に敏なるものと謂はんか

黒百五九惡し、此手を以て百七五に出で、白百七六、黒と白百八十白百七八と打たば、早く勝を收め得たらんに、百六七と後手になりて白に先鞭され、局勢更に不明とはなりたり。黒百九三にてちに覗きりに粘がせ、百九五に提りて、早く拾收に入るの見易きに從はざりは、畢竟勝算を確信する能はざるの

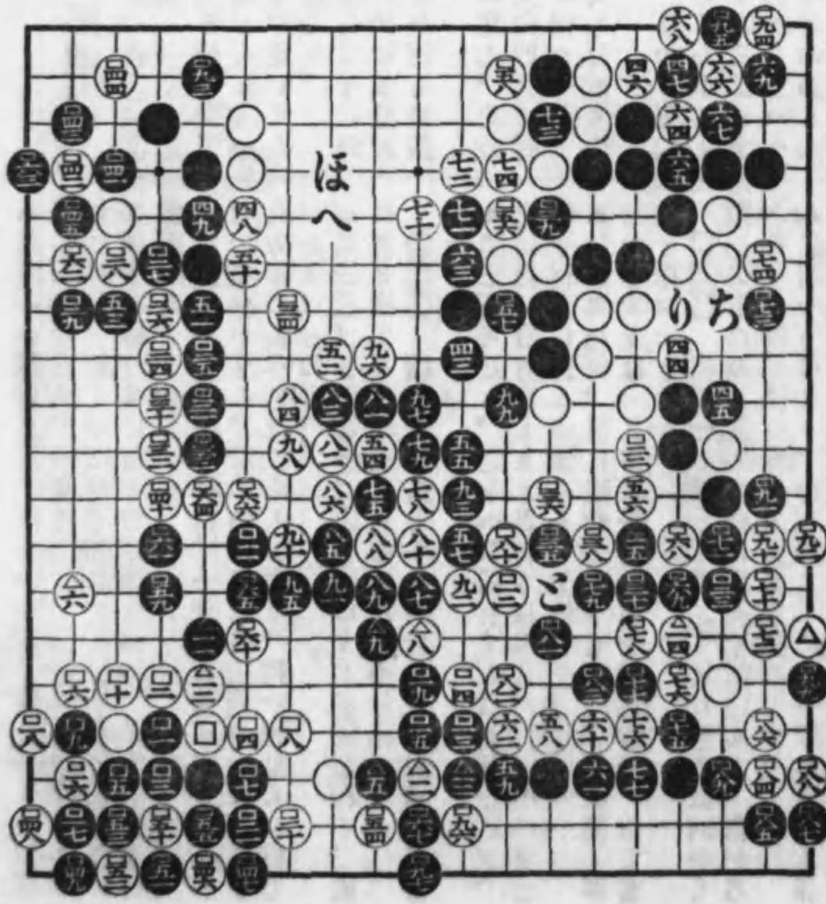




致す所なり、白二百二十と粘ぎて、玉碎するに至りしも、玆に至りては劫材纏がざれば是非なし。

▲總評、本局は之を要するに黒四三に肝要を失し白有望の局勢となりしが、白五十の大躰策戰面白からざるよりして終に事に破れたるを觀るもの乍ら、而も白五二以下最終迄の奮鬪振りは眞に觀者をして手に汗握らしむるものあり、之に對して黒亦善戰一寸の間隙なく終始せし局面、近來稀に觀る快局と云ふべし。

「二百十五手以下略」



# ▲第七十四局

## 八段中川龜三郎講評

十一月中　六目勝　福田正義（三段）
東京朝日新聞所載　互先　先番　田岡秀子（二段）

▲黒二一は事を急ぐもの、先づ二二に尖み備へて下側の形容を完ふすべし、此處は二二に掛けらるゝ一著の下に、黒の全躰低位に就く事となり、惹いて左側の三本伸びも、威力頓みに減退すればなり。

▲白二二打急ぎたり、一且黒二一に應酬して**イ**に斜走する型に出で、而して機を見て二二に掛ける意匠に出づべし二三と頂けしめては黒の陣容如何も整然とし、前途分り易き配置となればなり。

▲黒二七時機にあらず、一且下側三三に應じ、此時白三二ならば右側四九に據りて宜く、又白四九に拆かば之を機會に二七以下三一迄の手順に出づべし、然らば白の拆きは、黒の堅きに向つて爲したるものと惡化すればなり。

〔原評〕 黒三一と懸粘いで居つては、白から三二と桂馬に來られるのは、餘りに見え透いてゐることで、此場合としては三一を以て黒の方から三二に大きく斜行したい、然かも三一の部分は白から三一へ覗かるゝ程度のもので、目前たいした障碍のあるべき筈もない。

▲黒三一の懸粘ぎは、樞要の一著、之を以て原評三二に斜走せんは、一見雄大なる形容を收め得べきが如けれど、斯くせば白下側ロに征當りを打ち、黒ハに應ずる時、ニに截りつけ來らんか、黒忽ち應手に當惑せん。

〔原評〕 黒三三の時は、一著ホの邊へ打つて置きたい氣分がする、符の如く白に唯三四の一著だけで此方面の備へに充てらるゝ事は、稍や物足らぬ感じがありはせぬか。

▲黒三三は普通なり、之をホにする亦可なれど、或は實を棄てゝ虛に就くものとなるやを恐る。

〔原評〕 續いて三五もへへ斜行する方が本手であらう。

▲黒三五可なり、之をへに斜行するは良著なれど、之は白に右方よりトと斜行され來らんに、への著は部分行動に終るの憾みあるを惜しむ。

▲白三六如何、黒に三七と押させては、隅に響く事尠からず爰は一且トに斜走し黒の應答如何に依て著點を擇ぶべきなり。

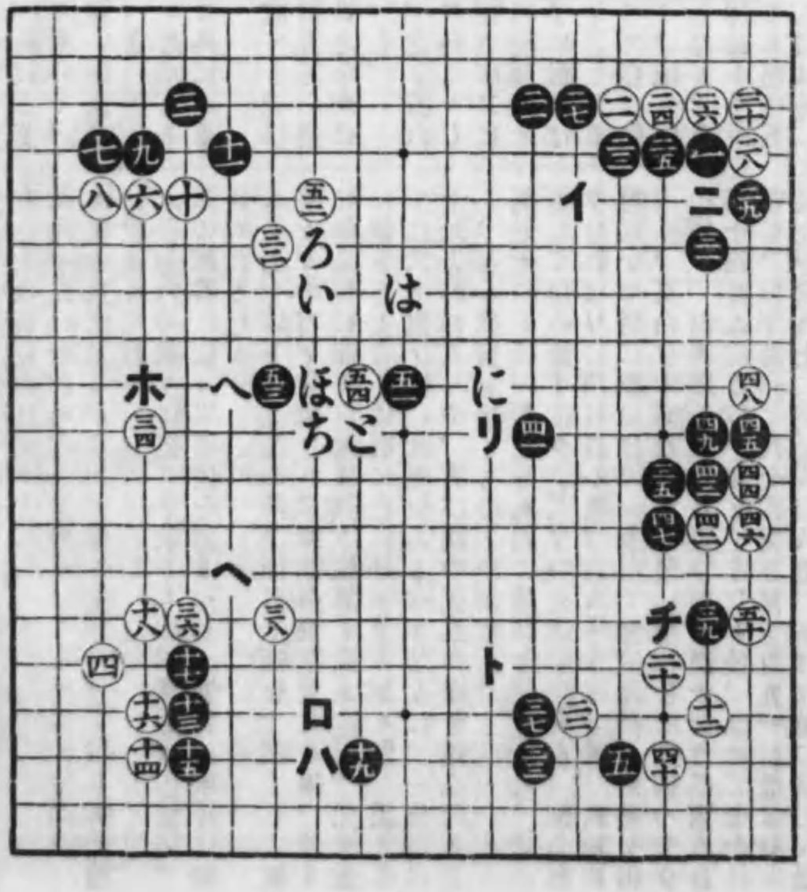
〔原評〕 黒四一と獨りで圍ふて居る態度は何やら調子が取れぬ、爰ではいに迄深く踏込んで、白がろと押した時、はへ飛び去る形を望みたい。

▲黒四一不可なり、由來圍ふ手に良手無しと云ふ碁諺あり。謂はんや漫然たる圍ひの斯手に於てをや、之を以ては右下隅チに押し、地歩を占めつゝ白に當るの計ひに出づべし大勢に關する肝要の一著とす、仰も斯局の如き圍ひ合の形勢たる碁にありては力めて自家の抱容を大にして衆ねて敵に當り打つ方針に出づるを棋法とす。

〔原評〕 又白四二に在つては、此意味に於て、中央にに迄詰め寄つて黒にリと押させて五一へ飛び去る手筋に出でたい、孰れにしても此場合眼の着け所は、中原の得喪問題であつて、其進跡の遲速如何は、自然大勢に影響を及ぼす因となる大切の時機にある。

▲白四二、本局中原の事は所謂秣草場たるに反し、右下隅チに押さるゝは白の尤も苦痛とする處なれば、白四二以下實利を占めて、此痛みを補ひたる計ひ、反つて原評に優れるを思ふ。

〔原評〕 黒五三はほへ一間控へて居つては不足と思ふての計らひにや白にして孰れはへに受ける事とせば



僅に一歩の差、ましてや白に五四と頂けられて其應手に迷とひ、卒然として更に、五五へ飛び附ける態度などは、黒として既に謹慎を缺いて居るもので、隨つて其歸趨する所誰しも斷案を下だし難い圖面になつて來た、まだしも五五を以ては一先づとに押へ白がちに二段刎ねして來たならば、苦しいながらも六五の覗きを以て應急の凌ぎを講ずるより外はあるまい。

▲黒五三の飛びは果敢の一著、只爾後に處する覺悟無かりしを責むる而已、白五四の頂けは黒五三の應答に困じたる餘りに出でたる著なるに、黒之を想はず五五と不成算なる一著に出たるは惜むべし。

▲黒五五を以ては、何故前著意を繼いで、之を五六には飛ばざりしにや、然らば優に爰を凌ぎ得たゝしなり假に一例を擧げんに、此時白五五に押さば又に飛び、白九四に伸びればとに綽ね白ちに二段綽ねせば百二に綽ね白ほ黒ルと運び、爰にて白ヲに截らばワに當て白カ黒ヨ白五八黒いと先手粘ぎを了したる後、六八に伸びれば黒大に宜ければ、從つて白は始め黒とに綽ねたる際、百二に引くの外無く、依りて黒ちに引き打たば難なく問題は解決されしなり。若し夫れ白五四に對して黒五五を原評とに綽ねる手段は白ち黒六五白ほ黒六六となるものとするも黒は五一五三及びとの三著無意味となるるに反し白は僅に三八の一著が惡化するのみなれば、此振替り黒に不利なるは言を要せず。

▲白七二は七四の覗きを先きにするを宜とせん。

▲黒七三は見るから耐へ難き姿勢、之を以ては七四に收まりて打つべし。

▲白七六の截りは慮りを缺くもの、下側ハに頂け、黒の應答に依りて手段を講ずべし、爰實に斯局に勝負所たるなり。

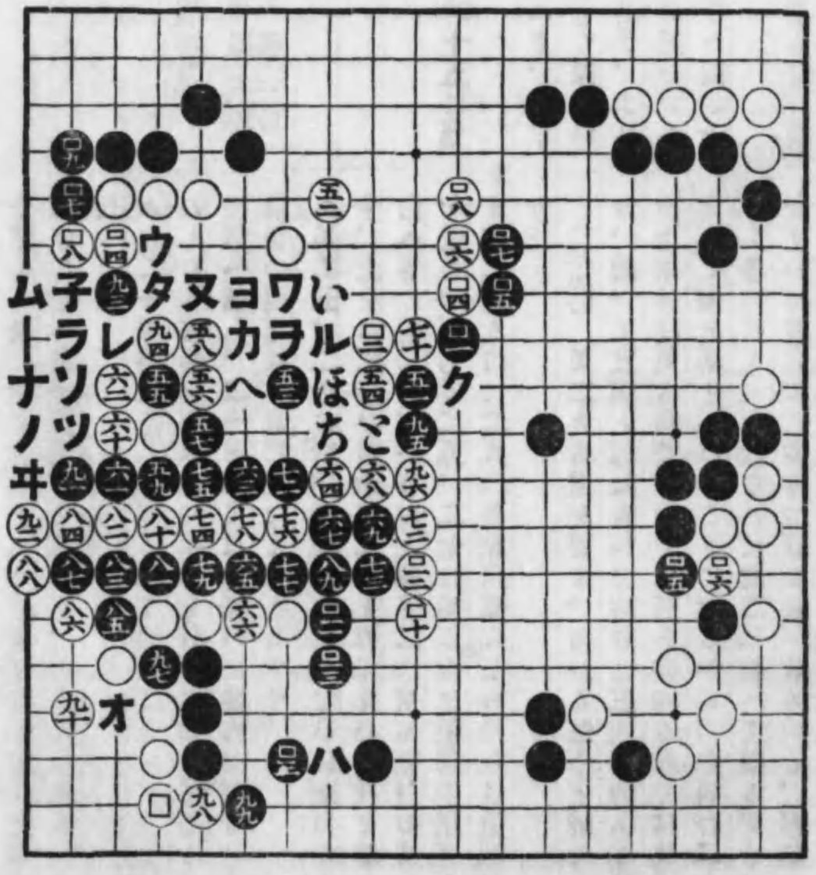
▲黒七七以下八五迄の計ひ拙俗を極む、斯くして無殘々々中石を生擒され、勝敗の決を見たる事、餘りに無造作に餘りに飽氣無き振舞と云ふべし。元來爰に截りあることは既に己に分りきり居る所、黒としては六七以下既に此覺悟あるべきなるに、一度白に七六と打たるゝや、再び爰の五五の徹を踏みたること、碁に誠實を缺くものとや謂はん。

黒七七にては一著之を九四に伸びを試むべし、之に對して白の應手はタ、レ、ソの三途の外無く、卽ち白タなればソに頂け白レ黒ツ白八十となる時、八四に懸粘いで活に就けば、一擧して勝敗顚倒の形勢を得べく、又白タの綽ねをレの當に換へなば黒換つてタに伸び、白又黒九三白ネ黒ツ白ソ黒ナ白ラ黒百八白百十四黒ム白ウの手順を了したる後、始めて七七に當て、以下驀然に八七迄突き貫き白九一に截る時一旦左下隅九七に突込み白八五に粘げば井に當てゝ劫となし白ノ黒オと劫立てして勝敗爰に決すべく、又白八五の粘をノの提りに換へなば八五に截つて之亦黒の勝形動かす可らざるものとなるなり

『但し右手順中黒百八の時、白九一に截れば八四に當て、白八十黒井と打拔くべきなり、初學者の爲に一言す』

されば白は黒九四の伸びに應ずるに黒ヘ白又黒ほと突當り白九五なれば一旦クに出でたる後、七八に粘ぎ白七七黒七九と活に就く圖面となるべく、而も斯くなりたる曉きに於ても黒尙ほ優に勝勢に有たるものを〔原評〕黒八七は全く敗著とも言ふ可もので單に九七へ截つて居つたなら、目前白から九八の綽粘を先手で加へらるノ憂ひ無く、百十二の押は反對に黒から手を着ける順序になるべきものを、折角中の四目を抱へても九八の綽粘ぎ百十二の押やら上下で利かされては大分地面も痩せて來た次第で、是れでは黒に負け色が定まつたもので、大躰論とし三、五五の時を以て黒とし大迷誤を招いたもの通觀される。

▲黒八七は原評に據るも白の勝勢を動かすに足らず白八七黒八九白百十二利を逸す百十三の刎ねを。追評白百十二利を逸すべし。先きにすべし。



# ▲第七十五局

## 本因坊秀哉講評

中外商業新報所載　先番　中押勝
十二月中　先相先

林有太郎（三段）
福田正義（三段）

〔原評〕 黒十三はいに打ち、白十四の時十五に運ぶ方が白の出路が窮屈になるだけ優る。

▲黒十三は、從來、定手とされ居る著なれど、往年竹朝が秀哉氏と對局の際、更に之を工夫して原評いに打つの多くの場合優るあるを發見せし著手、されど此場合にありていに打は、白十四の詰の間合いかにも好調を呈すれば如何、爰に在りては寧ろ圖の十三に挾み迫るを穩健なる態度とせん。

▲黒十五如何、斯く打つ意匠に出でんとならば、前著十三を高くいに迫るべきもの、而も一度穩かなる十三の一著に出でたる上は、十五を以ては之をイの飛びに替へ白十五黒ロと打ち進むの通躰に據るべきなり。

▲白二十機略に乏し、斯くして黒に二三にピンと綽ねしむる好形を與へ且つ形容を碎かれたる事白として堪へ難し、二十を以ては此際ハに並んで應ずべし前後の照應甚だ我に可なるにあらずや。

▲黒二五、二七は所謂緣離れの趣きなれは面白からず、之をニに沿ひ白ホ黒二八と打て此石に攻を加へ白へ等に備ふれば一著左上隅三二に飛んで白の構へを低め、而して二五、二七に構ふるを順調の運びとす圖に見る白に二八の要點に據らしめたるは遺憾なり。

〔原評〕 黒二九考慮を要す、白から三十と綽ねられ、續いて三四と綽ねられた時分に三六に約ふる事が出來れば兎も角圖の如く三五と控ゆる譯では先手で廣く地を圍まはれることになるから、此場合二九にてろに打ち、白はなれば三二に約へて居るがよい左すれば後にに尖みつける筋が殘るから、面白からう。



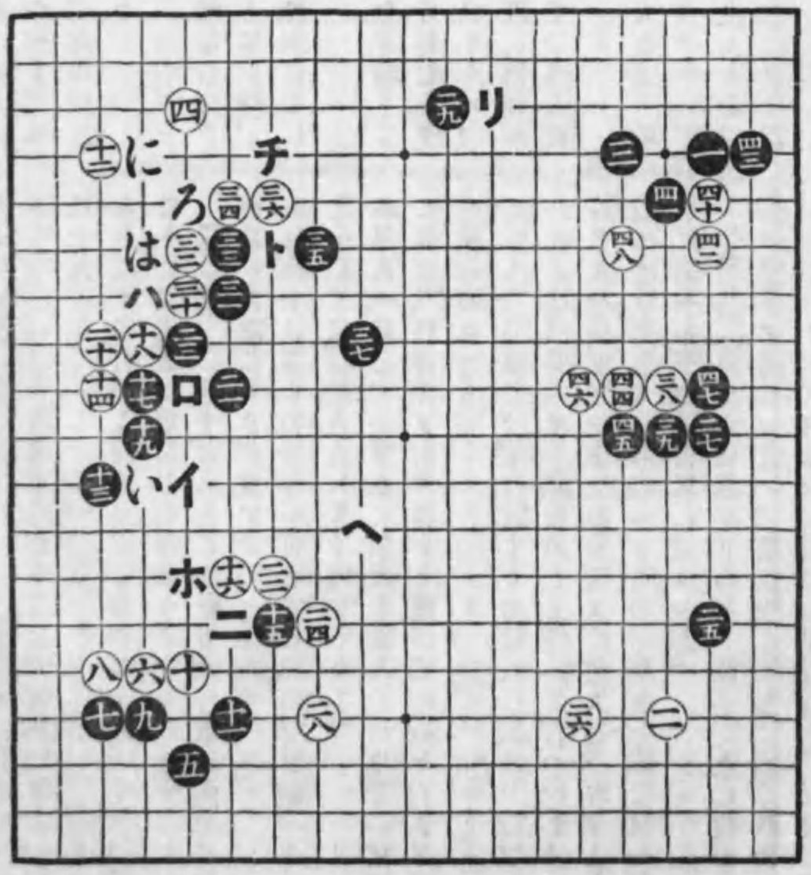


▲黒二九不可なるにあらざれど、若し手順より云ふ時は三二若しくは原評ろに一著したる後にするを是とす

▲黒三五甚だ怯なり、爰は何とあるとも、三六に綽ねざるべからず、白若しトに截るとも、敢然チに伸び居りて何かあらん。黒爰に臆れたる結果は、曩の二五の運びの失と相俟つて、黒白の形勢殆ど伯仲せり。

〔原評〕 白四十は惡し、黒二九が猶は一路狹くリにあれば格別、圖の如く廣い場合に、四十と頂げる結果敵地を固めて了ふから、普通の如く單に四四に伸びて居るが宜い。

▲白三八と打棄てにして、四十に頂ける手段は、之亦竹朝が往年瀨越氏との對局に始めて試みたる著なるも此場合に在りては黒を固めしむるなく、單に尋常四四に伸び打つを手廣しとす。



▲黒四九緩し、之を又に綽ね、白四九に截らばルに當て、白五十黒ヲと打拔いて此白を攻立つべく、又白四九に截らずしてワに愚集み止めれば、此時四九に打つて玆白を攻むる手段に出づべきなり。

△白五二より六二迄の應戰可なり。

▲黒六三は裂れ手を侵すもの、恐らく無理ならん。之を以てはカに曲り、白七五黒又白六五となる時、一轉して八一に打込むべし、斯くして棋勢未だ黒に不利なるを觀ず。

△白六八は一著六九に當てたる後にするを手順とす

▲黒七五惑へり、當然ヨに掛けて應せざる可ならず

〔原評〕 白七六緩し、ほに綽ねなくてはイカヌ、其時黒若しわに約へたらば手を拔いて八四に頂けべく、又黒が手を拔けば百五の截りがあつて、への頂け味を生ずるだけ嚴しい。

▲然り、白七六は無論ほに綽ねざるべからざるもの白之を失して、黒七五の失を活かしめたり。

▲黒七九の打込みは求めて爰進出の路を失ふもの、此際に在りては右下隅タに打ち、白レなればリに進展して中石を窺ふべく、又白レをツの押しに換へなば禾に綽ね、白リ黒レ白ナ黒ラと截り、隅に得るにあらずんば白の中石を生擒する策戰に出づべし、或は七九を以て直ちに八一に打込む擧に出で、白七九なればナに打つて凌ぐ意匠に出づるも亦可なり、要するに黒七九は筋違ひの著なり。

〔原評〕 白八十は八九に尖む方が、後に九二に綽ね粘いだ時に利きが宜い。

△白八十は多くの場合不可とする二の筋を選ぶもの之を以ては當然八九に尖まざるべからず。

▲黒八一緩し、一著ムに頂けを試み、白ウなればツに綽ね、白井黒ノ白オ黒タと運びて中石を狙ふ手段に出づべきなり。

▲黒八三亦緩し、爰に於ても尙ほムに頂け、白ツなればノに押進みオの綽ね出しを睨んで打つべし。

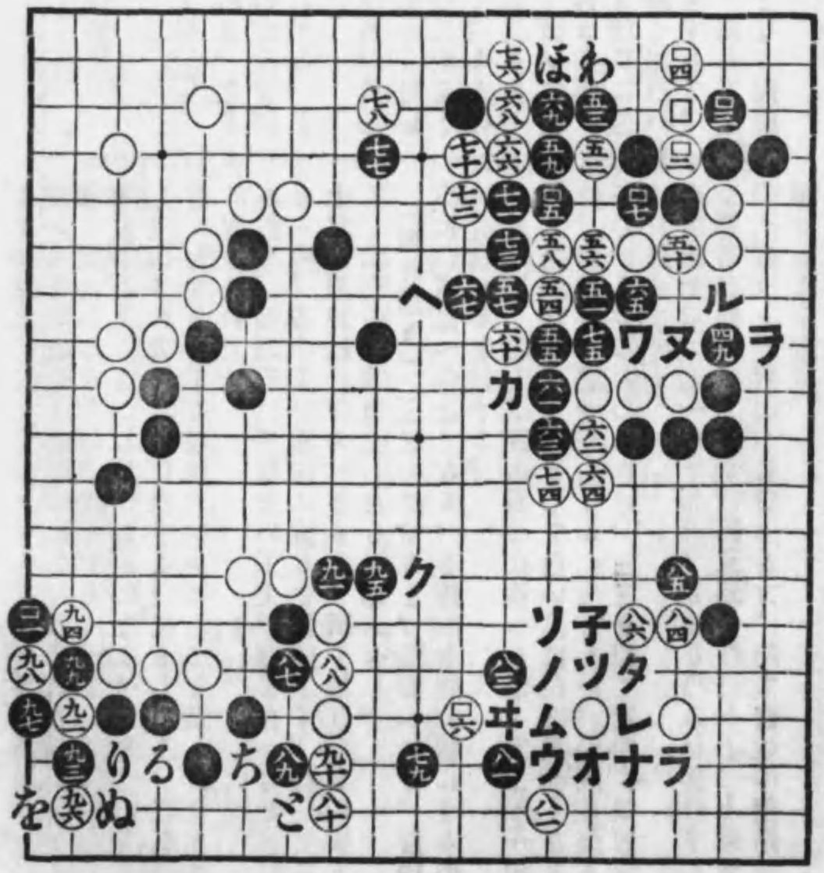
▲黒八七以下九一までの意匠甚だ危ふし。本來より云へば敗著とも斷じ得べきもの、斯著を以ては一應クに構へて下側の自軍に備ふべし。

〔原評〕 白九六は惡手である。此手でとに曲つて黒の應手を問ふが宜い、黒は恐らくちに粘ぐ外無かるべく、ソコデ白九六に頂ける手もあり、又りに截る手段もある、黒九七ならば白九九黒ぬ白九六黒るを白をとなつて攻合である。此好機を逸して、百一と劫を打拔かれては、勝敗は確定した。

▲然り、白九六は事を急いで自からを破滅し終れり。とに曲り打つ著に出でなば、面白き局面となり得べかりしに之を錯まつて挫折したるは、斯局の作品として遺憾なり。

〔總評〕 本譜は白二十に失し、黒優勢を占しが、黒亦三五に肝要を逸し、次で六三、七五に誤り、形勢將に危ふからんとせしが爰に於て白七六に機を逸し、形勢更に一變を呈せり、然るに黒亦七九、八一の宜ろしからざるあり、

次で八九、九一の急激手段は勝敗を未知數たらしめたるが、白此秋に際して機を誤り輕擧九六の一著に出で、爲に遽に敗衂を招きたるものなり




百七手終

# ▲第七十六局

## 八段中川龜三郎講評

東京朝日新聞所載　十二月中旬

中押勝　先　小岸壯二（五段）　小野田千代太郎（四段）

▲黒五、敢へて不可なりと云ふにあらざれど、之を以ては直ちに右下隅七に入り、白七一なれば左下隅二十の下目に據り、白三七に懸らば二一に尖み、白十三黒いと運ぶ配置に出づるを穩とせん。

〔原評〕　黒十三とかゝり入ることは、普通の着點ではあるが、此碁立では例外として十四若しくばいの拆きに換へたい、たとへ白が十三へ締つたからとて黒も既に上隅に一つの締りが先きんじて居るものとて、釣合の上から觀ても別段の不足も覺えまじ。

▲黒十三可なり、之を以て原評十四若しくばいに拆かんは、白十三に締りくるれば上側イに拆きて頗る配置を得れど、白は恐らく隅を手拔して上側ロに懸り來らんに、黒は十三に入るの外なく、斯くて白ハ黒十五白ニ黒十七となる時、尋常ホに截らずして、ヘに押へ込む型を採り來らんは必條なり。而して此時黒トに下れば白ホ黒チ白十六黒リ白ヌとなる配置圖に比して局面手廣きを覺ゆ。

〔原評〕　黒二五は此際さほど六づかしい解釋を下ださずとも、凡俗にろへ尖んで居つて差支はない、然かもその二七と棒粘ぎにしたことは工夫に過ぎて却て面白からぬもの、はへ平凡に受流して居る方が却て形の上に施こし易いことになる、目前白に二八と突出されて、之れに應ずる急場としても、二九の當てを先きにする現狀、いかにしても堪へがたき事に見渡された。

▲然り、黒二五は要なきの工夫、却て自からを痛むるもの、ろに尖む通法に據るを當然とす。次いで二七之亦原評はに伸ぶべきもの、斯く粘ぎたるに依りて、二三の一著愚化したるを思ふべし。

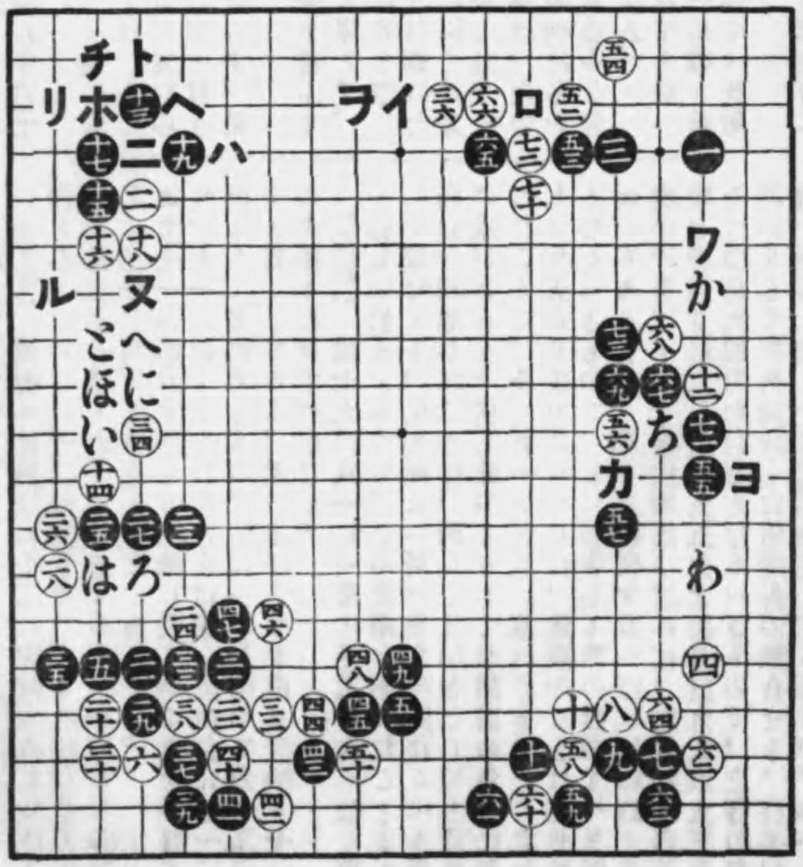
〔原評續き〕　三三の時でもまづ三四へかけ、白い黒に白ほ黒へ白ととなるべき應酬を經た後にする事が有利たるを信ずる。

▲黒三三　之を三四の掛けに換へる事、元より一理ある主張なれど、斯くして白い黒に白ほ黒へとなる時、白はとに應せずしてルに尖まんか、黒隅に失ふ所尠からざるものあれば、三三を以て三四に掛けるは意進まず。

▲黒三七以下五一まで如何、させる巧みを弄せずして尋常右側かに二拆し、爰五五の打込みと、上側ヲの詰拆きとの兩睨みに出づる方、却て前途の理路見易きあるを覺ゆ。

△白五二、五四大勢を誤る、抑々黒三七以下五一迄の手段は、其所にモロ〳〵の味を含める事勿論なれど、又一面には正に五五の打込みを狙ひ居るもの、然るに白五二、五四は黒に五三の一勢力を加へしめて一層打込みを痛切ならしむる著手、その黒に五五と打込まるゝに臨んで、五八以下六四までの措置に出たるは、明かに之が窮狀を語るものに非らずや、卽ち五二を以てはワに詰拆きて隅に迫り同時に、豫め黒の打込みに備ふべきもの、然らば黒には二五、二七の失著を出し居る事とて形勢良好なるものありしに、白此大事を怠りて將に勢ひを失はんとせり

△白六四、再び大事を誤る、一躰圖の五六と斜走に煽る著手は、常に譜の六七に頂け出さるゝ手筋に注意を拂はざる可らざるもの、然るに之に慮る處無く、六四と單なる凌ぎに出たること、當局者の手腕として怠りと云ふべし。斯著を以ては當然わに飛び迫つて先づ黒の應手を問ふべきもの、則ち黒カに突張ればヨに頂け



黒ちなれば七一に當込み居りて宜く、又黒カの突張りをタに換へなばレに伸び、黒カ白をと運んで六七の頂出しを防ぎ、兼て黒に迫り打つべし。然らば尙面白き局勢たるを失はざりしに、反對にも黒をして如上の間隙を衝かしむるに及びては、よし圖の如き七三迄の變化となるものとするも、爰白の三子無意味と化したる事は、七十、七二の突き貫きの偉大を以てするも、尙ほ之を償ふには當らず。果然形勢一變せり。

▲黒六七、功を急いで肝要を逸し爲に勝勢を緩ふせり、爰は沈着一番、右上隅リに當込むを大事とす、白にして之を手拔すとなれば卽ち已む、白若しツに應せんか其時六七に頂け出すべし、然らば白圖の七十、七二に突き貫く手段は、リの當込みに依て効力の中ばを制し居れば、隨つて白は他の方法に出づる外なく、而も此處リに一勢力を加へ居る事は、白の如何なる變化に對しても、圖に比して黒の利便尠からざれば、黒にして若し六七を以てリの當込みを先きにすれば、勝敗或は立ち所に決せしならん。

〔原評〕 白六八はちに遮へざる易道に就ても敢へて差支へもあるまい、それは黒にして七一に截り違つた時には、白り黒六九白ぬ黒るを白をと捌くべき用意も含まれてある故である。

▲白六八は當然の所置ならん、原評に據るは白りに引く時、黒に六八と押されて白恐らく所置に窮せん。

〔原評〕 黒七一は何故に七三に押附けぬものか、白としてはいづれ七二へ突き貫くより外無しとすれば、此次ぎの黒の打つ手は必ずや七一ならで、わ若しくば他に用ゐる方途も尠なくあるまい。

▲黒七一は紛れを避くる意味に於て却て之を手順とす、七一を以て七三に曲げんは第一此時白に七一に出らるゝ恐れあるもの又假に一歩を讓つて白七二に突き貫くとするも、黒の本手とする處は矢張り七一の突張りに存すればなり。

〔原評〕 黒七九は八一に一著の用意を加へ置く事が穩當の態度であつて、この設備を懈つたことより騷動を惹起したことは、恐らく當局者としても意外の感があらう。併し此事よりして卒然黒の負けになつたことは、全く九一の輕忽に基づくもので、之をして九五から手を着けゆけば、此隅のことは寄せ劫となるべきもので、まだ必ずしも黒の悲觀すべき局面でもあるまい。乃ち其變化を云へば『註に曰く此處原評符號手順、全然間違ひ居れば、左掲評者の手順を參照されたし。』黒九五白よ黒り白九二黒九三白そ黒つ白九四黒ね白なとなるべきもので、之等の錯誤からして折角期待した兩俊秀の顏合せも、百手以内で挫折したことは近頃物足らざる想ひが。多い

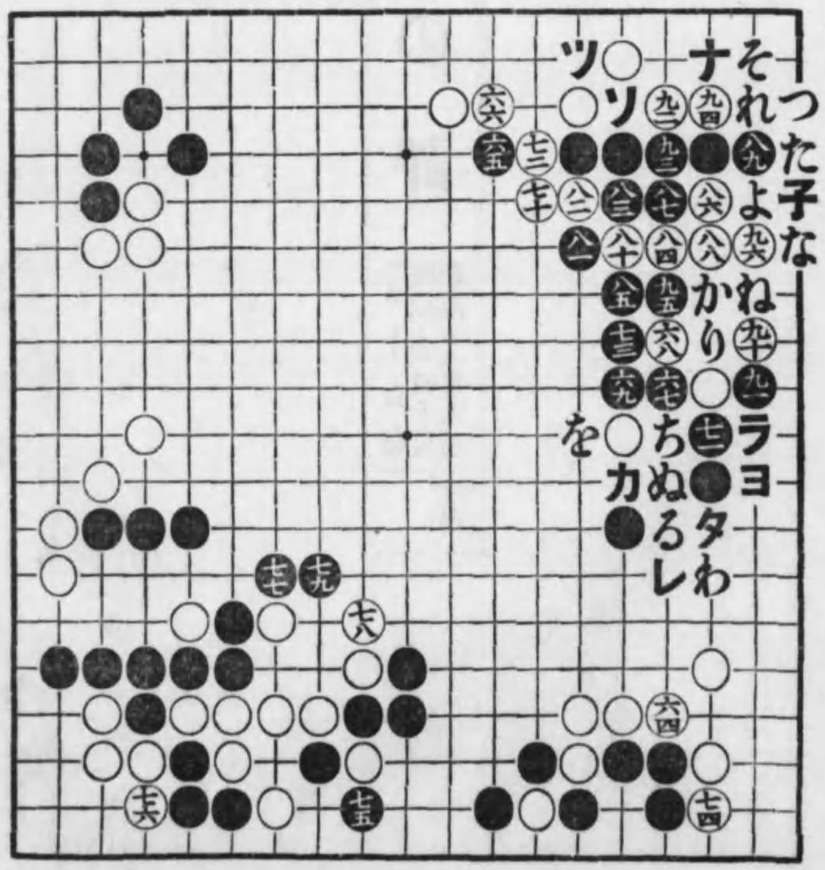




▲黒七九は之を上面八一に備ふべし然らば黒未だ確なる形勢なりし。

▲黒九一、恐らく見損じならん、之を九五に突き出し白よなれば黒か白ね黒ネ白九六黒そ白ナ黒れ白ラ黒ヨとなりて一手のヨセ劫たるべく、又白よの押へを九六に換へなばそに飛び居りて、之亦白一手のヨセ劫となれば、黒尙ほ勢ひを失はざりしに、一着俄に頓坐せしは惜しむべし。

〔總評〕 本局は劈頭黒二五、二七に要なき策を弄して姿勢崩れを招き局勢面白からざるもありしが此時に當て白五二に方針を誤り、次で六四に不用意の著に出せしより、形勢頓に一變せしに、黒亦六七に功を急ぎ爲に勢ひを緩ふし、更に七九に失し次で九五に挫折したるは、近頃呆氣なき局なりし。



最新碁戰評の評
（三十六局）
續編上（四十局）
續編下（卅九局）近刊



A. 11. 4

昭和九年十一月一日印刷
昭和九年十一月八日發行

評の評續編上
定價金壹圓四拾錢

著者　野澤竹朝
相續者　野澤愼一郎

發行者　武居勝治
東京市大森區新井宿三丁目千三百七十四番地

印刷者　高橋赤次郎
東京市京橋區湊町三丁目八番地一

印刷所　高橋印刷所
東京市京橋區湊町三丁目八地番一

發行所　模範棋書發行所　斯文館
東京市京橋區寶町一丁目八
振替東京二七七二三番

發賣所　大阪屋號
東京市日本橋區吳服橋二ノ五
振替東京一三七五番

著作權所有
不許漢譯

終